(8) 鶴ノ丸遺跡

調 査 要 項

遺跡所在地：栗原郡志波姫町八樟字谷地

遺 跡 記 号：ＢＫ（宮城県遺跡地名表登載番号：49015）

調 査 期 間：第１次　昭和49年9月11日～11月29日

第２次　昭和52年9月20日～12月８日

第３次　昭和53年4月10日～５月31日

調 査 面 積：8,500 ㎡

発 掘 面 積：第１次　660 ㎡

第２次　6,000 ㎡

第３次　8,200 ㎡

調　査　員：文化財保護課

第１次　平沢英二郎　恵美昌之　熊谷幹男

第２次　高橋多吉　後藤彪　斉藤吉弘　高橋守克　千藤宗久　一条孝夫　中島直

第３次　佐々木安彦　斉藤吉弘　高橋守克　阿部恵　太田昭夫　森貢喜　小野寺祥一郎　小川淳一

調査協力員：金野正（宮城県築館女子高等学校教諭）

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境……359
　１．位置と自然環境……359
　２．歴史的環境……359
Ⅱ．調査の方法と経過……362
　１．調査の方法……362
　２．調査の経過……362
　３．報告に際して……364
Ⅲ．中世以前の遺構と遺物……366
　１．基本層位……366
　２．竪穴住居跡とその出土遺物……369
　３．方形周溝墓とその出土遺物……385
　４．円形周溝とその出土遺物……392
　５．土壙とその出土遺物……398
　６．その他の出土遺物……403
　　(1)　縄文土器……403
　　(2)　弥生土器……405
　　(3)　土師器……405
　　(4)　須恵器……405
　７．土師器の分類と年代……406
　　(1)　土師器の分類……406
　　(2)　土師器の組み合わせ……410
　　(3)　土師器の年代と位置づけ……411
　　(4)　須恵器の分類と年代……415
　８．遺構の年代と考察……416
　　(1)　竪穴住居跡……416
　　(2)　方形周溝墓……417
　　(3)　円形周溝……419
　　(4)　土壙……420
Ⅳ．中世以降の遺構と遺物……422
　１．館跡の規模……422

２．発見された遺構 424
(1)Ａ平場 424
(2)Ｂ平場 441
(3)Ｃ平場 449
(4)Ｄ平場 453
３．発見された遺物と年代 454
(1)　陶器 454
(2)　磁器 457
(3)　石製品 459
(4)　木製品 459
(5)　金工品 459
(6)　古銭 460
４．遺構の年代と考察 460
(1)　掘立柱建物跡 460
(2)　竪穴遺構 463
(3)　井戸 464
(4)　土壙 464
(5)　溝 464
(6)　堀 465
(7)　土塁 465
(8)　土橋と通路 466
５．館跡の構造 467
６．館跡の性格 467
Ｖ．まとめ 471

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡・・・・・・ 360
第２図　周辺の地形と調査区・・・・・・・・・・ 363
第３図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・ 367・368
第４図　基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 369
第５図　第１住居跡と出土遺物・・・・・・・・ 370
第６図　第２住居跡と出土遺物・・・・・・・・ 372
第７図　第２住居跡出土遺物・・・・・・・・・・ 373
第８図　第3・第4住居跡と出土遺物・・・・ 375
第９図　第５住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 377
第10図　第５住居跡出土遺物⑴・・・・・・・・ 378
第11図　第５住居跡出土遺物⑵・・・・・・・・ 379
第12図　第６住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ 381
第13図　第６住居跡と出土遺物・・・・・・・・ 382
第14図　第７住居跡と出土遺物・・・・・・・・ 384
第15図　第１方形周溝墓・・・・・・・・・・・・・ 386
第16図　第１方形周溝墓と出土遺物・・・・ 388
第17図　第２方形周溝墓・・・・・・・・・・・・・ 390
第18図　第３方形周溝墓と出土遺物・・・・ 391
第19図　第３方形周溝墓・・・・・・・・・・・・・ 392
第20図　第１円形周溝と出土遺物・・・・・・ 393
第21図　第２・第３円形周溝・・・・・・・・・・ 394
第22図　第４円形周溝・・・・・・・・・・・・・・・ 396
第23図　第５円形周溝・・・・・・・・・・・・・・・ 397
第24図　土壙1～7 と出土遺物・・・・・・・・・ 399
第25図　土壙８～10・・・・・・・・・・・・・・・・・ 400
第26図　土壙10出土遺物・・・・・・・・・・・・・ 402
第27図　その他の出土遺物
（縄文土器・弥生土器）・・・・・・・・・・・・・ 404
第28図　その他の出土遺物（土師器・須恵器）405
第29図　館跡地形測量図・・・・・・・・・・・・・ 423
第30図　遺跡周辺の地籍図（明治13年）・・ 425・426
第31図　遺構配置図⑴・・・・・・・・・・・ 427・428
第32図　遺構配置図⑵・・・・・・・・・・・・・・・ 429
第33図　Ａ平場建物跡⑴・・・・・・・・・・・・・ 431
第34図　Ａ平場建物跡⑵・・・・・・・・・・・・・ 432
第35図　Ａ平場建物跡⑶・・・・・・・・・・・・・ 433
第36図　Ａ平場竪穴遺構・井戸・・・・・・・・ 434
第37図　Ａ平場井戸・ピット・土壙⑴・・ 436
第38図　Ａ平場土壙⑵・・・・・・・・・・・・・・・ 438
第39図　１号堀断面図・・・・・・・・・・・・・・・ 440
第40図　Ｂ平場土壙・竪穴遺構・・・・・・・・ 442
第41図　Ｂ平場竪穴遺構・溝・・・・・・・・・・ 443
第42図　土塁断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 444
第43図　2号堀・旧2号堀・3号堀断面図・・・・ 447・448
第44図　Ｃ平場井戸・土壙・・・・・・・・・・・・ 445
第45図　４号堀断面図・・・・・・・・・・・・・・・ 451
第46図　Ｃ平場整地層断面図・・・・・・・・・・ 452
第47図　Ｄ平場溝・土壙・・・・・・・・・・・・・ 454
第48図　出土遺物（陶磁器）・・・・・・・・・・・・ 456
第49図　出土遺物（石臼・木鉢・懸仏）・・ 458
第50図　古銭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 460
第51図　各遺跡の柱間寸法・・・・・・・・・・・・ 462

表　目　次

第１表　土壙（１～10）・・・・・・・・・・・・・・ 403
第２表　土師器坏の分類・・・・・・・・・・・・・ 407
第３表　土師器器台の分類・・・・・・・・・・・・ 407
第４表　土師器壺の分類・・・・・・・・・・・・・ 408
第５表　土師器甕の分類・・・・・・・・・・・・・ 409
第６表　土師器の組み合わせ・・・・・・・・・・ 410
第７表　須恵器坏の分類・・・・・・・・・・・・・ 415
第８表　土壙（11～21）・・・・・・・・・・・・・・ 439
第９表　土壙（22～28）・・・・・・・・・・・・・・ 441
第10表　土壙（29～32）・・・・・・・・・・・・・・ 449
第11表　土壙（33～35）・・・・・・・・・・・・・・ 453
第12表　掘立柱建物跡一覧表・・・・・・・・・・ 461
第13表　破片集計表・・・・・・・・・・・・・ 475・476

写真図版目次

図版１　遺跡遠景…… 477
図版２　航空写真…… 478
上・南東より　下・北東より
図版３　上　第１住居跡…… 479
中　第２住居跡
下　第３・第４住居跡
図版４　上　第５住居跡…… 480
中　第６住居跡
下　第７住居跡
図版５　上　第１方形周溝墓…… 481
中　同上遺物出土状況
下　第２方形周溝墓
図版６　上　第３方形周溝墓…… 482
中　第１～第３方形周溝墓
下　第１円形周溝
図版７　上　第２・第３円形周溝…… 483
中　第４円形周溝
下　第５円形周溝
図版８　上　第1・第2掘立柱建物跡とピット群 484
中　第3～第5掘立柱建物跡とピット群
下　第6・第7掘立柱建物跡とピット群
図版９　上　第１・第２竪穴遺構…… 485
中　第３竪穴遺構
下　第４竪穴遺構
図版10　上　第７竪穴遺構…… 486
中　同上堆積土断面（南北）
下　同上（東西）
図版11　上　Ｂ平場遺構…… 487
中　Ａ・Ｂ平場遺構
下　土壙６と第６竪穴遺構
図版12　上　土壙８…… 488
中　土壙10
下　同上　堆積土断面
図版13　上　１号堀内ピット２…… 489
中　１号堀内ピット１・２
下　Ａ平場土壙群
図版14　上　１号堀（西辺）…… 490
中　１号堀（北辺）
下　２号・旧２号堀（北辺）
図版15　上　２号堀調査風景（西辺）…… 491
中　２号・旧２号堀（西辺）
下　３号堀と通路
図版16　上　３号堀と通路…… 492
中　４号堀（南端）
下　上段平場・調査区風景
図版17　上　土塁（発掘前）…… 493
中　同上（発掘後）
下　同上（積土断面）
図版18　縄文土器…… 494
図版19　縄文・弥生土器…… 495
図版20　古墳時代前期の土師器
（坏・高坏・器台）…… 496
図版21　古墳時代前期の土師器（壺・甕） 497
図版22　古墳時代前期・平安時代の土師器
（甕・甑）…… 498
図版23　平安時代の土師器・須恵器
（坏・壺・甕）…… 499
図版24　中・近世の遺物（陶器・磁器・
懸仏・木鉢・古銭）　500

Ⅰ．遺跡の位置と環境

１．位置と自然環境

鶴ノ丸遺跡は、栗原郡志波姫町八樟字谷地に所在し、志波姫町役場の西約0.8㎞に位置している。

遺跡が所在する志波姫町は、宮城県の北部、栗原郡の東北部に位置し、金成町、若柳町、築館町と夫々境を接し、東西に長い区画を有している。

また、地形的には、迫川などの大小河川によって開析され、樹枝状に展開する築館丘陵支群に挾まれた扇状地性低地（迫川低地）の中に位置し、北部、中央部、南部の三つに分けて見ることができる。

北部は、一迫川によって形成された沖積地がなだらかな傾斜をもって広がり、随所に自然堤防が発達している。こうした沖積地は、水田として利用され、自然堤防上には、集落の形成が見られる。

一方、町の中央部は、築館町鹿島付近から北東に延びる標高20～30mの低平な台地となっており、台地の東端、北端部では舌状に突出し、沖積地と接している。町内の集落の多くは、この台地上に形成され、水田、畑地に利用されている部分も多い。

さらに、南部は、築館町横峰付近から伊豆沼、内沼などの湖沼地帯に延びてゆく標高40m前後の築館丘陵一支群の裾部を含む一帯で、町内では、比較的起伏の多い地形となっている。集落の形成は前者に比して粗で、土地の大部分は、水田として利用されている。

さて、本遺跡は、町中央部の平坦な台地が、吹付付近から北西に向って舌状に突き出した先端部に立地している。この先端部は、東西両側および北側で水田として利用されている一段低い沖積地と接し、また、南側には沢が入り込んでいるため、あたかも独立した地形の様相を呈している。なお、先端頂部と沖積地の比高差は約５ｍである。遺跡は、現在、宅地あるいは畑地、水田として利用され、特に南側では、削平等により旧状を失っている。

２．歴史的環境

鶴ノ丸遺跡は、当初中・近世の館跡として知られていたものであるが、調査の結果、後述するように、縄文時代から近世にまで至る複合遺跡であることが明らかになった。本遺跡の立地する台地および周辺の丘陵、自然堤防上には、縄文時代から中・近世にかけての各時代の遺跡が分布している（第１図）。

縄文時代の遺跡としては、迫川の形成した自然堤防上に立地する刈敷治郎遺跡や、台地上に

番号	遺跡名	時代	9	城内古墳	古墳(後)	19	上ノ上遺跡	古墳(後)～奈良	金成町		
志波姫町			10	山王館跡	中世	築館町			28	妨歯横穴古墳群	奈良
1	**鶴ノ丸遺跡**	**縄文～近世**	11	糠塚遺跡	奈良・平安	20	嘉倉貝塚	縄文(前・中・晩)弥生(中)	29	上館跡	平安(後)
2	宇南遺跡	縄文～近世	12	荒町遺跡	奈良・平安	21	玉萩台遺跡	縄文中・古墳中	30	下館跡	中世
3	御駒堂遺跡	古墳(後)～平安	13	竹ノ内遺跡	縄文	22	照越台遺跡	縄文(中・晩)古墳・奈良・平安	31	姉歯松古墳	奈良
4	日良館跡	中世	14	大門遺跡	奈良・平安	23	萩沢城跡	中世・近世	32	佐野遺跡	奈良・平安
5	阿久戸川古戦場	平安	15	八幡館跡	中世	24	木戸・鰻沢遺跡	縄文(中)	若柳町		
6	刈敷館跡	中世	16	狐塚遺跡	奈良・平安	25	佐内屋敷遺跡	縄文中奈良・平安	33	平館跡	中世・近世
7	刈敷袋遺跡	縄文	17	蓮田館跡	縄文・中世	26	伊治城跡	奈良・平安	34	原貝塚	縄文(晩)
8	刈敷治郎遺跡	縄文(晩)・平安	18	熊谷遺跡	縄文	27	天神城跡	中世・近世	35	敷味貝塚	縄文(後・晩)

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

立地する宇南、熊谷遺跡などがある。概して、本遺跡周辺には少なく、伊豆沼、内沼などの湖沼地帯を臨む丘陵地帯に多く認められている。

弥生時代の遺跡は、さらに少なく、天王山式期の土器棺墓が発見されている宇南遺跡など数ヶ所が知られているに過ぎない。

古墳時代になると、沖積地を見下す台地の縁辺、丘陵端を中心に、前代に比して僅かながら遺跡数の増加を見る。本遺跡同様に、塩釜式期の竪穴住居跡、方形周溝（墓？）などの検出されている宇南遺跡や、城生野、玉萩台遺跡などが知られている。

奈良、平安時代になると、遺跡数は急増し規模も大きくなる。古代東北経営の拠点としての伊治城をはじめにして、宇南、御駒堂、糠塚、佐野、佐内屋敷遺跡などの集落跡や、孤塚遺跡などの窯業跡、城内古墳、姉歯横穴古墳群などが知られている。集落跡の多くは、古墳時代の遺跡とほぼ同じ立地を呈するが、より広い範囲にわたり、一遺跡で検出される住居跡の数も多い(糠塚30軒、御駒堂40数軒、佐内屋敷30数軒など)。また、横穴古墳群は、迫川の両岸の丘陵斜面に多く築かれ、これらは、内陸部における横穴古墳の北限地帯を形成するものとして著名である。

次に、中・近世の遺跡を見ると、日良館、刈敷館、宇南館、下館、天神城跡など多くの城館跡が知られている。これらの館跡には、安永年間の風土記書上げ等に記載されているもの、文書等により館主の明らかなものもあるが、多くについては、未だ不明な点が多い。なお、日良館、宇南館、刈敷館跡からは、板碑の検出もある。また、館跡とは別に、近世において、迫川の水運を利用した米の蔵出し場として、御蔵、堀米などの地名が、一迫、二迫川の合流点近くに残っている。

以上、周辺部の遺跡についてその概略を述べてきた。縄文時代の遺跡は、伊豆沼、内沼などの湖沼地帯を背景とした周辺の丘陵上に多く展開し、本遺跡周辺には少ない。本遺跡周辺において、人々の活動が活発化してくるのは、古墳時代以降のことである。古墳時代以降の遺跡は、迫川の形成した沖積地を取り囲む丘陵、台地の縁辺に多く分布し、中・近世においては、台地上にまでその分布を広げている。このことは、弥生時代以降の人々の生業である水稲農耕の可耕地として迫川低地が最適の場所であったことを物語るものである。方形周溝墓等から想定される支配者階級の存在や、国家機関としての伊治城の存在も、こうした農業基盤から生まれる生産力および農耕集落と有機的なつながりを持つものと考えられる。さらに、中・近世においては、開墾、灌漑などによって台地上にも耕地が拡大され、農業生産力を増大させていったものと思われる。

すなわち、本遺跡周辺の歴史は、迫川低地における農業生産力を基盤として生活した人々の歴史として握えることができよう。

Ⅱ．調査の方法と経過

鶴ノ丸遺跡は、栗原郡誌（栗原教育會：1918）にその記載があり、また、町指定の遺跡としても関心を集めていた。昭和47年、東北自動車道関係遺跡分布調査により、中世から近世にかけての館跡として、その重要性が再確認された。本調査は、自動車道建設に伴って館跡が破壊されるため、事前に調査を行なったものである。調査対象面積は路線敷にかかる約8,500㎡で、これは館跡の中央よりやや西側を中心とした地区である。

１．調査の方法

調査区の設定：自動車道センター杭ＳＴA507＋40とＳＴA507＋60を結ぶ線を南北の基準とし、これに直交する東西線を設け、遺跡全体を３ｍ単位のグリッドで区画した。グリッド名は、南北をアラビア数字（１～73）、東西をアルファベット（A～Z）で表わし、両者の組み合わせで呼ぶことにした。

発掘の方法：発掘に際しては、遺構の分布を検討するために、３グリッドを単位としたトレンチを設定し、遺構のかかわる場合は必要に応じて拡張を行なった。その結果としてほぼ全面を発掘している。

実測図の作成：実測図としては、地形測量図、遺構平面図、断面図がある。平面図は堀・土塁については平板測量を行ない、他の遺構については遣り方測量で行なっている。縮尺は、地形測量図が1/400、平板測量図は1/40・1/100、遣り方平面図は1/20、断面図が1/20である。

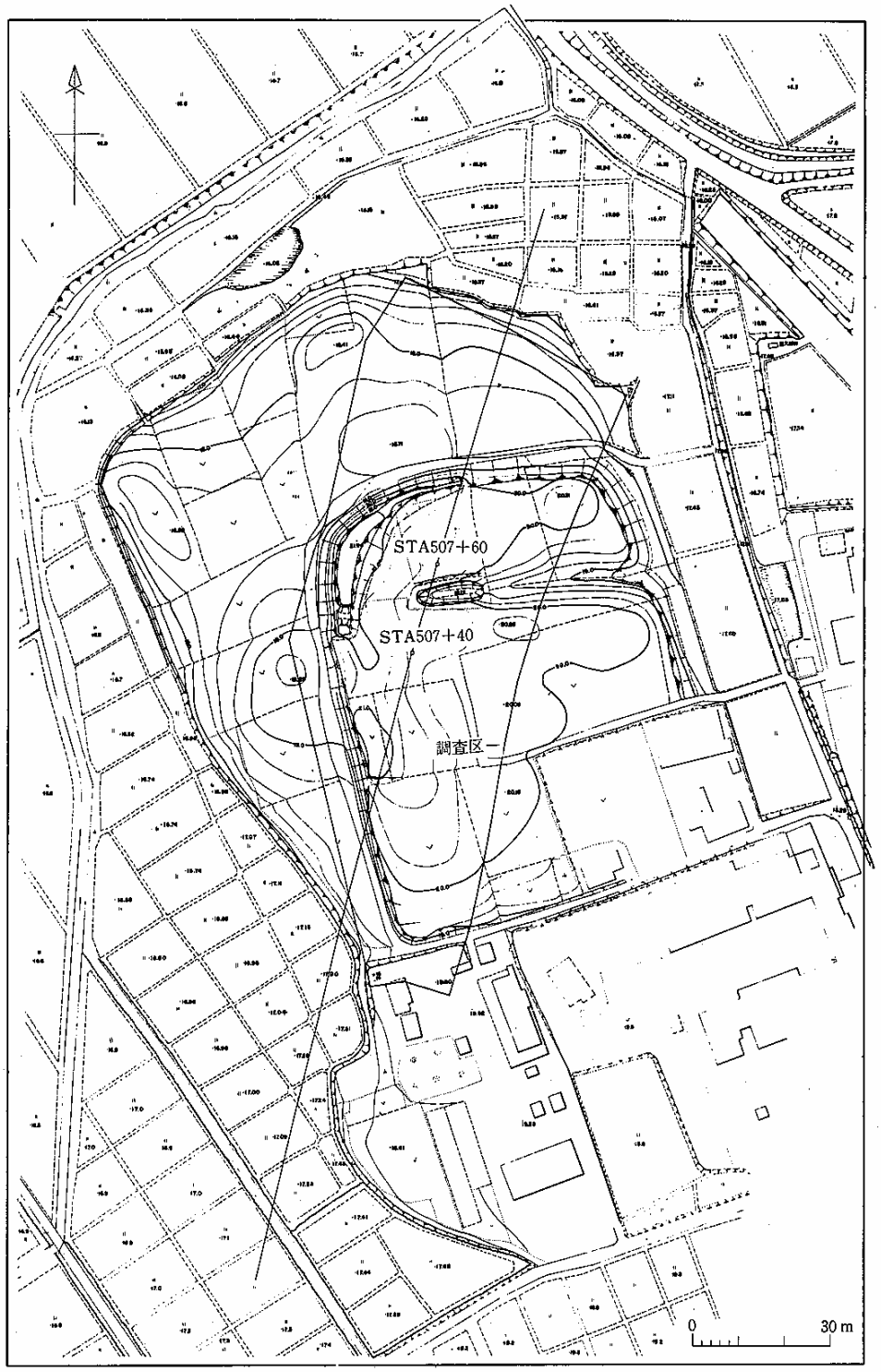
２．調査の経過

調査は３次にわたって実施された。以下にその概要を述べる。

第１次発掘調査：昭和49年９月11日に開始された。遺跡は畑地、宅地等に利用され樹木等も多く、路線の買収が決定してからは荒地ともなっており、まず、下刈り、雑物撤去、抜根作業を行なった。その後、10月７日から地形測量図を作成している。10月中旬から11月初旬にかけては、農繁期とも重なり作業員の確保が難しかったため、また、調査員の他の現場への応援等もあり、調査を一時中断している。

実際の発掘を開始したのは11月７日からである。発掘前の遺跡写真撮影を行なったのち、下段平場にトレンチを設定し、粗掘りを行なった。表土下約40㎝で黒色土層に達し、この面でピット群・井戸１基、土壙３基、堀１本を確認し、部分的に拡張を行ないながら調査を進めた。最終的な調査面積は約620㎡で、精査等は次期調査にゆだね、11月29日で終了している。

第２次発掘調査：第１次調査から２年を経た昭和52年９月20日から開始された。まず、上段



第２図　周辺の地形と調査区

平場Nラインにトレンチを設定し、さらに、これと平行または直交するトレンチを数本設け粗掘りを開始した。その結果、下段平場同様に、黒色土の上面あるいは地山面において堀・溝状遺構・ピット群など多くの遺構が検出された。そこで、トレンチの層位断面図を作成したのち、トレンチ掘りから全面発掘に切り替え、遺構全体の把握に務めた。表土の除去に際してはバックホーなどの重機を導入している。こうして、10 月中旬までに表土除去を終え、遺構の検出、精査へと調査を進めた。11 月中旬までに上段平場の堀の精査をほぼ終了し、平場内における土壙、ピット群の検出、精査に入った。これと並行して、下段平場の遺構確認を行なっている。その結果、第１次調査において検出された堀は西、さらに南に延びることが明らかになり、また、堀の間に重複があり、新旧２本の堀の存在が明らかになった。11 月下旬には、上段平場に遣り方を設定し、平面図の作成、写真撮影などを行ないながら調査を進めたが、冬期間に入り天候が不順となったため、12 月９日で調査を打ち切り、精査の一部を次年度へ持ち込むことになった。

第２次調査で検出された遺構は、堀３本、土塁１本、土壙 18 基、ピット群、井戸３基、竪穴遺構５基などである。

第３次発掘調査：昭和53 年４月 10 日から開始された。第２次調査で明らかになった下段平場の旧堀、および上段平場の土塁、ピット群などの精査を行ない、館跡の全容がほぼ明らかになった。４月 15 日に一般公開を行ない、現地説明会を開催した。その後、土塁の立ち割り、堀の平板測量、上段平場のピット群等の最終的な精査を終え、地山面まで掘り下げた結果、竪穴住居跡、方形周溝墓、円形周溝、土壙等などの遺構が確認され、調査は新たな局面をむかえた。

４月の下旬から精査に入り、５月の中旬までにほぼ精査を終えている。これと並行して、下段平場西側の調査を行ない、外郭線を形成するとも考えられる堀を確認している。こうして、５月 21 日に第２回現地説明会を開催した。その後、断続して調査を進め調査の一切を終了したのは５月 29 日である。最終的な調査面積は8,200 ㎡である。

３．報告に際して

本遺跡は、中・近世に属する館跡として調査を進めたものであるが、後に述べるような調査結果から、縄文時代から近世にわたる複合遺跡であることが明らかになった。そこで、報告書の構成としては、中世以前の遺構として縄文～平安時代までの遺構を述べ、中・近世の遺構として館跡について述べることとする。なお、これまで現地説明会・調査略報等で述べられている遺構の番号と、本書で使用した番号とに若干の違いがあるが、本書の番号をもって最終結果としたい。

遺構番号修正表

（整理の過程で遺構名・番号を下記のように修正した）

土　壙

（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）
土　壙　28	→	土　壙　1	土　壙　1	→	土　壙　13	土　壙　4	→	土　壙　25
2 住ピット	→	土　壙　2	土　壙　23	→	土　壙　14	土　壙　14	→	土　壙　26
3 住ピット	→	土　壙　3	土　壙　25	→	土　壙　15	土　壙　13	→	土　壙　27
土　壙　16	→	土　壙　4	土　壙　26	→	土　壙　16	土　壙　12	→	土　壙　28
土　壙　17	→	土　壙　5	土　壙　17	→	土　壙　17	土　壙　18	→	土　壙　29
土　壙　3	→	土　壙　6	第 7 竪穴遺構	→	土　壙　18	土　壙　19	→	土　壙　30
土　壙　10	→	土　壙　7	土　壙　29	→	土　壙　19	土　壙　20	→	土　壙　31
土　壙　15	→	土　壙　8	土　壙　30	→	土　壙　20	土　壙　2	→	土　壙　32
土　壙　32	→	土　壙　9	土　壙　27	→	土　壙　21	土　壙　5	→	土　壙　33
土　壙　11	→	土　壙　10	土　壙　34	→	土　壙　22	土　壙　7	→	土　壙　34
土　壙　24	→	土　壙　11	土　壙　35	→	土　壙　23	土　壙　6	→	土　壙　35
第 8 竪穴遺構	→	土　壙　12	土　壙　9	→	土　壙　24			

竪穴遺構

（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）
第 1 竪穴遺構	→	第 1 竪穴遺構	第 4 竪穴遺構	→	第 4 竪穴遺構	第 5 竪穴遺構	→	第 7 竪穴遺構
第 2 竪穴遺構	→	第 2 竪穴遺構	第 9 竪穴遺構	→	第 5 竪穴遺構			
第 3 竪穴遺構	→	第 3 竪穴遺構	土　壙　31	→	第 6 竪穴遺構			

井　戸

（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）
井戸跡 1	→	第 1 井戸	井戸跡 2	→	第 2 井戸	土　壙　21	→	第 3 井戸

溝

（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）
溝　1	→	第 1 溝	3 号堀	→	第 4 溝	溝　4	→	第 7 溝
溝　2	→	第 2 溝	4 号堀	→	第 5 溝			
溝　6	→	第 3 溝	溝　5	→	第 6 溝			

堀

（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）
1 号堀	→	1 号堀	旧 2 号堀	→	旧 2 号堀	6 号堀	→	4 号堀
2 号堀	→	2 号堀	5 号堀	→	3 号堀			

ピット

（原　図）		（報告書）	（原　図）		（報告書）
井戸跡 3	→	ピット 1	井戸跡 4	→	ピット 2

Ⅲ．中世以前の遺構と遺物

今回の調査で発見された中世以前と考えられる遺構としては、竪穴住居跡７軒・方形周溝墓３基・円形周溝５基・土壙10基があり、いずれも地山面で確認されている。また、出土遺物としては縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器等がある。ここでは、まず遺跡の基本層位を述べ、次に、これらの発見された遺構と遺物について述べてゆく。なお、出土遺物の項で取り上げた遺物は実測可能なものであり、図示できなかった破片類については、器種、器形、部位、器面調整などによって分類し、末尾に破片集計表として一括した。

１．基本層位（第４図）

遺跡は、北側に向って舌状に突出した台地の先端部に立地し、大きく上下２段の平坦面からなっている。以下、上段・下段に分けて、基本層位について説明する。

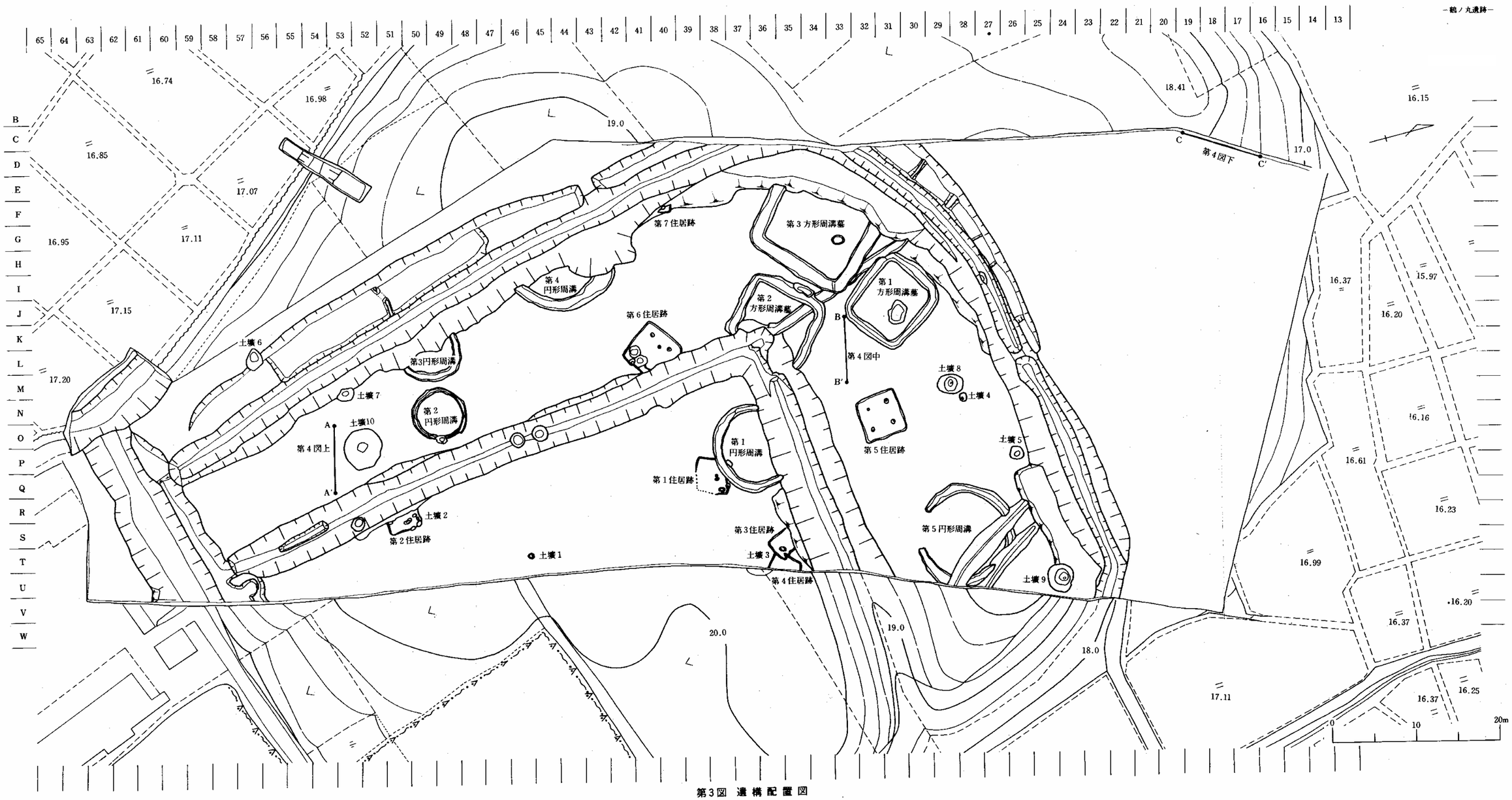
上段

基本的には２層が認められた。第Ⅰ層は表土、耕作土の暗褐色シルト層で、調査区全域に分布し、層の厚さは20～40㎝である。層中からは、縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器などがわずかに出土している。第３、第４溝は、この層中から掘り込まれている。第Ⅱ層は黒褐色シルト層で、調査区西側から中央部に主に分布し、東側では削平のためかその分布は顕著でない。層の厚さは10～20㎝で、層中からは縄文土器、弥生土器が出土している。１号～３号堀は、この層から掘り込まれ、土塁の構築面でもある。なお、竪穴住居跡、方形周溝墓など検出された遺構の大半は、第Ⅱ層下、地山面で確認されたものである。

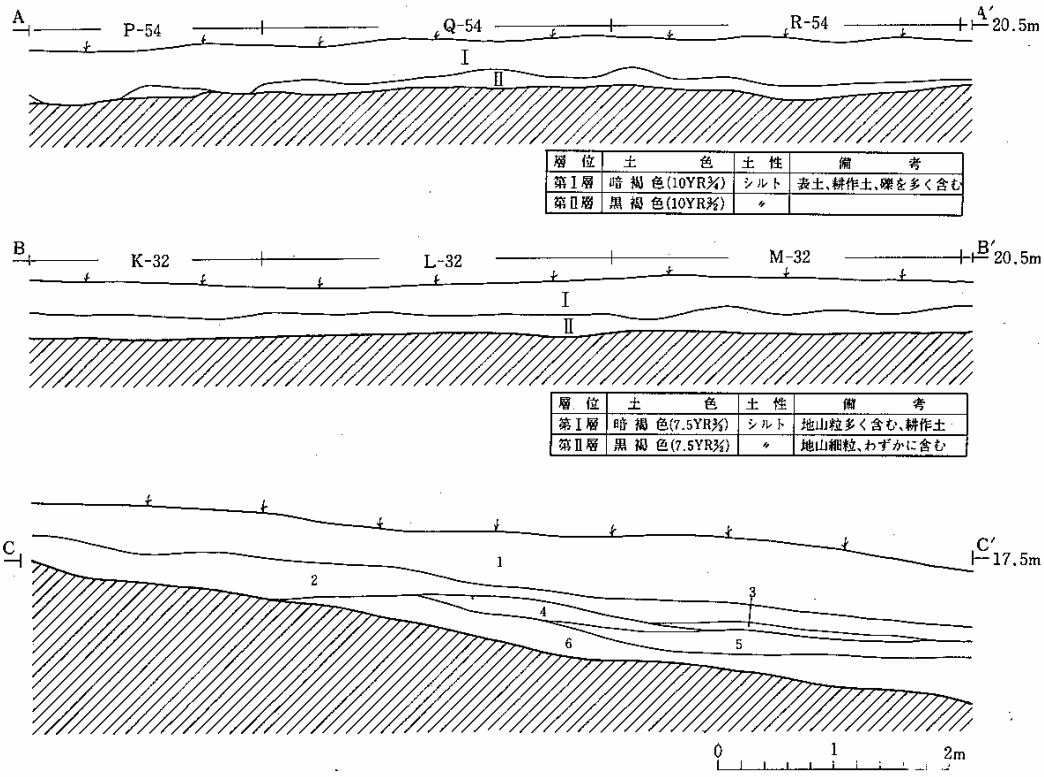
下段

西側では基本的に４層が認められた。しかし、東側では第Ⅰ層と第Ⅳ層の間に整地層があり第Ⅱ、Ⅲ層は認められなかった。整地層については、第Ⅳ章２項(3)および第46図に記してある。

第Ⅰ層は、上段同様に表土、耕作土となっている暗褐色シルト層で、調査区の全域に分布している。層の厚さは平均して40㎝ほどであるが、盛土等により１m近いところもある。層中からは縄文土器、土師器が出土しているが、上段に比して少ない。第Ⅱ層は黒褐色シルト層で、調査区の中央部から西側を中心に分布し、層の厚さは20～40㎝である。層中から遺物の出土はない。第Ⅲ層は褐色シルト・サンド層で、分布は第Ⅱ層と同じである。層の厚さは５～20㎝で層中から遺物の出土はない。第Ⅳ層は黒褐色あるいは黒色シルト層で、調査区のほぼ全域に分布し、層の厚さは、10～120㎝で、特に北側の沖積地に向って厚さを増している。上段のⅡ層に対応するものであろう。層中からは縄文土器、弥生土器がわずかに出土している。ピット群はこの層の上面で、井戸、土壙はⅣ層下の地山面で確認された。


ー鶴ノ丸遺跡ー
第3方形周溝墓
第1方形周溝墓
第2方形周溝墓
第7住居跡
第4円形周溝
第6住居跡
第3円形周溝
第2円形周溝
第1円形周溝
第1住居跡
第2住居跡
第3住居跡
第4住居跡
第5住居跡
第5円形周溝
土壙1
土壙2
土壙3
土壙4
土壙5
土壙6
土壙7
土壙8
土壙9
土壙10
第4図上
第4図中
第4図下
0
10
20m

第3図 遺構配置図



層位	土色	土性	備考
第Ⅰ層	暗褐色(10YR3/4)	シルト	表土、耕作土、礫を多く含む
第Ⅱ層	黒褐色(10YR3/2)	〃	

層位	土色	土性	備考
第Ⅰ層	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山粒多く含む、耕作土
第Ⅱ層	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	地山細粒、わずかに含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	表土・耕作土
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	〃	
	3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒、多く含む
第Ⅲ層	4	褐色(10YR4/3)	〃	
	5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	
第Ⅳ層	6	黒褐色(10YR3/2)	〃	

第4図　基本層位

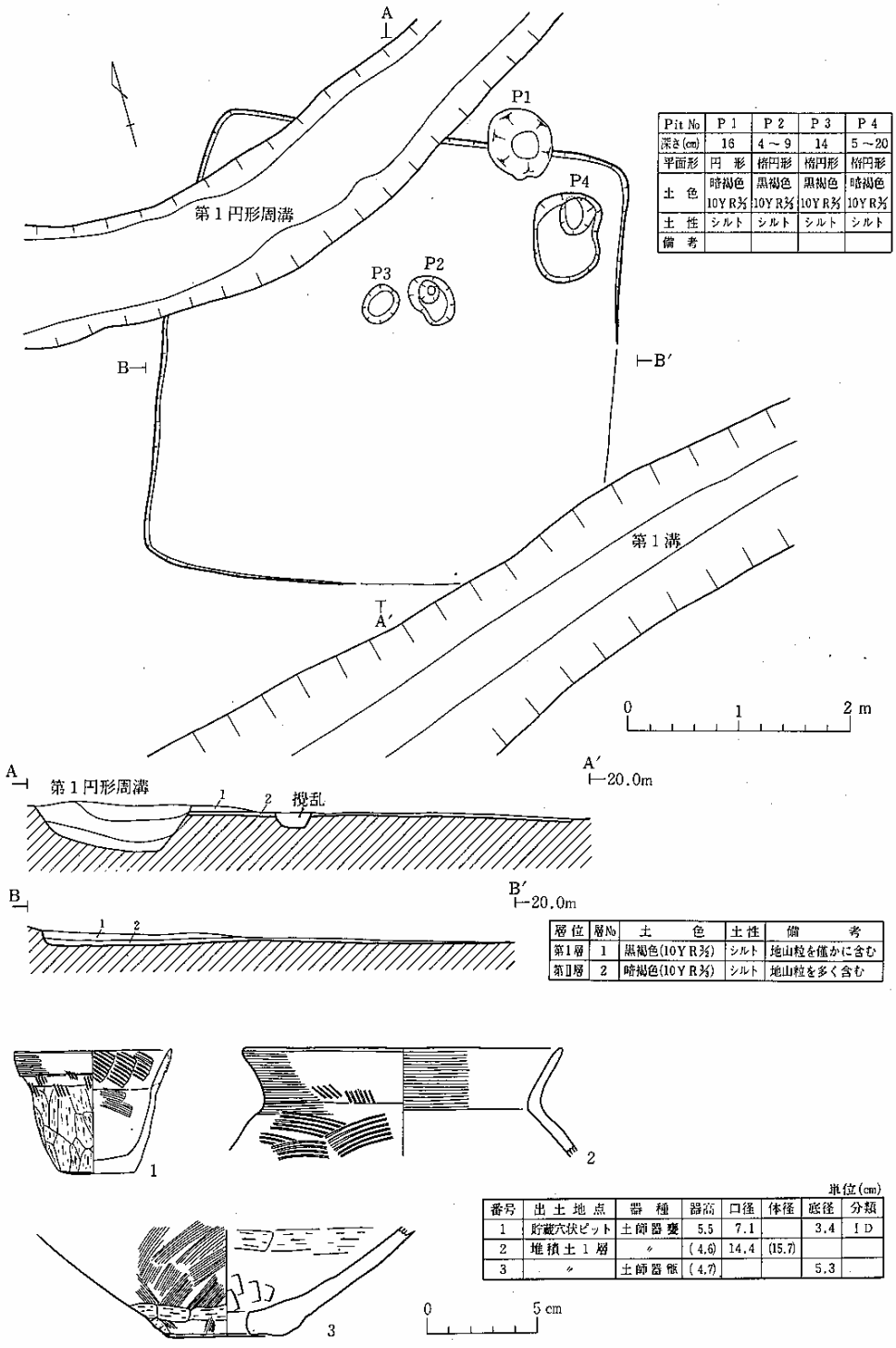
2．竪穴住居跡とその出土遺物

第1住居跡（第5図）

〔確認・重複〕調査区のほぼ中央部で検出され、第1円形周溝・第1溝・ピットによって切られている。

〔平面形・規模〕北西隅が第1円形周溝に、南東隅が第1溝によって切られ失われている。残存部から推定して、一辺約4mの方形基調の住居跡と思われる。

〔堆積土〕2層認められた。削平により堆積土の状況は良好とは言えない。第Ⅱ層は、床面全体に薄く堆積している。第Ⅰ層は、住居西半部分には残存しているが、その広がりについては不明である。



Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4
深さ(cm)	16	4～9	14	5～20
平面形	円　形	楕円形	楕円形	楕円形
土　色	暗褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/3
土　性	シルト	シルト	シルト	シルト
備　考				

層位	層No	土　色	土性	備　考
第1層	1	黒褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を僅かに含む
第II層	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を多く含む

単位(cm)

番号	出土地点	器　種	器高	口径	体径	底径	分類
1	貯蔵穴状ピット	土師器甕	5.5	7.1		3.4	1D
2	堆積土1層	〃	(4.6)	14.4	(15.7)		
3	〃	土師器甑	(4.7)			5.3	

第５図　第１住居跡と出土遺物

〔壁〕地山を壁としている。各壁とも重複・削平等によって壊され、残存高は最も高い西壁で約12㎝である。

〔床面の状況〕南東部では削平が床面まで及んでいるため、床面が失われている。残存部については、地山を床としており、平坦で堅い面をなしている。床面には４個のピット（Ｐ１～Ｐ４）が認められるが、P_1・P_2は住居堆積層の上面ですでに確認されていたもので、床面で確認されたものはP_3・P_4である。P_4は、平面形が楕円形（長軸80㎝×短軸60㎝）で深さ約20㎝を測り、底面から土師器甕が出土している。貯蔵穴状ピットと思われる。P_3は、柱痕跡が認められず柱穴とは考え難く、柱穴については不明である。

なお、周溝・カマド等は検出されなかった。

〔出土遺物〕住居に伴うと考えられる遺物で図示できたものに、貯蔵穴状ピット内出土の土師器甕１点がある。

甕（第５図１）小形のものである。口縁部は複合口縁となっており、わずかに外傾している。体部は直線的で、底部は平底である。器面調整は、口縁部外面に横ナデ、内面に刷毛目、体部外面は刷毛目ののちヘラケズリ、ヘラミガキ（単位不明）され、内面はナデが施されている。

〔堆積土出土遺物〕堆積土中からは縄文土器・弥生土器・土師器が出土しているが、前２者については後述し、ここでは土師器について述べる。器種としては、甕・壺・甑などがあり、いずれも破片として出土しているが、図示できるものが２点ある。

甕（第５図２）口縁部から体部上端にかけての資料である。口縁部は外傾し、体部は球形を呈するものと思われる。器面調整として、外面は刷毛目ののち口縁部に横ナデ、内面は口縁部に横ナデが施されている。

甑（第５図３）体下部から底部にかけての資料である。単孔式で鉢型を呈するものと思われる。器面調整として、外面にナデ、ヘラケズリが、内面にはヘラナデ、ヘラケズリがみられる。

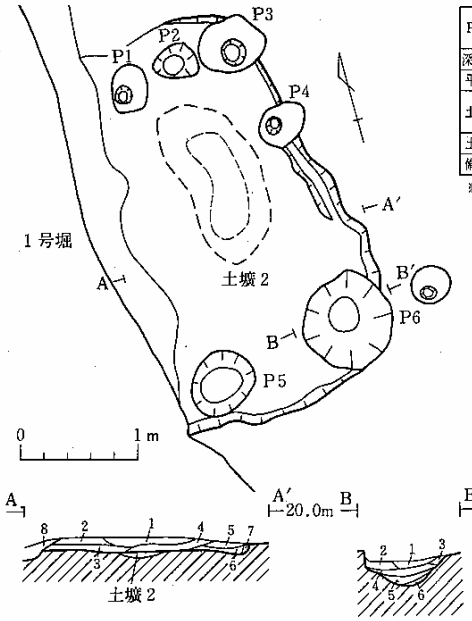
第２住居跡（第６・７図）

〔確認・重複〕上段平場南側で検出された。１号堀、ピットに切られ土壙２を切っている。

〔平面形・規模〕西半が１号堀によって切られているため、全体の規模については不明である。東壁は3.4mを測る。東西については、1.7m残存しているに過ぎない。平面形は、南東隅等から推して方形基調と思われる。

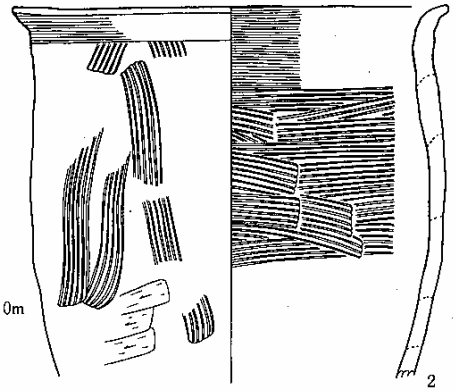
〔堆積土〕４層に大別される。第Ⅳ層は、東壁沿いの床面上に認められる堆積層で、周溝内の堆積土ともなっている。第Ⅲ層としたものは、東壁中央部から南壁部分にかけて認められる焼土の層である。第Ⅱ層は、住居中央部床面上に堆積している。第Ⅰ層は、住居中央部に認められ、床面までは達していない。

〔壁〕地山を壁としている。残存壁高は、東壁が最も高く約12㎝、南壁・北壁では５㎝前後認



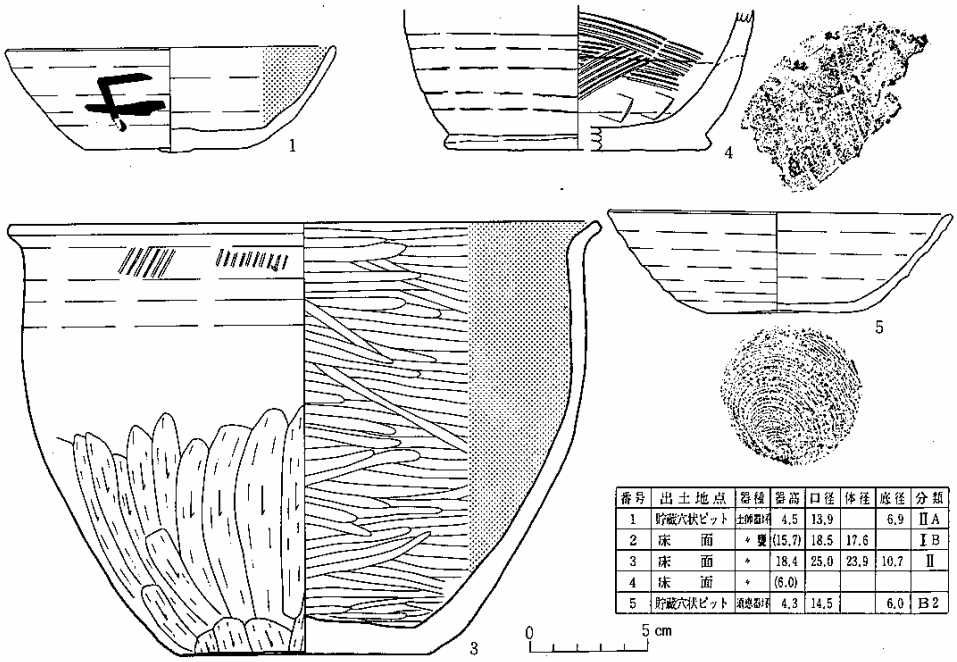
Pit No	P1		P2	P3		P4		P5	P6
	掘り方	柱痕		掘り方	柱痕	掘り方	柱痕		
深さ(cm)	30	28	15	48	34	38	34	21	26
平面形	楕円形	円形	不整円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形
土色	暗褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/2	暗褐色 10YR3/3	暗褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/2	褐色 10YR4/4	
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	
備考	小礫含む		地山粒含む	※1		地山粒含む		※2	※3

※1 小礫、地山粒含む　※2 木炭、焼土含む　※3 貯蔵穴状ピット



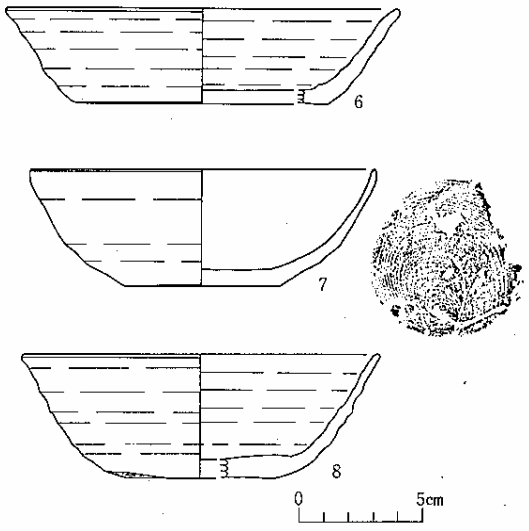
層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	僅かに焼土、木炭を含む
	2	暗褐色(10YR3/4)	〃	焼土を多く含む
第Ⅱ層	3	暗褐色(10YR3/3)	〃	灰白色、粘土、粒子、焼土、木炭を多く含む
	4	暗褐色(10YR3/3)	〃	灰白色、粘度、粒子、焼土、木炭
第Ⅲ層	5	明褐色(7.5YR5/6)	〃	焼土、木炭を含む
第Ⅳ層	6	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
	7	黒褐色(10YR3/2)	〃	6に比して地山粒を多く含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭、焼土、地山粒含む
	2	暗褐色(10YR3/3)	〃	木炭、焼土、地山粒含む
	3	暗褐色(10YR　)	〃	灰白色塊、木炭含む
	4	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅱ層	5	黒褐色(10YR3/3)	〃	
第Ⅲ層	6	黒褐色(10YR3/3)	〃	



番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	貯蔵穴状ピット	土師器甕	4.5	13.9		6.9	ⅡA
2	床面	〃 壺	(15.7)	18.5	17.6		ⅠB
3	床面	〃	18.4	25.0	23.9	10.7	Ⅱ
4	床面	〃	(6.0)				
5	貯蔵穴状ピット	須恵器坏	4.3	14.5		6.0	B2

第6図　第2住居跡と出土遺物



単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
6	床面	須恵器坏	3.9	16.0		10.1	B2
7	床面	〃	4.8	14.0		6.2	B2
8	貯蔵穴状ピット	〃	5.0	14.4	12.2	6.0	B1
9	床面	須恵器壺	(7.6)			7.3	

第７図　第２住居跡出土遺物

められるだけである。

〔床面の状況〕西半は重複によって失われている。残存部では、土壙２と重複する部分に貼り床をしている以外は、地山を床としている。貼り床の部分は、地山の部分にくらべてわずかにくぼんでいる。床面には、６個のピット（P_1～P_6）が認められる。P_3・P_4は堆積土上面で確認されたもので、本住居に伴うものではない。南東隅に位置するP_6は、堆積土中及び床面から須恵器坏などが出土している。規模は径約80cm、深さ約26cmで貯蔵穴状ピットと思われる。また、P_1は柱痕跡が認められるが、P_2・P_5には柱痕跡はなく、全体の柱穴については不明である。なお、東壁中央部沿いに長さ80cm、幅20cm、深さ４cm前後の周溝が認められている。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物で図示できたものに、床面出土の土師器甕３点と、須恵器坏２点、須恵器壺１点、貯蔵穴状ピット内出土の土師器坏１点と須恵器坏３点がある。床面出土の遺物は、大半が住居の中央部で認められているが、完全なものはない。

土師器

坏（第６図１）製作に際しロクロを使用し、底部の切り離し技法がヘラ切りによるものである。体部から口縁部にかけて、わずかに丸味をもちながら外傾している。器面調整として、内外面とも口縁部から体部はロクロ調整され、底部外面は周縁部がわずかにヘラミガキされている。内面は黒色処理が施されている。なお、体部外面には墨書があり、「カ」とも判読できる。

甕（第６図２～４）２は長胴形を呈している。製作に際しロクロを使用していない。口縁部は短く外反し、体部は直線的である。底部は欠損しているため不明である。器面調整として、口縁部内外面に横ナデ、体部外面に刷毛目ののちヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

３・４は、製作に際しロクロを使用している。３は、いわゆる鉢型を呈している。口縁部は短く、外反し、体部は内弯気味に立ち上がり、底部は平底である。器面調整として、外面体部上半には、平行タタキ目を施したのちロクロ調整を、下半から底部にはヘラケズリが、内面には、ヘラミガキののち黒色処理が施されている。４は、体部下半から底部にかけての資料である。底部は平底で、体部はやや丸味をもっている。体部外面は粘土積み上げ痕が、底部外面には木葉痕が認められる。器面調整は、外面はロクロ調整され、内面は刷毛目、ヘラナデである。

須恵器

坏（第６図５・第７図６～８）底部の切り離し技法が回転糸切りによるものである。体部から口縁部にかけてはいずれも外傾し、やや外反するもの（６）、端部が内弯気味になるもの（７）もみられる。９には、体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。

壺（第７図９）体部から底部にかけての資料である。底部切り離し技法は回転糸切りで、体部は内弯気味に立ち上がっている。器面調整としては、外面にはロクロ調整が施されている。

第３住居跡（第８図）

〔確認・重複〕第１住居跡の東側で検出された。１号堀に切られ、第４住居跡、土壙３を切っている。

〔平面形・規模〕西側が１号堀に切られ、また、後世の削平により失われているため、全体の規模については不明である。東壁は約2.7mを測り、南北壁は約2.4mが残存している。平面形は残存部から推して方形基調と思われる。

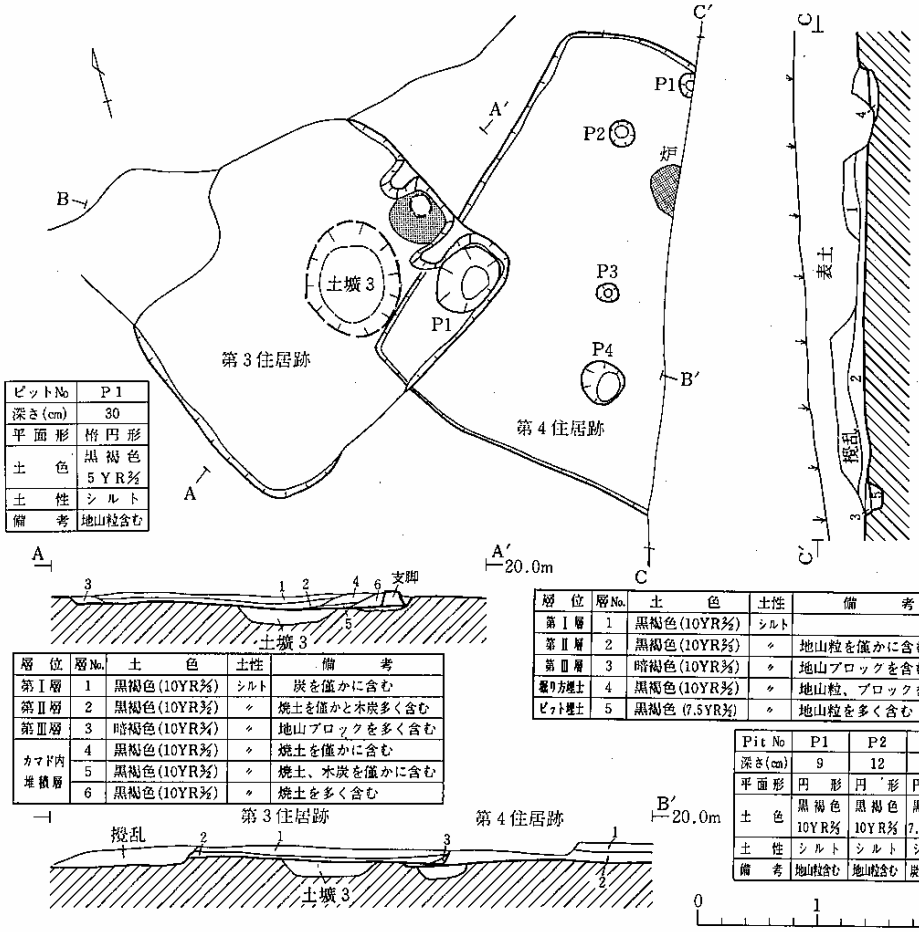
〔堆積土〕３層認められた。第Ⅲ層は西壁寄りの床面上に堆積している。第Ⅰ層・第Ⅱ層の分布はほぼ同じで、住居中央部に認められ、第Ⅱ層は床面上に堆積している。

〔壁〕第４住居跡と重複する部分では、第４住居跡堆積土を壁としており、他の部分では、地山を壁としている。残存壁高は、北壁が最も高く約 10㎝、他の部分では約５㎝ である。床面からの立ち上がりは緩やかである。

〔床面の状況〕土壙３と重複する部分は、土壙３の堆積土上面を、他の部分では地山を床としている。床面には、わずかに凹凸が認められるが、ほぼ平坦で堅い面となっている。カマド右側で１個のピット（P_1）が検出された。平面形は楕円形で、規模は長軸55㎝、短軸40㎝、深さ30㎝である。位置などから貯蔵穴状ピットの可能性がある。柱穴、周溝は認められない。

〔カマド〕北壁の東寄りに構築されており、燃焼部と側壁が残存している。燃焼部は、幅・奥行きとも約50㎝ で、底面は火熱により赤変し堅くなっている。側壁は粘土で築かれている。なお、燃焼部底面奥壁近くからは、支脚に使用されたと考えられる土師器甕が倒位で検出されている。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物で図示できたものに、カマド内で支脚として使用された土師器甕

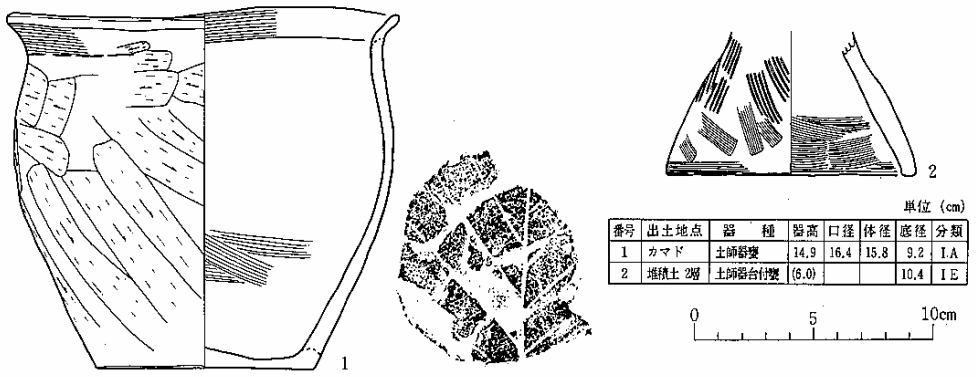


ピットNo	P1
深さ(cm)	30
平面形	楕円形
土色	黒褐色 5YR3/2
土性	シルト
備考	地山粒含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/3)	〃	地山粒を僅かに含む
第Ⅲ層	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロックを含む
掘り方埋土	4	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒、ブロックを含む
ピット埋土	5	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	地山粒を多く含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭を僅かに含む
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	〃	焼土を僅かと木炭多く含む
第Ⅲ層	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山ブロックを多く含む
カマド内堆積層	4	黒褐色(10YR3/2)	〃	焼土を僅かに含む
	5	黒褐色(10YR3/2)	〃	焼土、木炭を僅かに含む
	6	黒褐色(10YR3/2)	〃	焼土を多く含む

Pit No	P1	P2	P3	P4
深さ(cm)	9	12	14	14
平面形	円形	円形	円形	円形
土色	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 10YR3/3	黒褐色 7.5YR3/2	黒褐色 7.5YR3/2
土性	シルト	シルト	シルト	シルト
備考	地山粒含む	地山粒含む	炭化物含む	地山粒含む



単位 (cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	カマド	土師器甕	14.9	16.4	15.8	9.2	I.A
2	堆積土 2層	土師器台付甕	(6.0)			10.4	I E

第8図　第3・第4住居跡と出土遺物

１点がある。

甕（第８図１）鉢型を呈している。製作に際しロクロを使用していない。口縁部は短く、外反し、体部は上半でややふくらみ平底の底部に至っている。器面調整として、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。底部外面には木葉痕が観察される。

〔堆積土出土遺物〕堆積土２層中から、縄文土器・土師器・須恵器の破片がわずかに出土している。図示できたものは、土師器台付甕１点である。

甕（第８図２）台付甕の台の部分と思われる。円錐台状を呈し、端部内面に稜をもっている。器面調整として、外面には刷毛目・ナデが、内面にはナデが施されている。

第４住居跡（第８図）

〔確認・重複〕第３住居跡の東側で検出され、南西隅が第３住居跡によって切られている。

〔平面形・規模〕東半部分が調査区外に延びるため、全体の形については不明であるが、残存部分から方形基調と思われる。規模は北辺で約3.6mを測る。

〔堆積土〕３層認められた。耕作などによる攪乱をうけ、堆積土の状況は良好とは言えない。第Ⅲ層は、東壁沿いの床面上に部分的に認められるだけで、第Ⅱ層が床面上に広く堆積している。第Ⅰ層は、住居中央部南側にわずかに認められる。

〔壁〕地山を壁としている。各壁とも重複・削平等により保存状態は良くない。最も残存高の高い西壁で約10㎝、他の壁では約５㎝残っているだけである。

〔床面の状況〕西壁から北壁にかけての壁沿いの部分には、幅40㎝前後の住居掘り方が認められ、壁沿いでは、掘り方埋土上面を床面としている。他の部分では地山を床面としている。床面は中央部がわずかに高く、堅くなっている。周溝は検出されなかった。また、４個のピット（P_1～P_4）が検出されているが、柱痕跡をもたず、配置に規則性がないことから、柱穴とは考え難い。

〔炉〕住居中央部より東壁側に寄ったところに焼面が確認された。径約40㎝の範囲で、床面下約６㎝のところまで熱変化をうけている。

〔出土遺物〕認められない。

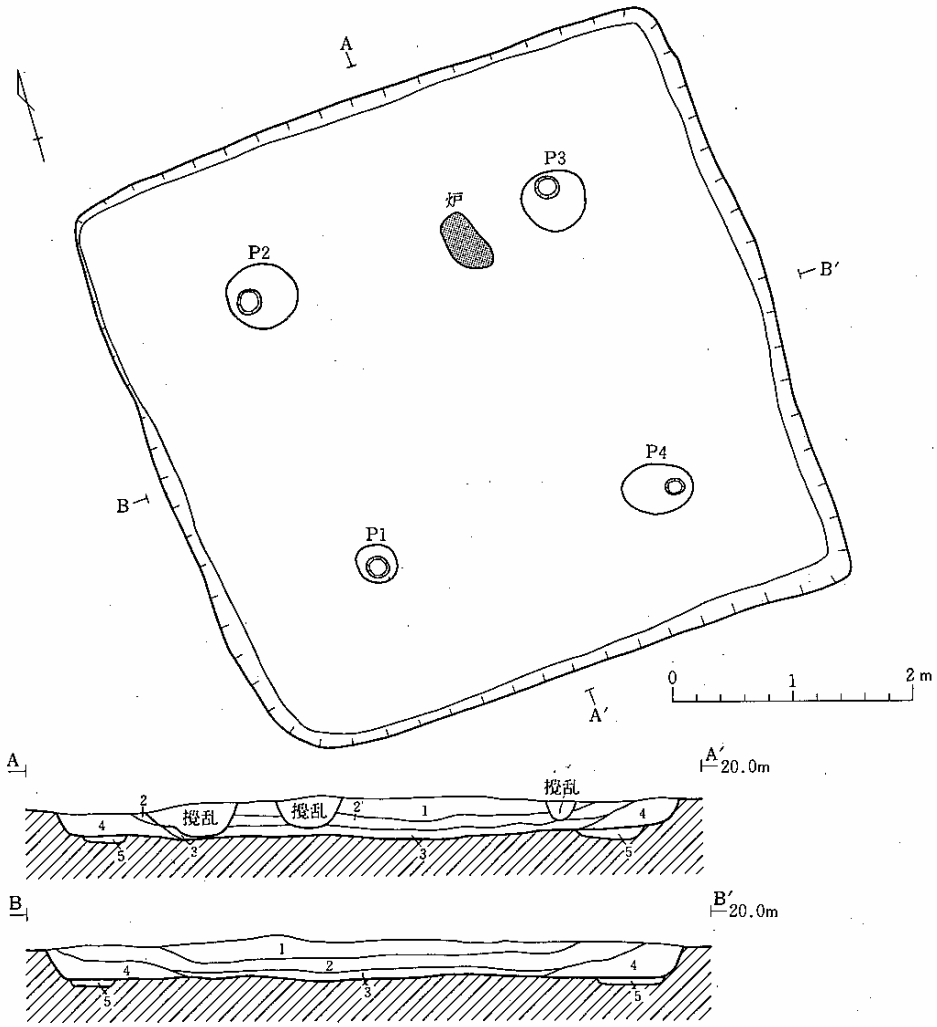
第５住居跡（第９～11図）

〔確認・重複〕第１住居跡の北側で検出された。重複は認められない。

〔平面形・規模〕南北5.15m、東西5.3mのほぼ正方形の住居跡である。

〔堆積土〕４層認められた。第Ⅳ層は各壁沿いの床面上に堆積し、第Ⅲ層～第Ⅰ層は、住居中央部にほぼ水平な堆積状況を示している。第Ⅲ層は広く床面上に堆積している。

〔壁〕地山を壁としている。残存壁高は20～30㎝で、壁面の保存も良く、床面からは急角度で



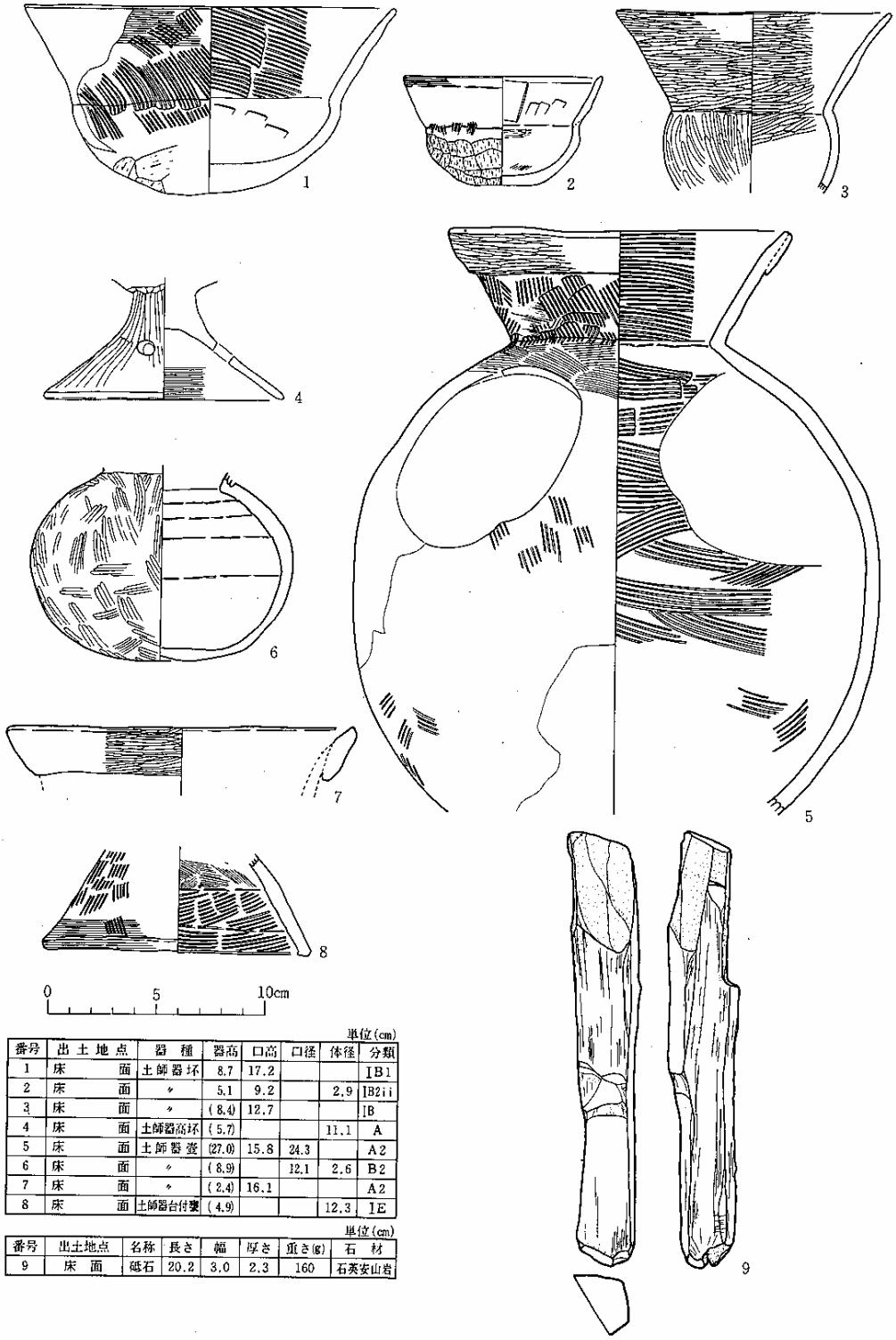
層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭火物を僅かに含む
第Ⅱ層	2	暗褐色(10YR3/4)	〃	炭火物を僅かに含む
第Ⅲ層	3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	地山粒を含む
第Ⅳ層	4	暗褐色(10YR3/3)	〃	焼土、地山粒を含む
堀り方埋土	5	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を含む

Pit No	P1		P2		P3		P4	
	掘り方	柱痕	掘り方	柱痕	掘り方	柱痕	掘り方	柱痕
深さ(cm)	42	43	39	40	31	35	25	36
平面形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形
土色	褐色 10YR4/4	黒褐色 10YR3/2	黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/2	黄褐色 10YR5/4	墨褐色 10YR3/2	黄褐色 10YR5/4	黒褐色 10YR3/2
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考	小礫含む	地山粒含む		小礫含む				

第9図　第5住居跡

立ち上がっている。

〔床面の状況〕各壁沿いの部分には、幅30～50cmの住居掘り方が認められ、この部分では、掘り方埋土の上面を床面にしている。他の部分では地山を床面としている。床面は平坦で地山の



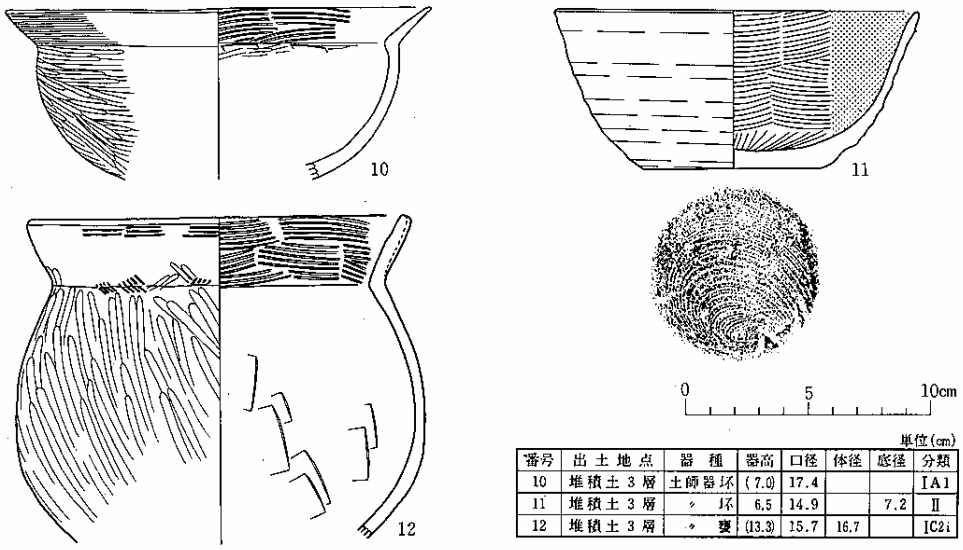
単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口高	口径	体径	分類
1	床面	土師器坏	8.7	17.2			ⅠB1
2	床面	〃	5.1	9.2		2.9	ⅠB2ii
3	床面	〃	(8.4)	12.7			ⅠB
4	床面	土師器高坏	(5.7)			11.1	A
5	床面	土師器甕	(27.0)	15.8	24.3		A2
6	床面	〃	(8.9)		12.1	2.6	B2
7	床面	〃	(2.4)	16.1			A2
8	床面	土師器台付甕	(4.9)			12.3	ⅠE

単位(cm)

番号	出土地点	名称	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	石材
9	床面	砥石	20.2	3.0	2.3	160	石英安山岩

第10図　第５住居跡出土遺物（１）



単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
10	堆積土3層	土師器坏	(7.0)	17.4			IA1
11	堆積土3層	〃 坏	6.5	14.9		7.2	II
12	堆積土3層	〃 甕	(13.3)	15.7	16.7		IC2i

第11図　第５住居跡出土遺物（２）

部分は堅くしまっている。周溝は認められない。なお、床面上で４個のピット（P_1～P_4）が検出されている。これらは柱痕跡が認められること、住居の対角線上に規則的に配置されていることなどから、本住居跡に伴う柱穴と思われる。

〔炉〕住居中央部よりやや北東寄りの部分に南北50cm、東西30cmの範囲で焼面が認められた。床面から約３cmの部分まで熱変化をうけて赤変している。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物で図示できたものに、床面出土の土師器坏３点、高坏１点、壺３点、台付甕１点、砥石１点がある。出土地点にまとまりはなく、ほぼ床面全体に散らばって認められる。

土師器

坏（第10図１～３）いずれも体中央部内面に稜をもっている。１は、底部が丸底で体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外傾している。器面調整は、外面口縁部が刷毛目ののち横ナデ、体部が刷毛目、底部がヘラケズリで、内面は、口縁部に刷毛目、体部にヘラナデが施されている。２は、底部が平底である以外、器形的に１と似ている。器面調整は、外面口縁部が横ナデ、体部が刷毛目ののちヘラケズリ、内面は、口縁部にヘラナデ、体部にナデが施されている。３は、底部を欠損している。体部の内弯は１・２より強く、口縁部は１・２に比して長く、大きく開きながら外傾している。器面調整は、内外面とも入念なヘラミガキである。

高坏（第10図４）坏部を欠損しているための脚部器形しか判然としない。脚部は円錐台状を呈し、３個の円窓が穿たれている。器面調整としては、外面にヘラミガキ、内面には横ナデが

施されている。

壺（第10図５～７）５は、底部を欠損している。体部はやや縦長の球形を呈し、頚部で鋭く屈曲する。口縁部は複合口縁を呈し、外傾している。体部上半に焼成後に穿たれた径約９㎝の孔が１個認められる。器面調整として、外面口縁部にヘラミガキ、頚部に刷毛目、体部には刷毛目ののちナデ、ヘラミガキ（単位不明）がわずかに認められる。内面には刷毛目が施されている。６は、口縁部を欠損している。体部はやや横長の球形を呈し、底部はわずかにくぼんでいる。内面には、粘土の積み上げ痕が明瞭に観察される。器面調整として、体部外面にヘラミガキが施されている。７は、口縁部破片である。複合口縁を呈し、外傾している。器面調整として、外面にヘラミガキが施されている。内面については剥落が著しく不明である。

台付甕（第10図８）台の部分が残存している。円錐台状を呈し、内面には粘土の積み上げ痕が明瞭である。器面調整として、外面に刷毛目ののち裾部に横ナデが、内面はナデ、刷毛目が施されている。

砥石（第10図９）半欠品である。残存平面形はほぼ長方形を呈している。表面には二段の平坦面がみられる。使用痕として表裏側面に擦痕がみられる。石材は石英山岩である。

〔堆積土出土遺物〕堆積土３層中から出土した遺物で図示できたものに、土師器坏２点、甕１点がある。

土師器

坏（第11図10・11）10は稜・屈曲が体上部に位置し、底部形態が丸底を呈している。体部は、内弯気味に立ち上がり、口縁部は強く外傾する。器面調整としては、外面口縁部に横ナデ、体部にヘラミガキ、内面口縁部に刷毛目、体部にはヘラミガキが施されている。11は、製作に際しロクロを使用しており、底部の切り離しは右回転糸切りである。体部から口縁部にかけては丸味をもって外傾している。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕（第11図12）底部を欠損している。口縁部は外傾し、粘土貼り付けによって肥厚している。また、体部はゆがんだ球形を呈している。外面は口縁部・体部に刷毛目ののちヘラミガキを施し、内面は、口縁部に刷毛目、体部にヘラナデが施されている。

第６住居跡（第12・13図）

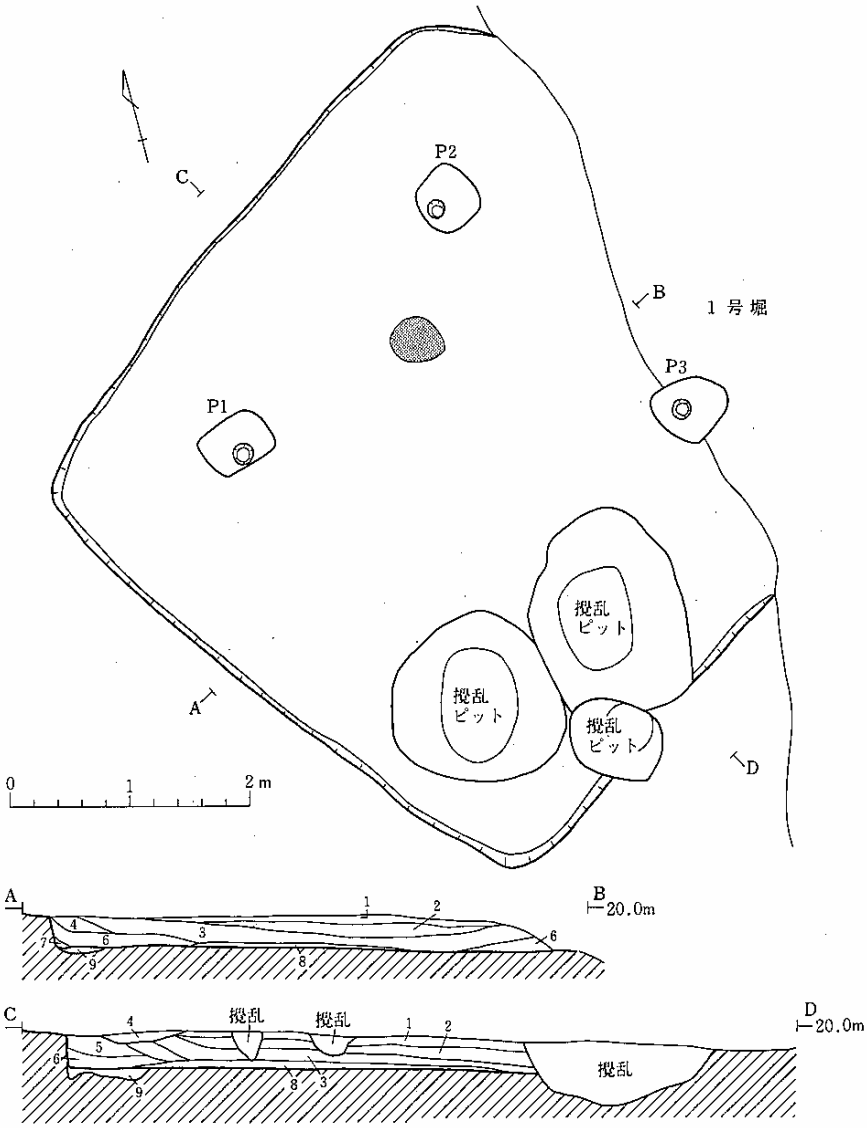
〔確認・重複〕調査区中央部第１住居跡の西で検出された。１号堀に切られ、南西隅には攪乱がおよんでいる。

〔平面形・規模〕南辺が１号堀によって切られ失われているが、残存部から推して、一辺約5.5ｍのほぼ正方形の住居跡と思われる。

〔堆積土〕６層に大別される。第Ⅵ層は壁際を除く床面上に薄く認められる堆積層で、第Ⅴ層は北壁際にのみ認められる地山の崩壊土層である。第Ⅲ・第Ⅳ層は、各壁際に認められ、第Ⅳ

層は床面上に堆積している。第Ⅰ・第Ⅱ層は、住居中央部にレンズ状の堆積を示し、第Ⅱ層の一部は床面にまで達している。

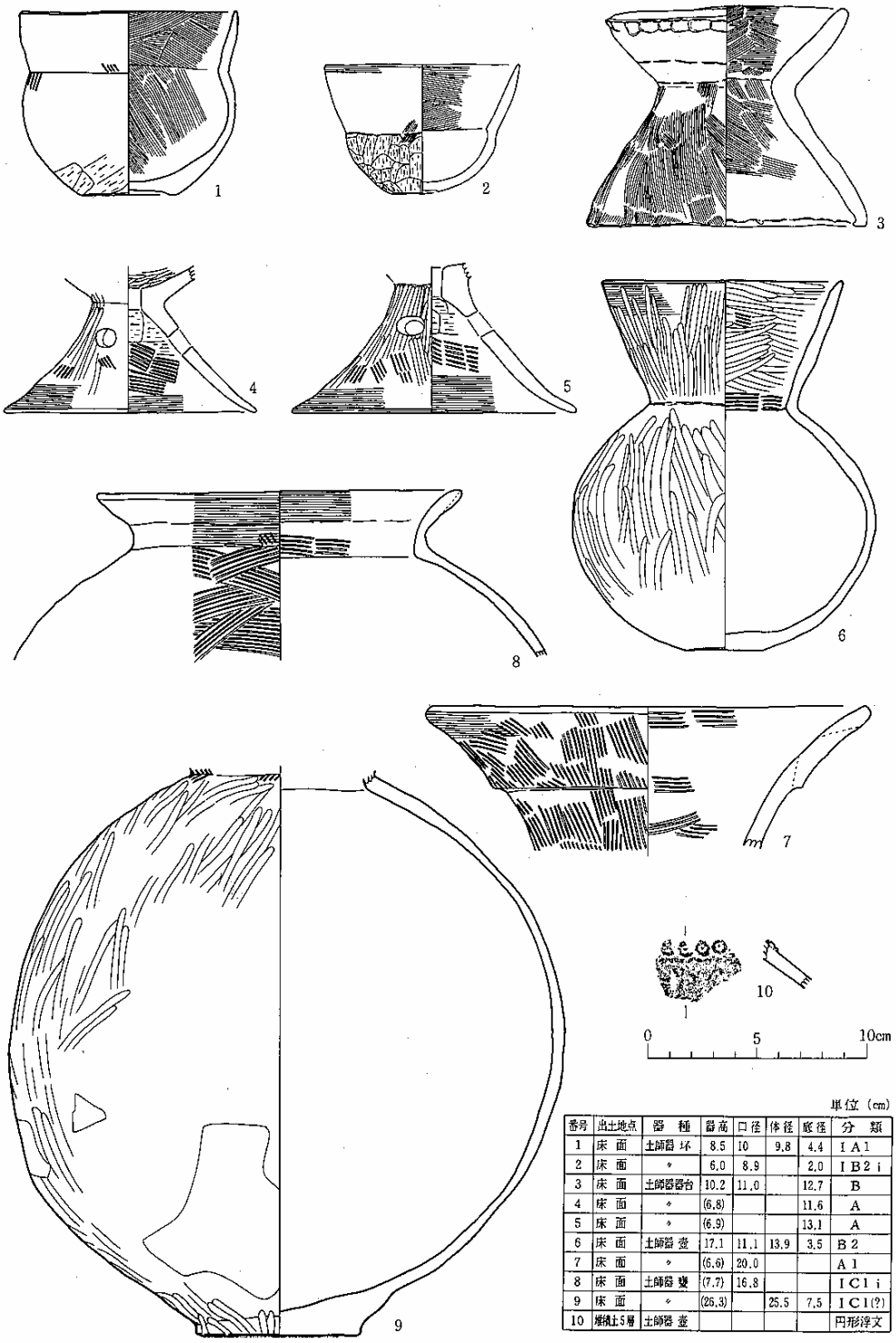
〔壁〕地山を壁としている。重複によって失われている南壁を除いては、壁面の保存は良く、



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を僅かに含む
	2	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を多量に含む
第Ⅱ層	3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を多量に含む
第Ⅲ層	4	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒を多量に含む
第Ⅳ層	5	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
	6	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
第Ⅴ層	7	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒を多量に含む量
第Ⅵ層	8	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒、木炭を多量に含む
掘り方埋土	9	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒、ブロックを多量に含む

Pit No.	P1		PP2		P3	
	掘り方	柱痕	掘り方	柱痕	掘り方	柱痕
深さ(cm)	62	57	60	59	58	62
平面形形	方形	円形	方形	円形	方形	円形
土色	褐色 10YR4/4	褐色 10YR4/4	黄褐色 10YR5/4	暗褐色 10YR3/4	黄褐色 10YR5/4	暗褐色 10YR3/4
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考	シルト粒含む	木炭含む		地山粒多く含む		地山粒含む

第12図　第 6 住居跡



単位（cm）

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	床面	土師器 坏	8.5	10	9.8	4.4	ⅠA1
2	床面	〃	6.0	8.9		2.0	ⅠB2 i
3	床面	土師器器台	10.2	11.0		12.7	B
4	床面	〃	(6.8)			11.6	A
5	床面	〃	(6.9)			13.1	A
6	床面	土師器 壺	17.1	11.1	13.9	3.5	B2
7	床面	〃	(6.6)	20.0			A1
8	床面	土師器 甕	(7.7)	16.8			ⅠC1 i
9	床面	〃	(26.3)		25.5	7.5	ⅠC1(?)
10	堆積土5層	土師器 壺					円形浮文

第13図　第６住居跡出土遺物

残存高も30～35㎝を測る。床面からは急角度で立ち上がっている。

〔床面の状況〕壁沿いの部分には住居掘り方があり、掘り方埋土の上面を床面とし、他の部分では地山を床面としている。掘り方の幅は40～70㎝で、東壁側の幅が広くなっている。また、西壁沿いの部分は、攪乱坑のために、南壁沿いの部分は１号堀によって切られているため、床面が失われている。地山を床面とする中央部では、床面は平坦な面をなし堅くなっている。周溝は認められない。また、床面で柱痕跡の認められるピットが３個（P_1～P_3）が検出された。これらは、住居の対角線上に位置するなど配置の規則性から、本住居に伴う柱穴と考えられる。また、P_2と対角線上に対応するであろうピットについては、攪乱により壊されている可能性が強く、本来は、対角線上に４本が配置されていたものであろう。

〔炉〕住居中央部よりやや東壁寄りのところで、径約40㎝の範囲に焼面が認められた。床面下６㎝まで熱変化を受けて赤変し、堅くなっている。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物で図示できたものに、床面出土の土師器坏２点、器台３点、壺２点、甕２点がある。遺物は焼面の周辺や、北壁沿いの部分から多く出土している。

土師器

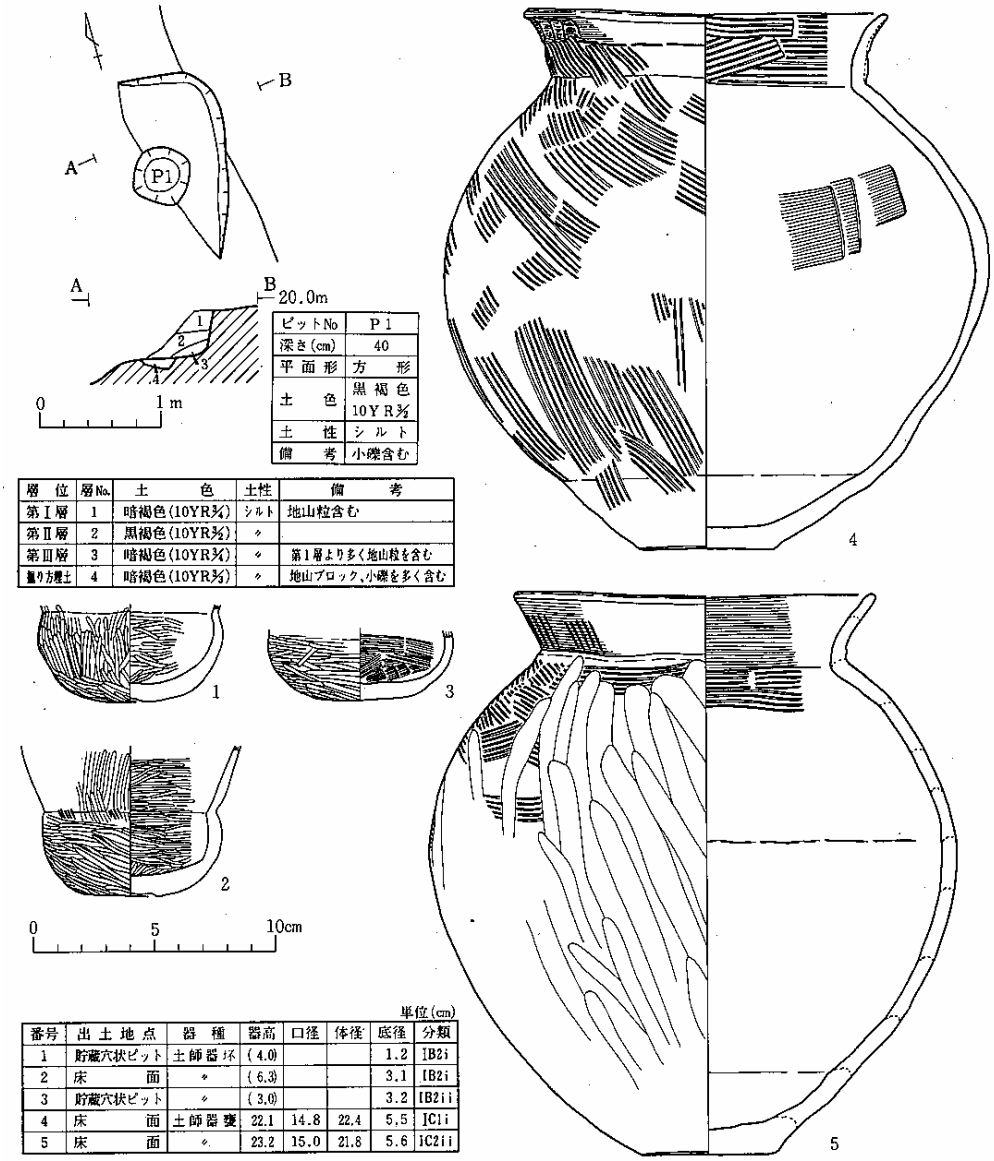
坏（第13図１・２）１は、体上部内面に稜をもち、稜から上の口縁部が内弯気味に立ち上がっている。体部は丸味をもち、底部は平底であるが、わずかにくぼみ上げ底気味になっている。器面調整としては、外面口縁部・体部上半に刷毛目、下半にヘラケズリが施されているが、全体として摩滅が激しい。内面は丁寧なナデで仕上げられている。２は、内面体中央部に稜をもち、稜から上の口縁部が外傾している。体部は内弯気味に立ち上がり、底部は平底であるが、わずかにくぼんでいる。器面調整として、外面口縁部は横ナデ、体部はヘラケズリが施され、内面は口縁部にナデが施されている。

器台（第13図３～５）３は完形で、４・５は受け部を欠損している。脚部はいずれも円錐台状を呈し、受け部と脚部の間には貫通孔が認められる。３は、全体に肉厚で鼓型を呈している。受け部の口縁部には、指頭による成形痕が観察される。器面調整として、受け部内面、脚部内外面にナデが施されている。４・５は、脚部に３個の円窓が穿たれている。器面調整として、脚部外面には刷毛目ののちヘラミガキが、裾部には横ナデが施されている。内面には、ヘラケズリ、刷毛目、横ナデがみられる。

壺（第13図６・７）６は完形で、体部がほぼ球形を呈し、頸部で強くくびれ、口頸部は直線的に外傾している。器面調整として、外面口縁部に横ナデののちヘラミガキ、体部にヘラミガキ、内面は、頸部に刷毛目、口縁部にヘラミガキが施されている。口縁部から体部にかけてスス状のものが付着している。７は口頸部資料で、口縁部が複合口縁を呈し、外反気味になっている。器面調整として、刷毛目が内外面に施され、外面口縁部では、その後横ナデを施している。

甕（第13図８・９）８は、口縁部から体上部の資料である。口縁部は粘土貼り付けによって肥厚し、外反している。体部は球形を呈するものと思われる。器面調整として、口縁部内外面に刷毛目ののち横ナデが、外面体部には刷毛目が施されている。内面については摩滅のため不明である。９は、口縁部を欠いている。体部は球形を呈し、底部は平底である。器面調整として、体部外面にヘラミガキが施されている。内面については摩滅・剥落が著しく不明である。

また、第13図10は、堆積土５層中から出土したもので、土師器壺の肩部破片と思われる。径約６㎜ほどの円形浮文が認められる。



第14図　第７住居跡と出土遺物

第７住居跡（第14図）

〔確認・重複〕調査区中央部西端で検出され、大部分が２号堀に切られている。

〔平面形・規模〕僅かに北東隅が残存しているだけである。したがって、平面形については不明な点が多いが、残存部から推して方形基調を呈するものと思われる。残存規模は、南北1.54ｍ、東西0.8ｍである。

〔堆積土〕３層認められた。第Ⅲ層は壁際に分布し、地山の崩壊土を多く含んでいる。第Ⅰ・第Ⅱ層は、残存部が少なく分布については不明であるが、第Ⅱ層は床面まで達している。

〔壁〕地山を壁としている。北東隅だけが残存し、残存高は43㎝を測れる。壁面の保存は良好で、床面からは急角度で立ち上がっている。

〔床面の状況〕壁から20㎝ほど離れて、部分的ではあるが、幅25㎝前後の住居の掘り方がある。床面は、この掘り方埋土上面を床面とする部分と、地山を床面とする部分がある。また、床面でピットが１個（P_1）が検出されている。このピットは柱痕跡をもたず、堆積土中から土師器坏２点などが出土している。規模は一辺約40㎝の方形で、深さは40㎝である。貯蔵穴状ピットと考えられる。周溝・炉・柱穴等については残存部も少なく検出されなかった。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物で図示できたものに、床面から出土した土師器坏１点・甕２点・貯蔵穴状ピット内出土の土師器坏２点がある。甕は立位で検出されている。

土師器

坏（第14図１～３）１・３は、口縁部を欠損しており、いずれも底部は平底で、底部から内弯気味に体部が立ち上がり、体中央部内面に稜を形成している。１・２の底部は上げ底風にくぼんでいる。２は、口縁部が直線的に外傾している。器面調整として、外面にヘラミガキ、内面は１・２がヘラミガキ、３では、ナデ・ヘラナデである。

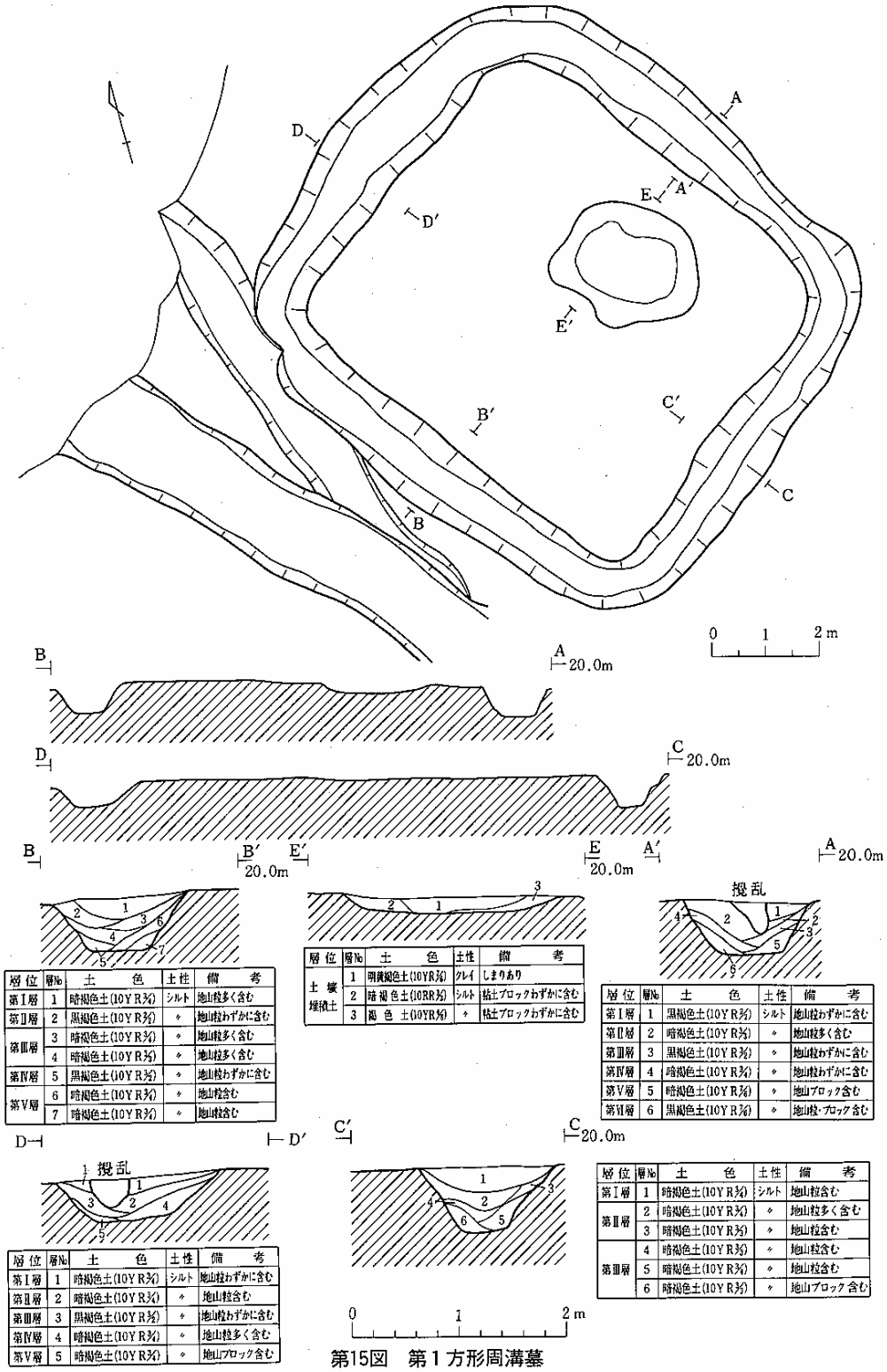
甕（第14図４・５）４・５とも体部中央に最大径が位置し、体部は球形、底部は平底を呈している。口縁部は外反し、４では、粘土貼り付けによって肥厚している。器面調整として、４は、口縁部が内外面とも刷毛目を施したのち、外面では横ナデを、体部は外面に刷毛目、内面にヘラナデが施されている。５は、外面口縁部に刷毛目ののち横ナデが、体部に刷毛目ののちヘラミガキが、内面は、口縁部に横ナデ、体部に刷毛目が施されている。

３．方形周溝墓とその出土遺物

第１方形周溝墓（第15・16図）

〔確認・重複〕上段平場北西端、第５住居跡の西側で検出された。溝によって西隅の周溝が切られている。

〔平面形・規模〕長軸約10.4ｍ×短軸約9.2ｍの隅丸長方形に途切れることなく溝がめぐるもの



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	地山粒多く含む
第Ⅱ層	2	黒褐色土(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅲ層	3	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒多く含む
	4	暗褐色土(10YR3/3)	〃	地山粒多く含む
第Ⅳ層	5	黒褐色土(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅴ層	6	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
	7	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む

層位	層No	土色	土性	備考
土壙埋積土	1	明黄褐色土(10YR7/6)	クレイ	しまりあり
	2	暗褐色土(10RR3/3)	シルト	粘土ブロックわずかに含む
	3	褐色土(10YR5/3)	〃	粘土ブロックわずかに含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色土(10YR3/2)	シルト	地山粒わずかに含む
第Ⅱ層	2	暗褐色土(10YR3/3)	〃	地山粒多く含む
第Ⅲ層	3	黒褐色土(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅳ層	4	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅴ層	5	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山ブロック含む
第Ⅵ層	6	黒褐色土(10YR3/6)	〃	地山粒・ブロック含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	地山粒含む
第Ⅱ層	2	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
第Ⅲ層	3	黒褐色土(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅳ層	4	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒多く含む
第Ⅴ層	5	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山ブロック含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	地山粒含む
第Ⅱ層	2	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒多く含む
	3	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
第Ⅲ層	4	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
	5	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
	6	暗褐色土(10YR3/3)	〃	地山ブロック含む

第15図　第１方形周溝墓

である。北辺がわずかに胴張りになっている。長軸方向はN－32°－Wである。

〔溝〕各辺の中央部で隅の部分より幅がわずかに広くなっており、特に北辺においては胴張りとなっている。溝の底面は、四隅の部分がわずかに浅くなりやや凹凸している。溝壁は、内外において傾斜に差異がなく、断面形は、各辺ともほぼ逆台形を呈する。規模は、幅が各辺中央部で1.3～1.5m、深さ約40㎝、隅の部分では、幅0.9～1.2m、深さ約30㎝である。

〔溝内堆積土〕溝内堆積土は、辺によって順序の差がみられるが、溝の内外からほぼ交互に流入しているなど、埋まり方に差は認められない。

〔台状部〕長軸約８m×短軸約6.7mの隅丸長方形を呈しており、長軸線と平行する東西辺は直線的で、南北辺はわずかに出入りがある。封土は認められず、平坦な面となっている。中央部から東辺寄りのところで、長軸約2.7m×短軸約2.0m、深さ約15㎝の不整楕円形の土壙が検出された。土壙内の堆積土は３層に分かれ、いずれも各辺からの流入土で、人為的な堆積状況とは言い難い。

〔出土遺物〕溝内堆積土中から、縄文土器・弥生土器・土師器が、溝底面からは土師器が出土している。堆積土出土のものは小破片のものが多く、土師器はいずれも甕あるいは壺の体部破片で、各辺の溝中でバラバラに検出されている。溝底面出土のものは、南辺溝東隅近くや、西辺溝中央部にみられ、前者は略完形を呈する体部穿孔された複合口縁の壺で、底部を下にし、押しつぶされたような状態で検出された。据え置かれていた可能性もある。一方、後者は甕で底部を欠損し、横位で検出されているものもある。図示できたものは６点ある。

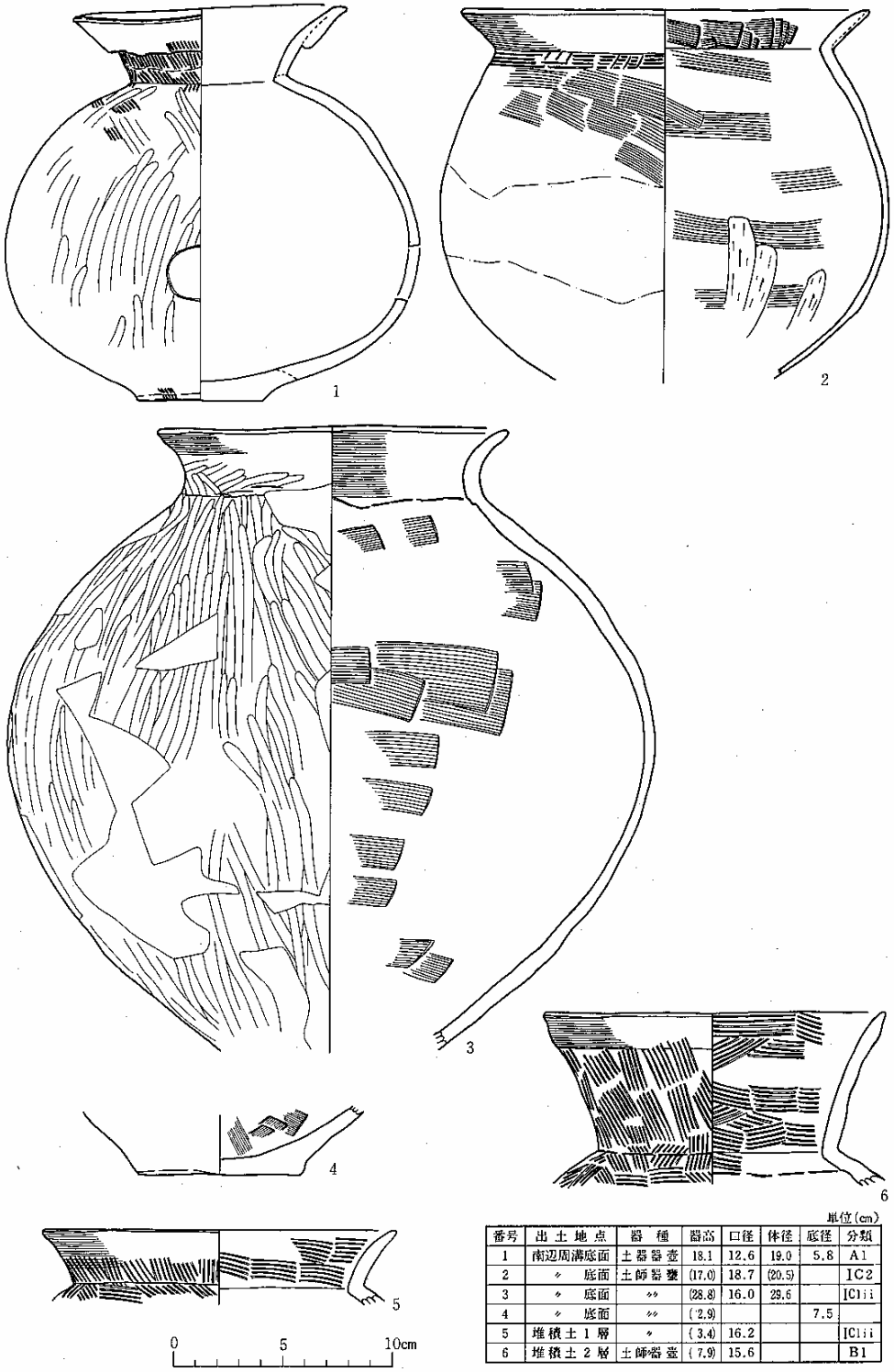
底面出土の土師器

壺（第16図１）複合口縁を呈し、口縁部はわずかに外反している。複合部は折り返し口縁気味に粘土帯を貼り付けて作っている。体部はやや歪んだ球形を呈している。体部中央には、焼成後に１個の穿孔がなされている。器面調整として、外面口縁部に刷毛目、体部には刷毛目ののちヘラミガキが施されている。内面については摩滅のため不明である。

甕（第16図２～４）２は底部を欠損している。口縁部は粘土貼り付けによって肥厚し、外傾している。体部はわずかに下膨みで歪んだ球形を呈している。器面調整として、外面口縁部に横ナデ、体部に刷毛目ののちナデが、内面口縁部にヘラナデ、体部にナデ、ヘラケズリが施されている。なお、体部中央にはスス状の炭化物が帯状に付着している。３も底部を欠損している。口縁部の外反する体部球形の大形甕である。器面調整としては、外面口縁部に横ナデののちヘラミガキ、体部にヘラミガキが、内面は口縁部に横ナデ、体部にヘラナデが施されている。４は、底部資料である。内面にナデ、ヘラナデが施されている。

堆積土出土の土師器

甕（第16図５）口縁部から体上部にかけての資料である。口縁部は外傾し、体部は球形を呈



単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	南辺周溝底面	土器器壺	18.1	12.6	19.0	5.8	A1
2	〃 底面	土師器甕	(17.0)	18.7	(20.5)		IC2
3	〃 底面	〃〃	(28.8)	16.0	29.6		ICiii
4	〃 底面	〃〃	(2.9)			7.5	
5	堆積土1層	〃	(3.4)	16.2			ICiii
6	堆積土2層	土師器壺	(7.9)	15.6			B1

第16図　第1方形周溝墓出土遺物

するものと思われる。器面調整として、外面口縁部は刷毛目ののち横ナデ、体部は刷毛目が、内面は口縁部に刷毛目が施されている。

壺（第16図６）単純口縁で、口頸部の外傾する大形の壺である。器面調整として、内外面とも刷毛目が施され、その後、外面口縁部に横ナデが施されている。

第２方形周溝墓（第17図）

〔確認・重複〕第１方形周溝墓のすぐ南側に位置している。溝・１号堀・ピットに切られている。

〔平面形・規模〕南辺を失っているが、長軸約10.3m×短軸9.5m前後（推定規模・残存は約8.5m）の隅丸長方形に溝がめぐるものと思われる。長軸方向はN－40°－Wである。北辺が胴張りになっている。

〔溝〕各辺とも隅の部分で幅が狭くなり、中央部ではやや幅広くなっている。特に北辺では胴張りを呈している。溝の底面にはわずかに凹凸がみられ、北隅が最も浅くなっている。溝は残存部では途切れることなくめぐり、溝の断面形は、角のつかないほぼ逆台形を呈している。規模は、北辺中央部で幅が約1.5m、東西辺では約1.3mである。深さは北隅が約20㎝、他では30～40㎝である。

〔溝内堆積土〕３層に大別できる。各辺ともに堆積層に差はなく、溝の内外から交互に流入している。第Ⅲ層は地山の崩壊土を多く含んでいる。

〔台状部〕長軸約８m×短軸約7.5m前後（推定規模・残存は約７m）の隅丸長方形を呈しており、各辺は直線的である。北隅から対角線上を走る溝によって壊されている。封土・土壙などは検出されなかった。

〔出土遺物〕認められない。

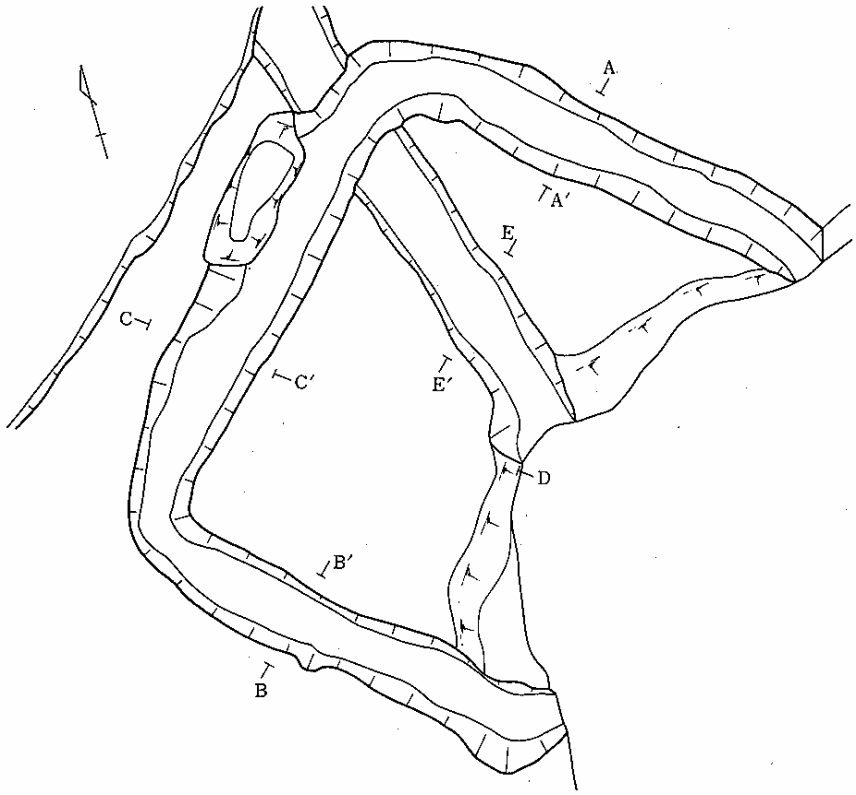
第３方形周溝墓（第18・19図）

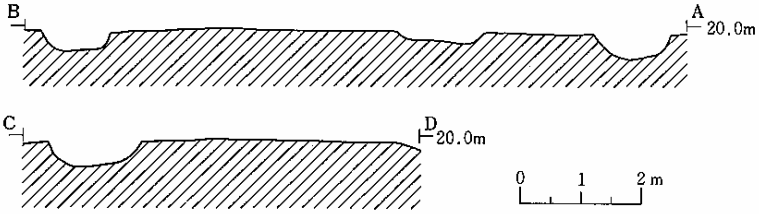
〔確認・重複〕第１方形周溝墓の西、第２方形周溝墓の北に位置している。溝・２号堀に切られている。

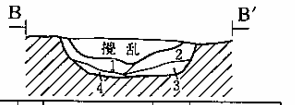
〔平面形・規模〕北辺の全体・東・西辺の一部を２号堀との重複によって失っている。南辺は14.5mを測り、東辺が9.6m、西辺が8.1mまで残存している。溝は残存部では途切れることなく隅丸長方形状にめぐっている。

〔溝〕各辺とも直線的に認められている。溝壁は、東・西辺では内側の立ち上がりが外側に比して急であるが、断面形はほぼ逆台形を呈している。溝の底面はわずかに凹凸が認められ、隅の部分が浅くなっている。規模は、溝幅が1.7～1.9m、深さ35～50㎝であるが、隅の部分では深さが25㎝前後となる。

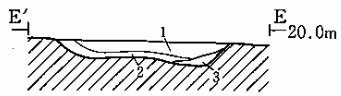
〔溝内堆積土〕堆積層に違いはあるものの、いずれも溝の内外からほぼ交互に流入している。



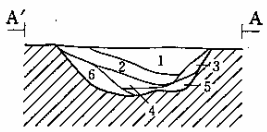




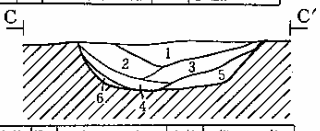
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	地山粒含む
	2	暗褐色土(〃)	〃	地山粒・木炭
	3	暗褐色土(〃)	〃	地山ブロック含む
第Ⅱ層	4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	〃	地山粒含む



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	地山粒わずかに含む
	2	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
第Ⅱ層	3	黒褐色土(10YR2/3)	〃	地山ブロック含む



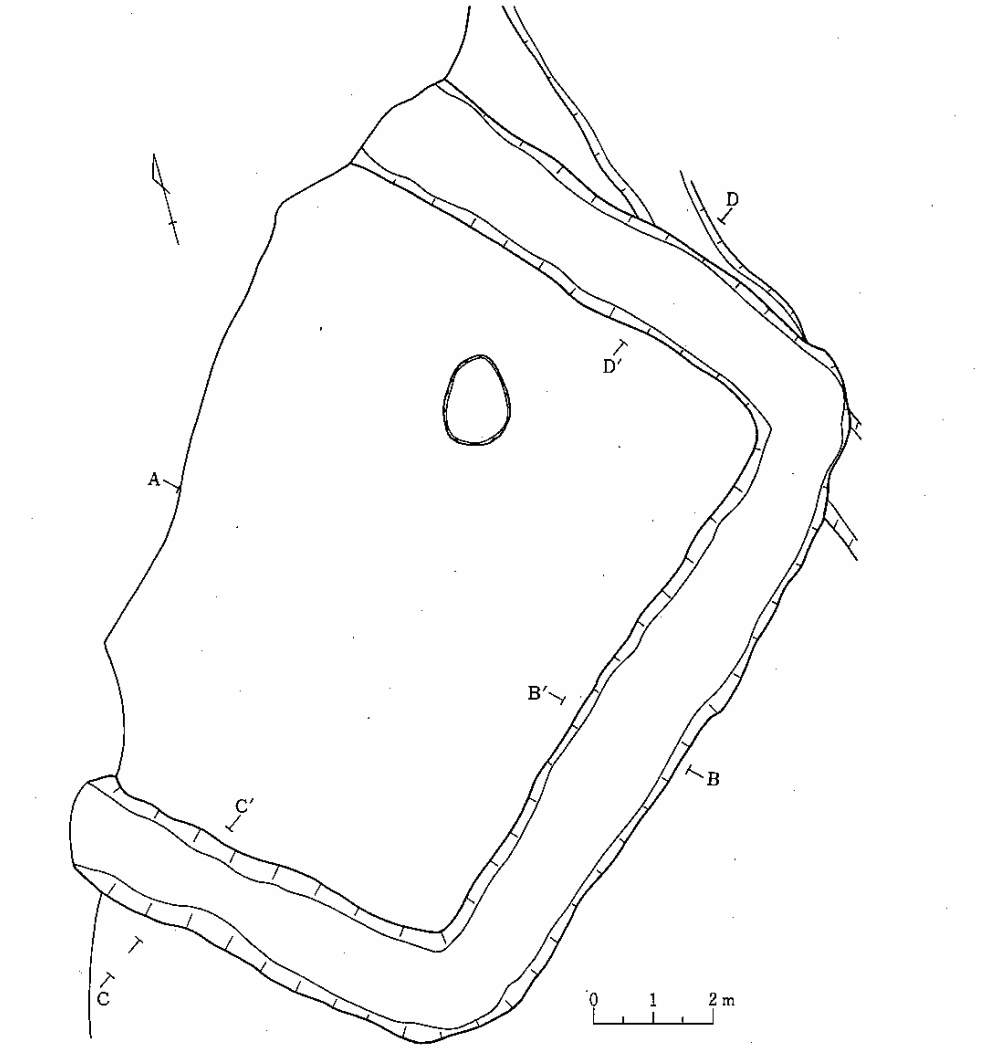
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	
第Ⅱ層	2	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
	3	暗褐色土(〃)	〃	地山粒含む
第Ⅲ層	4	暗褐色土(〃)	〃	地山粒含む
	5	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む
	6	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒含む



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色土(10YR3/4)	シルト	地山粒わずかに含む
第Ⅱ層	2	暗褐色土(10YR3/4)	〃	しまりなし
	3	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒多く含む
	4	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅲ層	5	褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒多く含む

0 1 2 m

第17図　第２方形周溝墓

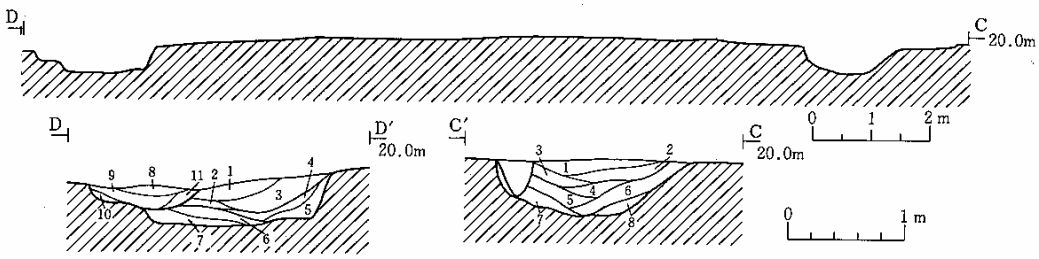


単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	堆積土2層	土師器甕	(3.6)			6.1	IAorIB

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒含む、しまりなし
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/3)	〃	地山粒含む、しまりなし
	3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む、しまりなし
第Ⅲ層	4	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒含む、しまりなし
第Ⅳ層	5	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む

第18図　第3方形周溝墓と出土遺物



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒わずかに含む、しまりなし
	2	黒褐色(10YR3/3)	〃	地山粒わずかに含む、しまりなし
	3	黒褐色(10YR3/1)	〃	地山粒わずかに含む、しまりなし
第Ⅱ層	4	黒　色(10YR3/1)	〃	しまりなし
	5	黒　色(10YR3/2)	〃	地山粒・ブロック含む、しまりなし
第Ⅲ層	6	黒褐色(10YR3/1)	〃	しまりなし
	7	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む、しまりなし
第1溝堆積土	8	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒含む、しまりあり
	9	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山ブロック含む
	10	黒褐色(10YR3/2)	〃	しまりあり
	11	黒褐色(10YR3/1)	〃	しまりなし

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	ややしまりあり
	2	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒わずかに含む、ややしまり
	3	暗褐色(10YR3/4)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅱ層	4	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅲ層	5	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅳ層	6	黒褐色(10YR3/3)	〃	地山粒わずかに含む
第Ⅴ層	7	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒含む
第Ⅵ層	8	黒　(10YR3/2)	〃	地山粒含む

第19図　第３方形周溝墓

〔台状部〕残存部は東西10.8m、南北残存約7.0mの長方形を呈し、各辺は直線的で、隅も角ばっている。封土は認められず、平坦な面となっている。中央東西寄りの部分から長軸約 1.5m、短軸約1.1m、深さ５cmの楕円形の土壙が検出されている。堆積土は１層だけで、人為的なものかどうか確証にかける。

〔出土遺物〕溝内堆積土中から、土師器がわずかに出土しているが、いずれも破片として出土するものでまとまりは示さない。図示できたものは１点だけである。

甕（第18図１）体下部から底部にかけての資料である。底部はわずかに外に張り出しているが、体部器形については不明である。器面調整として、体下部外面にナデが、内面には刷毛目ナデが施されている。

４．円形周溝とその出土遺物

第１円形周溝（第20図）

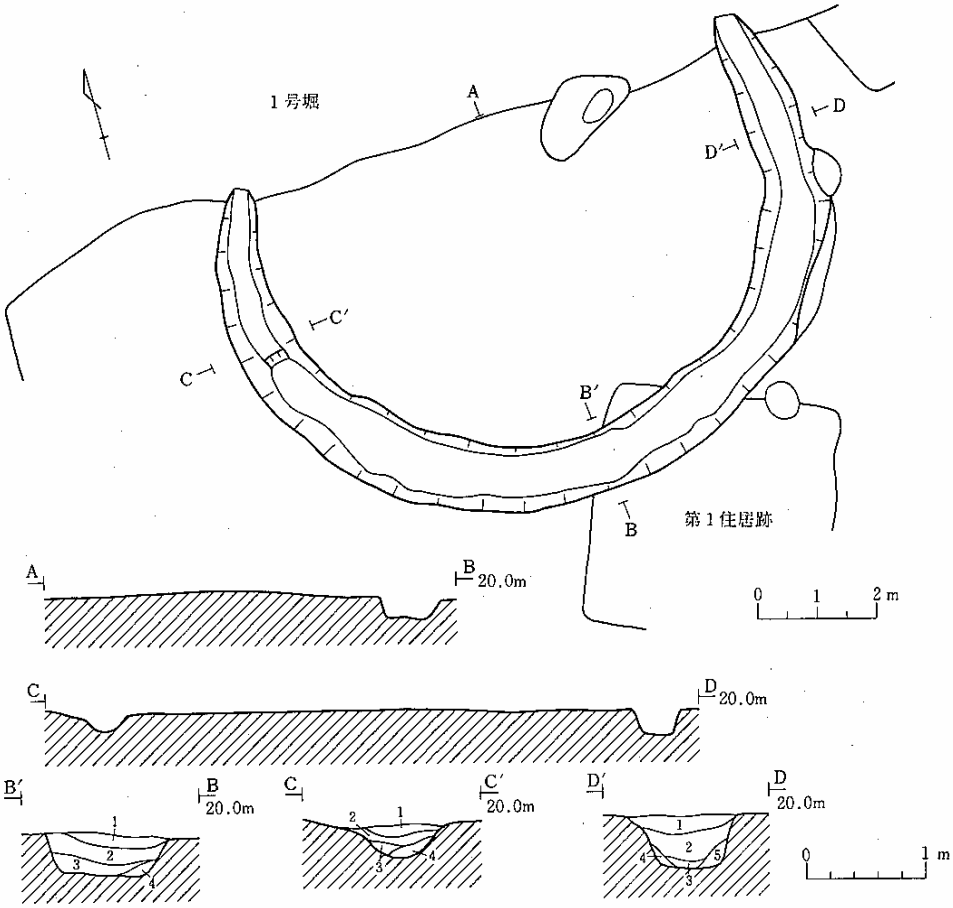
〔確認・重複〕第１住居跡と重複して検出され、これを切り、１号堀に切られている。

〔平面形・規模〕１号堀によって、北半を切られているため推定になるが、直径約10.5mの円形に溝がめぐるものと思われる。

〔溝〕残存部では途切れることなくめぐっている。幅は平均して0.8～1.1mであるが、南側がいく分広くなっている。深さは 30～45cm で溝底にはわずかに凹凸がみられ、特に東側で深くなっている。断面形は西側でU字形、他では逆台形を呈している。

〔溝内堆積土〕３層に大別できる。溝の内外からの堆積土であり、自然流入土と思われる。

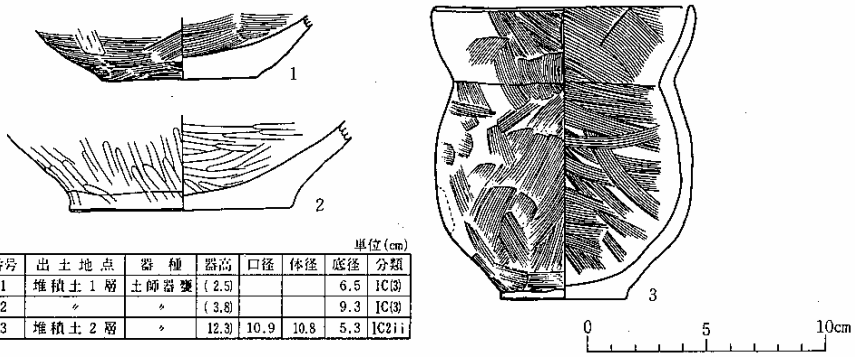
〔台状部〕直径約8.3mの円形を呈するものと思われる。封土は認められなく、平坦な面とな



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を僅かに含む
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を僅かに含む
第Ⅲ層	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を多量に含む
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を多量に含む

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫・地山粒を多く含む
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒、炭水物を僅かに含む
4	黄橙色(10YR7/6)	〃	旧表土を僅かに含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫を含む
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	若干、しまりあり
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性、しまりあり
第Ⅲ層	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を多量に含む
	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	



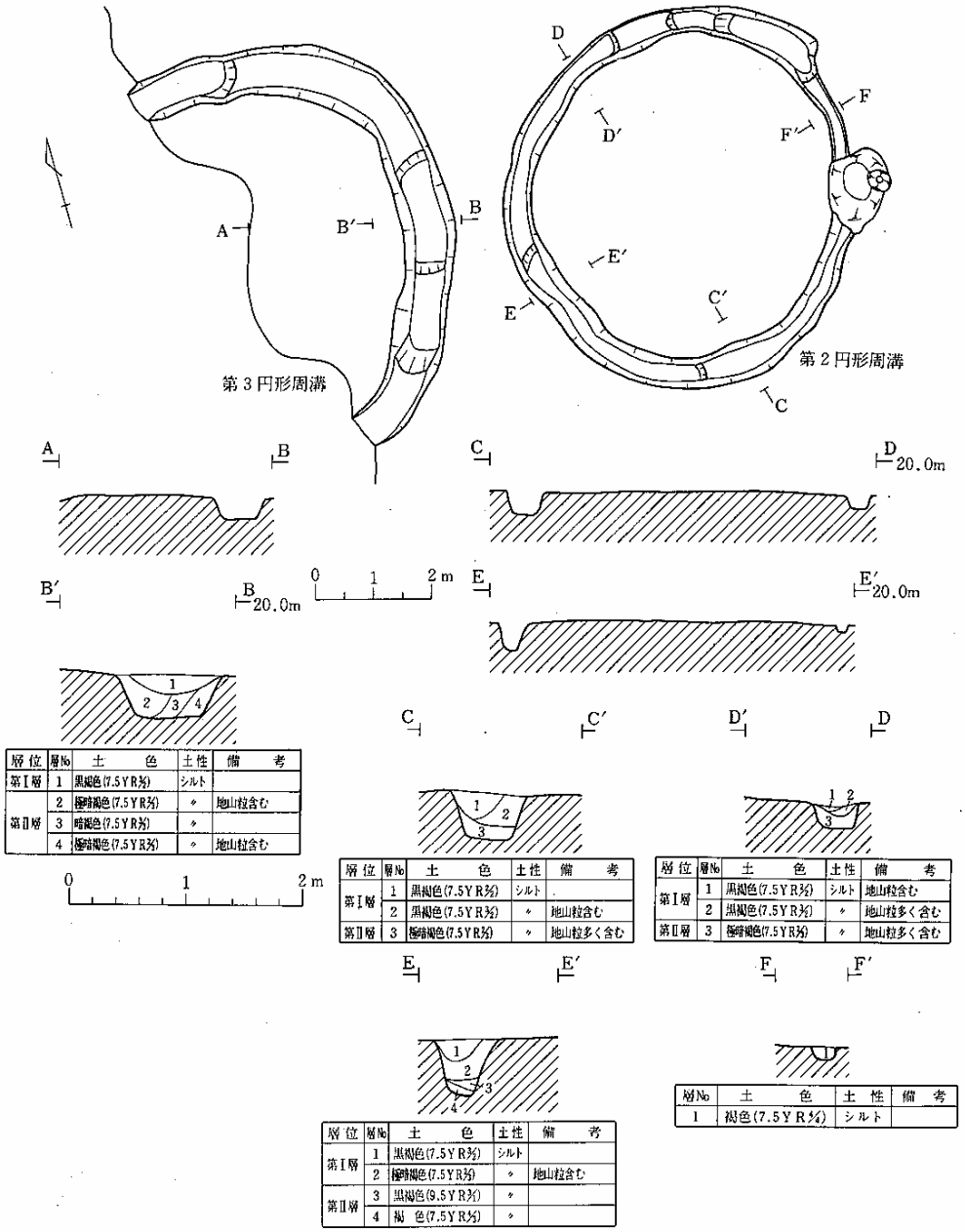
単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	堆積土1層	土師器甕	(2.5)			6.5	IC(3)
2	〃	〃	(3.8)			9.3	IC(3)
3	堆積土2層	〃	12.3)	10.9	10.8	5.3	IC2ii

第20図　第1円形周溝と出土遺物

っている。中央部の東寄りに長軸1.8m×短軸0.9m、深さ約50cmの不整楕円形を呈した土壙が検出されている。堆積土が自然堆積を示していることから、墓壙とは考え難い。

〔出土遺物〕堆積土中からの出土で底面から出土するものはない。縄文土器・弥生土器・土師器がある。



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
第Ⅱ層	2	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山粒含む
	3	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	
	4	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山粒含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
	2	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	地山粒含む
第Ⅱ層	3	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山粒多く含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山粒含む
	2	黒褐色(7.5YR3/2)	〃	地山粒多く含む
第Ⅱ層	3	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山粒多く含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
	2	極暗褐色(7.5YR2/3)	〃	地山粒含む
第Ⅱ層	3	黒褐色(9.5YR3/1)	〃	
	4	褐色(7.5YR4/3)	〃	

層No	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR4/4)	シルト	

第21図　第２・第３円形周溝

土師器

土師器は破片で出土するものが多く、図示できるものは甕３点だけである。第20図３は、第２層の上面で横位で検出されたものであり、略完形を呈している。

甕（第20図１～３）１・２は、体部下端から底部の資料である。１は、体部から緩やかに底部に移行している。器面調整は、体部内外面ともナデが施され、のちに外面ではヘラケズリが施されている。２は、１に比して底部が突き出ている。器面調整は、内外面ともヘラミガキである。１・２ともに体部は球形を呈するものと思われる。３は、口縁部が内弯気味に立ち上がり、体部はやや縦長の球形を呈している。底部はわずかに突き出す平底である。器面調整としては、外面にナデが、内面にはヘラナデが施されている。

第２円形周溝（第21図）

〔確認・重複〕第２住居跡の西側で検出された。遺構間での重複はないが、東側に木根による攪乱がある。

〔平面形・規模〕長軸6.65m×短軸6.05mの楕円形に溝が途切れることなくめぐるものである。

〔溝〕溝は平均して40～50cmの幅をもってめぐるが、北側が65cmと幅広く、東側は削平・攪乱等により20cmと保存は良くない。溝底は部分的に凹凸があり、北東側が浅く10cm前後、南西側が50cm前後を深くなっている。断面形は、西側がU字形、他の部分では逆台形を呈している。

〔溝内堆積土〕２層に大別できる。溝内外からの流入土で地山粒を多く含んでいる。

〔台状部〕長軸5.65m×短軸5.2mの楕円形を呈している。封土は認められず、平坦な面をなしている。

〔出土遺物〕堆積土Ⅰ層から、土師器の甕あるいは壺の体部破片が数点出土しているが、図示できるものはない。

第３円形周溝（第21図）

〔確認・重複〕第２円形周溝の西側で検出された。２号堀によって切られ、西半を失っている。

〔平面形・規模〕わずかな出入りがあるものの、残存部から推して径約 7.5mの円形に溝がめぐるものと思われる。

〔溝〕残存部では途切れることなくめぐっている。幅は0.9m、深さは10～40cmで、溝底には部分的に凹凸がみられる。南東部、北部が深くなっている。断面形は逆台形を呈している。

〔溝内堆積土〕２層に大別できる。第Ⅱ層は溝外側からの流入を示し、地山粒を多く含んでいる。自然堆積と思われる。

〔台状部〕直径約5.7mの円形を呈するものと思われる。封土は認められない。西側がいく分削平をうけている。

〔出土遺物〕認められない。

第４円形周溝（第22図）

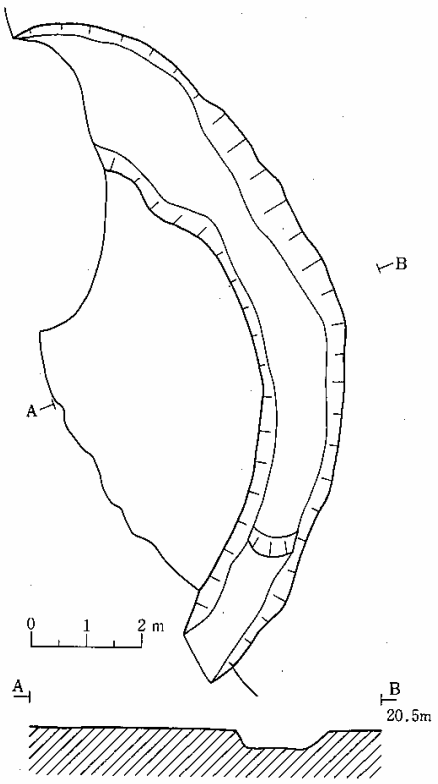
〔確認・重複〕第５住居跡の西側、第３円形周溝の北側で検出された。２号堀、第７竪穴遺構に切られている。

〔平面形・規模〕重複によって切られ、全体の$^{1}/_{6}$ほどしか残っていない。そのため平面形・規模ともに正確さを欠くが、直径 12m前後の円形基調に溝がめぐるものと思われる。

〔溝〕残存部では途切れることなくめぐっている。幅は 1.2～2.2mと一様ではなく、北東側が広くなっている。深さは35～40cmである。

〔台状部〕直径９m前後の円形を呈するものと思われる。残存部では封土・土壙等は検出されず平坦な面をなしている。

〔出土遺物〕認められない。



第22図　第４円形周溝

第５円形周溝（第23図）

〔確認・重複〕上段平場北東端、第５住居跡の東側で検出された。第４溝・第５溝によって切られている。

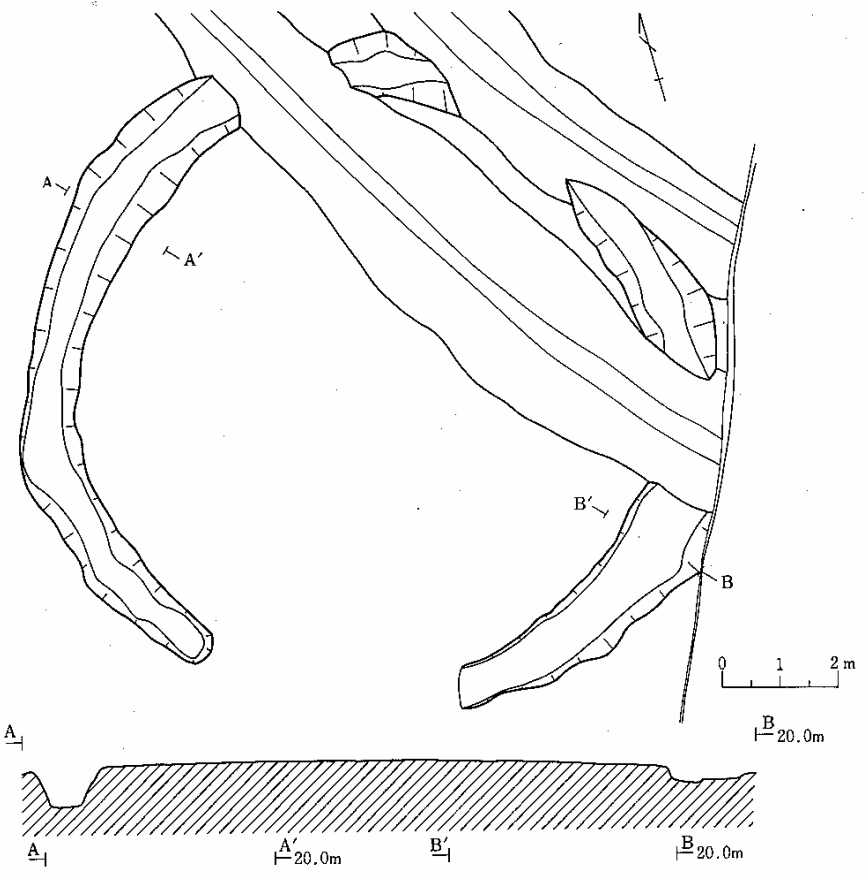
〔平面形・規模〕直径約12.2mの円形に溝がめぐるが、南側の一部が約4.2mほど途切れている。この途切れの部分が意図的なものか否かは明らかでない。

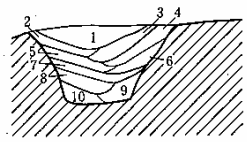
〔溝〕0.9～1.2mの幅でめぐっている。南側の途切れる部分で幅が約70cmと狭くなる。溝底は凹凸がみられ、深さは10～65cmと一定していない。特に北側の部分で深くなっている。断面形は西側で逆台形、東側ではU字形を呈している。

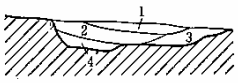
〔溝内堆積土〕５層に大別できる。溝内外から交互に流入する自然堆積を示している。

〔台状部〕直径約 9.8mのほぼ円形を呈し、南側に向ってわずかに傾斜している。封土および土壙の検出はない。

〔出土遺物〕堆積土中から土師器の小破片がわずかに出土しているが、図示できるようなものはない。







層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	しまりあり
第Ⅱ層	2	暗褐色土(10YR3/3)	〃	しまりあり
	3	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒多く含む、しまりあり
第Ⅲ層	4	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒わずかに含む、しまりあり
	4	暗褐色土(10YR3/4)	〃	地山粒・ブロックわずかに含む、しまりあり
	6	暗褐色土(10YR3/3)	〃	ややしまりなし
第Ⅳ層	7	黒褐色土(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む、しまりあり
	8	黒褐色土(10YR3/2)	〃	地山粒わずかに含む、しまりあり
第Ⅴ層	9	暗褐色土(10YR3/3)	〃	地山粒多く含む、しまりなし
	10	暗褐色土(10YR3/3)	〃	地山粒多く含む、しまりなし

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	しまりあり
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒をわずかに含む、しまりあり
	3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山ブロックをわずかに含む、しまりあり
第Ⅲ層	4	黄褐色(10YR5/6)	〃	しまりあり

0 1 2 m

第23図　第５円形周溝

５．土壙とその出土遺物

中世以前と考えられる土壙は10基が検出されている。平面形は円形を基調とするものが多く、規模は直径あるいは長軸の長さが 0.6m～５mほどのものまであり多様である。以下に、主なるものについて説明を加え、他のものについては表として一括してある。

土壙1（第24図）

第１住居跡と第２住居跡のほぼ中間で検出されたもので、土壙 17 に切られている。上端平面形は直径約１mの不整円形、底面は長軸1.26m、短軸0.9mの長方形で、深さ0.9mを測る。部分的に外側にえぐれている。壁の立ち上がりは急で、断面形は台形を呈する。堆積土は、木炭・焼土を含む褐色シルト層が底面を覆っている。堆積土中から、弥生土器の出土がある。

弥生土器（第24図１）体部破片で壺形を呈するものと思われる。肩部には横位平行沈線による文様が施されている。体部には地文である縄文（ＬＲ）が施文されている。

土壙7（第24図）

第３円形周溝の南側で検出されたもので、２号堀に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.65m、深さ１mを測る。底面はやや丸味をもち、壁は下端で緩やかであるが上端では急になり、断面形はU字形を呈する。堆積土は暗褐色シルト層など４層が観察され、レンズ状の堆積を呈している。４層中から、須恵器長頸壺の口縁部破片が出土している。

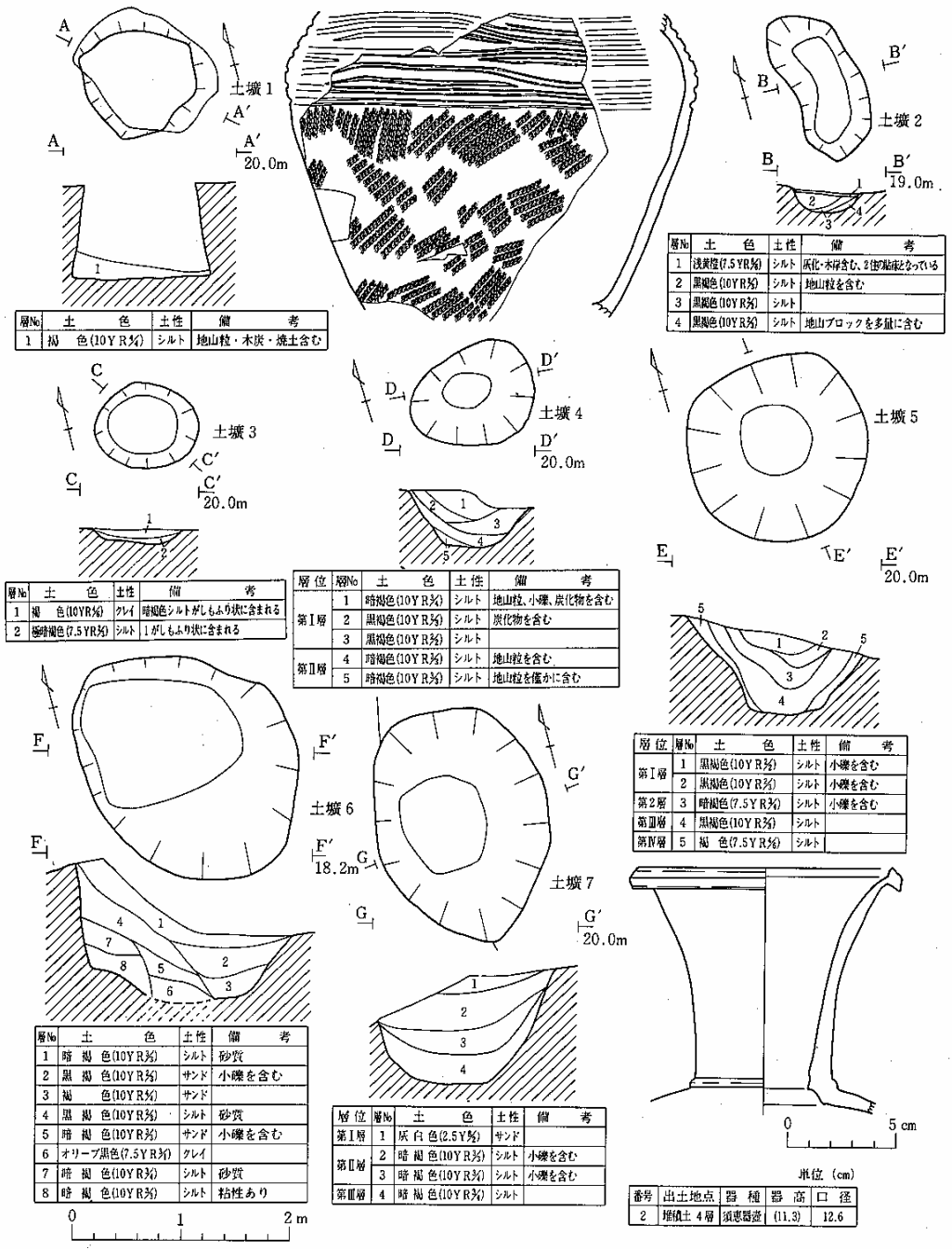
須恵器長頸壺（第24図２）口頸部資料である。肩部と頸部接点に隆帯をめぐらし、口頸部は外反している。端部は上下につまみ出され、幅約１㎝の縁帯を形成している。色調は黒灰色を呈し、焼成は堅徴である。内外面ともにロクロ調整であるが、ロクロ痕は明瞭でない。

土壙8（第25図）

第５住居跡北側で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 3.1m、短軸 2.5m、深さ0.95mを測る。壁は底面から緩やかに立ちあがり、断面形は逆台形を呈する。底面はわずかに凹凸があり、壁下端とともに火熱を受け焼面になっている。なお、底面のほぼ中央部に長軸80㎝×短軸64㎝、深さ 25㎝ほどの楕円形のピットがみられ、この内面も同様に焼けている。堆積土は、黒褐色・暗褐色・極暗褐色シルト層など大別して５層が認められ、第Ⅱ層までは地山ブロックを含み、第Ⅲ層から第Ⅴ層は、炭化物・焼土粒などを多く含んでいる。出土遺物はない。

土壙9（第25図）

第５円形周溝の東側で検出されたもので、第６竪穴遺構に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径が3.1m～3.35mで、深さは1.45mを測る。底面の状況・ピット・焼面・壁の立ち上がりなどについては、土壙８とほぼ同様である。堆積土は、暗褐色・黒褐色シルト層などが大別して４層が認められ、炭化物が多く含まれる。出土遺物はない。



層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒・木炭・焼土含む

層No	土色	土性	備考
1	淺黃橙(7.5YR8/4)	シルト	灰化・木炭含む、2は粘質となっている
2	黑褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む
3	黑褐色(10YR3/2)	シルト	
4	黑褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む

層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR5/4)	クレイ	暗褐色シルトがしもふり状に含まれる
2	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	1がしもふり状に含まれる

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒、小礫、炭化物を含む
	2	黑褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を含む
	3	黑褐色(10YR3/2)	シルト	
第Ⅱ層	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を含む
	5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を僅かに含む

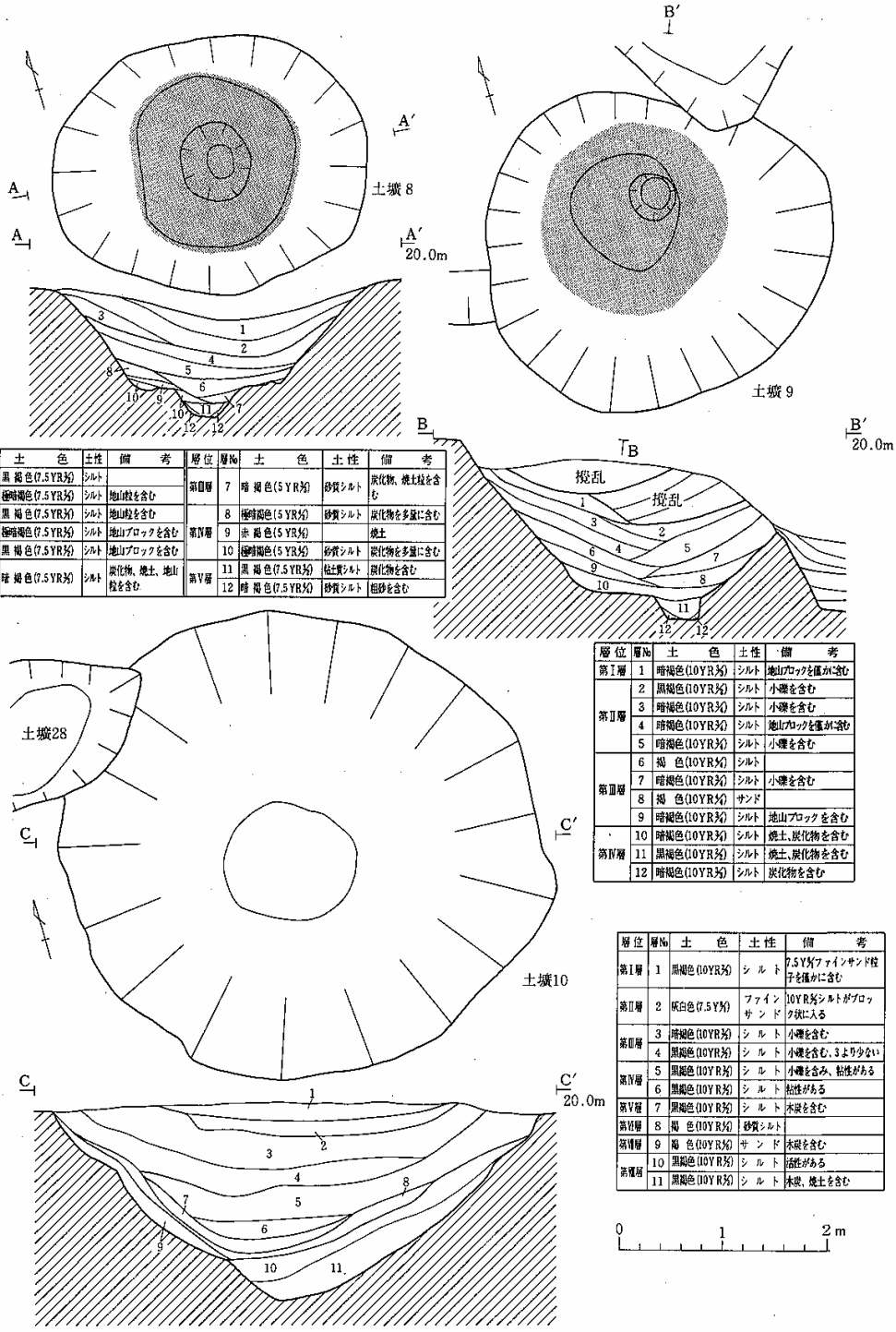
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黑褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を含む
	2	黑褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を含む
第2層	3	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	小礫を含む
第Ⅲ層	4	黑褐色(10YR3/2)	シルト	
第Ⅳ層	5	褐色(7.5YR5/6)	シルト	

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	砂質
2	黑褐色(10YR3/3)	サンド	小礫を含む
3	褐色(10YR5/4)	サンド	
4	黑褐色(10YR3/3)	シルト	砂質
5	暗褐色(10YR3/3)	サンド	小礫を含む
6	オリーブ黒色(7.5YR3/1)	クレイ	
7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	砂質
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	粘性あり

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	灰白色(2.5Y8/2)	サンド	
第Ⅱ層	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫を含む
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	小礫を含む
第Ⅲ層	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	

番号	出土地点	器種	器高	口径
2	堆積土 4層	須恵器壺	(11.3)	12.6

第24図　土壙1～7と出土遺物



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
	2	極暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山粒を含む
	3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山粒を含む
第Ⅱ層	4	極暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む
	5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む
第Ⅲ層	6	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物、焼土、地山粒を含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅲ層	7	暗褐色(5YR3/3)	砂質シルト	炭化物、焼土粒を含む
第Ⅳ層	8	極暗褐色(5YR2/3)	砂質シルト	炭化物を多量に含む
	9	赤褐色(5YR3/6)		焼土
	10	極暗褐色(5YR2/3)	砂質シルト	炭化物を多量に含む
第Ⅴ層	11	黒褐色(7.5YR3/2)	粘土質シルト	炭化物を含む
	12	暗褐色(7.5YR3/3)	砂質シルト	粗砂を含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを僅かに含む
第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を含む
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫を含む
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを僅かに含む
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫を含む
第Ⅲ層	6	褐色(10YR4/4)	シルト	
	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫を含む
	8	褐色(10YR4/4)	サンド	
	9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む
第Ⅳ層	10	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土、炭化物を含む
	11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土、炭化物を含む
	12	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物を含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	7.5Y5/1(ファインサンド粒子を僅かに含む
第Ⅱ層	2	灰白色(7.5Y8/1)	ファインサンド	10YR5/3シルトがブロック状に入る
第Ⅲ層	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫を含む
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を含む、3より少ない
第Ⅳ層	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を含み、粘性がある
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性がある
第Ⅴ層	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭を含む
第Ⅵ層	8	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	
第Ⅶ層	9	褐色(10YR4/6)	サンド	木炭を含む
第Ⅷ層	10	黒褐色(10YR3/2)	シルト	活性がある
	11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭、焼土を含む

第25図　土 壙 8 ～ 10

土壙10（第25・26図）

第２円形周溝の南側で検出されたもので、土壙28に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径が約4.5m～4.9m、深さ２mを測る。底面は、直径1.3mほどの円形を呈するが、壁下端との区別は不明瞭で丸味をもっている。壁高は崩落のためか凹凸が多い。断面形は摺鉢状を呈している。堆積土は、灰白色・黒褐色・褐色シルト・サンド層など大別してⅧ層が認められ、Ⅲ層中から土師器坏・甕・須恵器坏・壺など多くの遺物が出土している。

〔出土遺物〕図示できたものに土師器坏１点、甕１点、須恵器坏６点、甕３点、鉢１点、壺１点がある。いずれも第Ⅲ層中からの出土である。

土師器

坏（第26図１）製作に際しロクロを使用しており、底部は右回転糸切りによって切り離されている。体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾し、口縁端部がわずかに外反する。器面調整として外面はロクロ調整、内面はヘラミガキされ黒色処理が施されている。ヘラミガキは底部で放射状、体部では井桁状になされている。

甕（第26図２）製作に際しロクロを使用していない。口縁部から体部上半の資料である。口縁部は短く外傾し、体部はわずかに丸味をもっている。器面調整として外面は体部に荒いヘラケズリが、内面は口縁部に刷毛目がみられる。

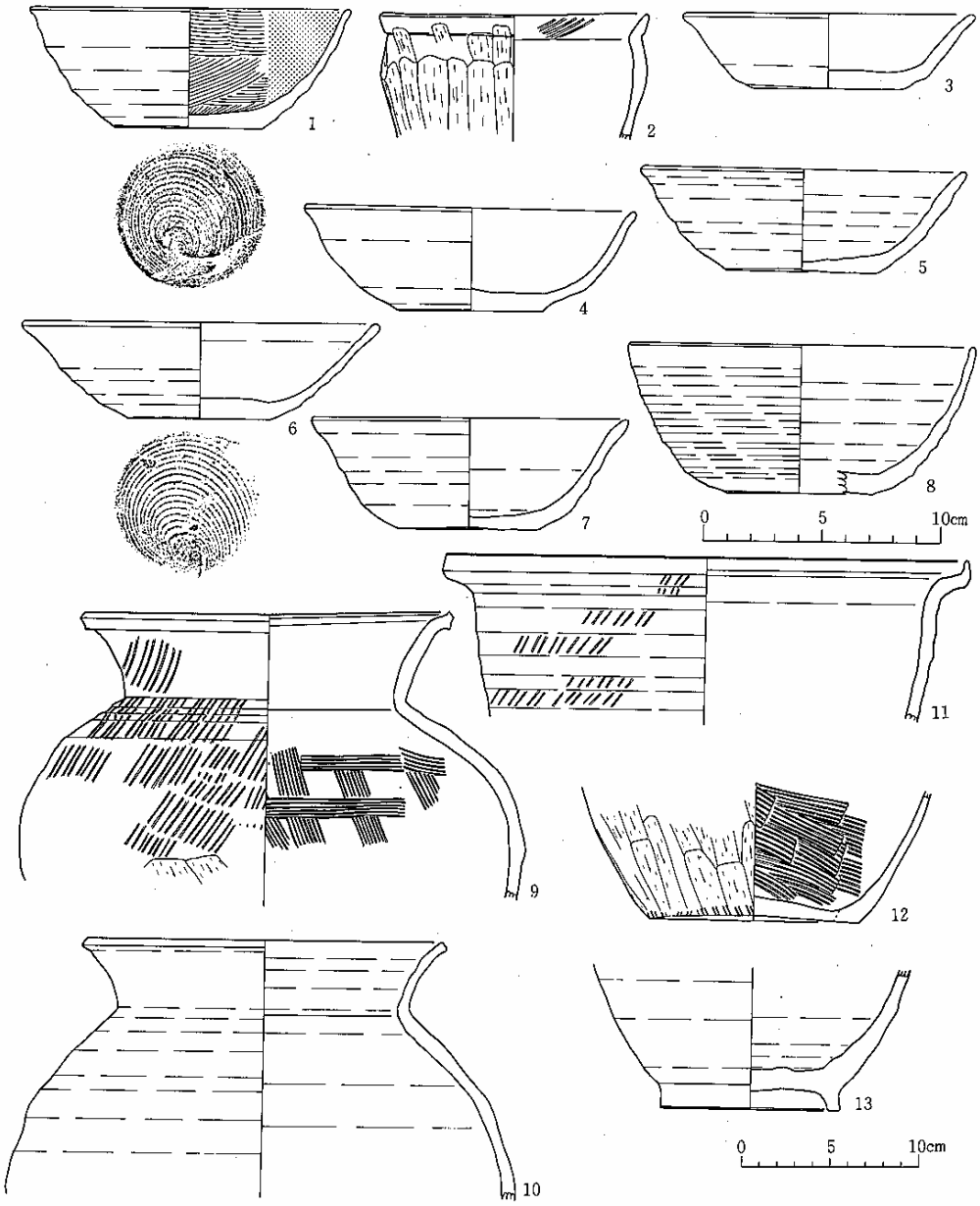
須恵器

坏（第26図３～８）３は、底部の切り離しがヘラ切り、４～８は右回転糸切りである。３～５、７は、体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反している。６は、体部から口縁部まで直線的に外傾し、８では内弯気味に立ち上がっている。いずれも内外面がロクロ調整されている。

甕（第26図９・10・12）９・10は体下部から底部を欠損している。肩部から頚部にかけて「く」字状に屈曲し、口縁部がわずかに外反している。９の口縁部は上下につまみ出され、口縁帯を形成している。一方、10の口縁部は平坦で、やや角ばった口縁部となっている。器面調整として、９では外面、体上部から頚部に平行タタキ目、体下部にヘラケズリを施したのちロクロ調整が、内面では体部に刷毛目が施されている。10は内外面ともロクロ調整である。12は体下部から底部にかけての資料である。底部はいく分上げ底気味で、体部は内弯気味に出て上がっている。器面調整は、外面に平行タタキ目ののちヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

鉢（第26図11）体下部から底部を欠損している。口縁部は横に短く外反し、その先端が上方につまみ出されている。器面調整として、口縁部から体部に平行タタキ目が施され、その後ロクロ調整されている。

壺（第26図13）体下部から底部にかけての資料で高台がついている。底部は右回転糸切りで



単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	堆積土3層	土師器坏	5.1	13.5			Ⅱ
2	〃 〃	〃	(5.4)	11.4	11.2		ⅠA
3	〃 〃	須恵器坏	3.2	12.3		6.2	A
4	〃 〃	〃	4.3	14.0		6.1	B 2
5	〃 〃	〃	4.3	13.7		6.3	B 2
6	〃 〃	〃	4.1	15.1		6.0	B 2
7	〃 〃	〃	4.7	13.4		5.9	B 2
8	〃 〃	〃	6.3	14.7			B 2

単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
9	堆積土3層	須恵器甕	(16.0)	2 .0	28.5		
10	〃	〃 〃	(14.5)	21.5	28.7		
11	〃	〃 鉢	(9.0)	20.7			
12	〃	〃 甕	(7.8)	9		11.8	
13	〃	〃 壺	(8.0)			10.1	

第26図　土壙10出土遺物

第１表　土　　壙（１～10）

土壙番号	位　置	重　複	平面形	大きさ（cm）	深さ（cm）	底面の状況	壁 下端	壁 立ち上がり	出土遺物	備　考	調査時の番号
1	T－46	→土壙17	不整円形	100	85	平　坦	明　瞭	急	弥生土器・甕	プラスコに近い断面形	28
2		第２位居跡(床面下)	不整楕円形	62×90	20	丸味あり	不明瞭	緩やか			
3	V－35	第３住居跡(床面下)	円　形	78×95	13	わずかに凹凸あり	不明瞭	緩やか			
4	D－28		円　形	118×88	50	丸味あり	不明瞭	緩やか			16
5	Q－26		円　形	168	71	平　坦	明　瞭	上 緩やか 下 急	土師器		17
6	M－57		不整円形	190×240	130以上	凹凸あり	明　瞭	急			3
7	N・O－53		楕円形	220×165	100	丸味あり	不明瞭	急	須恵器・長頸壺		10
8	N・O－28・29		楕円形	310×250	95	凹凸あり	明　瞭	緩やか			15
9	V－25	→土壙29	円　形	310×335	145	わずかに丸味あり	不明瞭	緩やか			32
10	P・Q－52・53	→土壙28	円　形	490×455	200	丸味あり	不明瞭	摺鉢状	土師器・坏 須恵器坏・甕・甕・鉢		11

切り離され、高台は付高台である。内外面ともロクロ調整である。

６．その他の出土遺物（第27図）

ここでは、遺構内堆積土中や基本層位のⅣ層中から出土した縄文土器、弥生土器と、基本層位のⅠ層中から出土した土師器、須恵器について説明をする。

(1)　縄文土器

縄文土器は、第１・第４・第５・第６住居跡の堆積土中、第１方形周溝墓、第１・第２・第４円形周溝の周溝内堆積土や、基本層位の上段第Ⅱ層・下段第Ⅳ層から約340点が出土している。いずれも小破片のため、器形・文様の不明なものや、地文だけのため所属時期を明確にし得ないものが大半である。したがって、ここでは口縁部・体部で比較的文様の明らかなものや、底部資料を対象にして取り扱うことにする。なお、地文だけのものには、弥生土器と区別することができず、弥生土器を含んでいる可能性があることも付記しておく。

口縁部資料は19点が出土している。口縁部形態には、平口縁と波状口縁のものがある。

平口縁のもの（第27図１～18）

１は、口縁端部に刻目を施し、口縁部に３条以上の平行沈線を有し、その間の１条に刺突の施されるものである。２は、頂部の二分された山形突起を配し、口縁部に２条以上と平行沈線を有する。３～６は、口縁部に２条～３条以上の平行沈線を有するもので、３の体部には、地文である縄文（ＬＲ）が施文されている。７・８は、口縁下に１条の沈線がめぐり、この沈線によって無文帯と地文（縄文）が区別されている。９～18は、文様をもたないものである。９～16は口縁部が無文帯で、体部に地文である縄文（ＬＲ）が施文されている。17・18は地文としての縄文（ＬＲ）の施文されたものである。なお、１～５・９では、口縁部の内面に１条の沈線がめぐっている。

波状口縁のもの（第27図19）

小波状口縁で、口縁部には平行沈線がめぐっている。また、口縁部内面にも１条の沈線がめぐっている。

第27図　その他の出土遺物（縄文土器・弥生土器）

体部破片は313点出土している。このうち文様をもつものは6点（第27図20～25）だけで、他は地文としての縄文（ＬＲ）が施文されただけのものである。地文のみのものの中には、前述したように、弥生土器を含んでいる可能性もある。

20～22は、２条から４条の横位の平行沈線が施されるものである。23には、１条の沈線がみられる。24は磨消縄文手法によって文様を描くもので、縄文部分は帯状にめぐって、はちまき状の文様構成をなすものと思われる。25は、エ字文状の文様構成をもつものである。

底部資料は３点みられる（第27図26～28）。26は、台の部分で７条以上の平行沈線がめぐっている。27・28は小形土器で、27は、体部下端に平行沈線がめぐり、底部には木葉痕がみられる。28は、体下部に弧状の沈線がみられる。地文は縄文（ＬＲ）である。

以上のような特徴をもつ土器は、角田市梁瀬浦遺跡（角田市教委：1976）、一迫町巻堀遺跡（宮城県教委：1977）などに類例がみられ、縄文時代晩期大洞C_1式から大洞A´式の間に位置づけられるものである。個々にみると、口縁部資料１は、大洞C_1式かC_2式、２は大洞A式かA´式、

３～19 は、大洞C_2式から大洞A´式のいずれかに属するものと思われる。また、体部資料では 24 が大洞C_2式、25 が大洞A式かA´式、20～23 は、大洞C_2式から大洞A´式のいずれかに属するものと思われる。また、底部資料 26～28 は、大洞A式か大洞A´式のものと思われる。

(2)　弥生土器

第６住居跡・第１円形周溝・土壙１の堆積土中や、基本層位の上段第Ⅱ層・下段第Ⅳ層中から７点出土している。いずれも体部破片である。この他に、地文だけのため縄文土器と区別できないため、縄文土器として取り扱っている可能性のあるものもある。

第27 図29～31 は、横位平行沈線による文様をもつもので、29 の体部には、地文である縄文（ＬＲ）が施文されている。32～35 は、横位平行沈線や弧状沈線による文様をもつもので、沈線で区画された区画内には、縄文（ＬＲ）が施文されている。

以上のような特徴を示す土器は、大泉遺跡（伊東：1957）、角田市鱸沼遺跡（志間：1971）、仙台市船渡前遺跡（宮城県教委：1977）などで類例がみられ、大泉式土器として理解されているものである。

(3)　土師器

土師器は、基本層位のＩ層中から 38 点が出土している。このうち図示できるものに器台１点と壺１点がある。

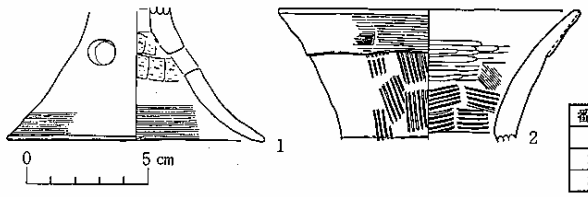
器台（第28 図１）受け部を欠損している。脚部は円錐台状を呈し、３個の円窓をもっている。また、受け部と脚部の間には貫通孔がある。器面調整は、外面は摩滅が激しく、裾部には横ナデがわずかに認められるだけである。内面は、上半にヘラケズリ、下半に横ナデが施されている。

壺（第28 図２）口頸部資料である。複合口縁を呈し、口縁部は外反している。器面調整として、外面口縁部に刷毛目ののち横ナデ、頸部には刷毛目が施されている。内面は、口縁部にヘラミガキ、一部ナデもみられる。頸部には刷毛目が施されている。

(4)　須恵器

須恵器は、基本層位のＩ・Ⅱ層中から 23 点が出土しているが、多くは甕の体部破片で、図示できるものは蓋１点である。

蓋（第28 図３）リング状を呈するつまみをもつ蓋で、口縁部を欠いている。天井部には回転ヘラケズリ調整が加えられている。



単位(cm)

番号	出土地点	器種	器高	口径	体径	底径	分類
1	基本層位Ⅲ層	土師器器台	(5.6)			10.1	A
2	〃	〃　壺	(5.4)	12.4			A1
3	不　明	須恵器蓋	(2.1)				

第28図　その他の出土遺物（土師器・須恵器）

７．土師器の分類と年代

(1) 土師器の分類

土師器は、本遺跡出土土器の大部分を占め、器種には坏・高坏・器台・壺・甕・甑がある。これらのうち坏・器台・壺・甕はそれぞれ、製作技法や器形的な特徴から、いくつかに分けることができる。なお、分類は図示遺物を対象に行っている。

坏：製作に際してロクロを使用していないもの（Ⅰ類）と、使用しているもの（Ⅱ類）とがある。

坏Ⅰ類：いずれも、体部内面に稜をもち、対応する外面が屈曲している。稜および屈曲の位置の違いによって、Ａ・Ｂ類の２つに分けることができる。

坏ＩＡ類：稜、屈曲が体上部に位置するものである。底部形態の違いによりＩA_1・ＩA_2類の２つに細分される。

坏ＩA_1類：底部形態が丸底を呈するものである。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は強く外傾する。器面調整としては、外面口縁部に横ナデ、体部にヘラミガキ、内面口縁部に刷毛目、体部にヘラミガキが施されている。

坏ＩA_2類：底部形態が平底を呈するもので、いく分くぼみ上げ底気味になっている。体部は丸味をもち、口縁部は内弯気味に立ち上がる。器面調整としては、外面上半部に刷毛目、下半にはヘラケズリ、内面にはナデが施されている。

坏ＩＢ類：稜・屈曲が体中央部に位置するものである。底部形態の違いによりＩB_1・ＩB_2類の２つに細分される。

坏ＩB_1類：底部形態が丸底を呈するものである。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外傾している。器面調整として、外面は刷毛目ののち口縁部に横ナデが、体部にはヘラケズリが、内面は、口縁部に刷毛目、体部にヘラナデが施されている。

坏ＩB_2類：底部形態が平底を呈するものである。底部がくぼむもの（ＩB_2ｉ類）と、くぼまないもの（ＩB_2ii類）に細分される。体部器形はＩB_1類と似ているが、口縁部において直線的に外傾するものや、直立気味になるものもある。器面調整には、内外面ともヘラミガキの施されるものと、外面口縁部に横ナデ、体部から底部にヘラケズリ、内面にナデかヘラナデの施されるものがある。なお、外面口縁部については、横ナデが認められるものの、器面において磨耗が激しく、ヘラミガキが消えている可能性がある。

坏Ⅱ類：底部の切り離し技法の違いによってＡ・Ｂの２類に分けることができる。

坏ⅡＡ類：底部の切り離し技法がヘラ切りによるものである。体部から口縁部にかけてわずかに丸味をもちながら外傾している。底部外面は、周縁部がわずかにヘラミガキされ、内面に

は黒色処理が施されている。

坏ⅡB類：底部の切り離し技法が回転糸切りによるものである。器形的にはⅡA類と同様である。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

第２表　土師器坏の分類

Ⅰ ロクロ不使用	A ― 稜・屈曲の位置が体上部	1 ― 丸　底 2 ― 平　底	
	B ― 稜・屈曲の位置が体中央部	1 ― 丸　底 2 ― 平　底	i ― くぼむ ii ― くぼまない
Ⅱ ロクロ使用	A ― 底部の切り離しがヘラ切りによるもの		
	B ― 底部の切り離しが回転糸切りによるもの		

器台：製作に際してロクロを使用していない。脚部に円窓をもつもの（A類）と、もたないもの（B類）とがある。

器台A類：いずれも受け部を欠損しているため、脚部器形しか判然としない。脚部は円錐台状に開き、３個の円窓が穿たれている。受け部と脚部の間は貫通孔となっている。器面調整としては、外面には最終的にヘラミガキを施している。前段階の調整としての刷毛目、横ナデの認められるものもある。内面にはヘラケズリ、刷毛目、横ナデが施されている。

器台B類：A類に比して大形で、かつ肉厚で全体として鼓型を呈している。脚部はややふくらみをもち、受け部と脚部の間が貫通孔となっている。受け部の口縁部には、指頭による整形痕が観察される。器面調整としては、受け部内面、脚部内外面にナデが施されている。

第３表　土師器器台の分類

ロクロ不使用	A ― 脚部に円窓をもつ
	B ― 脚部に円窓をもたない

壺：製作に際してロクロを使用していない。口縁部が複合口縁を呈するもの（A類）と、単純口縁を呈するもの（B類）とがある。

壺A類：口縁部が複合口縁を呈するもので、口頸部が外反するもの（A_1類）と、外傾するもの（A_2類）とに分けられる。

壺A_1類：体部はほぼ球形を呈するが、最大径は体中央部よりわずかに下に位置する。器面調整としては、外面口頸部は刷毛目を施したのち、口縁部に横ナデを施している。内面口頸部に

は、刷毛目を施すものと、口縁部にヘラミガキ、頚部に刷毛目を施すものなどがある。体部は刷毛目ののちヘラミガキを施しているものがある。なお、調整後に体部穿孔されているものがある。

壺A_2類：体部は球形を呈し、最大径はほぼ中央部に位置している。器面調整として、外面頚部・体部には刷毛目が施され、口縁部にはヘラミガキが施されている。内面には刷毛目が施されている。

壺B類：体部が球形で大形のもの（B_1類）と、小形のもの（B_2類）に分けられる。

壺B_1類：口縁部は長く外傾している。器面調整は、内外面とも刷毛目を施したのち、外面口縁部に横ナデを施している。

壺B_2類：体部が球形を呈し、頚部で強くくびれ、口頚部は直線的に外傾している。底部は平底で、わずかにくぼむものもみられる。器面調整として、内外面ともヘラミガキを施しているものが多い。

なお、この他に小破片のため上記の分類に含み得なかったものに、円形浮文のついた土器がある。

第４表　土師器壺の分類

ロクロ不使用	A ― 複合口縁	1 ― 口頚部が外反するもの 2 ― 口頚部が外傾するもの
	B ― 単純口縁	1 ― 体部球形で大形のもの 2 ― 体部球形で小形のもの

甕：製作に際してロクロを使用していないもの（Ⅰ類）と、使用しているもの（Ⅱ類）とがある。

甕Ⅰ類：器形的な特徴から、A～Eの５つに分けることができる。

甕ⅠA類：いわゆる鉢型のものである。口縁部は短く外反している。底部は平底である。器面調整として、外面口縁部にヘラケズリが、内面口縁部は横ナデが施されている。底部外面には木葉痕が観察される。

甕ⅠB類：長胴形のものである。口縁部は短く、外反している。器面調整として、口縁部内外面に横ナデ、体部は外面に刷毛目ののちヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

甕ⅠC類：体部球形で、いわゆる壺形のものである。最大径が体部中央に位置するもの（ⅠC_1類）と、体部中央よりわずかに下に位置するもの（ⅠC_2類）に分けられる。

甕ⅠC_1類：体部は球形を呈し、底部は平底である。口縁部が粘土貼り付けによって肥厚するもの（ⅠC_1ⅰ類）と、しないもの（ⅠC_1ⅱ類）に分けられる。

甕ⅠC_1ⅰ類：口縁部は肥厚し、かつ外傾している。器面調整として、外面は全体に刷毛目が施

され、口縁部にはのちに横ナデが施されている。内面は、口縁部に横ナデか刷毛目、体部には刷毛目かヘラナデが施されている。

甕ＩＣ$_1$ⅱ類：口縁部は外傾するものと外反するものがある。器面調整として、口縁部は内外面ともに横ナデ、体部外面にはヘラミガキが施されているが、ヘラミガキ以前に刷毛目を施すものもみられる。内面には刷毛目かヘラナデが施されている。

甕ＩＣ$_2$類：ＩＣ$_1$類に比して頚部の収縮が小さく、体部は歪んだ球形を呈している。口縁部の肥厚するもの（ＩＣ$_2$ⅰ類）と、しないもの（ＩＣ$_2$ⅱ類）に分けられる。

甕ＩＣ$_2$ⅰ類：口縁部が外傾し、体部はやや下膨み状を呈している。底部は欠損している。器面調整としては、外面口縁部、体部に刷毛目ののちヘラミガキを施すものと、刷毛目ののちナデを施すものとがある。前者は、内面口縁部に刷毛目、体部にヘラナデが、後者は、内面口縁部にヘラナデ、体部にナデ・ヘラケズリが施されている。

甕ＩＣ$_2$ⅱ類：ＩＣ$_2$ⅰ類に比して小形である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、体部は楕円形に近い形を呈している。底部は平底である。器面調整としては、外面がナデ、内面がヘラナデである。

甕ＩＤ類：小形のものである。口縁部は複合口縁を呈し、外傾している。底部は平底である。器面調整として、外面口縁部に横ナデ、体部に刷毛目ののちヘラケズリ・ヘラミガキ（単位不明）が施され、内面口縁部には刷毛目、体部にはナデが施されている。

甕ＩＥ類：台付甕である。台の部分は円錐台状に開いている。器面調整としては、外面に刷毛目ののち裾部に横ナデ、内面はナデを施すもの、刷毛目、ナデを施すものがある。

第５表　土師器甕の分類

Ⅰ ロクロ不使用	Ａ ― いわゆる鉢形のもの		
	Ｂ ― 長胴形のもの		
	Ｃ ― 体部球形のもの	１．― 最大径が体部中央	ⅰ ― 口縁部肥厚 ⅱ ― 〃 しない
		２．― 最大径が体部中央よりやや下	ⅰ ― 口縁部肥厚 ⅱ ― 〃 しない
	Ｄ ― 小形のもの		
	Ｅ ― 台付のもの		
Ⅱ ロクロ使用	いわゆる鉢形のもの		

甕Ⅱ類：鉢型のものである。口縁部は短く、外反している。器面調整として、外面体部は上半に平行タタキ目を施したのち、ロクロ調整を行ない、その後、下半ではヘラケズリが、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

高坏：坏部を欠損しているため、脚部器形しか判然としない。脚部は円錐台状を呈し、３個の円窓が穿たれている。器面調整としては、外面にヘラミガキ、内面には横ナデが施されている。

甑：体下部から底部の出土しかない。単孔式で鉢型を呈するものと思われる。器面調整として、外面にナデ・ヘラケズリ、内面にはヘラナデ・ヘラケズリがみられる。

(2)　土師器の組み合わせ

土師器は前項のように分類された。次にそれらがどのような共伴関係、または組み合わせを示すかを検討してみたい。住居跡単位にみていくと、第１・第３住居跡では、甕１器種の出土しかなく、また、第４住居跡では遺物の出土がないため、第２・第５・第６・第７住居跡から出土した遺物の共伴関係をみていきたい。

第２住居跡で共伴関係を示す土器には、床面、貯蔵穴状ピット内出土の土器がある。これらには、坏ⅡA類、甕ＩＢ・Ⅱ類がある。第５住居跡の共伴関係を示す土器には、床面出土の坏ＩB類、壺A_2・B_2類、甕ＩＥ類、高坏A類がある。第６住居跡の共伴関係を示す土器には、床面出土の坏ＩA_2・ＩB_2類、壺A_1・B_2類、甕ＩC_1類、器台A・B類がある。第７住居跡の共伴関係を示す土器には、床面、貯蔵穴状ピット出土の坏ＩB_2類、甕ＩC_1類がある。

以上、４軒の住居跡において、共伴関係を示す土器は、その組み合わせにおいて違いが認められるが、第５・第６・第７住居跡では、お互いに共通するものを含んでいる。すなわち、第５・第６・第７住居跡の坏ＩB_2ⅱ類、第６・第７住居跡の坏ＩB_2ｉ類、第５・第６住居跡の壺B_2類、第６・第７住居跡の甕ＩC_1類がそれである。これを整理すると、坏ＩA_2・ＩB_1・ＩB_2ｉ・ＩB_2ⅱ類、高坏A類、壺A_1・A_2・B_2類、甕ＩC_1ｉ・ＩC_1ⅱ・ＩＥ類、器台A・B類となる。

次に方形周溝墓から出土した土器について考えてみたい。方形周溝墓出土の土器はすべてが溝中からの出土で、底面から出土するもの、堆積土中から出土するものがある。第１方形周溝

第６表　土師器の組み合わせ

遺構名＼器種	坏	高坏	器台	壺	甕
第１住居跡					ＩD
第２住居跡	ⅡA				ＩB、Ⅱ
第３住居跡					ＩA
第４住居跡					
第５住居跡	ＩB_1、ＩB_2ii、ＩB（?）	A		A_2、B_2	ＩE
第６住居跡	ＩA_2、ＩB_2i、ＩB_2ii		A、B	A_1、B_2	ＩC_1i、ＩC_1ii
第７住居跡	ＩB_2i、ＩB_2ii				ＩC_1i、ＩC_1ii
第１方形周溝墓				A_1	ＩC_1ii、ＩC_2i

墓では、底面から土師器壺ＩＡ類、甕ＩＣ$_1$ⅱ・ＩＣ$_2$ⅰ類の出土があり、これらが方形周溝墓に伴う土器と考えられる。壺A$_1$・甕ＩＣ$_1$ⅱ類は、前述の住居跡にも共伴が認められ、坏ＩＡ$_2$・ＩＢ$_1$・ＩＢ$_2$ⅰ・ＩＢ$_2$ⅱ類、高坏A類、壺A$_1$・A$_2$・Ｂ$_2$類、甕ＩＣ$_1$ⅰ・ＩＣ$_1$ⅱ・ＩＣ$_2$ⅰ・ＩＥ類、器台A・Ｂ類が同一年代幅の中で処理できる土器組成と考えられる。

(3)　土師器の年代と位置づけ

ここでは、前項において分類され、そして組み合わせの成立した土師器の年代について考えてみたい。

東北地方南部の土師器編年は、氏家和典氏の「東北土師器の形式分類とその編年」（氏家：1957）でその大綱がたてられた。それによると第２住居跡で出土した土師器坏Ⅱ類は、製作に際しロクロを使用していることから、表杉ノ入式に比定され、共伴した甕ＩＢ・Ⅱ類も同時期のものと考えられる。また、第５・第６・第７住居跡・第１方形周溝墓から出土し、組み合わせとして成立した坏ＩＡ$_2$・ＩＢ$_1$・ＩＢ$_2$ⅰ・ＩＢ$_2$ⅱ類、高坏A類、壺A$_1$・A$_2$・B類、甕ＩＣ$_1$ⅰ・ＩＣ$_1$ⅱ・ＩＣ$_2$ⅰ・ＩＥ類、器台A・Ｂ類は、土師器最古の型式である塩釜式に比定することができる。

次に、遺構に伴わないで出土した土師器、すなわち、堆積土から出土した土器で分類の対象となったものについて年代をみていきたい。坏ＩＡ$_1$類、壺Ｂ$_1$類、甕ＩＤ類がある。

坏ＩＡ$_1$ⅰ類は、底部が丸底を呈し、口縁部は強く外傾している。器面調整は、口縁部が横ナデ、体部がヘラミガキである。類似のものは、古川市留沼遺跡（手塚：1980）において認められるが、口縁部の外傾度が本遺跡のものより小さい。留沼遺跡の例は塩釜式に比定されている。

壺ＢⅠ類は、単純口縁で体部球形の大型壺である。類似のものは、蔵王町大橋遺跡（藤沼：1971・大田：1980）、名取市西野田遺跡（丹羽他：1974）で出土している。前者では、本遺跡の坏ＩＡ$_2$・ＩＢ$_2$類の坏との共伴があり、塩釜式期とされているが、器面調整がヘラミガキである点が異なる。後者では、他の器種との共伴関係が捉えられていないため、時期については述べていないが、器面調整が全面刷毛目である点で共通性が強い。

甕ＩＤ類は、小形のもので、口縁部は複合口縁を呈している。類似のものは、留沼遺跡において認められ、塩釜式に比定されているが、底部形態にわずかな違いが認められる。

なお、分類の対象として含み得なかった円形浮文の付いた壺は、県内では蔵王町大橋遺跡で出土しているが、共伴関係については不明とされている。浮文系土器で共伴関係の明らかな例としては、福島県朝日長者遺跡第 102 号住居跡（原川他：1977）、山形県山形西高校遺跡４号住居跡（山形県教委：1978）出土の棒状浮文のついた複合口縁の壺がある。本遺跡の坏ＩＢ類に類似した坏を含む他の器種との共伴関係が認められ、前者は五領式に、後者は塩釜式に比定されている。

次に塩釜式に比定された各器種を当該期の遺跡の資料と比較検討し、本遺跡における土器群

の塩釜式内での位置づけについて述べてみたい。塩釜式の資料が公表されている遺跡としては、蔵王町大橋・名取市西野田・志波姫町宇南・古川市留沼などの諸遺跡がある。中でも、大橋・留沼の２遺跡は遺物の出土量も多く、共伴関係の明らかなもの、セットとして把握できるものがあり、氏家和典、丹羽茂、太田昭夫諸氏によって論考が加えられ、現在のところでは、大橋の資料を塩釜式内での古い方に、留沼の資料を塩釜式内での新しい方に位置づけて考えることが大勢を占めている。

はじめに、大橋・留沼両遺跡の資料の比較検討から、各器種間の相違をみていく。両遺跡に共通する器種としては、坏・高坏・器台・壺・甕の５器種がある。

坏：坏は稜・屈曲をもつもの（Aタイプ）と、稜・屈曲をもたないもの（Bタイプ）に分けることができる。Aタイプは、さらに、稜・屈曲の位置によって、１．体上部の内外面に位置するもの、２．体中央部の内外面に位置するもの、３．体上部の内面にのみ位置するものに分けられ、A_1には、a：底部が平底のもの、b：丸底のものがある。A_2・A_3タイプはすべて平底である。A_1～A_3のタイプともに両遺跡に認められるが、大橋遺跡の場合、A_1タイプはA_1aで量的に最も多く、A_2・A_3タイプは少ない。一方、留沼遺跡の場合は、A_2タイプが量的に多く、A_1・A_3タイプは少ない。留沼遺跡におけるA_1タイプには、A_1a・A_1bの二者があり、A_1aの比較では、大橋遺跡のものに比して大形で横長の器形を呈している。器面調整をみると、大橋遺跡の場合、A_1タイプのものは、体部外面に刷毛目ののちヘラケズリを施すものが多く、A_2タイプでは、全面にヘラミガキを施すものが多い。A_3タイプは、刷毛目あるいはヘラケズリ調整である。一方、留沼遺跡の場合、A_1aがナデ、A_1bが刷毛目ののちヘラミガキ、A_2タイプでは、全面ヘラミガキ、あるいは刷毛目ののちヘラケズリ、A_3タイプは、刷毛目である。

一方、Bタイプのものは、両遺跡ともに量的には少ないが、大橋遺跡のものには、１．口縁部が内弯するもの、２．体部から直線的に大きく外傾するものがみられ、留沼遺跡のものには、３．体部から丸味をもって立ち上がるものがある。器面調整として、B_1は刷毛目、B_2は刷毛目、あるいはヘラケズリののちヘラミガキ、B_3はヘラケズリが施されている。

高坏：高坏は、脚部に円窓をもつもの（Aタイプ）と、もたないもの（Bタイプ）に大きく分けることができる。また、脚部の型態には、１．裾で大きく開くもの、２．円錐台状に開くもの、３．柱実の柱状部と脚部からなるものがある。Aタイプの脚部形態には、１、２があり、Bタイプの脚部形態には、２、３がある。器面調整では、最終的に入念なヘラミガキの施されるものが多い。大橋遺跡の高坏はすべてAタイプに属し、留沼遺跡の高坏はすべてBタイプに属している。

器台：脚部に円窓をもち、貫通孔がある。大橋遺跡のものは、円錐台状に開く脚部と、外傾する小さな受け部からなっている。一方、留沼遺跡のものは、脚部が長かったり、受け部の口

縁部に変化があるなど、器形的に若干の違いがある。

壺：口縁部型態によって、複合口縁のもの（Aタイプ）と、単純口縁のもの（Bタイプ）に大きく分けることができる。大橋遺跡では、Aタイプのものが多く、１．頚部に突帯のめぐるもの、２．頚部に突帯のないものがある。一方、留沼遺跡では、Aタイプのものは極めて少なく、A_2タイプの退化した形態のものが１点みられるだけである。また、Bタイプのものには、１．体部球形の大形のものと、２．口頚部が長い小形のものがある。量的にはB_2タイプのものが多く、完形品で比較した場合、大橋遺跡のものは、体部がやや横長の球形を呈し、体部径に比して口縁部径が小さい。一方、留沼遺跡のものは、体部がほぼ球形で、体部径と口縁部径は、ほぼ同じである。器面調整として、Aタイプのものは、刷毛目ののちヘラミガキを施すものが多く、Bタイプでは、ヘラミガキを施すものが多い。また、大橋遺跡では、円形浮文の施された肩部破片が出土している。

甕：口縁部型態によって、S字状口縁のもの（Aタイプ）、複合口縁のもの（Bタイプ）、単純口縁のもの（Cタイプ）に分けることができる。Aタイプは、大橋遺跡にみられるが、量的には少ない。Bタイプは、留沼遺跡にみられる大形・小形のもの各１点である。Cタイプは、両遺跡とも最も多く認められ、体部器形では、１．最大径が体部のほぼ中央に位置し、体部が球形を呈するもの、２．体部器形が縦長の球形を呈するもの、３．最大径が口縁部に位置する鉢型のもの、４．最大径が体部中央下部に位置するため、体部が下膨みを呈するものなどがある。大橋遺跡の場合は、いずれもC_1タイプであり、口縁部が粘土貼り付けによって肥厚するものと肥厚しないものがある。一方、留沼遺跡の場合は、C_1～C_4タイプまであり、器形的にバラエティーに富んでいる。いずれも口縁部は肥厚しない。器面調整としては、Aタイプは体部にヘラケズリ、Bタイプは小形のものがヘラケズリ、大形のものが刷毛目である。また、C_1タイプは刷毛目を施すものが多く、C_2タイプでは、刷毛目ののちヘラケズリ、あるいはヘラケズリだけのもの、C_3タイプでは、刷毛目ののちヘラケズリ、あるいはヘラミガキ、C_4タイプでは、刷毛目ののちヘラケズリのもの、ヘラミガキだけのものがある。

以上、大橋・留沼両遺跡における坏・高坏・器台・壺・甕の５器種について、その特徴あるいは相違点を述べてきた。これをまとめてみると、従来、土師器の編年においてその基準ともされていた坏においては、一型式内での器形の変化の流れを明確に捕えることは困難に思われる。量的には、大橋にA_1ａタイプが多く、留沼にはA_2タイプが多いが、これは量的な比較であり、傾向としては言えるかも知れないが、単独で出土した場合には、時間差は決め難い。ただし、底部が丸底を呈するDタイプは、大橋には全く認められない器形であることは１つの着目点であろうか。全体としては古い時期のものにバラエティーがあり、それが収縮される形で継続していったものと思われる。

次に、高坏についてみると、脚部型態の違いが大きく、特に円窓の有無が時間差を示していると言えよう。

器台は、円錐台状に開く脚部と外傾する受け部からなる単調なものから、変化のあるものへの移行が考えられる。

壺は、古いタイプに複合口縁のものが認められ、新しいタイプでは消滅する傾向にある。単純口縁のものは継続して認められ、型態が坩に近いものでは、古いタイプで体部径に比して口縁径が小さいことが言えそうである。また、浮文を有するものについては、口縁部型態は明らかでないが、古い方に認められるものである。

甕は、古い時期のものにはＳ字状口縁、単純口縁で粘土貼り付けによって口縁部が肥厚するものなど、口縁部に変化をもたせるものが認められる。また、これらの体部はいずれも球形を呈している。一方、新しい時期のものは体部器形にバラエティーがある。口縁部の変化は少なく、また、器面調整においては、古い時期のものは外面体部に刷毛目を多く用い、新しいものには、ヘラケズリが多く用いられる傾向がありそうである。

次に、上記の結果をもとに、本遺跡出土の各器種の塩釜式内における位置づけを行なってみたい。器種間にまとまりを示す第６住居跡で共伴した各器種を取り上げ検討してみる。第６住居跡で共伴した器種としては、坏ＩＡ$_2$・ＩＢ$_2$ｉ・ＩＢ$_2$ii類、器台Ａ・Ｂ類、壺Ａ$_1$・Ｂ$_2$類、甕ＩＣ$_1$ｉ・ＩＣ$_1$ii類がある。

坏は、いずれも体部に稜あるいは屈曲をもつもので、底部は平底を呈している。ＩＡ$_2$・ＩＢ$_2$ｉ類は大橋遺跡に類例が認められる。また、ＩＢ$_2$ii類は大橋、留沼両遺跡に類例が認められるが、留沼遺跡のものは、わずかに横長の器形を呈するなどの違いがある。

器台のうちＡ類は、大橋遺跡のものに似ているが、Ｂ類は両遺跡ともに認められない器形である。類似資料は西野田、南小泉遺跡などで認められている。

壺ＡＩ類は、複合口縁を呈し口頸部の外反するもので、大橋遺跡に類例が認められる。いわゆる坩と呼ばれるＢ$_2$類は、大橋・留沼両遺跡ともに認められる器形であるが、大橋遺跡のものほど口頸部の直立が顕著でない。

体部球形で口縁部の肥厚する甕ＩＣ$_1$ｉ類は、大橋遺跡のものに類似している。一方、ＩＣ$_1$ii類は大橋・留沼両遺跡とも最も多く認められる器形であるが、器面調整において違いがある。すなわち、本遺跡のものは、外面体部にヘラミガキを施すのに対して、大橋遺跡のものは刷毛目を、留沼遺跡においては、刷毛目あるいはヘラケズリを施しているのである。

以上、第６住居跡で共伴した各器種は、坏ＩＡ$_2$・ＩＢ$_2$ｉ類、器台Ａ類、壺Ａ$_1$類、甕ＩＣ$_1$ｉ類など、その多くが大橋遺跡のものと近似した特徴を示すことが言え、塩釜式の中でも、古い時期に位置づけることができよう。また、第５・第７住居跡、第１方形周溝墓で共伴した各器種も

その組み合わせに違いはあるものの、多くは第６住居跡で共伴した各器種とその特徴に共通性を示すことから、同様の時期が与えられよう。

すなわち、本遺跡出土の塩釜式の土師器は、同型式内でも古い時期と考えられたわけであるが、塩釜式に関しては、整理報告された遺跡数も少なく、その内容については今後の研究にゆだねるところが大きく、類似資料の増加を待って、更なる検討が必要なものと思われる。

(4)　須恵器の分類と年代

須恵器は、土師器に比して出土量、器種ともに少ないが、坏については分類が可能である。

坏：底部切り離し技法の違いにより、２つに分類される。

A類：底部の切り離しがヘラ切りによるもの。

B類：底部の切り離しが回転糸切りによるもの。

坏A類：体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾するものと、体部が直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反するものとがある。

坏B類：再調整のあるもの（１類）と、ないもの（２類）がある。体部器形については、A類同様であるが、わずかに器高の高いものが多い。

坏B_1類は、体部下端にヘラケズリが施されるものである。

次に分類の対象となり得なかった甕・壺・鉢・蓋について概略を記しておく。

甕：体部が球形で、肩部から頚部にかけて「く」字状に屈曲し、外反する口縁部をもつものである。

第７表　須恵器坏の分類

A ― 底部の切り離しがヘラ切りによるもの		
B ― 底部の切り離しが回転糸切りによるもの	1 ― 再調整あり 2 ― 再調整なし	

壺：長頚壺の口頚部と底部資料である。底部は右回転糸切りによって切り離され、高台が付いている。

鉢：口縁部が横に短く外反し、先端が上方につまみ出されているものである。

蓋：リング状のつまみをもつもので、天井部外面に回転ヘラケズリの施されるものである。

次に、須恵器の年代について述べてみたい。

坏A類：B類ともに第２住居跡において、ロクロ使用の土師器坏Ⅱ類と共伴関係にあることから、平安時代のものと思われる。

甕、壺、鉢は、土壙10・第３層において検出されたものである。第３層中出土の土師器はすべてロクロ使用のものであることから、これらも平安時代のものと考えられる。

蓋は、共伴関係がない。類似のものは大和町鳥屋窯跡（東北学院大学：1975）、大衡村窯跡群（東北学院大学：1978）等にみられ、平安時代のものと思われる。

８．遺構の年代と考察

(1)　竪穴住居跡

前項において、本遺跡出土土器の検討を行った。ここでは、各住居跡に伴うと考えられる土器の年代から、各住居跡の年代を考えてみたい。

第１・第５・第６・第７住居跡から出土した各器種の土器は、土師器編年上「塩釜式」のものと考えられ、したがって、これらの住居跡の年代も「塩釜式」期と考えられる。また、第２・第３住居跡出土の土器は、土師器編年上「表杉ノ入式」のものであり、竪穴住居跡の年代も「表杉ノ入式」期と考えられる。第４住居跡については、住居に伴う遺物の出土がなく、年代を明確にし得ないが、表杉ノ入式期と考えられる第３住居跡に切られていることから、表杉ノ入式期以前であることに間違いはない。また、カマドを備えず地床炉をもつこと、南小泉期の遺物の出土が遺跡内にみられないことなどから、塩釜式期と考えて差しつかえないものと思われる。

次に、各期の竪穴住居跡の構造をまとめ、この時期に属する他遺跡の類例と比較・検討を行ってみたい。

塩釜式期の竪穴住居跡

５軒検出されている。平面形はすべて方形を基調とし、全体形の明確な第５住居跡はほぼ正方形を呈し、各隅はやや丸くなっている。これは他の住居跡においても同様に言える。規模では、一辺が3.6～5.5mの範囲に収まる。床面は、地山を床とするもの（第１・第６住居跡）、地山と掘り方埋土上面を床面とするもの（第４・第５・第７住居跡）があり、周溝は、いずれの住居跡でも検出されていない。柱穴が検出されたものは、住居の対角線上に正方形に４個配置されたものである（第５・第６住居跡）。地床炉と考えられる焼面が住居中央部からわずかに偏したところに検出されているものもある（第４・第５・第６住居跡）。焼面の範囲は径 40cm で、他と区画する施設（石組等）はない。貯蔵穴状ピットは、第１住居跡で楕円形、第７住居跡で方形のものが検出されているだけである。

以上が、本遺跡で検出された塩釜式期の竪穴住居跡の概略である。当該期の竪穴住居跡は、発見例も増え始め報告されているものが約 30 軒ある。構築等について比較検討を行ってみる。平面形は方形を基調とするものが大部分であるが、西野田遺跡には、円形あるいは楕円形を呈するものが３軒みられる。住居の隅が丸くなるものも各遺跡に認められる傾向であるが、丸くならないものと混在する例の方が多いようである。規模では、一辺が４～６m前後のものが最

も多く、蔵王町大橋、名取市宮下遺跡において検出された一辺が９m以上もある大形の住居跡は、極めて珍しい例と言えよう。床面は、掘り方がある例とない例が混在している。柱穴については、住居対角線上に４個配置されるものが、各遺跡において多く認められる一方、全く不明なものも少なくない。大橋遺跡第１住居跡では、添柱と考えられる柱穴も検出されている。西野田遺跡第６住居跡のように竪穴外の壁沿いに規則正しく配置される例もある。また、周溝は検出されている例が多く、本遺跡のように全く検出されない例は少ない。

次に炉であるが、いずれも石組みなどの区画する設備をもたず、床面の一定範囲が焼けて硬くなっている。いわゆる地床炉である。住居跡の平面形の全体が明らかなものでは、検出される例が多く、場所は住居の中央よりいずれかに偏したところに認められている。貯蔵穴状ピットは、各遺跡ともに検出されるものの方が多く、平面形では、隅丸長方形、円形の２タイプがありそうである。

以上、他遺跡で検出された住居跡と簡単な比較を行ってみたが、本遺跡で検出された５軒の竪穴住居跡も、構造上は、基本的に他の遺跡のものとなんら変わりなく、ごく一般的なタイプと思われる。ただ、周溝の全く認められないことは、特記される点であろう。

表杉ノ入式期の竪穴住居跡

２軒検出されている。２軒とも重複・攪乱等により全体の平面形は明らかではないが､残存部から推して方形を基調とするものと思われる。規模は、一辺が2.7m～3.4mと小さい。床面に掘り方はみられず、柱穴と思われるピットの検出もない。周溝は第２住居跡で部分的に検出されている。カマドは第３住居跡で認められ、北壁東寄りに付設されている。側壁を粘土で構築したものである。貯蔵穴状ピットは２軒ともに認められ、平面形が円形のものと楕円形のものである。

以上が本遺跡で検出された表杉ノ入式期の竪穴住居跡の概略である。当該期の集落は、県内でも数多く発見されており、報告例も多い。平面形は方形を基調とし、カマドを備えているものが普遍的で、柱穴に関しては、４本検出されるものと、全く不明なものの２タイプが多い。

本遺跡の２軒は、部分的な検出であるが、基本的には、当該期の住居跡となんら異なった特徴は示していない。

(2)　方形周溝墓

検出された方形周溝墓は３基で、そのうちの２基は後世の遺構との重複によって壊され、全体の型態を失っている。型態の明らかな第１方形周溝墓は、溝が途切れることなくめぐるもので、平面形は隅丸のやや南北に長い長方形を呈し、北側でわずかに胴が張っている。他の２基についても残存部では溝が途切れずめぐり、隅は丸くなっている。規模は、第１・第２方形周溝墓では長軸が約10.4m、第３方形周溝墓では約14.5mと、第３方形周溝墓が他の２基に比し

てやや大形である。台状部は、第１方形周溝墓では四辺が外周四辺に比して直線的で、四隅の丸味も少なくなっている。封土は３基ともに認められず、墓壙と思われる施設の検出もない。周溝は中央部で幅広く、隅の部分が狭くなっている。深さは、確認面から10～65㎝と一様でなく、底面には部分的に凹凸が認められ、隅の部分が他に比して浅くなっている。堆積土は溝の内外から交互に堆積するのが一般的で、自然流入の状態を示している。周溝断面形は、逆台形を呈している場合が多い。遺物は周溝内に認められ、第１方形周溝墓では、東辺北隅寄りの底面から、略完形で焼成後に体部穿孔された土師器複合口縁の壺が、底部を下にし、あたかも据え置かれていたものが押しつぶされたような状態で、また、南辺中央部底面からは、底部を欠損した土師器甕が横位で出土している。他にも、溝底面、堆積土中から土師器甕、あるいは壺の体部、底部破片が出土しているが、まとまって出土するようなことはなく、各位の溝中に散らばっている。甕・壺ともに供献用の土器と考えられるが、供献するために意図的に製作したものというより、生活用具として使用していたものを転用した感が強い。第２方形周溝墓からは、遺物の出土が全くなく、第３方形周溝墓では、土師器甕、あるいは壺の体部・底部破片がわずかに出土しているに過ぎない。出土遺物の年代から第１方形周溝墓の年代は、古墳時代前期塩釜式期に位置づけられる。また、第３方形周溝墓は、出土遺物の中で最も新しい時期のものが塩釜式の土師器であること、第２方形周溝墓も含めて型態的な特徴が第１方形周溝墓と近似することから、同時期の遺構と考えられる。

以上、方形周溝墓について概略を述べた。県内において方形周溝墓は、本遺跡の他に、名取市今熊野、高清水町東館、仙台市安久東、多賀城市五万崎、志波姫町宇南の５遺跡で（総数18基）発見されており、本遺跡例が現在のところでは、最北に位置している。立地としては、安久東遺跡の例が沖積地であるほかは、丘陵か台地の平坦面に認められている。平面型態としては、溝が全周するタイプが多く、隅の一部が途切れ、ブリッジ状を呈するものがわずかに認められる。また、安久東遺跡の例は、南辺中央部で溝が扇状に外に向って開口する特異な型態を呈するもので、あたかも前方後方墳の型態をみるようである。規模は、一辺あるいは長軸が10m前後のものが多いが、安久東・今熊野遺跡では20m以上の大形のものもみられる。周溝の一部が胴張りになったり、溝底面で隅が浅くなるなど、本遺跡で認められた特徴は10m前後の規模をもつ例においては、ほぼ認められる傾向である。台状部で封土・墓壙の検出された例はない。遺物はいずれの場合も周溝内から認められ、特に堆積土中からの出土が多い。中でも、安久東・今熊野１号では、焼成前に底部穿孔された土師器複合口縁あるいは有段口縁の壺が出土しており、これらは明らかに供献用として意識的に作られたものと思われ、本遺跡の例とは大きく異なっている。出土遺物の年代から、これらの方形周溝墓の年代は、古墳時代前期塩釜式期と考えられている。最後に、同時期の集落との関係についてみると、東館・多賀城五万崎・

安久東遺跡を除いては、方形周溝墓・住居跡の双方が検出されている。今熊野遺跡の場合、鴻ノ巣地区(標高 40m前後)、北台地区（標高 50m前後）と２つの地区に分かれて遺構が存在し、方形周溝墓は、標高の高い北台地区に集中して、住居跡は標高の低い鴻ノ巣地区に集中して認められる。また、宇南遺跡の場合は、同一台地上で最も眺望のよい西側縁辺に方形周溝墓が位置し、台地北・南縁辺に住居跡が位置することなどから、居住の場と墓城とが区画されていた可能性がある。本遺跡の場合、３基の方形周溝墓と４軒の住居跡は近接して検出され、「場」の違いはみせない。まして、これが時期差を意味するか否かは遺物の比較検討から明らかにできなかった。

以上、方形周溝墓について簡単に考察を加えてみたが、東北地方では、本県を除くと山形県米沢市で１例が検出されているだけである。古墳時代の墓制の１つである方形周溝墓が宮城県の北部にまで及んでいること、しかも、同時期とみられる前期高塚古墳よりもその分布を広げていることは、前期古墳および集落をも含めて、古墳時代の社会解明に多くの問題を提起するであろうが、資料的にはまだ不足である。類例の増加、土師器の編年、被葬者まで含めた更なる検討が今後の課題となるであろう。

(3)　円形周溝

検出された円形周溝は５基で、型態的な特徴としては幅 0.4～2.2mの溝が直径６～12mの範囲で、円形あるいは楕円形にめぐるものである。全体形の明らかな第２円形周溝では、溝が途切れることなく全周しているが、一方、第５円形周溝では南側で一部溝が途切れ開口するなどの違いがみられるが、後者の場合、この開口が溝の掘られた段階でのものかは明らかでない。なお、第１・第３・第４円形周溝は、後世の遺構との重複などにより壊され、全体の平面形については明確さを欠いている。

規模においては、第１・第４・第５円形周溝の３基が直径 10mを越し、溝幅は 0.9～2.2mを測る。溝の深さは確認面から 0.3～0.65mで、底面はいずれも部分的に凹凸がある。一方、第２・第３円形周溝は直径６～7.5m、溝幅 0.4～0.9m、深さ 0.1～0.5mと前者に比して規模が小さい。溝底面の状況は前者同様である。

溝内堆積土は、溝内外からほぼ交互に流入する傾向が認められ、自然堆積の状況を示している。また、溝で区画された台状部は平坦な面をなしており、封土があったか否かについては不明である。土壙などの施設の検出もない。

次に、円形周溝の年代について検討してみたい。

第１・第２・第５円形周溝からは、縄文土器・弥生土器・土師器が出土しているが、いずれも溝内堆積土中からの出土で、底面からの出土はない。これらの遺物は数も少なく、破片で出土するものが多く、器形等について知り得るものはごく僅かである。しかし、最も新しい出土

遺物である土師器が、塩釜式に属するものであることから、塩釜式期には、周溝は完全に埋まりきったものと思われる。また、第１円形周溝は、塩釜式期と思われる第１住居跡を切って構築されていることから、塩釜式期内での時間差が考えられるが、遺物相互の比較においては、遺構に伴うと考えられる遺物がなく、その時間差を明らかにすることはできなかった。

県内において類似の遺構は、名取市西野田遺跡において２基が検出されている。いずれも幅0.4～１mの溝が直径10mを越す大きさで円形にめぐるもので、１基からは長円形の土壙（底面の規模・長軸 1.7m×短軸 0.4m、深さ・７㎝、長軸方向・北北東－南南西）が台状部において検出されている。調査者は、周溝については他の空間から区画する役割りを果す程度のものであろうとし、土壙については周溝墓としての可能性を否定するものではないと結論している。本遺跡の場合、土壙の検出もなく墳墓とする積極的な根拠をもたないが、型態的な類似性から、墳墓の可能性も否定できない。年代は本遺跡同様に供献された状態を示す土器の出土はなく、周溝内から発見される最も新しい時期の遺物が塩釜式であることから、同式期内に位置づけている。また、西野田遺跡においては、塩釜式期の住居跡が11軒検出されているが、住居跡と円形周溝との占地についての違いが指摘されており、住居跡・方形周溝墓・円形周溝が占地を同じくする本遺跡とに違いがみられる。かりに、円形周溝を墓として考えるならば、必ずしも同時存在が言えるわけではないが、同型式期内に方形周溝墓・円形周溝墓の２型態が墳墓として存在するわけで、新しい発見と言えよう。円形周溝と住居跡の切り合いがあるように、塩釜式期内での年代差のあることは明らかであり、時期により方形周溝墓を形成した集団、円形周溝墓を形成した集団と２つの集団があったのであろうか。同時存在の場合、方形に造るものと円形に造るものの違いはどこから生まれてくるのだろうか。いろいろな問題を提起する遺構である。

(4)　土壙

検出された土壙は10基で、平面形は円形を基調とするものが多い。規模については、直径あるいは長軸の長さが0.6～５m、深さ0.1～２mと多様である。土壙１からは、弥生時代大泉式土器の出土があり、同式期あるいはそれ以前の遺構と思われる。土壙２、３は、平安時代表杉ノ入式期の竪穴住居跡床面下で検出されたもので、住居跡構築以前の遺構と考えられる。土壙４～６、８・９は出土遺物がなくその年代については不明であるが、中世と考えられる土塁、堀、竪穴遺構との重複から、中世以前の遺構と考えられる。また、土壙７は須恵器長頸壺の年代から、土壙10は、表杉ノ入式土師器坏の年代から平安時代の遺構と考えられる。

以上、検出された土壙の年代について述べたわけであるが、その性格については現段階では不明である。土壙８、９は、規模、型態共に類似性が極めて強く、その性格も同様のものであろう。壁下端から底面に焼面を持つ土壙は、いわゆる“焼土遺構”として、金成町佐野遺跡(平

沢、手塚：1980）、古川市藤屋敷遺跡（加藤：1980）、色麻町上新田遺跡（小井川：1981）などで検出され、上新田遺跡では、土師窯の可能性も指摘されている。土壙８、９の場合、底面ピットがある点、他の遺跡の類例と異なるが、あるいはこうした性格をも考慮すべきであろうか。土壙10は、古川市宮沢遺跡（斉藤・真山：1980）で類例が２基検出されている。平安時代のものであるが、性格については不明とされている。土壙については、墓壙、落し穴、貯蔵施設などの性格が付与される場合が多いが、必ずしもすべてが当を得たものとは言えないように思われる。個々の特徴を再吟味し、相互に比較検討し性格付けを行なうことが、今後の課題となろう。

Ⅳ．中世以降の遺構と遺物

鶴ノ丸遺跡は、前にも述べたように中・近世の館跡として知られていたものである。調査の結果、土塁・堀・掘立柱建物跡など、館跡を構成すると考えられる遺構や、中・近世の所産と考えられる陶磁器などの遺物が発見された。本章では、これらの遺構、遺物について述べる。

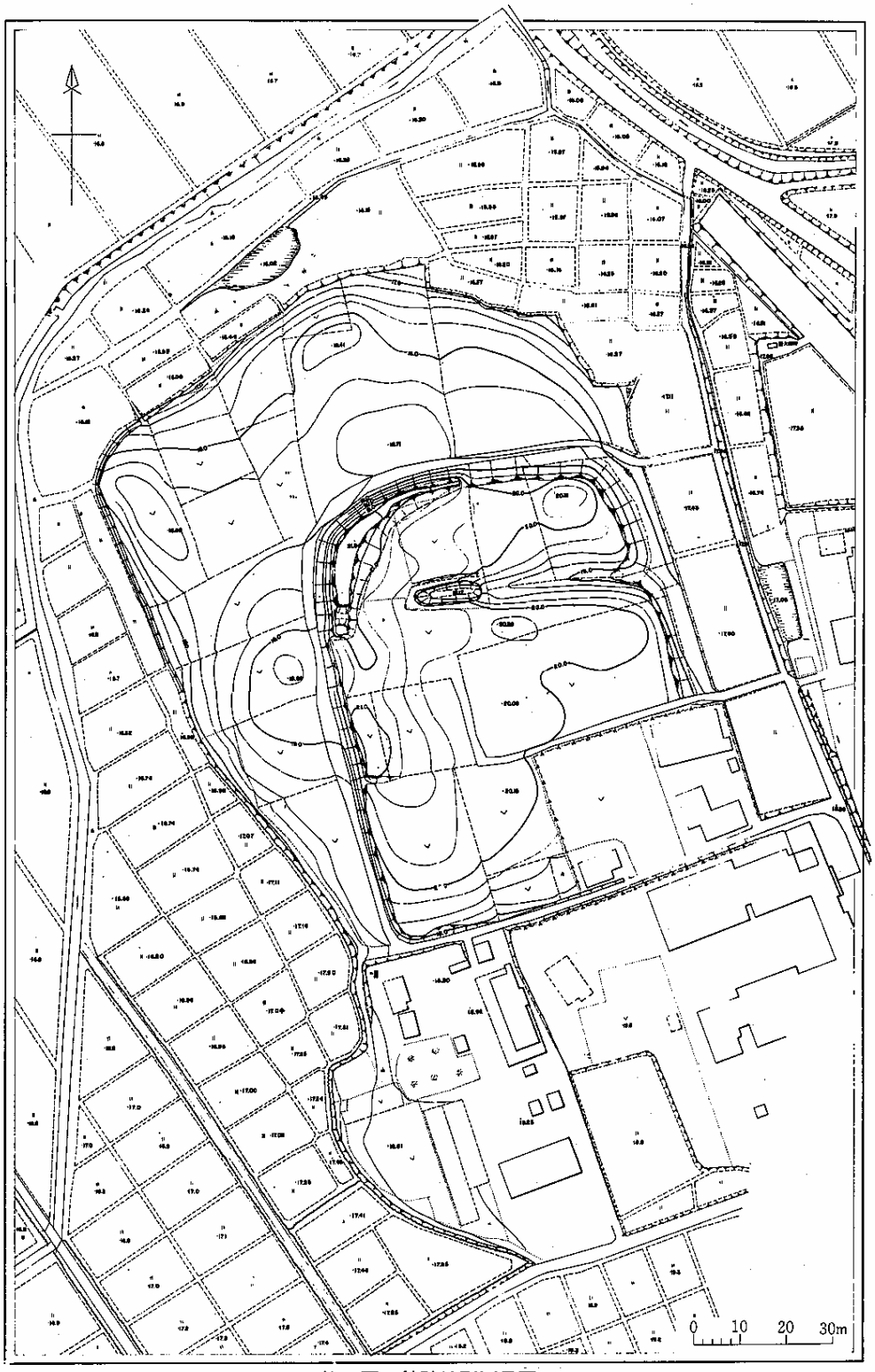
１．館跡の規模

館跡は、前にも述べたように築館町鹿島附近から若柳町にかけて、南西から北東にのびる標高25～30mほどの低平な台地が、志波姫町吹付附近から、北西に向って舌状に突き出した先端部に立地している。この先端部は、東西両側および北側で水田として利用されている一段低い沖積地と接しており、また、南側には沢が入り込んでいるため、あたかも独立した地形の様相を呈し、南北長約210m、東西幅約120m、面積にして25,200㎡ほどの広さをもっている。遺跡周辺の地形測量図（第29図）、明治13年作成の地籍図（第30図）をもとに、館跡の規模について考えてみたい。

第29図を見ると、ほぼ中央部に畑地あるいは宅地として利用されている南北長約90m、東西幅約70m、面積にして6,300㎡ほどの広さをもつほぼ長方形を呈した平場が認められる。この平場は、先端部において最も高い部分で標高約20mを測り（以下、上段平場とする）、北・西縁には、高さ１m、幅５mほどの土塁がめぐっている。また、平場の北寄りの部分には、東西方向に長さ45m、幅４m、深さ１mほどの溝状の掘り込みがみられ、東側では水田部と接続している。

また、上段平場の周辺部を見ると、東側は約2.5mの比高差をもって幅の狭い水田部分と接しているが、北および西側には、外縁部に向って緩やかに傾斜し、畑地として利用されている平場が、南側には、民家の屋敷地として利用されている平場がある（以下、下段平場とする）。下段平場は、標高18～19mで上段平場より１～２m低く、北側では、上段平場北縁から40mほどの広がりをもち、端部では、比高差もなく水田部分と接して、その境界は不明瞭となっている。一方、西側は上段平場西縁から10～40mほどの広がりをもち、南側ほど幅が狭くなり、端部においては、比高差１mほどで水田部分と接している。面積にして約6,300㎡ほどの地域である。また、南側は南北70m、東西120m、面積にして8,400㎡ほどの広さをもつ地域で、南端では、幅の狭い水田（沢を利用している）と、比高差もなく接し、西側では約１mの比高差で水田部分と接している。

次に、第30図を見てみよう。第29図の上段平場の外縁を沿うように、“マワシボリ”と呼称されている用水堀が長方形に巡り、東辺では南側にのび、東側に折れ、さらに南北にのびてい



第29図　館跡地形測量図

る。この用水堀は、上段平場の縁辺にみられる土塁と対をなす堀の可能性が考えられ、上段平場を土塁と堀で区画された一つの郭と見ることもできる。また、この用水路の北辺および南辺から約 70m、西辺から約 30～50m、東辺から約 60m離れて“マワシボリ”とほぼ軌を一にした用水路がめぐっている。

この用水路は、第 29 図の下段平場の西側および南側では、端部のわずかに外側に、北側では約 25mほど外側に、東側では標高 17m前後の最も低い幅の狭い水田部分にあたる。西側および南側において、この用水路となっている部分の内側は、幅の狭い水田として利用されている部分が多く、水田部分の内側は、宅地や畑地として利用されている場合が多い。すなわち、幅の狭い水田部分は、かつて堀であった可能性が強く、用水路は堀の一部を利用して作られたものと考えることもできる。また、地元の方の話によると、先にのべた“マワシボリ”の東西延長部分で東に折れ曲がるあたりは、かつて“大手”と呼ばれていたらしい。

以上、29・30 両図から、館跡は、上下２段の平場から構成され、その規模は、突出した先端部の全体と周辺の水田部をも含めた、南北長 210～250m、東西幅 120～150m、面積にして 20,000～37,500 ㎡になるものと思われるが、南側および東側は、宅地等として利用されているため旧状を知ることはできない。

２．発見された遺構

調査の結果、掘立柱建物跡８棟、竪穴遺構７基、井戸３基、土壙 25 基、溝７本、土塁、堀４本、土橋、通路状遺構などの遺構が上段、下段の両平場から検出された。ここでは、便宜状上段平場の１号堀内側をＡ平場、外側をＢ平場、下段平場の北側をＣ平場､南側をＤ平場として、各平場単位で発見された遺構について述べてゆくことにする。

〔上段平場〕

⑴Ａ平場

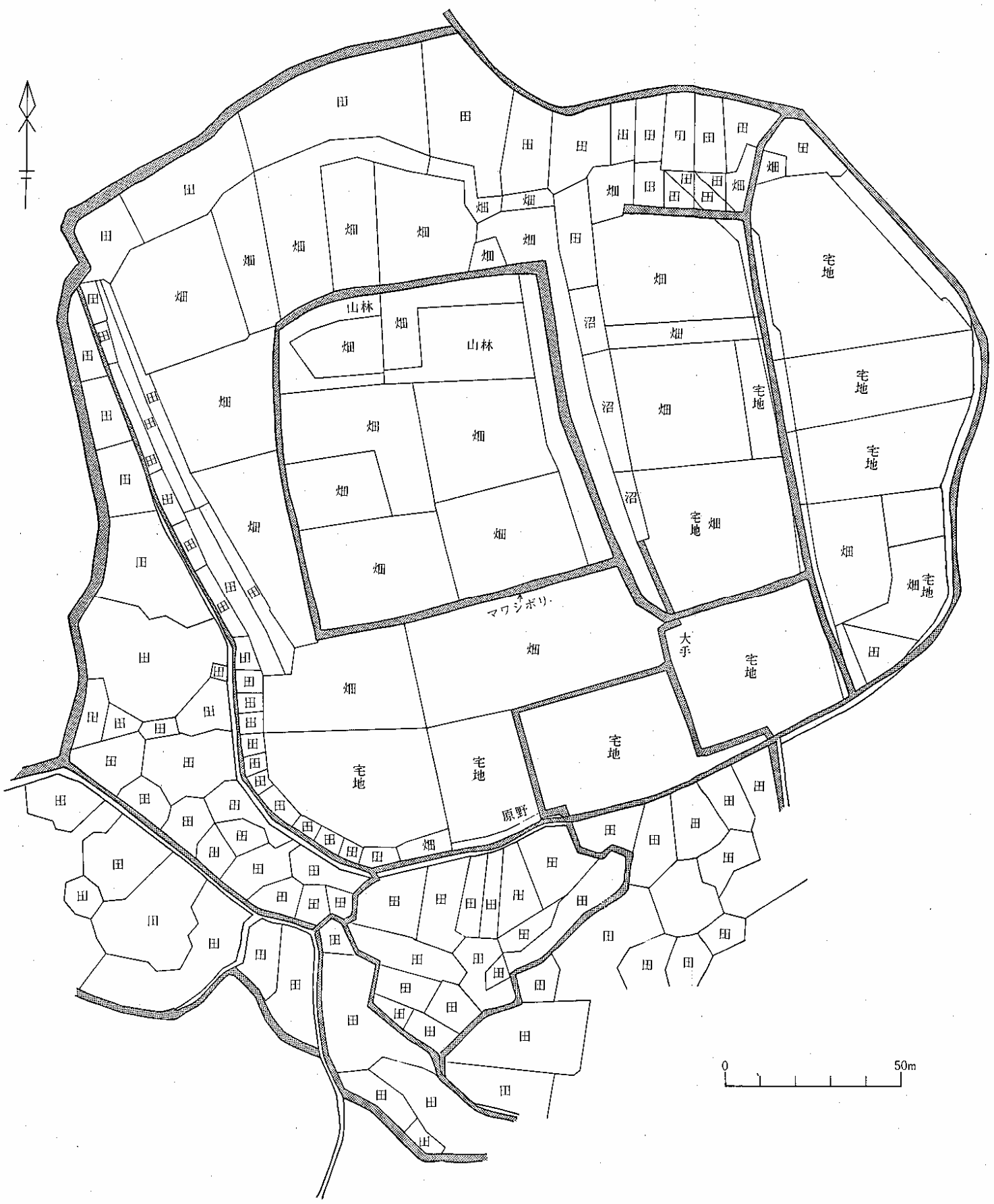
Ａ平場は、１号堀と３号堀によって区画された南北 60m、東西 50m、面積にして約 3,000 ㎡の平場である。このうち、調査の対象となったのは西側部分の 750 ㎡ほどである。調査区内からは多数のピットが検出され、これらの中には柱痕跡をもつものが多く、それらの組み合わせによって８棟の掘立柱建物跡が確認された。その他に、竪穴遺構５基、井戸２基、土壙 11 基、溝３本、堀１本が検出されている。

掘立柱建物跡

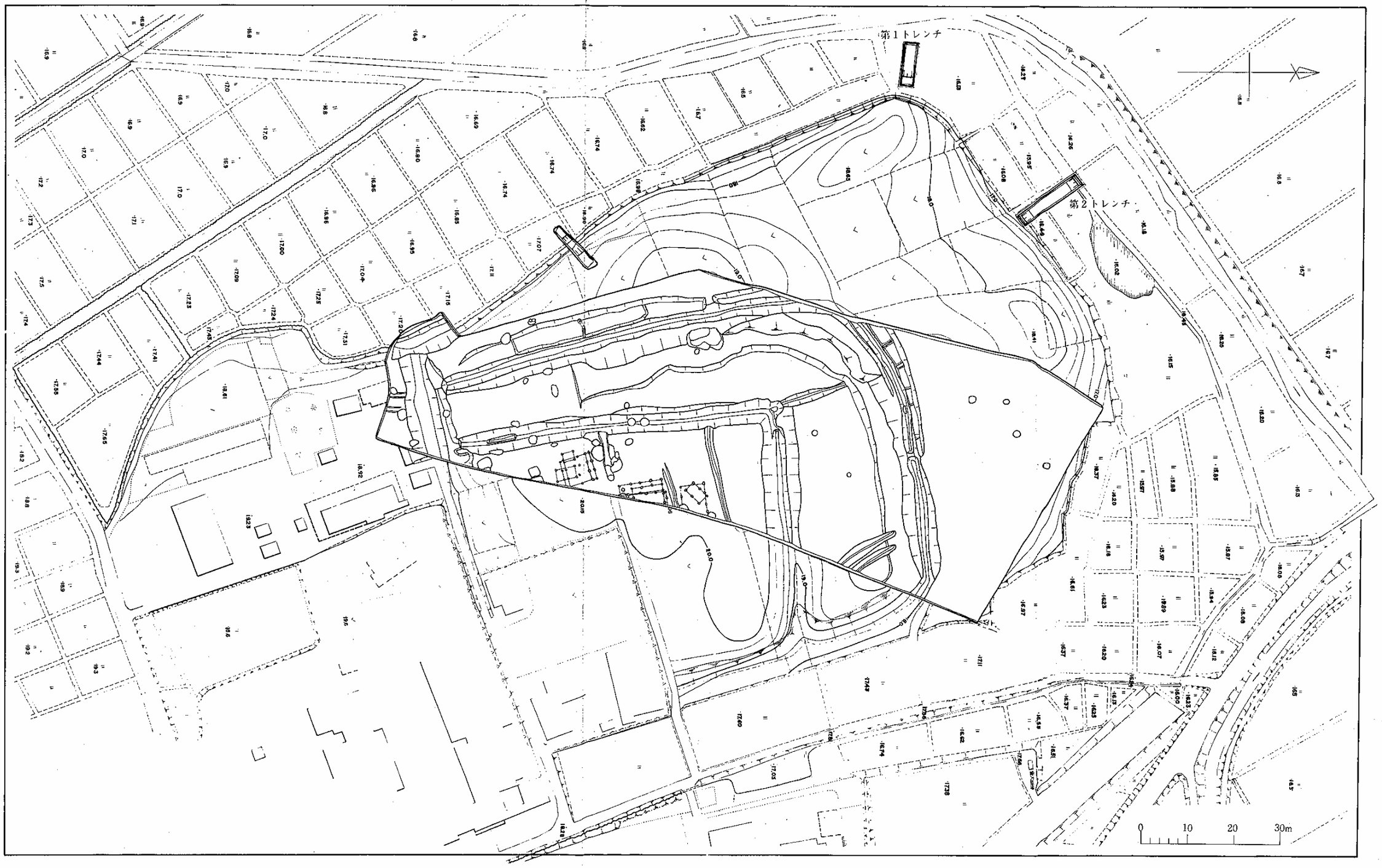
基本層位の第Ⅱ層上面、および地山面で確認されている。

第１建物跡（第33図）

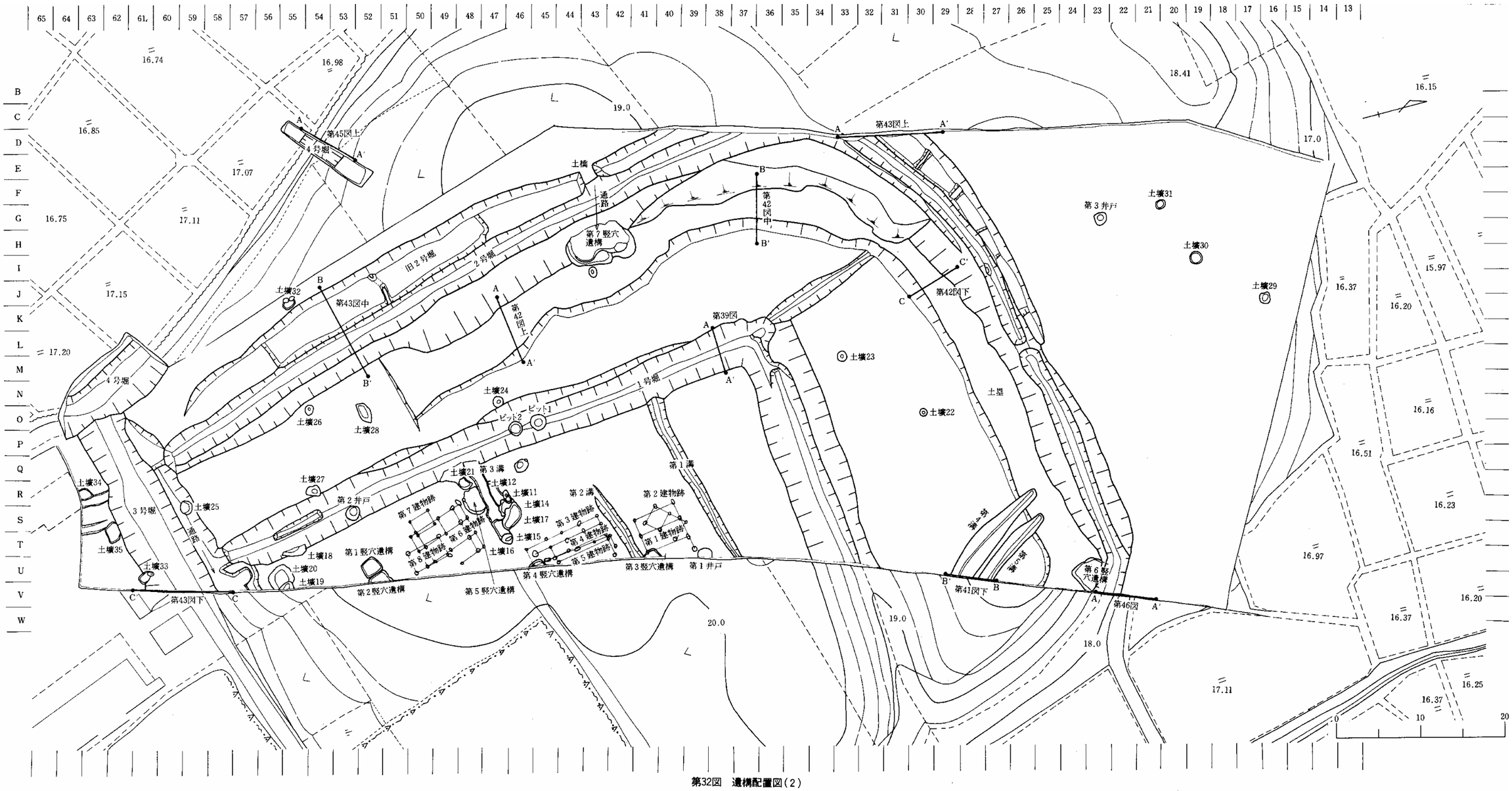
平場北寄りの第１溝と第２溝の間に位置し、東側が調査区外にのびている。桁行３間以上、



第30図　遺跡周辺の地籍図（明治13年）

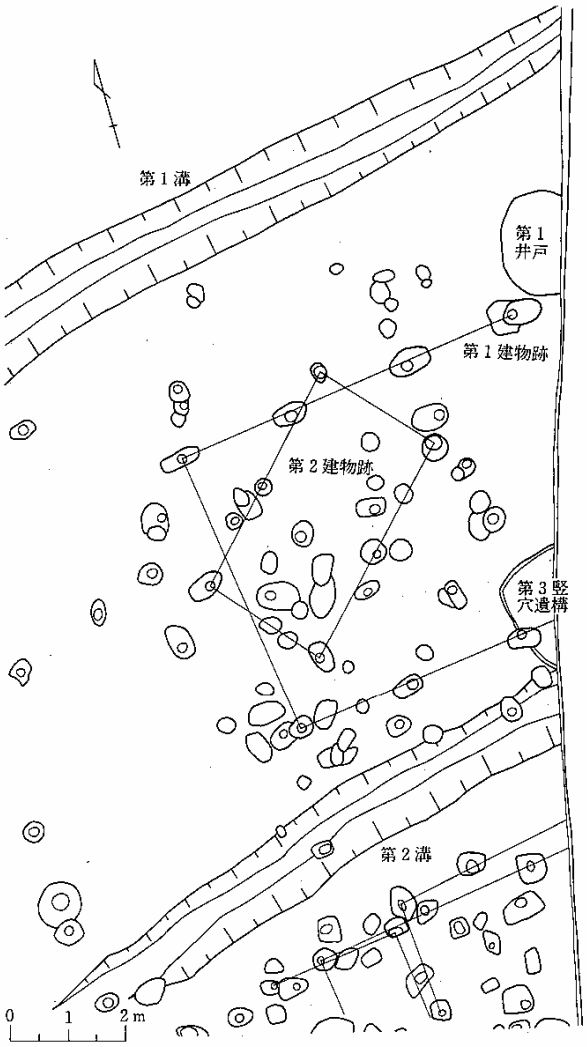


第31図　遺構配置図（1）


第45図上
4号堀
第43図上
土橋
通路
第7竪穴遺構
第42図中
旧2号堀
2号堀
第43図中
第42図上
第39図
1号堀
第42図下
第3井戸
土壙31
土壙30
土壙29
土壙32
土壙26
土壙28
土壙24
ピット1
ピット2
土壙23
土壙22
土墨
土壙27
土壙34
3号堀
土壙25
土壙35
土壙33
第2井戸
第7建物跡
第6建物跡
第5建物跡
第3建物跡
第4建物跡
第2建物跡
第1建物跡
第3溝
第2溝
第1溝
土壙21
土壙12
土壙11
土壙14
土壙17
土壙15
土壙16
土壙18
土壙20
土壙19
第1竪穴遺構
第2竪穴遺構
第5竪穴遺構
第4竪穴遺構
第3竪穴遺構
第1井戸
第41図下
第6竪穴遺構
第46図
第43図下
4号堀

第32図　遺構配置図(2)

梁間１間の東西棟でし、棟方向はＮ－81°－Ｅを示す。後述する第２建物跡、第３竪穴遺構と重複し、後者を切り、前者とは柱相互に切り合いがなく新旧関係は不明である。桁行の柱間寸法は2.0～2.15ｍと不ぞろいであるが、平均して2.07ｍ（６尺８寸）になる。梁間の柱間寸法は約5.1ｍ（16尺８寸）と、桁柱間の約2.5倍ある。柱穴の掘り方は長軸40～60㎝、短軸30㎝ほどの楕円形で、長軸方向は桁行の方向と一致している。柱痕跡は径15～20㎝の円形を呈している。



第33図　Ａ平場建物跡（１）

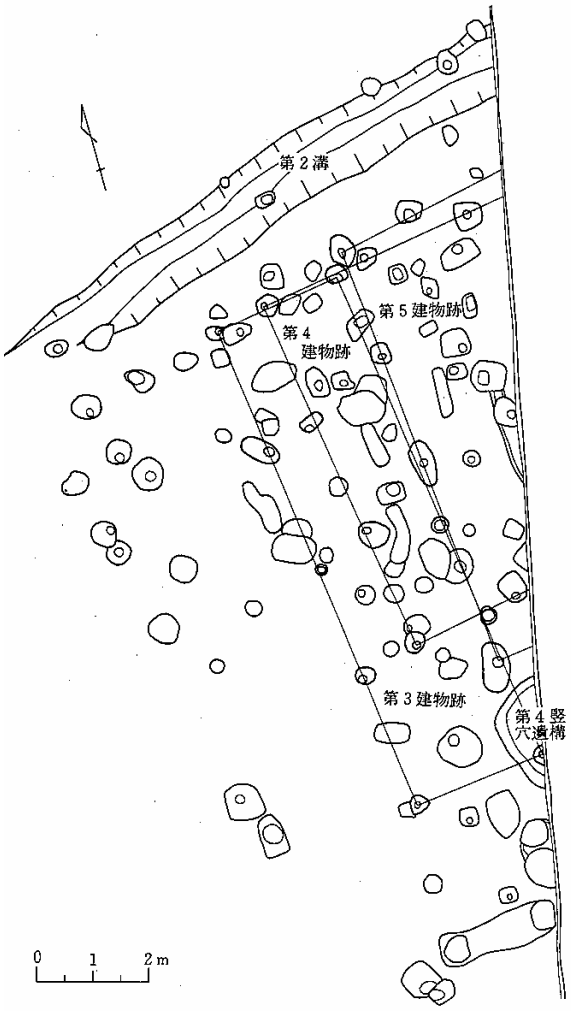
第２建物跡（第33図）

桁行２間、梁間１間の建物で、棟方向は重複する第１建物跡に比して北に偏し、Ｎ－42°－Ｅを示す。桁行の柱間寸法は1.9～2.2ｍと不ぞろいであるが、平均すると約2.1ｍ（６尺９寸）となる。梁間の柱間寸法は北側で2.22ｍ、東側で2.32ｍ、平均して約2.27ｍ（７尺５寸）である。柱穴の掘り方は径30～40㎝の円形、あるいは長軸60㎝、短軸30㎝の楕円形を呈している。柱痕跡は径15～20㎝の円形を呈している。

第３建物跡（第34図）

第２溝の南側、Ａ平場のほぼ中央部に位置している。桁行４間、梁間１間の南北棟で、棟方向は、Ｎ－７°－Ｗを示す。後述する第４・第５建物跡・第４竪穴遺構と重複している。第４竪穴遺構を切っているが、建物の柱穴相互に切り合いはなく、建物間においての新旧関係は不明である。桁行の柱間寸法は、西側では2.1～2.42ｍまであり、平均すると約2.3ｍ（７尺６寸）

になる。一方、東列では北から２番目の柱が検出できず、柱間の寸法も1.85～4.8mまであり、より以上のばらつきがみられる。梁間の柱間寸法は、北側で 2.3m（７尺６寸）、南側で2.4m（７尺９寸）である。柱穴の掘り方は径 20～35cm ほどの円形を呈するものが多く、長軸70cm、短軸30cm の楕円形を呈するものもみられる。柱痕跡は径10～15cm の円形を呈している。



第34図　Ａ平場建物跡（２）

第４建物跡（第34図）

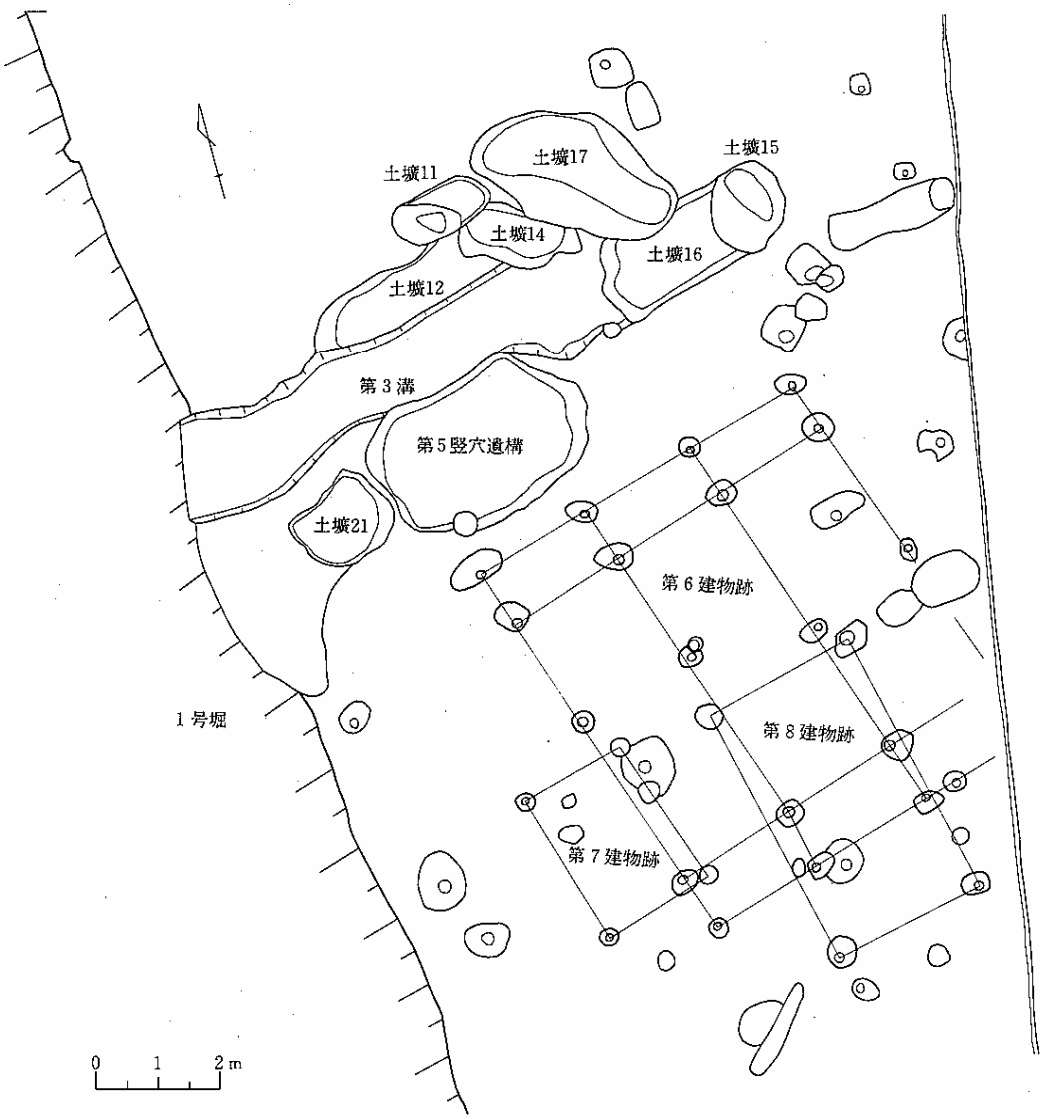
桁行３間、梁間２間以上の南北棟で、棟方向はN－９°－Wを示す。第３・第５建物跡と重複している。桁行の柱間寸法は、西列で 2.1～2.32mまであり、平均すると約2.2m（７尺３寸）になる。東側は調査区にのびるため不明である。梁間寸法は、南北ともに約２m（６尺５寸）である。柱穴の掘り方は、40cm前後の方形か不整円形で、柱痕跡は径15cmほどの円形を呈している。

第５建物跡（第34図）

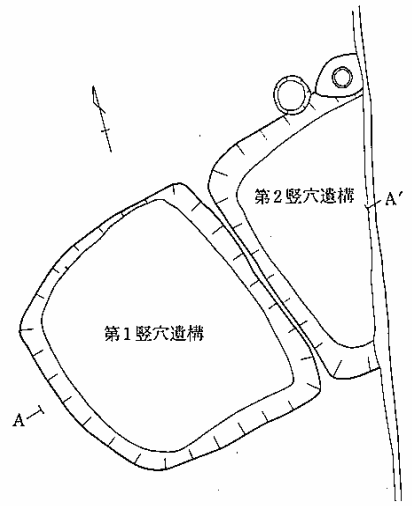
桁行４間、梁間１間以上の南北棟で、棟方向はN－３°－Wを示す。第３・第４建物跡と重複している。桁行の柱間寸法は、西側で1.85～2.02mまであり、平均すると約1.95m（約６尺４寸）になる。東側は調査区外にのびるため不明である。梁間の柱間寸法は、約 1.4m（約４尺６寸）と、桁行の柱間に比して約50cmほど狭くなっている。柱穴の掘り方は、長軸80cm、短軸50cmほどの楕円形か、一辺40cm前後の不整方形で、柱痕跡は径15～20cmの円形を呈している。

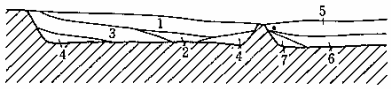
第６建物跡（第35図）

第３・第４・第５建物跡の南東、Ａ平場の南寄りに位置している。後述する第７・第８建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行３間、梁間２間の総柱の東西棟で、棟方向はN－72°－Eを示す。桁行の２面には約１mの庇がついている。身舎の桁行柱間寸法は 1.88～2.0mまであり、平均すると 1.93m（約６尺４寸）になる。梁間の柱間寸法は、西列北側で 1.92m(約６尺４寸)、南側で３m(約９尺９寸)、東列北側で約 2.4m（７尺９寸）と一定した数値を示さず、ばらつきがある。柱穴の掘り方は、径30～50cmの円形か不整の方形を呈するものが多く、柱痕跡は身舎が15～20cm、庇は10～15cmと身舎のものの方がわずかに大きい。

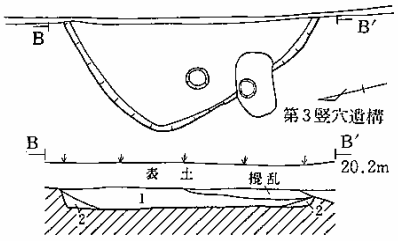


第35図　Ａ平場建物跡（３）

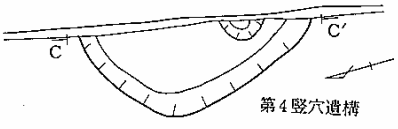




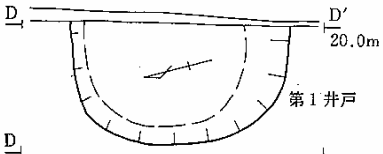
	層位	層No.	土色	土性	備考
第1竪穴遺構	第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	第Ⅱ層	2	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
		3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
	第Ⅲ層	4	黒褐色(10YR3/2)	〃	粘性がある
第2竪穴遺構	第Ⅰ層	5	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
	第Ⅱ層	6	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
	第Ⅲ層	7	黒褐色(10YR3/2)	〃	粘性がある

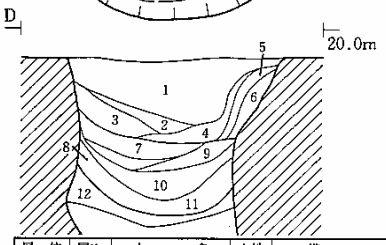


層No	土色	土性	備考
1	黒 (10YR3/1)	シルト	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	

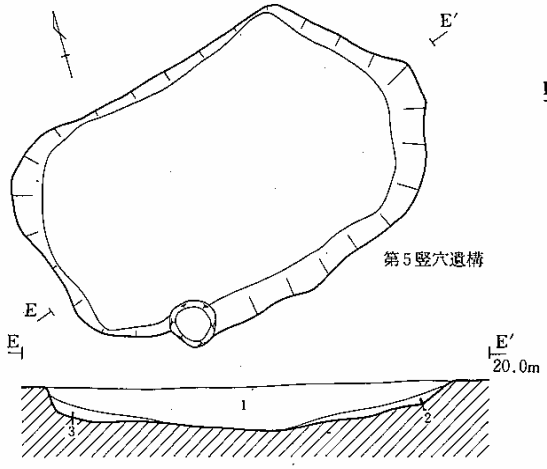


層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭を含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む
3	暗褐色(7.5YR3/2)	シルト	





層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒を斑状に含む
	2	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒を僅かに含む
	3	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒を僅かに含む
	4	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒を僅かに含む
	5	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	粘土質シルト(5YR5/2)との混合土
	6	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	
第Ⅱ層	7	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	柔かい
	8	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒を僅かに含む
	9	暗褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山粒を僅かに含む
	10	暗褐色(10YR3/2)	砂質シルト	小礫を含む
	11	極暗褐色(7.5YR2/3)	粘土質シルト	地山粒を僅かに含む
第Ⅲ層	12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘土質シルト(5YR5/2)との混合土



層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	10YR5/2シルト僅かに含む
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	10YR5/2シルトブロック状に含む

0 1 2 m

第36図　A平場竪穴遺構・井戸

第７建物跡（第35図）

第６建物跡と重複し、わずかに西に位置している。桁行１間、梁間１間の南北棟で、棟方向はN－16°－Wを示す。桁行の柱間寸法は、西列で2.58m、東列で2.5m、平均すると2.54m（約８尺４寸）になる。梁間の柱間寸法は、北側で1.74m、東側で1.9mであり、平均すると1.82m（約６尺）になる。柱穴の掘り方は径30cmほどの円形を、柱痕跡は径10cmほどの円形を呈している。

第８建物跡（第35図）

第６建物跡と重複している。桁行１間、梁間１間の南北棟で、棟方向はN－23°－Wを示す。桁行の柱間寸法は、西側で4.4m、東側で4.52mであり、平均すると4.46m（14尺７寸）になる。梁間の柱間寸法は、南北とも2.5m（約８尺３寸）である。柱穴の掘り方は長軸50cm、短軸30cm前後の楕円形を呈し、柱痕跡は径15cmほどの円形である。

竪穴遺構

土壙にくらべてやや規模も大きく、平面形が方形基調で、底面が平坦なものを竪穴遺構とした。

第１竪穴遺構（第36図）

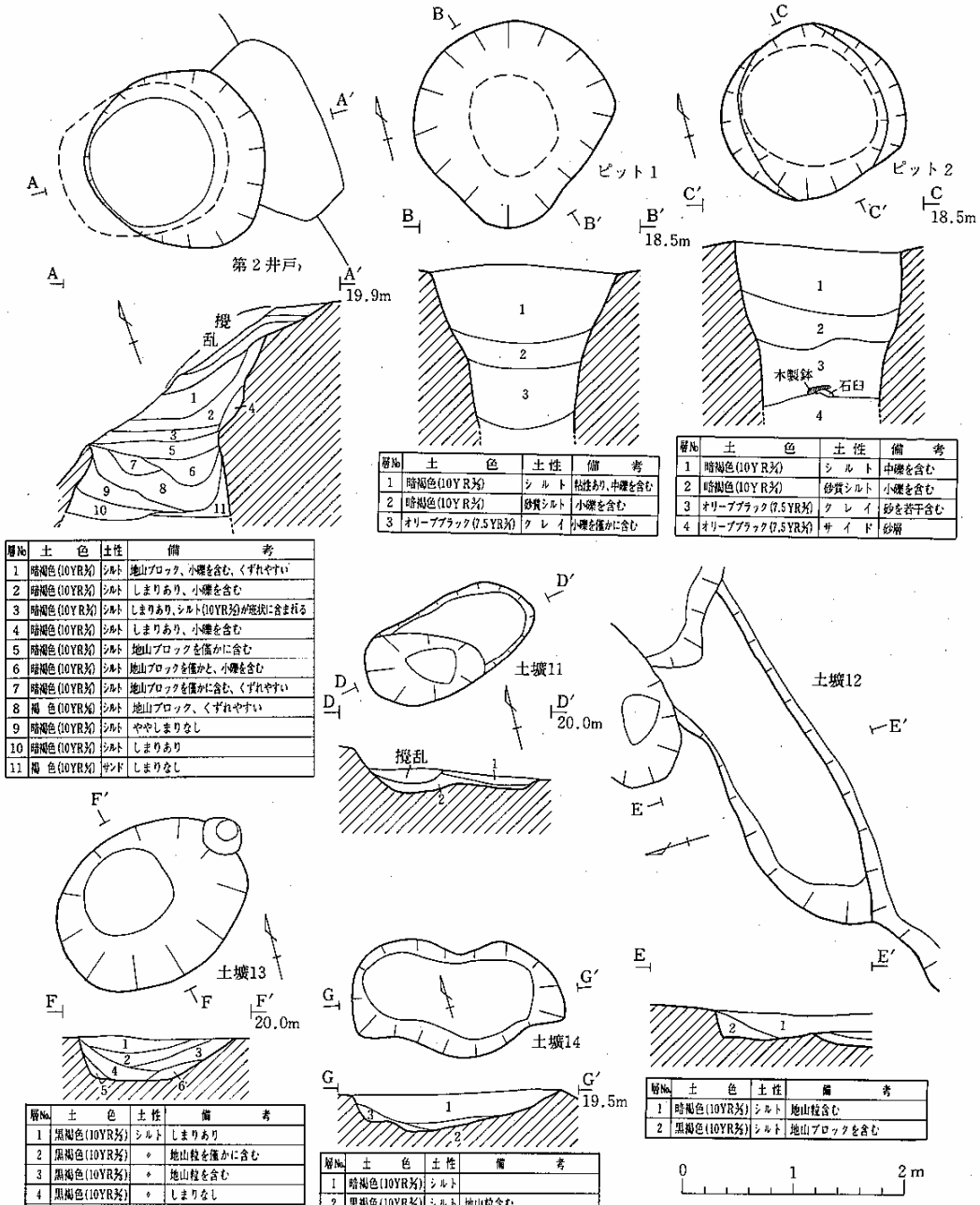
第６・第７・第８建物跡の南側に位置している。平面形は、長軸 2.2m、短軸２mの長方形を呈し、西辺がわずかに丸味をもっている。壁は、20～30cmが残存し、底面から緩やかに立ち上がっている。底面は、中央部がわずかに高く、壁沿いが低くなっている。堆積土は３層に大別される。第Ⅲ層は各壁沿いの部分に認められる堆積層で、第Ⅰ・第Ⅱ層は西側からの流入を示し、第Ⅱ層がほぼ底面に堆積している。遺物は出土していない。

第２竪穴遺構（第36図）

第１竪穴遺構の東にほぼ接して位置し、ピットに切られている。平面形は、東半が調査区外にのびるため全体形は不明であるが、方形基調を呈するものと思われる。規模は、西辺が約 2.2m、北辺は1.6mまで確認されている。壁は、約20cm残存し、底面から緩やかに立ち上がり、底面は平坦な面となっている。堆積土は３層確認された。壁沿いに第Ⅲ層が堆積し、第Ⅰ・第Ⅱ層が中央部に堆積し、第Ⅱ層がほぼ底面を覆っている。堆積土中から砥石、陶器が出土している。

第３竪穴遺構（第36図）

第１掘立柱建物跡の東に位置し、これに切られ第２溝を切っている。規模は、北辺が約1.3m、西辺が約 1.7mまで確認されているが、東辺・南辺については調査区外にのびているため、全体の規模については不明である。平面形は、残存部から推して方形基調を呈するものと思われる。壁は、10～18cmが残存しており、底面からは比較的急角度で立ち上がっている。底面には径約20cmの円形ピットが１個みられるが、柱痕跡はない。堆積土は２層確認された。第２層は



層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、小礫を含む、くずれやすい
2	暗褐色(10YR3/2)	シルト	しまりあり、小礫を含む
3	暗褐色(10YR3/2)	シルト	しまりあり、シルト(10YR3/2)が斑状に含まれる
4	暗褐色(10YR3/2)	シルト	しまりあり、小礫を含む
5	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを僅かに含む
6	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを僅かと、小礫を含む
7	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを僅かに含む、くずれやすい
8	褐　色(10YR4/6)	シルト	地山ブロック、くずれやすい
9	暗褐色(10YR3/2)	シルト	ややしまりなし
10	暗褐色(10YR3/2)	シルト	しまりあり
11	褐　色(10YR4/6)	サンド	しまりなし

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり、中礫を含む
2	暗褐色(10YR3/2)	砂質シルト	小礫を含む
3	オリーブブラック(7.5YR3/1)	クレイ	小礫を僅かに含む

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	中礫を含む
2	暗褐色(10YR3/2)	砂質シルト	小礫を含む
3	オリーブブラック(7.5YR3/1)	クレイ	砂を若干含む
4	オリーブブラック(7.5YR3/1)	サイド	砂層

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	しまりあり
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を僅かに含む
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を含む
4	黒褐色(10YR3/2)	〃	しまりなし
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を含む
6	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒を含む

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒含む
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒僅かに含む

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む

第37図　A平場井戸・ピット・土壙(1)

壁沿いにわずかに認められるだけで、第１層がほぼ全体に堆積している。出土遺物はない。

第４竪穴遺構（第36図）

第３掘立柱建物跡の東に位置し、これに切られている。規模は、北辺が約1.1m、西辺が約1.5mまで確認されているが、東辺・南辺は調査区外にのびるため、全体の規模については不明である。平面形は、残存部から推して方形基調を呈するものと思われる。壁は、約20cmを測り、底面からは緩やかに立ち上がっている。堆積土は２層認められた。堆積状況は第３竪穴遺構と同じであるが、中央部では攪乱が底面にまで及び、堆積土の状況は良好とは言えない。出土遺物はない。

第５竪穴遺構（第36図）

第６掘立柱建物跡の北側に位置し、第３溝を切っている。平面形は隅丸長方形で、規模は、長軸約3.5m、短軸約2.2mで、壁は、約20cmを測り、底面は中央部がわずかにくぼみ皿状を呈している。堆積土は３層が認められ、第２・第３層は壁寄りの底面上にわずかに認められるだけで、第１層がほぼ全体に堆積している。堆積土中から三引両押捺の火舎破片が出土している。

井戸跡

第１井戸（第36図）

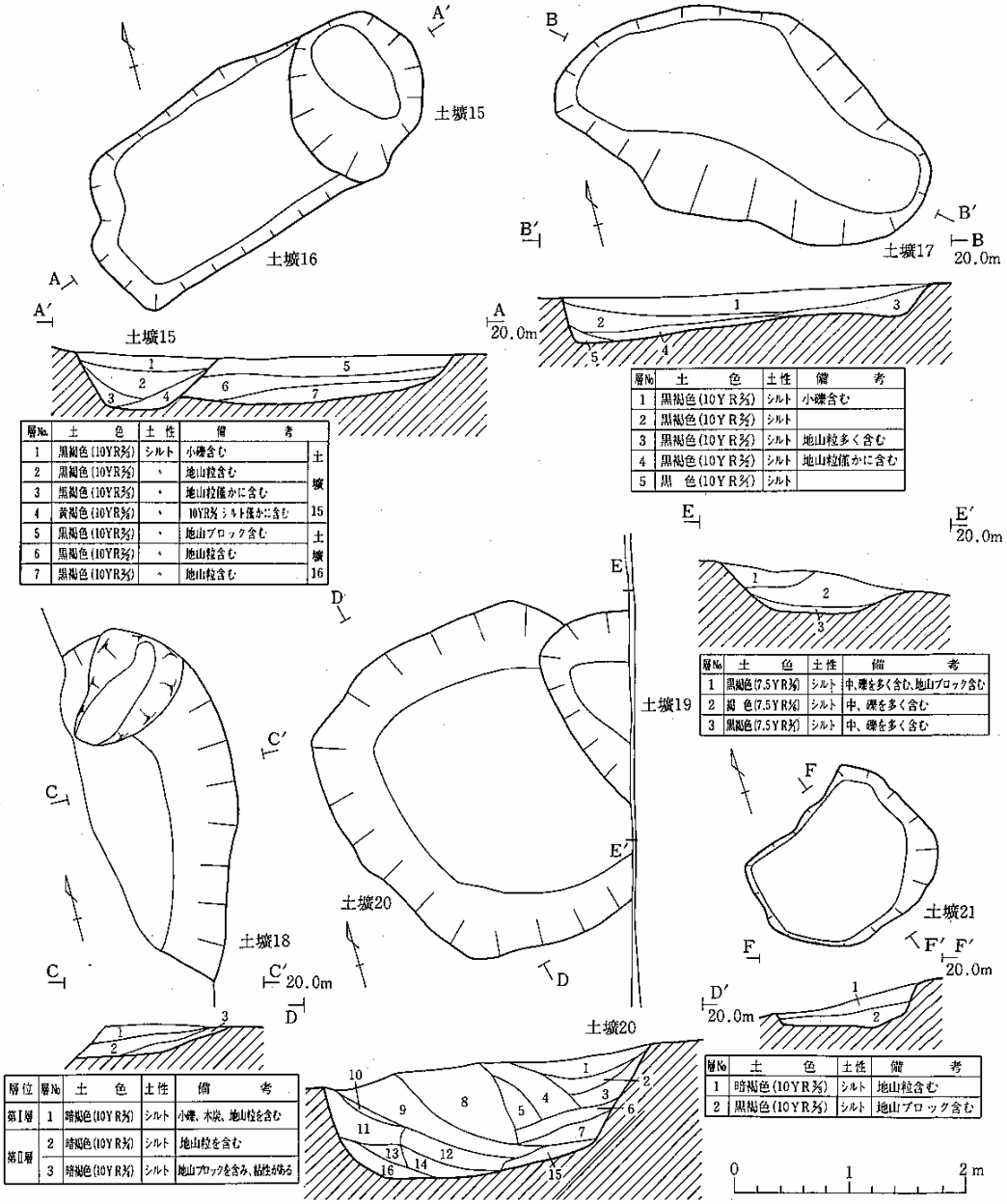
第１掘立柱建物跡の北東で検出された素掘りのものである。東半が調査区外にのびているが平面形は、約1.9mの円形を呈するものと思われる。約1.6mの深さまで掘ったが湧水が著しく、壁の崩落の危険もあったので、以下の掘り下げを断念している。掘り方は、上半部では外に向って開き気味になっているが、下半部ではほぼ円筒形を呈している。堆積土は、地山粒を含む黒褐色の砂質シルトなど３層に大別できる。ほぼレンズ状の自然堆積を示している。出土遺物はない。

第２井戸（第37図）

第６掘立柱建物跡の西南で検出された素掘りのものである。１号堀を切っている。平面形は径約1.6mの円形を呈している。深さ1.8mまで掘ったが第１井戸同様、湧水のため完掘りしてはいない。掘り方は上半部では外に向って開き、下半部ではこれとは逆の円錐台状に開いている。堆積土は、暗褐色シルト層が大部分で11層が確認された。上半部分では小礫・地山ブロックをわずかに含み、堆積状況はレンズ状を呈している。出土遺物はない。

土壙（第37・38図）

11基が検出されている。一地点に集中して検出され、互いに重複するものが多い。平面形は円形を基調とするものが７基（11～15・17・18）と多く、方形基調のもの２基(20・21)、不明のもの１基（19）がある。規模は、長軸が1.6～3.2mのものまで様々であるが、３m前後のものが大半を占める。深さは、確認面から25～50cmほどで、壁は底面から緩やかに立ち上がり、



層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫含む	土壙15
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒含む	
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒僅かに含む	
4	黄褐色(10YR5/6)	〃	10YR5/6シルト僅かに含む	
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山ブロック含む	土壙16
6	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒含む	
7	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山粒含む	

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒多く含む
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒僅かに含む
5	黒 色(10YR3/1)	シルト	

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	中、礫を多く含む、地山ブロック含む
2	褐 色(7.5YR4/4)	シルト	中、礫を多く含む
3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	中、礫を多く含む

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫、木炭、地山粒を含む
第Ⅱ層	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を含む
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含み、粘性が強い

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む

層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山をブロック状に含む	9	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	
2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〃	10	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〃	11	黒 色(10YR3/1)	シルト	
4	黒 色(7.5YR3/1)	シルト	〃	12	(10YR3/4)	サンド	
5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	〃	13	褐 色(10YR4/4)	シルト	
6	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〃	14	(10YR3/4)	サンド	中礫を含む
7	黒 色(7.5YR3/1)	シルト	〃	15	黒 色(7.5YR3/1)	シルト	
8	黄褐色(10YR5/6)	シルト		16	(10YR3/4)	シルト	

第38図　A平場土壙(2)

壁の下端と底面の区別の不明瞭なものが多い。底面は平坦なもの、わずかに凹凸のあるものがほぼ同数である。堆積土は、暗褐色あるいは黒褐色のシルト層で、地山粒を含んでいる。出土遺物はない。

土壙20（第38図）

平場南端に位置し、土壙19に切られている。平面形は不整方形を呈し、規模は長辺2.95m、短辺2.5m、深さは1.1mを測る。壁は底面からやや急角度で立ち上がり、断面形はやや丸味のある逆台形を呈している。底面にはわずかな凹凸がみられる。堆積土は、黒褐色・黒色・黄褐色・褐色などのシルト・サンド層が16層認められ、1～7層までに地山ブロックが含まれている。堆積層の状況から風倒木穴と考えられる。

第8表　土　　壙（11～21）

土壙番号	位置	重複	平面形	大きさ（cm）	深さ（cm）	底面の状況	壁 下端	壁 立ち上がり	出土遺物	備考	調査時の番号
11	S－46・47	←土壙12・14	楕円形	160×80	30	凹凸あり	明瞭	緩やか			24
12	S－47	第3溝→土壙12→土壙11・14	楕円形（？）	(300)×(100)	25	凹凸あり	明瞭	急			
13	R－46		楕円形	180×140	40	平坦	明瞭	一方が急			1
14	S・T－47・48	第3溝・土壙12→土壙14→土壙11・17	不整楕円形	190×100	35	凹凸あり	不明瞭	一方が急			23
15	U－46・47	←土壙16	不整円形	140×120	50	平坦	不明瞭	緩やか			25
16	T・U－46・47	第3溝→土壙16→土壙11・14	長方形	300×170	40	やや丸味あり	不明瞭	緩やか			26
17	S・T－46・47	←土壙1・4・16	不整楕円形	340×200	40	わずかに凹凸あり	明瞭	一方が急			17
18	R－55		楕円形（？）	(320)×(135)	25	平坦	不明瞭	緩やか			
19	S－55	←土壙20	（？）	(110)×(60)	45	平坦	不明瞭	緩やか			29
20	S－55	→土壙19	不整方形	295×250	110	わずかに凹凸あり	不明瞭	やや急		風倒木穴（？）	30
21	R・S－48	←土壙12	不整方形	160×116	20	わずかに凹凸あり	不明瞭	緩やか			27

溝

第1溝（第32図）

第1掘立柱建物跡の北側で検出されたもので、1号堀の北辺と平行に平場を横断し、西側では1号堀に注ぎ、東側は調査区外へのびている。規模は上幅が1～2m、下幅が30～50cmで、深さは7～10cmである。底面は平坦であるが、東西で底面のレベルを比較すると、東側が約20cmほど高くなっている。出土遺物はない。

第2溝（第32図）

第1溝の南約10m、第1・第2掘立柱建物跡と第3・第4・第5掘立柱建物跡の間で検出されたもので、第1溝と平行して走っている。西側はS―43区で途切れ、東側は調査区外にのびている。第3竪穴遺構、ピット群と重複し、これらに切られている。規模は上幅が約1.2m、下幅が約40cmで、深さは10cm前後である。底面は平坦であるが、東西で底面のレベルを比較すると、東側が約20cm低くなっている。出土遺物はない。

第3溝（第32図）

第2溝の南約12m、第6・第7・第8掘立柱建物跡の北で検出されたもので、第2溝と平行して走り、西側は1号堀に注ぎ、東側はT―47区で途切れている。第5竪穴遺構、土壙12・14・

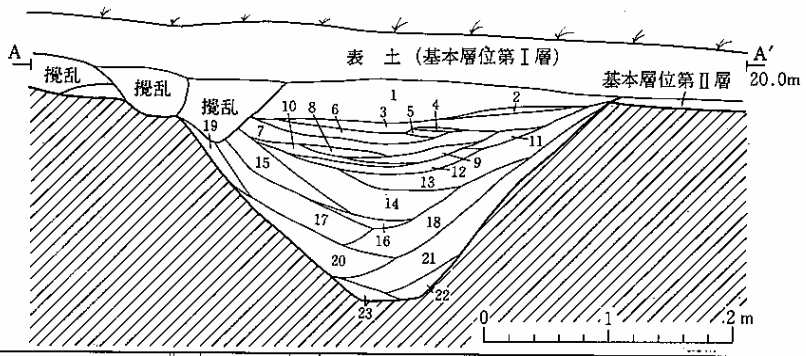
16に切られている。規模は上幅が1.4～1.6m、下幅が約1.2mで、深さは2～6cmである。底面は平坦で、東西のレベル差もほとんどない。堆積土中から、陶器（皿・火舎）、砥石が出土している。

堀

1号堀（第32・39図）

地表観察で推定されていたものである。A平場とB平場を区画する堀で、平場の北辺と西辺に沿って「L」字形に検出されている。検出された長さは約96m、幅は、北辺で上幅が約7m、下幅が0.6～1m、西辺で上幅が約5m、下幅が0.8～1mと、北辺が上幅で約2m広くなっている。壁の立ち上がり角度は、外側で約40°、内側で約50°と内側が急角度になっている。断面形は逆台形を呈している。底面のレベルは、西辺がわずかに南に傾斜（北端と南端のレベル差10cm）し、南端は約40cmの段差で立ち上がり、約1mの平場面をはさんで、後述する3号堀と直交している。3号堀底面より比高差では約1m高い。北辺は、北西隅で段差がつき、西辺より約65cmほど低くなっている。確認面からの深さは、北辺で2～2.3m、西辺北端で約1.8m、南端で約1.3mである。これは平場自体が南にやや傾斜しているためである。また、南端から約12m北側で、長さ約12mにわたって底面より約40cmほど深くなっている部分がある。堆積土は、褐色・暗褐色のシルト・サンド層などが23層確認され、礫を含み粘性をもつものが多い。出土遺物はない。

なお、西辺の底面ほぼ中央部から、径1.7m前後の円形ピットが2個（P_1・P_2）、約3mの間隔をおいて検出されている。柱痕跡は認められず素掘りの型態を呈している。深さ約1.5mで湧水が激しく、完掘りしていない。P_2の堆積土中から石臼・木製鉢が出土している。



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト		9	褐 色(7.5YR4/4)	サンド	しまりなし	17	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	fine sond をわずかに含む、しまりあり
2	褐 色(10YR4/4)	サンド	fine sond を多く含む	10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	しまりあり	18	褐 色(7.5YR4/4)	シルト	粘性、しまりなし、小円礫を多く含む
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	fine sond をブロック状に含む	11	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	しまりなし	19	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	しまりあり
4	褐 色(10YR4/4)	サンド	円礫をわずかに含む	12	褐 色(10YR4/4)	サンド	砂である	20	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘性、しまりなし、円礫を含む
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	fine sond をわずかに含む	13	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘性・しまりなし	21	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	粘質が地山粒をわずかに含む
6	褐 色(7.5YR4/4)	サンド	中礫・小礫を含む	14	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	明褐7.5YR5/6クレイ・円礫含む、しまりあり	22	黒 色(7.5YR2/1)	シルト	粘性・しまりなし
7	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	fine sond 小礫を含む	15	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粘性・しまりなし	23	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	シルト・クレイを含む、しまりあり
8	褐 色(7.5YR4/4)	サンド	しまりあり	16	褐 色(7.5YR4/4)	サンド	粘性・しまりなし				

第39図　1号堀断面図

(2) B平場

B平場は、１号堀の外側を「L」字形にとりまく平場で、上段平場の縁部にあたる。平場の北辺の長さは約70m、西辺の長さは約90mで、幅は、１号堀北側で約20m、西側では10～15mで面積にして約2,500㎡の広さをもっている。調査対象はほぼ平場全体におよび、平場内からは竪穴遺構２基・土壙７基・溝２本、土塁が検出されている。また、平場を囲むように３本の堀がめぐり（２号・旧２号・３号堀）、旧２号堀には土橋状遺構がみられ、これと対応するように平場内に通じる通路状の遺構の検出もある。

竪穴遺構

地山面で確認されている。

第６竪穴遺構（第40図）

平場北東端に位置し、土壙９を切り、２号堀に切られている。残存部から推して、平面形は方形基調を呈するものと思われる。規模は、西辺が3.75m、南辺が３mほど残っている。壁は約80cmが残存し、底面からは急角度で立ち上がっている。底面は平坦である。堆積土は、褐色、にぶい黄褐色のシルト・サンド層が大別して３層認められ、小礫を含んでいる。第Ⅲ層が底面上に堆積し、第Ⅰ・第Ⅱ層はその上にほぼ水平な堆積を示している。出土遺物はない。

第７竪穴遺構（第41図）

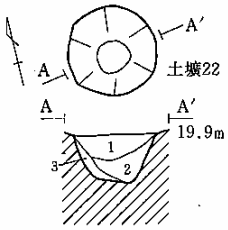
平場西縁のほぼ中央部に位置している。土塁・２号堀と重複し、２号堀に切られているが、土塁との新旧関係は攪乱が及んでいるため不明である。平面形は、南北に長い「コ」字形を呈し、西側が開口している。東辺は、攪乱のため出入りが多くなっている。規模は、東辺約7.5m、北・南辺約５mで、壁は約80cmが残存し、底面からは急角度で立ち上がっている。底面はわずかに凹凸がみられ、東側が高くなっている。なお、西半の部分は、後述する通路状の遺構上の堆積層上面を底面としている。堆積土は、褐色・暗褐色・黒褐色シルト層など大別して５層が認められ、第Ⅰ～第Ⅲ層中には小礫が含まれている。第Ⅲ～第Ⅴ層は底面上に堆積し、第Ⅳ・第Ⅴ層中からは、中世陶器甕破片７点が出土している。

土壙（第40図）

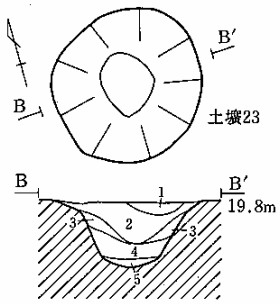
地山面において７基が検出されている。相互に重複はなく分布に粗である。平面形は、円形のもの５基（22～26）、不整方形のもの１基（27）、不整楕円形のもの１基（28）である。規模は、長軸あるいは直径が1.2～2.6m、深さ0.4～0.8mとばらつきがある。壁は、底面から比較

第９表　土　　壙（22～28）

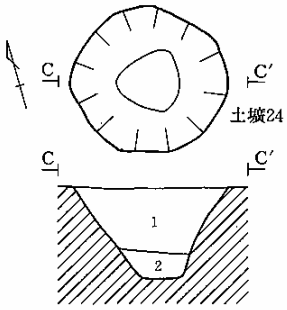
土壙番号	位置	重複	平面形	大きさ（cm）	深さ（cm）	底面の状況	壁 下端	壁 立ち上がり	出土遺物	備考	調査時の番号
22	P－30		円形	75	40	平坦	不明瞭	急			34
23	M・N－33		円形	125	55	丸味あり	不明瞭	上・緩やか　下・急			35
24	O－46		円形	125	78	平坦	明瞭	緩やか			9
25	T－59		円形	(145)	72	平坦	明瞭	上半・急			4
26	O・P－54		円形	120×100	83	丸味あり	不明瞭	急			34
27	S－54	←１号堀	不整方形	170×115	60	丸味あり	不明瞭	緩やか			13
28	O・P－52	←土壙10	不整楕円形	260×130	65	丸味あり	不明瞭	急			12



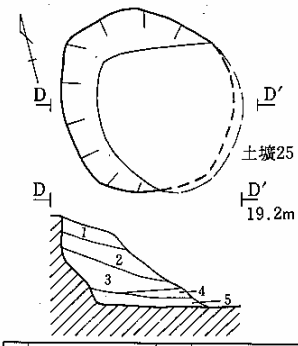
層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	木炭多く含む
2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	木炭少し含む
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒多く含む



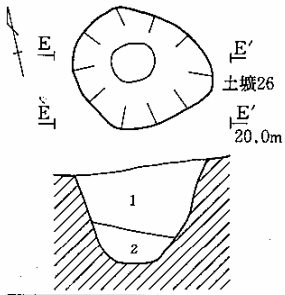
層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/3)	シルト	サンド含む、しまりなし
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	しまりなし
3	黒褐色(10YR3/3)	シルト	地山ローム粒含む、しまりなし
4	黒褐色(10YR3/3)	シルト	しまりなし
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ローム粒含む、しまりなし



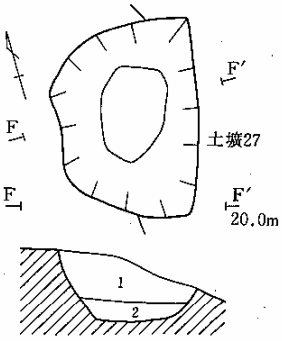
層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/3)	シルト	粘性あり、小礫を僅かに含む
2	褐色(10YR4/4)	シルト	粘性あり、地山ブロックを含む



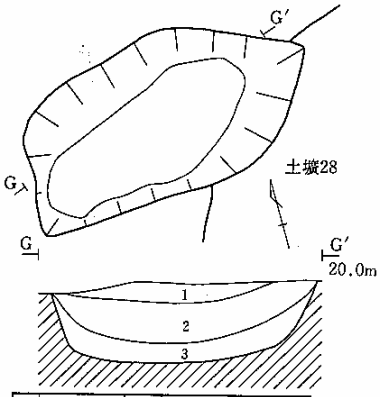
層No.	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	
2	褐色(10YR4/4)	シルト	小礫を含む、しまりがない
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粘性がある
4	褐色(10YR4/4)	シルト	小礫を僅かに含む
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	粘性がある、小礫を僅かに含む



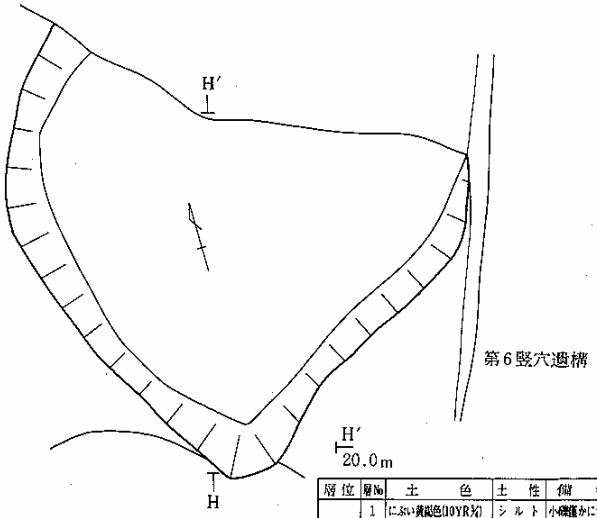
層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山ブロックを含む



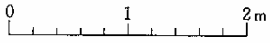
層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/3)	〃	粘性あり

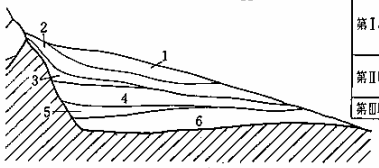


層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり・しまりあり
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	粘性なし・しまりなし
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山ブロックを含む

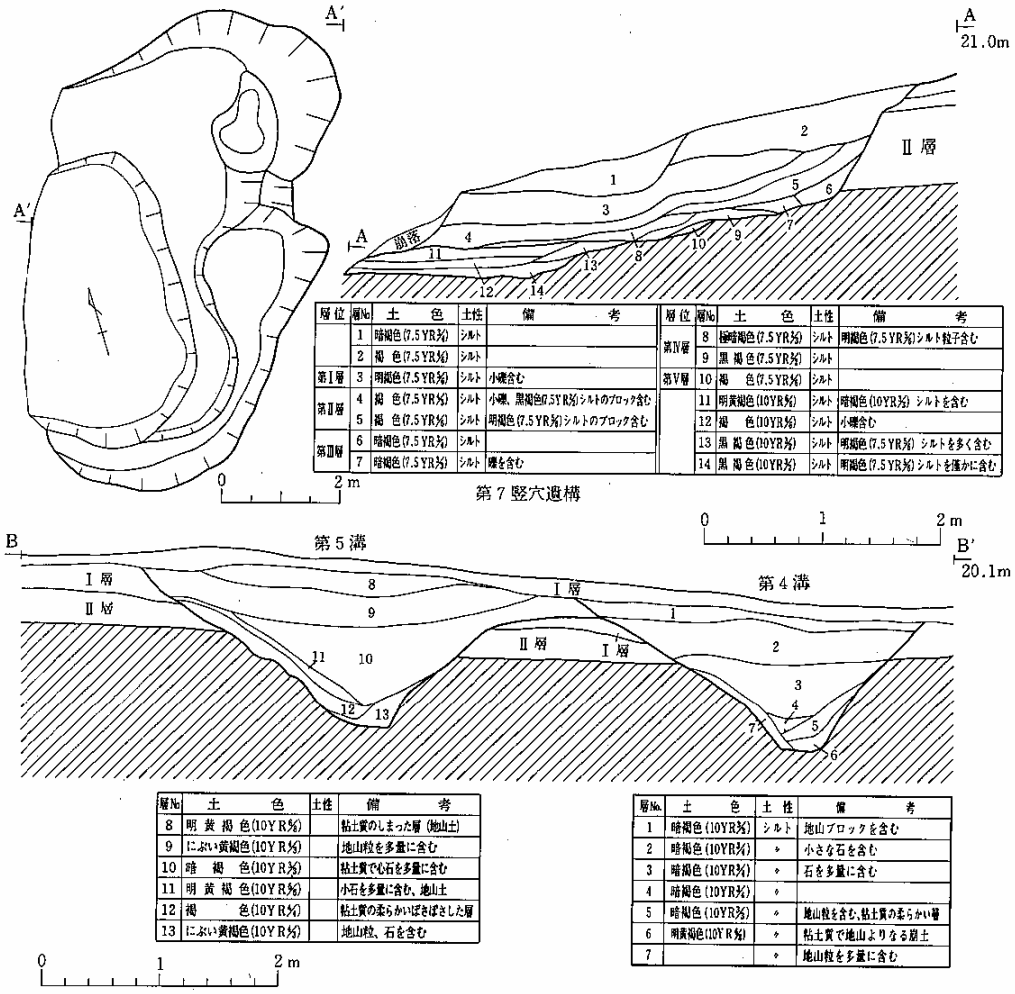


層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	小礫僅かに含む
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	小礫僅かに含む
	3	にぶい黄橙(10YR6/4)	ファインサンド	小礫僅かに含む
第Ⅱ層	4	褐色(10YR4/4)	シルト	小礫多く含む
	5	にぶい黄橙(10YR6/4)	サンド	小礫多く含む
第Ⅲ層	6	明褐色(10YR5/6)	シルト	小礫僅かに含む





第40図　B平場土壙・竪穴遺構



層位	層No.	土色	土性	備考
	1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	2	褐色(7.5YR3/4)	シルト	
第Ⅰ層	3	明褐色(7.5YR5/4)	シルト	小礫含む
第Ⅱ層	4	褐色(7.5YR5/4)	シルト	小礫、黒褐色(7.5YR3/4)シルトのブロック含む
	5	褐色(7.5YR5/4)	シルト	明褐色(7.5YR5/4)シルトのブロック含む
第Ⅲ層	6	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	7	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	礫を含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅳ層	8	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	明褐色(7.5YR5/4)シルト粒子含む
	9	黒褐色(7.5YR2/3)	シルト	
第Ⅴ層	10	褐色(7.5YR5/4)	シルト	
	11	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	暗褐色(10YR3/3) シルトを含む
	12	褐色(10YR5/4)	シルト	小礫含む
	13	黒褐色(10YR2/3)	シルト	明褐色(7.5YR5/4) シルトを多く含む
	14	黒褐色(10YR2/3)	シルト	明褐色(7.5YR5/4)シルトを強かに含む

層No.	土色	土性	備考
8	明黄褐色(10YR6/6)		粘土質のしまった層(地山土)
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)		地山粒を多量に含む
10	暗褐色(10YR3/3)		粘土質で心石を多量に含む
11	明黄褐色(10YR6/6)		小石を多量に含む、地山土
12	褐色(10YR5/4)		粘土質の柔らかいぼさぼさした層
13	にぶい黄褐色(10YR5/4)		地山粒、石を含む

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む
2	暗褐色(10YR3/4)	〃	小さな石を含む
3	暗褐色(10YR3/4)	〃	石を多量に含む
4	暗褐色(10YR3/4)	〃	
5	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒を含む、粘土質の柔らかい層
6	明黄褐色(10YR6/6)	〃	粘土質で地山よりなる崩土
7		〃	地山粒を多量に含む

0 1 2m

第41図　B平場竪穴遺構・溝

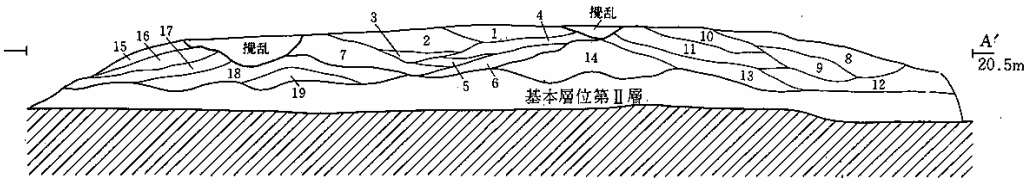
的急角度で立ち上がるものが多い。底面は、平坦なものと丸味を帯びるものがほぼ同数である。堆積土は、黒褐色・暗褐色シルト層などで、多くは地山粒を含んでいる。出土遺物はない。

溝

基本層位第Ⅰｂ層上面で確認されている。

第4溝（第32・41図）

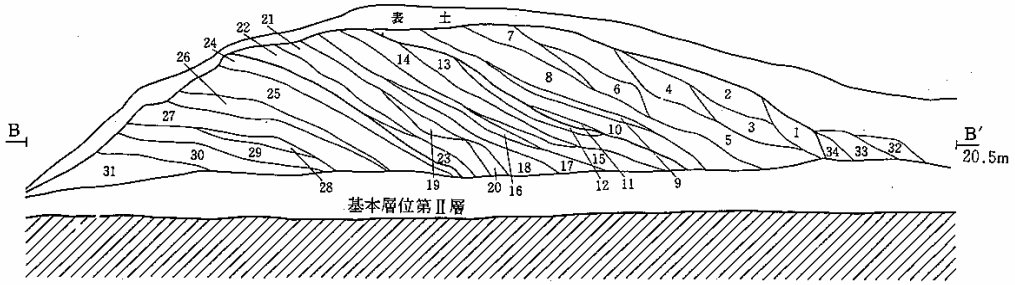
平場北東端に位置し、さらに東の調査区外にのびている。第５円形周溝・土塁・第５溝と重複し、これらを切っている。規模は、上幅1.3～2.8m、下幅0.3～0.5m、深さ1.2m前後である。底面はほぼ平坦で、北へ向ってわずかに傾斜している。壁面はなめらかで、底面からは約



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	黄褐色(10YR⅝)	シルト	粘性あり・小礫を含む
	2	暗褐色(10YR⅜)	〃	小礫を含む
	3	暗褐色(10YR⅜)	〃	礫・黄色土を含む
	4	黄橙色(10YR⅞)	〃	粘性強い・黒色土粒を含む
	5	暗褐色(10YR⅜)	〃	小礫・黄色土を含む
	6	黄褐色(7.5YR⅝)	クレイ	粘性あり、黒色土粒を含む
	7	暗褐色(10YR⅜)	シルト	礫・黄色土を含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅱ層	8	にぶい黄橙色(10YR⅞)	シルト	砂質・小礫を含む
	9	黄褐色(10YR⅝)	〃	粘性強い・黒色土粒多含む
	10	暗褐色(10YR⅜)	〃	小礫をわずかに含む
	11	黄褐色(7.5YR⅝)	〃	粘性強い・黒色土粒を含む
	12	黒褐色(10YR⅜)	〃	粘質でしまりあり
	13	黒　色(10YR⅜)	〃	粘質でしまりあり
	14	黒　色(10YR⅜)	〃	粘質でしまりあり

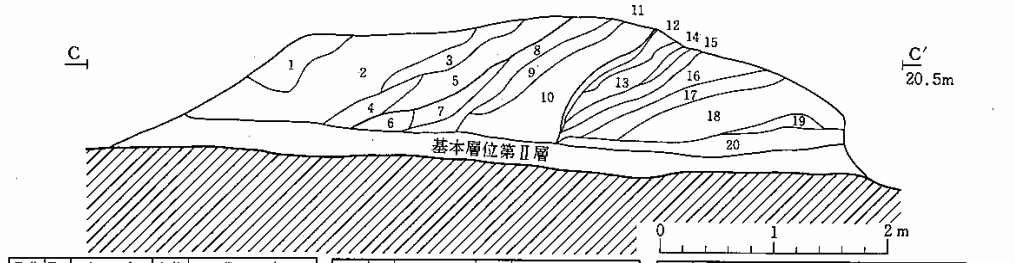
層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅲ層	15	にぶい黄橙色(10YR⅞)	シルト	砂質・小礫を含む
	16	暗　色(10YR⅜)	〃	礫・黄色土を含む
	17	暗褐色(10YR⅜)	〃	黄色土を含む
	18	黒褐色(10YR⅜)	〃	粘質でしまりあり
	19	暗褐色(10YR⅜)	〃	当礫・黄色土を含む



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	明褐色(7.5YR⅝)	レ　キ	小礫・fine sondを含む
	2	明褐色(7.5YR⅝)	サンド	fine sand・礫を含む
	3	褐　色(7.5YR⅝)	〃	fine sand・小礫を含む
	4	褐　色(10YR⅝)	〃	fine sand礫を含む
	5	明褐色(10YR⅝)	〃	fine sand・礫を含む
	6	褐　色(7.5YR⅝)	〃	fine sand・小礫を含む
	7	赤褐色(10YR⅝)	〃	fine sand
	8	赤褐色(5YR⅝)	〃	fine sand・中礫を含む
	9	明褐色(5YR⅝)	〃	小礫をわずかに含む
	10	赤褐色(7.5YR⅝)	〃	中礫をわずかに含む
	11	明褐色(5YR⅝)	〃	小礫を含む

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅱ層	12	褐　色(10YR⅝)	サンド	小礫をわずかに含む
	13	褐　色(7.5YR⅝)	〃	小礫を含む
	14	褐　色(10YR⅝)	〃	小礫をわずかに含む
	15	褐　色(10YR⅝)	〃	小礫をわずかに含む
	16	褐　色(10YR⅝)	〃	中礫をわずかに含む
	17	明褐色(7.5YR⅝)	〃	礫を多く含む
	18	褐　色(10YR⅝)	〃	大きな塊になっている
	19	明褐色(7.5YR⅝)	〃	中・小礫をわずかに含む
	20	褐　色(10YR⅝)	クレイ	礫をわずかに含む
	21	明褐色(7.5YR⅝)	サンド	中・小礫をわずかに含む
	22	褐　色(10YR⅝)	〃	礫をわずかに含む
	23	赤褐色(5YR⅝)	〃	しまりなし

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅲ層	24	黒褐色(10YR⅝)	シルト	粘性あり
	25	褐　色(10YR⅝)	〃	礫をわずかに含む
	26	黒褐色(10YR⅝)	〃	地山粒・ブヤックを含む
	27	褐　色(10YR⅝)	〃	地山粒を含む
	28	褐　色(10YR⅝)	〃	地山粒をわずかに含む
	29	褐　色(10YR⅝)	〃	地山粒を含む
	30	暗褐色(10YR⅜)	〃	地山粒を含む
	31	黒褐色(10YR⅝)	〃	地山粒を含む
	32	褐　色(7.5YR⅝)	サンド	fine sond小礫を含む
	33	褐　色(7.5YR⅝)	〃	小礫・中礫を多く含む
	34	褐　色(7.5YR⅝)	〃	礫を含む、しまりなし



層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	褐　色(10YR⅝)	シルト	礫をわずかに含む
	2	明黄褐色(10YR⅝)	クレイ	礫をわずかに含む
	3	(7.5YR⅝)	サンド	礫をわずかに含む
	4	明褐色(7.5YR⅝)	〃	地山粒・円礫をわずかに含む
	5	明褐色(7.5YR⅝)	〃	円礫・粘土塊を含む
第Ⅱ層	6	明褐色(7.5YR⅝)	クレイ	円礫をわずかに含む
	7	明褐色(7.5YR⅝)	クレイ	粘土と砂の割合が7：3である

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅱ層	8	黄褐色(10YR⅝)	クレイ	粘土と砂の割合が6：1である
	9	明褐色(7.5YR⅝)	サンド	砂・円礫をわずかに含む
	10	明褐色(7.5YR⅝)	サンド	粘土塊・円礫を含む
第Ⅲ層	11	黒褐色(10YR⅜)	シルト	地山粒を含む
	12	明褐色(7.5YR⅝)	サンド	円礫をわずかに含む
	13	褐　色(10YR⅝)	クレイ	円礫をわずかに含む
	14	褐　色(10YR⅝)	〃	砂が粘土塊中に点在する

層位	層No.	土色	土性	備考
第Ⅲ層	15	明黄褐色(10YR⅞)	サルト	小円礫をわずかに含む
	16	明褐色(7.5YR⅝)	サンド	くずれ易い
	17	黄褐色(10YR⅝)	シルト	10YR⅞シルトのラミナが入る
	18	黄褐色(10YR⅝)	〃	しまりあり
	19	黄褐色(10YR⅝)	〃	地山粒を含む
	20	暗褐色(10YR⅜)	〃	地山粒を多く含む

第42図　土墨断面図

45°の勾配で立ち上がり、断面形は、ほぼ逆台形を呈している。堆積土は、暗褐色シルト層で、上部では小礫等を含み、下部では地山粒を多く含んでいる。出土遺物はない。

第５溝（第32・41図）

第４溝の東側に接して検出され、これに切られ、第５円形周溝、土塁を切っている。規模は、上端が１～1.7m、下端が0.4m、深さ0.9～1.3mである。壁面に凹凸がみられる以外は、底面の状況、断面形等は、第４溝同様である。堆積土は、小礫・地山粒を多量に含んでいる。出土遺物はない。

土塁（第32・42図）

地表観察で確認されていたもので、平場の北辺および西辺をとりまくように築かれている。基本層位の第Ⅱ層である黒色土を構築面としている。確認された長さは約 110mであるが、本来はいく分南側にのびていたものと思われる。基底幅は６～８m、高さは最も保存の良い部分で約1.3mを測る。構築順序としては、平場の外側から内側に向って積んでいる場合が多く、西辺部では、基底部両端から積み上げ、中央部を最後に積んでいるところもある。積土は、初期に積んだものにはシルト質のものが多く、砂質のものも僅かにみられる。一方、後から積まれたものには小礫を含む場合が多い。２号堀あるいは旧２号堀を掘った際に構築したものであろうか。なお、崩壊土中から、中世陶器甕破片、御正体（懸仏）が出土している。

堀

２号堀は、地山面、旧２号堀堆積土上面で、旧２号・３号堀は、地山面で確認されている。

２号堀（第32・43図）

上段平場と下段平場を区画する堀で、上段平場の北辺下から西辺下にかけて検出され、さらに東の調査区外へのびている。後述する旧２号堀を切っている。検出された長さは約 140mである。幅は、土塁および上段平場の肩部のくずれているところもあり、内側の上端については推定の部分もあるが、上端が５～７m、下端が約１mである。壁は、外側が旧２号堀の堆積土、内側が地山で、壁面は部分的に凹凸がある。底面からの立ち上がり角度は、内側で約 50°外側で約 45°と内側の勾配が強い。断面形は、１号堀同様である。底面は、わずかに凹凸があるもののレベル差は少ない。南端は、１号堀同様に約１mの段差で立ち上がり、約１mの幅をもって３号堀に直交している。３号堀底面との比高差は約５cmである。深さは、上段平場から約 2.5m、下段平場からでは約 1.5m、土塁項部との比高差では４mほどを測り、旧２号堀底面より40～60cmほど深い。堆積土は、暗褐色、黄褐色シルト層が大部分で７層が認められた。なお、北辺のほぼ中央部に、堀と直交して幅 0.8mほど地山を掘り残している部分がある。底面との比高差は約20cm、堀外側上端より約1.3m下っている。土橋にしては、基底幅も狭く、高さもないことから、堰状の施設とも考えられるが、１箇所だけという点に疑問が残る。

旧２号堀（第32・43図）

２号堀のわずかに外側を平行して走り、２号堀に切られている。検出された長さは約 100mであるが、北辺の東端、西辺の南端では、削平等により痕跡として残っているに過ぎない。上幅は内側が２号堀との重複によりこわされているため推定になるが、４～５mほどになるものと思われる。下幅は、北辺で1.2～2.4m、西辺で2.2～2.5mを測り、1・２号堀に比して幅広くなっている。地山を壁とし、底面からは約45°の勾配で立ち上がっている。断面形は、1・２号堀に比して下底の長い逆台形を呈している。底面には、段がついて深くなる部分（底面から10～30㎝）や、堀と直交して幅１～1.2mほど地山を掘り残している部分があり、堰状の施設とも考えられる。深さは、平均して北辺で0.9m、西辺で1.1mで、２号堀底面より 40～60㎝ほど浅い。堆積土は、褐色・明黄褐色・オリーブ褐色などのシルト・サンド層12層が認められ、サンド層には、礫が含まれる場合が多い。堆積土中から、中世陶器甕破片５点が出土している。

なお、西辺のほぼ中央部に後述する土橋状遺構がみられる。

３号堀（第32・43図）

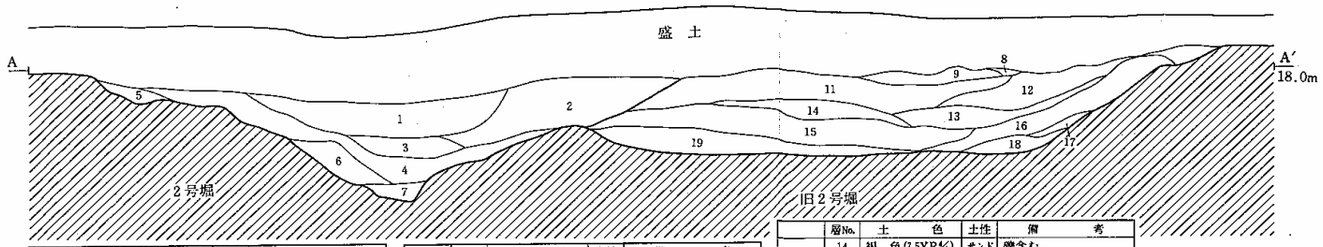
上段平場の南限を画する堀で、東西に走っている。検出された長さは約23mで、東は調査区外にのび、西は後述する４号堀に約 1.5mの段差をもってほぼ直交している。上幅は、東側が約７mと広く、２号堀と対応する部分から西側では約５mと狭くなる。下幅も同様に東側が広く約2.5m、西側では約1.7mである。地山を壁とし、底面からの立ち上がり角度は、内側で約45°、外側で約40°と内側の勾配が強い。断面形は、旧２号堀に似ている。底面は平坦であるが、東から西にわずかに傾斜している。深さは、確認面から約1.5m、Ｂ平場より 1.8m、１号堀底面より約１m下がる。堆積土は、褐色・暗褐色などのシルト・サンド層が24層認められた。これらには小礫・地山粒を含むものが多い。また、下部の層では粘性を帯び、グライ化あるいは酸化しているものもみられ、滞水していた可能性も考えられる。出土遺物はない。

土橋状遺構と通路（第32図）

土橋状遺構は、旧２号堀西辺のほぼ中央部で検出されたもので、東半部分が２号堀によって切られ失われている。旧２号堀構築の際に、地山の一部を掘り残して築いたものと思われる。検出された長さは約２m、上幅は約1.8m、下幅は約3.5mで、断面形は台形を呈している。

一方、通路と考えられる部分は、２号堀を挟んで土橋とほぼ対応する部分、第７竪穴遺構の底面下で検出されたもので、幅は4.5～5mを測る。上段平場に向って斜面を登るように構築されたものと思われる。

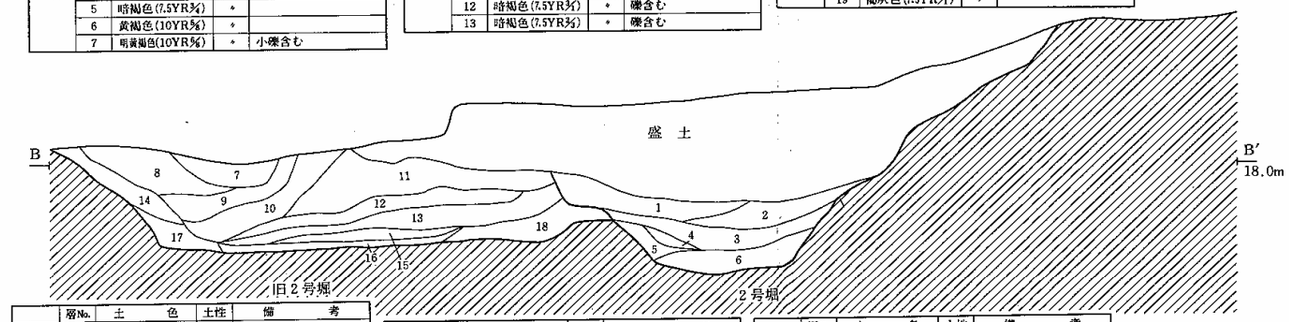
また、これとは別に、上段平場の南端、３号堀北辺に沿って幅１mほどのテラス状の部分がある。この部分は、上段平場から約30㎝の段差をもち、２号堀と直交する西端部では約50㎝の段差で下段平場と接している。各平場を結ぶ南端の通路の可能性が考えられる。



	層No.	土 色	土性	備 考
2号堀	1	褐暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	
	2	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	礫含む
	3	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	
	4	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	
	5	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	
	6	黄褐色(10YR5/6)	〃	
	7	明黄褐色(10YR5/6)	〃	小礫含む

	層No.	土 色	土性	備 考
旧2号堀	8	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	9	明褐色(7.5YR5/6)	サンド	礫含む
	10	(YR3/4)		
	11	褐 色(7.5YR5/4)	サンド	礫含む
	12	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	礫含む
	13	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	礫含む

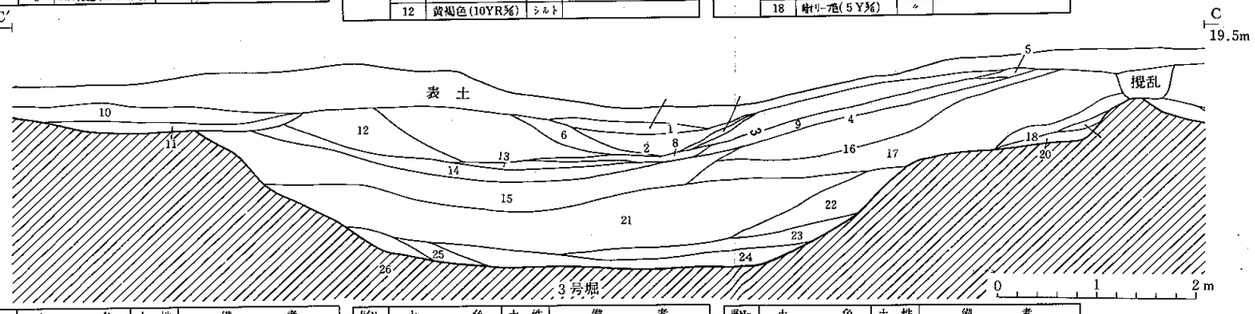
	層No.	土 色	土性	備 考
旧2号堀	14	褐 色(7.5YR5/4)	サンド	礫含む
	15	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	明褐色の粒子・礫含む
	16	暗褐色(7.5YR3/4)	〃	
	17	褐 色(7.5YR5/4)	〃	明褐色の粒子含む
	18	明褐色(7.5YR5/6)	〃	
	19	褐灰色(7.5YR5/1)	〃	



	層No.	土 色	土性	備 考
2号堀	1	褐 色(7.5YR5/4)	シルト	
	2	褐 色(7.5YR5/6)	〃	
	3	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	
	4	黄褐色(10YR5/6)	サンド	
	5	明黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山崩壊土
	6	[illegible]褐色(10YR5/4)	〃	(7.5YR5/1)のオリーブ黒を帯状に含む

	層No.	土 色	土性	備 考
旧2号堀	7	褐 色(7.5YR5/4)	シルト	
	8	黄褐色(10YR5/6)	サンド	小礫含む
	9	褐 色(10YR5/4)	シルト	礫のみ
	10	明黄褐色(10YR5/6)	〃	
	11	明黄褐色(10YR5/6)	サンド	
	12	黄褐色(10YR5/6)	シルト	

	層No.	土 色	土性	備 考
旧2号堀	13	褐 色(10YR5/4)	シルト	
	14	暗褐色(7.5YR3/3)	〃	
	15	暗オリーブ色(5 YR5/3)	〃	
	16	暗オリーブ褐色(2.5YR3/3)	〃	
	17	オリーブ褐色(2.5YR4/3)	〃	
	18	暗オリーブ色(5 Y3/6)	〃	



層No.	土 色	土 性	備 考
1	褐 色(10YR5/4)	シルト	小礫係かに含む
2	暗 褐 色(10YR3/3)	〃	小礫含む、しまりなし
3	暗 褐 色(10YR3/3)	〃	明褐色(7.5YR5/6)を含む、粘性あり
4	褐 色(10YR5/4)	〃	小礫多く含む
5	暗 褐 色(10YR3/4)	〃	しまりなし
6	暗 褐 色(10YR3/4)	〃	砂質、しまりなし
7	褐 色(10YR5/6)	〃	砂質、小礫含む、ボサボサしている
8	暗 褐 色(10YR3/4)	〃	しまりあり
9	褐 色(10YR5/4)	〃	ややしまりあり

層No.	土 色	土 性	備 考
10	暗 褐 色(7.5YR3/4)	シルト	明黄褐色(10YR6/6)をブロック状に含む
11	明黄褐色(10YR3/6)	〃	しまりあり
12	黄 褐 色(10YR5/6)	〃	小礫多く含む
13	褐 色(10YR5/6)	〃	
14	暗 褐 色(10YR3/4)	〃	粘質
15	褐 色(10YR5/4)	〃	しまりあり
16	褐 色(10YR5/6)	〃	
17	暗 褐 色(10YR3/4)	〃	小礫係かに含む
18	暗 褐 色(10YR3/4)	〃	地山粒係かに含む

層No.	土 色	土 性	備 考
19	明黄褐色(10YR5/6)	シルト	粘性あり
20	褐 色(10YR5/4)	〃	
21	暗 褐 色(7.5YR3/4)	〃	明黄褐色(10YR6/6)をブロック状に多く含む
22	暗 褐 色(10YR3/3)	〃	しまりなし
23	褐 色(7.5YR5/6)	〃	鉄分を多く含む
24	褐 灰 色(10YR5/1)	〃	泥質、グライ化している
25	褐 色(7.5YR5/6)	〃	鉄分・小礫含む
26	(10YR5/6)	〃	小礫含む

第43図　2号堀・旧2号堀・3号堀断面図

〔下段平場〕

(3)Ｃ平場

Ｃ平場は、上段平場の北・西縁下に認められる外縁に向って緩やかに傾斜する平場である。平場の北辺の長さは約 100m、西辺の長さは約 120mで、幅は２号堀北側で約 45m、西側では 10～40mで、面積にして約 6,300 ㎡の広さをもっている。調査対象となったのは、このうち約 3000 ㎡である。検出された遺構としては、井戸・土壙４基・ピット群・堀・整地層があり、前４者は地山面での確認であり、整地層は、基本層位第Ⅳ層上に作られたものである。

井戸跡

第３井戸（第44図）

北側Ｔ―32 区に位置する素掘りの井戸である。平面形は、上端が径約 1.5mの円形、底面は径約 50cm の円形を呈し、深さは約 2.1mを測る。掘り方は、上半が外に向って開き気味になるもののほぼ円筒形を呈し、底面は平坦になっている。堆積土は、暗褐色・黒褐色・褐色などのシルト層が大別して９層確認され、第８・第９層は粘性が強くグライ化している。

土壙（第44図）

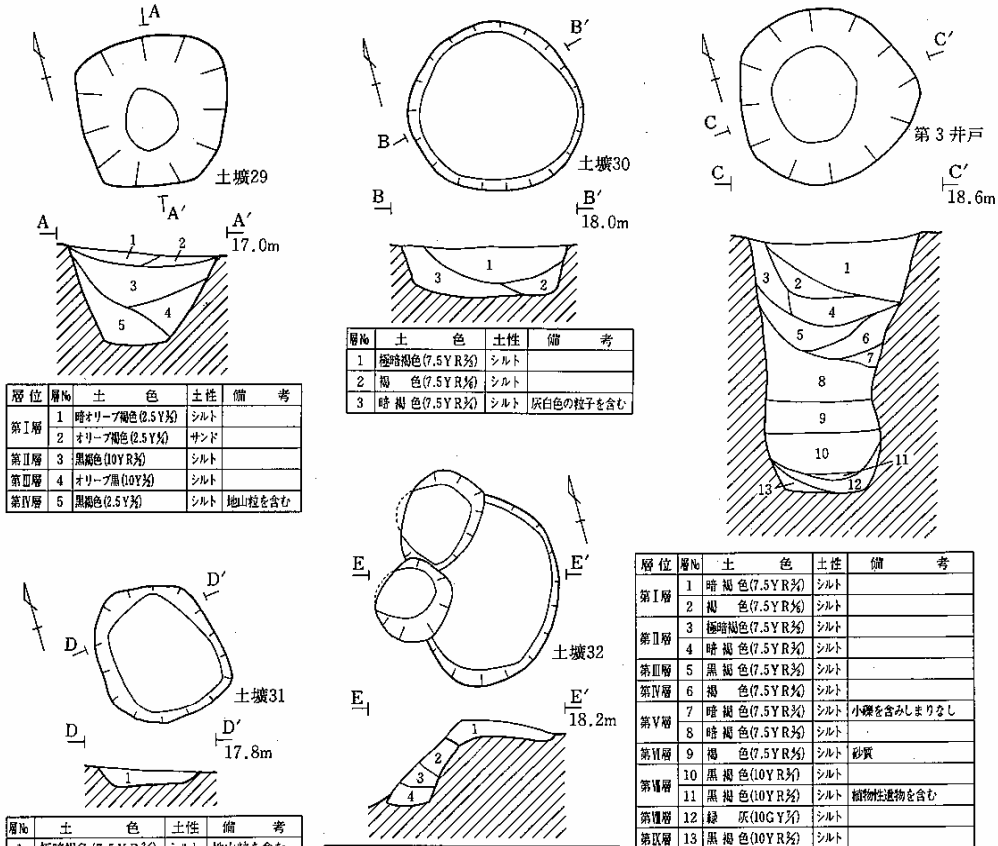
北側で３基、西側で１基の計４基が検出されている。平面形は、円形・楕円形・不整方形と一様ではなく、規模は、径あるいは長軸が 1.2～1.5mである。深さは、土壙 29 が４基の中で最も深く約 80cm、土壙 31・32 では 15cm 前後と浅い。壁は、底面から急角度で立ち上がるもの、緩やかに立ち上がるものがあり、底面も平坦なもの、丸味をもつものなどがある。堆積土は、黒褐色・極暗褐色のシルト層で、自然堆積を呈している。出土遺物はない。

第10表　土　　壙（29～32）

土壙番号	位置	重複	平面形	大きさ（cm）	深さ（cm）	底面の状況	壁		出土遺物	備考	調査時の番号
							下端	立ち上がり			
29	L－16		方形	122×110	78	平坦	明瞭	急			18
30	J－19		円形	150	43	丸味あり	明瞭	急			19
31	H－20		楕円形	125×100	15	平坦	不明瞭	緩やか			20
32	K－55		楕円形	160×(120)	15	凹凸あり	明瞭	緩やか			2

ピット群

北側Ｋ～Ｍ－18～21 区にかけて約 100 個のピットが検出されている。これらは平面形が円形を基調とするものが多く、規模は直径が 30cm 前後である。また、これらのピットの中には直径 10～15cm ほどの柱痕跡の認められるものが約 30 個あり、それらの組み合わせから掘立柱建物跡を想定したのであるが、柱相互の組み合わせを検討しても、建物跡を復元することはできなかった。



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	
	2	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	サンド	
第Ⅱ層	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
第Ⅲ層	4	オリーブ黒(10Y3/2)	シルト	
第Ⅳ層	5	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山粒を含む

層No	土色	土性	備考
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	
2	褐色(7.5YR4/6)	シルト	
3	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	灰白色の粒子を含む

層No	土色	土性	備考
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山粒を含む

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	しまりなし・地山粒を含む
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	
4	黒褐色(10YR3/2)	〃	地山ブロックを含む,しまりなし

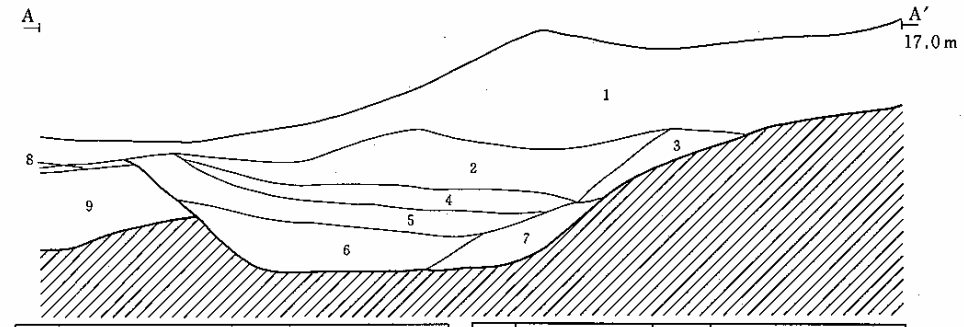
層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
	2	褐色(7.5YR4/6)	シルト	
第Ⅱ層	3	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	
	4	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
第Ⅲ層	5	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	
第Ⅳ層	6	褐色(7.5YR4/6)	シルト	
第Ⅴ層	7	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	小礫を含みしまりなし
	8	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	
第Ⅵ層	9	褐色(7.5YR4/6)	シルト	砂質
第Ⅶ層	10	黒褐色(10YR3/1)	シルト	
	11	黒褐色(10YR3/2)	シルト	植物性遺物を含む
第Ⅷ層	12	緑灰(10GY5/1)	シルト	
第Ⅸ層	13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	

第44図　Ｃ平場井戸・土壙

堀

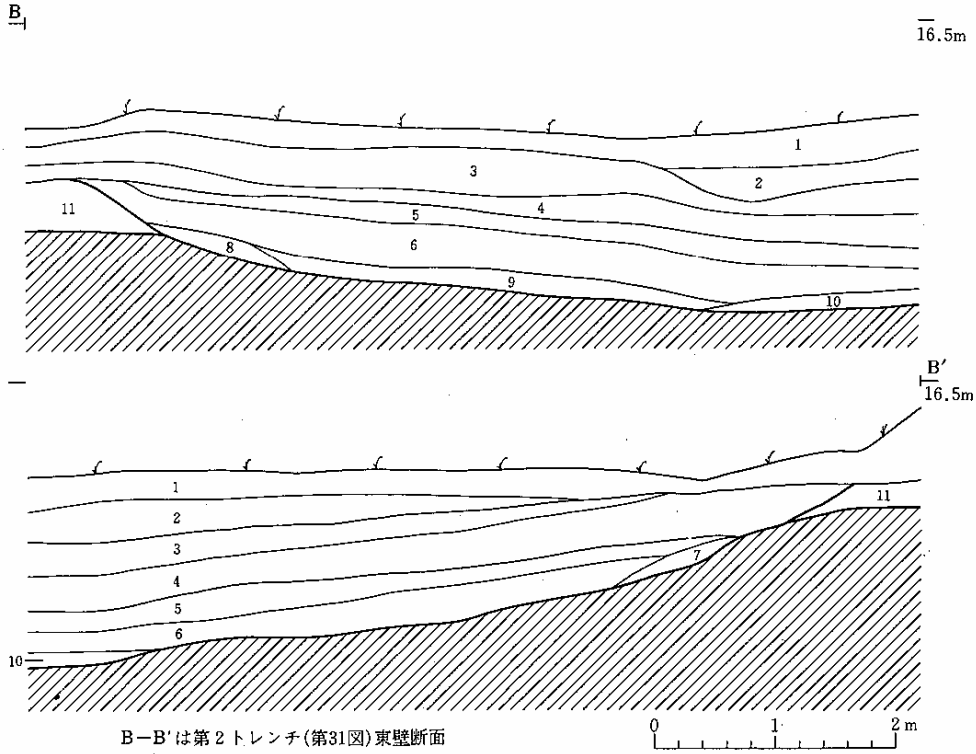
4号堀（第31図・45図）

Ｃ平場西側で部分的に検出されたもので、平場と沖積地（現水田・湿地帯）との境界付近を平場の西縁に沿ってほぼ南北に走り、上段平場の南端で３号堀とほぼ直交し、さらに南にのびている。３号堀との新旧関係は不明である。北側に関しては、昭和54年２月の県営圃場整備にかかわる事前調査で、２本のトレンチを設定し、この堀の延長と考えられる立ち上がりを検出している(斉藤：1979)。この結果を総合すると、北側ではいく分東の方に曲がり、平場北縁に沿って湿地帯へ開く可能性が考えられる。規模は、上幅が３～10m、下幅が1.2～7.5m、深さは確認面から約 1.2mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は角のつかない逆台形を呈している。底面はわずかに北側に傾斜している。堆積土は、黒色・墨褐色のシルト・サンド層など６層が確認されている。出土遺物はない。



層No	土色	土性	備考
1	黒 色(7.5YR3/1)	シルト	5cm大の礫含む
2	黒 色(10YR3/1)	シルト	3層より褐色
3	黒 色(10YR3/1)	シルト	1cm大の礫含む
4	黒褐 色(7.5YR3/1)	サンド	
5	黒褐 色(10YR3/1)	シルト	

層No.	土色	土性	備考
6	黒黄 色(10YR3/1)	シルト	
7	黒 色(10YR3/1)	〃	1～2cmの礫含む
8	浅黄 色(7.5YR7/3)	〃	地山
9	黒 色(10YR3/1)	〃	

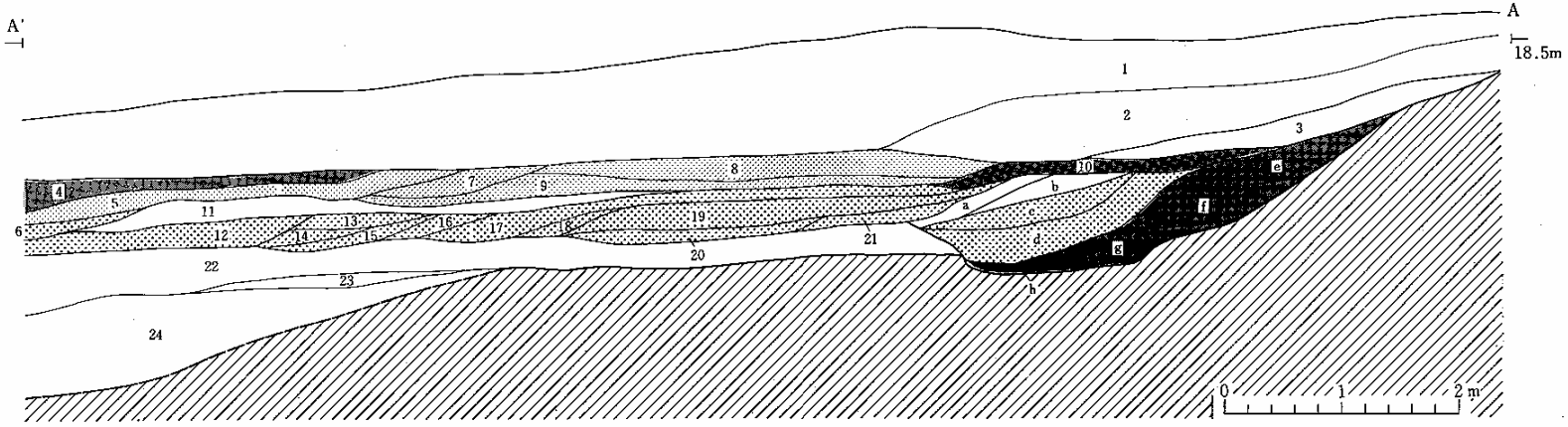


B－B′は第2トレンチ(第31図)東壁断面

層位	層No.	土色	土性	備考
	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	表土、耕作土
	2	灰 色(7.5YR5/1)	細砂	表土、耕作土
第Ⅰ層	3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やや粘性あり
	4	黒褐色(10YR3/1)	〃	やや粘性あり
第Ⅱ層	5	里褐色(2.5YR3/1)	〃	粘性あり

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅱ層	6	黒褐 色(2.5Y3/1)	シルト	粘性強い
	7	黒褐 色(2.5Y3/1)	シルト	
第Ⅲ層	8	灰 色(7.5Y5/1)	細砂	
	9	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	粘性強い
第Ⅳ層	19	緑灰 色(10GY5/1)	中砂	小礫を含む
	11	黒 色(10YR3/1)	シルト	基本層位西側下段Ⅳ層と同じ

第45図　4号堀断面図



層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅰ層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	表土、耕作土
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	表土、耕作土、小礫を含む
第Ⅱ層	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	しまりあり
第Ⅲ層	4	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山粒を多く含む
	5	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山粒・小礫を多く含む
第Ⅳ層	6	黄色(12.5Y7/6)		小礫層
第Ⅴ層	7	黄褐色(10YR5/6)	シルト	小礫と地山粒の混った層
	8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	〃
	9	黄褐色(10YR5/6)	シルト	〃
第Ⅵ層	10	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山粒をわずかに含む、やわらかい
第Ⅶ層	11	黒色(10YR3/1)	シルト	粘性があり、やわらかい
第Ⅷ層	12	灰色(10Y5/1)	シルト	小礫を多く含む、やわらかい
第Ⅸ層	13	灰オリーブ色(5Y5/2)	シルト	小礫を多く含む、かたくしまっている
	14	灰オリーブ色(5Y5/3)	シルト	〃 〃
	15	暗オリーブ色(5Y4/3)	シルト	〃 〃
	16	浅黄色(5Y7/4)	シルト	〃 〃

層位	層No	土色	土性	備考
第Ⅸ層	17	灰オリーブ色(5Y5/2)	シルト	小礫を多く含む、かたくしまっている
	18	灰オリーブ色(5Y5/2)	シルト	〃 〃
第Ⅹ層	19	暗オリーブ色(5Y4/3)	シルト	小礫を多く含みかたい
第ⅩⅠ層	20	灰オリーブ色(5Y5/2)	シルト	小礫を含み、やわらかい
	21	灰オリーブ色(5Y5/2)	シルト	〃 〃
第ⅩⅡ層	22	黒褐色(10YR3/2)	シルト	わずかに粘性があり、かたくしまっている
	23	灰色(5Y5/1)	シルト	
	24	黒色(10YR2/1)	シルト	わずかに粘性があり、かたくしまっている
2号堀堆積土	a	暗褐色(10YR3/3)	シルト	粘性があり、やわらかい
	b	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性があり、かたい
	c	黒褐色(10YR3/2)	シルト	小礫を多く含む
	d	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性があり、小礫をわずかに含む
	e	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山粒をわずかに含む
	f	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	〃
	g	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〃
	h	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	地山粒を多く含む

地山粒を含む層

地山粒・小礫を含む層

小礫を含む層

第46図　C平場整地層断面図

整地層（第32図・46図）

Ｓラインより東側で確認され、北側への広がりは 18 ラインまで認められるが、それ以北に関しては、水田として利用されているため不明である。第Ⅲ章１の基本層位下段の項で述べたように、西側においては、基本的に４枚の層（Ⅰ～Ⅳ層）が確認された。しかし、東側では、西側のⅡ・Ⅲ層に対応する層として、全く別の 18 枚の層が確認された。これら 18 枚の層は、断面図からも明らかなように、２号堀が埋まりきってから形成されたもので、小礫を含む層、小礫と地山粒を含む層、地山粒を含む層などに大きくわかれ、不整合な面もあり、必ずしも自然堆積の状態を示していない。また、基本層位のⅣ層（№22）上面には、小礫を含む層が、その上には小礫と地山粒を含む層が位置するなど規則性があり、しかも、レベル的にほぼ水平になっていることなどから意図的に形成された層、すなわち整地層と考えられる。全体としての厚さは約 60cm であるが、上部においては耕作等により削平をうけている可能性もあり、本来はもっと厚く盛られていた可能性がある。なお、この整地層上からは、何ら遺構の検出はなく、層中から遺物の出土もない。

(4)Ｄ平場

Ｄ平場は、上段平場の南側に位置する南北長 70m、東西幅 120m、面積にして 8,400 ㎡ほどの広さをもつ地域であるが、調査の対象となったのは北西端にあたるわずかに 80 ㎡である。検出された遺構としては、土壙３基・溝２本がある。確認面は地山面である。

土壙（第47図）

検出された３基の土壙は、いずれも溝・堀・ピットなどと重複しているため、必ずしも全体の平面形は明らかでないが、土壙 33・34 は楕円形を、土壙 35 は平行四辺形を呈するものと思われる。規模は 1.3～2.2m で、深さは 15～35cm を測る。底面はわずかに凹凸がある。堆積土は、１層あるいは２層が確認されている。多くは地山粒や小礫を含んでいる。出土遺物はない。

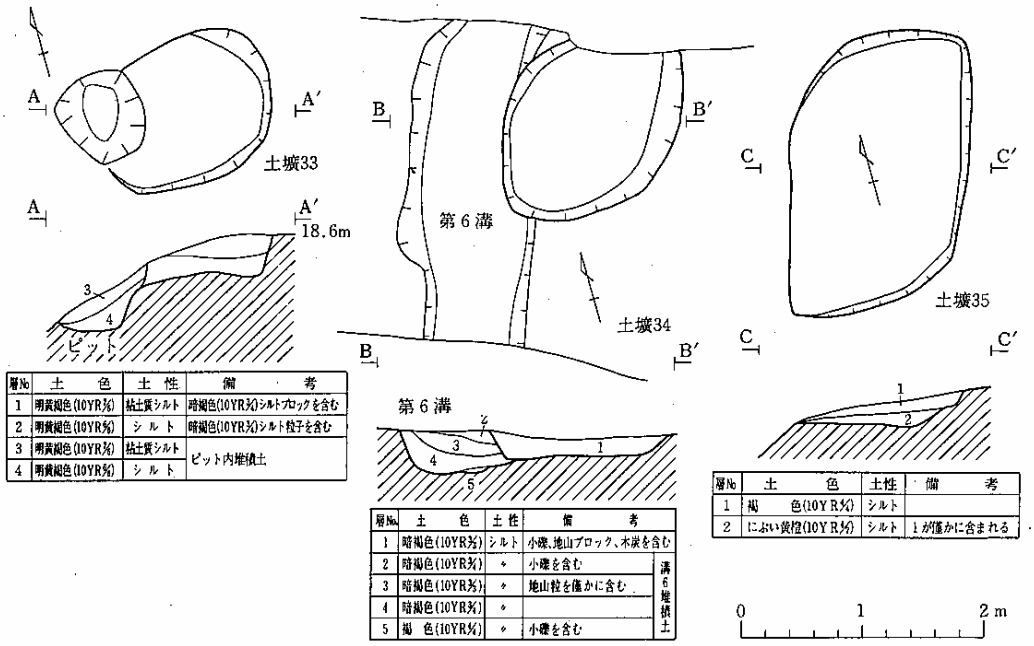
第11表　土　　壙（33～35）

土壙番号	位置	重複	平面形	大きさ（cm）	深さ（cm）	底面の状況	壁 下端	壁 立ち上がり	出土遺物	備考	調査時の番号
33	V－61		楕円形	(150)×120	35	凹凸あり	明瞭	急			5
34	S－63	←第６溝	楕円形	(160)×140	15	凹凸あり	明瞭	緩やか			7
35	T－62		平行四辺形	222×(145)	25	凹凸あり	明瞭	急			6

溝

第６溝（第47図）

土壙 34・３号堀に切られている。上幅 0.8m、下幅 0.6m、深さ 35cm を測る。底面は丸味をもち北に向ってわずかに傾斜している（レベル差 14cm）。壁は部分的に出入りがあり、立ち上がりは比較的急である。断面形はＶ字形を呈している。堆積土は、暗褐色・褐色シルト層など４層が認められ、小礫・地山粒を含んでいる。出土遺物はない。



層No	土色	土性	備考
1	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/4)シルトブロックを含む
2	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	暗褐色(10YR3/4)シルト粒子を含む
3	明黄褐色(10YR7/6)	粘土質シルト	ピット内堆積土
4	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	

層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	小礫、地山ブロック、木炭を含む	溝6堆積土
2	暗褐色(10YR3/3)	〃	小礫を含む	
3	暗褐色(10YR3/3)	〃	地山粒を僅かに含む	
4	暗褐色(10YR3/4)	〃		
5	褐色(10YR4/4)	〃	小礫を含む	

層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR5/4)	シルト	
2	にぶい黄橙(10YR6/4)	シルト	1が僅かに含まれる

第47図　Ｄ平場溝・土壙

第7溝（第47図）

土壙35に切られている。上幅0.8～1.1m、下幅0.5～0.6m、深さ23～41cmを測る。北端は削平によるためか判然としない。底面は南にわずかに傾斜している（レベル差25cm）。壁は出入りがあり、立ち上がりは緩やかである。断面形はおおむねU字形を呈している。堆積土については第６溝と同様である。出土遺物はない。

３．発見された遺物と年代

各遺構、基本層位中から、中世あるいは近世に属すると思われる遺物が出土している。遺物としては、陶器、磁器、石臼、木製鉢、懸仏（御正体）、古銭がある。なお、明治時代以降と思われる遺物は対象から外している。以下に順を追って説明を加えてゆく。

(1)　陶器

陶器には甕、摺鉢、火舎、皿がある。前三者は無釉、後者は施釉されている。

甕（第48図１～５）

１は、口縁部径が約54cmの大甕で、体下部から底部を欠いている。口縁部は横に短く外反しその先端が上方に折り曲げられ、外側に幅1.4cmの口縁帯を形成し、その内側に幅１cmの１条の沈線がめぐる。いわゆる受口状の口縁形態を呈している。頚部から肩部にかけては「八」の字形となり、頚部には幅1.2cmの沈線が１条めぐり、肩部下端に最大径が位置する。最大径は約75cm

である。器面調整として、外面口頸部に横ナデが、肩部には斜位に粗いナデ調整がなされ、最大径から下の部分にはヘラケズリが施されている。内面は、口頸部に横ナデ、肩部から体部には指頭によるオサエ痕が見られる。色調は、外面がにぶい赤褐色、内面が明赤褐色、割れ口は橙色を呈している。胎土には砂粒を含み、全体によく焼き締められている。Ｂ平場第７竪穴遺構第５層からの出土である。

２は、直接に接合しないが、１と同一個体と思われる口頸部資料である。旧２号堀第２層からの出土である。

３、４も口頸部資料である。１同様に、口縁部はわずかに外反し、先端が上方に折れ曲げられているが、１ほど明瞭な口縁帯を形成してはいない。また、内側の沈線も不明瞭である。器面調整としては、内外面ともに横ナデが施されている。色調、胎土、焼成は１と同様である。３は旧２号堀第５層、ＡはＪ－34 区土塁崩壊土中からの出土である。

５は、体下部から底部にかけての資料である。底部径は約 25cm を測る。器面調整として刷毛目、ナデが観察される。色調、胎土、焼成は１同様である。旧２号堀第２層からの出土である。

なお、上記の他に、第７竪穴遺構、土塁崩壊土中、基本層位Ⅰ・Ⅱ層中から、15 点の甕体部破片が出土している。器面調整、色調、胎土、焼成など上記のものと差異は認められない。

以上のような特徴を示す甕は、伊豆沼古窯跡群の熊狩Ａ窯（工藤、藤沼他：1979）、三本木古窯跡群の多高田窯（藤沼、佐々木他：1978）などの地元窯や、高清水町観音沢遺跡（加藤、阿部：1980）に類例が認められる。熊狩窯は、鎌倉時代中葉から後期にかけて機能した窯跡と考えられるものであり、これらの甕の年代も同様に考えることができよう。

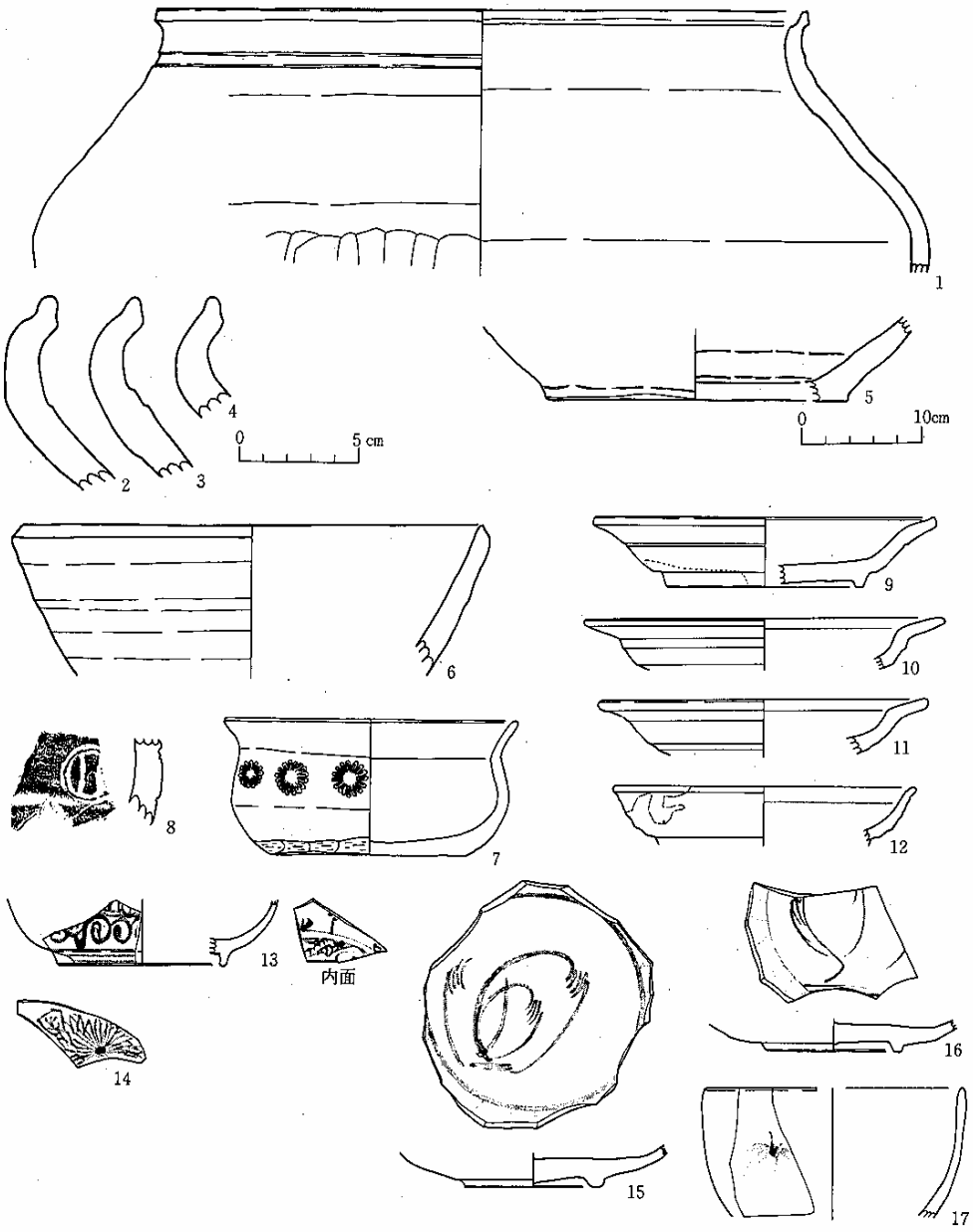
擂鉢（第48図６）

口径 19.8cm を測り、底部を欠いている。体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部はほぼ平坦で、やや角ばった形をしている。破片としての出土のため、片口の有無については不明である。内面に筋目はみられない。器面調整としては、内外面ともに横ナデが施されている。色調、胎土、焼成とも甕と差異はない。Ⅰ－37 区土塁崩壊土中からの出土である。

類似のものは、熊狩Ａ窯、観音沢遺跡に認められ、甕同様に、鎌倉時代中葉～後期にかけての所産と考えられる。

火舎（第 48 図７・８）

７は、口径 12.3cm、底径 8.0cm、器高 5.6cm と小型のものである。底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反気味になっている。体上部には、菊花文の押印が捺され、体下部にはヘラケズリ調整が施されている。内面口縁部にはすすが付着している。色調は、内外面ともに明褐色を呈している。胎土には砂粒等を含まず、焼成は甕類よりも軟弱である。Ａ平場第３溝からの出土である。



第48図　出土遺物（陶磁器）

８は、体部の小破片である。三引両の押印が捺されている。Ａ平揚土壙８からの出土である。

以上のような火舎は、８は江戸期のものと思われるが、７については、年代は不明である。

皿（第48図９～12）

９は、口径14.3cm、底径8.2cm、器高2.9cmを測る。口縁部はわずかに外反し、胴部には１条の沈線がめぐる。底部には回転糸切り痕を残し、高台は逆台形の断面形を呈し、外面は回転ヘラケズリされている。胴部は外傾気味に立ち上がる。内面および外面の口縁部から胴部（一部高台にも）には、ややくすんだ黄緑色に発色した灰釉がかかり、細かな貫入がみられる。また、見込みには、重ね焼きの痕跡が認められる。素地は白色を呈し、焼成は堅緻である。Ａ平場第３溝からの出土である。

10は、口径15.1cmを測り、底部を欠いている。口縁部は、ほぼ水平に折り曲げられ、胴部は内弯気味に立ち上がっている。素地を鉄釉でおおい、その上に長石釉をかけ還元焔で焼いているため、釉は鼠色に発色している。素地は、暗いオリーブ色を呈し、砂粒をわずかに含んでいる。焼成は堅緻である。Ａ平場第３溝からの出土である。

11は、口径13.8cmを測り、底部を欠いている。口縁部からの移行が10よりもなめらかである。釉色、素地、焼成は10と同様である。Ａ平場第２竪穴遺構からの出土である。

12は、口径12.6cmを測り、底部を欠いている。胴部に段が認められ、段から口縁部にかけては、内弯気味に立ち上がっている。内外面には白色に発色した長石釉が厚くかけられ、細かな貫入がみられる。胴部内面に灰色に発色した幅１cmほどの圏文が１本描かれている。素地は白色を呈し、焼成は堅緻である。Ａ平場第３溝からの出土である。

以上のような皿類は、美濃地方で焼かれたものと思われ、いずれも桃山期の所産と考えられる。

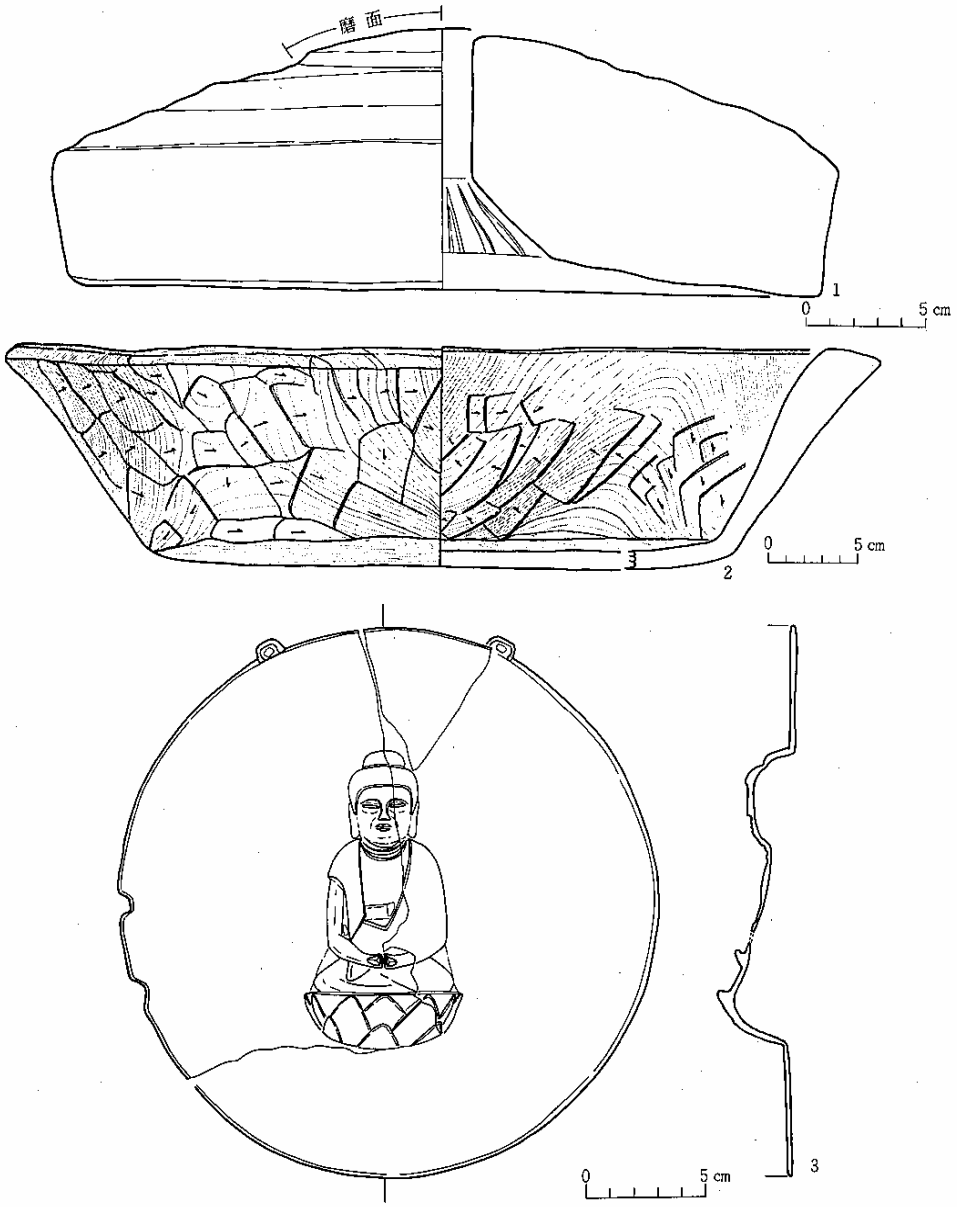
(2)　磁器

磁器には、舶載磁器と国産磁器がある。ともに染付である。

舶載磁器（第48図13・14）

13は、小片のため全体を知り得ないが、碗形を呈し、底径は７cmほどになるものと思われる。全体につくりは薄手である。畳付けと高台内側のわずかな部分が無釉で、他は、やや青味を帯びた白釉がかけられ、細かな貫入がみられる。外面胴下部には、唐草文(？)とも思われる文様が力強く青料で描かれ、高台部には三条の横線がごく薄い青料で描かれている。見込みには、重圏文がめぐり、草花文(？)とも思われる文様が描かれている。素地は白色を呈し、焼成は堅緻である。

14は、小片であるが皿の胴部と思われる。全体に白釉がかけられ、内側胴部には、濃い青料で、菊あるいは蓮華とも思われる花文が描かれている。



第49図　出土遺物（石臼・木鉢・懸仏）

この２点の磁器は中国製で、明代後半期の所産と考えられる。

国産磁器（第48図15～17）

15・16は、皿と思われる。底部が残存し、口縁部から胴部を欠いている。底径は5.7cmと小さい。13・14に比してつくりは厚手である。畳付けを除いて青味を帯びた明るい灰色の釉がかけ

られている。見込みには焼成の際に灰をかぶった痕跡がある。また、畳付けの部分には、焼成の際に火床に直接置いたためか砂粒が付着しザラザラしている。内面胴部には型押しの蓮弁文様があり、見込みには圏文と柳絵が描かれている。15の圏文は、幅が約２㎜で淡いオリーブ灰色に発色し、柳絵は、鮮明な青色の発色をしている。また、見込みには型押しの際の布目圧痕が残っている。一方、16の圏文は、幅１㎜以下で15に比して細く、さらに淡く、柳絵とともにオリーブ灰色に発色している。

17は、茶碗と思われる。口縁部から胴部にかけて残存し、底部を欠いている。全体にやや青味を帯びた明るい灰色の釉がかけている。外面の口縁部と胴部に圏文が描かれ、その間に紅葉が描かれている。ともに、淡い青色の発色をしている。

以上の磁器は、伊万里焼と考えられ、皿類は江戸初期～中期、茶碗は江戸後期の所産と思われる。

(3)　石製品

石臼（第49図1）

穀磨臼の下臼である。直径約33㎝、厚さは５～９㎝と一様ではなく重さは11.5㎏を測る。上面はふくらみが大きく、下面は逆にえぐり込まれている。断面形としては、コマを逆さにしたような形態を呈している。中央部には直径2.3㎝の芯棒受けの貫通孔があり、ここから直径11㎝ほどのところまできれいな磨面となっているが、その外側はザラザラしている。この部分では時計回り方向の磨滅痕が観察される。目は全く認められない。石材が多孔質の熔結凝灰岩であるために、目を必要としなかったのかも知れない。なお、下面には製作時の痕跡と思われるノミ痕が観察される。１号堀中ピット２からの出土であり、おおまかではあるが、中世のものと考えられる。

(4)　木製品

鉢（第49図2）

半欠品である。栗材の一木造りによるもので、口径48.5㎝、底径32㎝、器高12.3㎝を測る。器壁は底面が約１㎝と最も薄く、口縁部に向って次第に厚みを増し、口縁端では約３～４㎝を測る。口縁端は平坦な面をなし、外側にわずかに傾斜している。内外面ともに製作時の痕跡と思われる手斧あるいはノミによる削り痕が明瞭に観察される。１号堀内ピット２からの出土であり、おおまかではあるが中世のものと考えられる。

(5)　金工品

懸仏（第49図3）

土塁崩壊土中から出土したもので、中央部から半欠している。鋳銅製のもので、鏡板、仏像を一鋳し、その後、両肩に釣り孔をつけている。鏡板は、直径22.8㎝、厚さ２～３㎜の無縁の

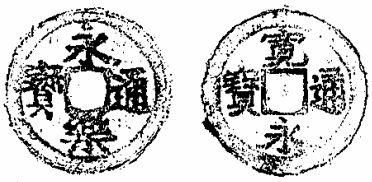
もので、表面は研磨され、多くの擦痕が観察される。鏡板の中央部には、阿弥陀如来坐像が配されている。像は、高さ10cm(台座まで含めると12.4cm)、肘張り2.3cm、膝張り2.9cm、厚さは２～７㎜で、定印を結び三段に配された胎葉蓮華座上に結跏趺坐している。三道はあるが白毫はない。また、宝髻、耳、法衣などにも細かな装飾はみられず簡素な造りといえる。銘文はみられない。

懸仏は、本地垂迹説に基づき形成された鏡像の発展型態であり、その本義は神鏡に映じた本地仏とされている。平安時代後期以降、室町時代にかけて、信仰の対象として作られ、特に最盛期の鎌倉時代には、毛彫りを施した鏡像から、仏像そのものに意識がうつり写実的モデリングの強くなった仏像彫刻の影響をうけて、技巧的にも優れたものが多く作られ、大型のものも作られるようになった。そして、室町時代に至っては、大型の懸仏は壮厳がさらに誇張され、装飾過多になる。一方、一般的な庶民信仰の対象となったのは、こうした装飾過多のものではなく、中・小型の極薄の板金製のものや、一鋳で簡略化されたものが多いとされている。県内においては、名取市熊野那智神社に、毛彫りのもの、金銅製の薄肉あるいは半肉彫りの仏像を鋲止めしたもの、一鋳のものなど多様にわたる鎌倉時代の懸仏群がある。また、角田市斗蔵寺にある鎌倉時代後期（延慶三年銘入）の大型の懸仏は、中央に千手観音を配したもので、装飾、技巧ともに秀れ完成期のものと考えられている。

こうした流れの中に本遺跡出土のものを位置づけると、鏡板と仏像を一鋳した中型で簡素な作りであることなどから、鎌倉時代後半あるいは室町時代の時期が考えられる。

(6) 古銭 （第50図）

永楽通宝２枚と寛永通宝２枚が出土している。ともに基本層位第Ⅰ層からの出土である。



第50図 古　銭（実大）

４．遺構の年代と考察

前項において、各平場単位で検出された遺構について述べた。ここでは、これらを各遺構別に内容を検討し、かつ出土遺物等からその年代について考えてみたい。

(1) 掘立柱建物跡

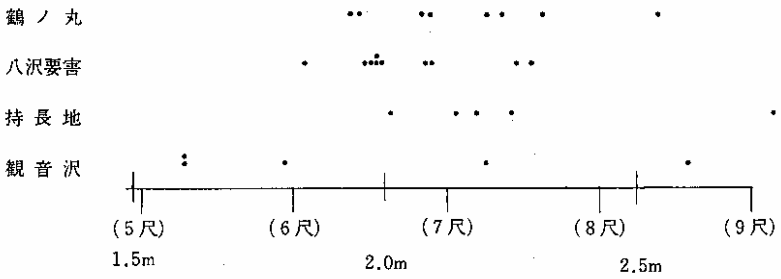
Ａ平場でのみ検出され、８棟がある。その内容は第 12 表に示す通りである。これらの建物跡は、その配置において２～３棟ずつのまとまりを示し、各々に重複が認められるが、柱相互に切り合いがなく、その新旧関係については不明である。重複の状態からみて少なくとも３時期に分かれ、第３～第５建物間では、棟方向が一致し、かつ近接していることなどから、建て替えの可能性も考えられる。規模の確実にわかるものは、第２・第３・第６～第８建物跡の５棟

第12表　掘立柱建物跡一覧表

遺構名	規模（m）	面　積	身舎桁行×梁間（間）	棟方向	柱　間　寸　法（m）	平均柱間寸法（m）	備　考
第 1 建物跡	(6.17)×5.1	(31.47㎡) (9.5坪)	3（？）×1	N-81°-E	桁行　北列西より 2.02+2.15+2.0（6尺7寸＋7尺1寸＋6尺6寸） 桁行　南列西より 2.1+2.08+　（6尺9寸＋6尺9寸＋　　） 梁間　5.1	2.07 （6尺8寸） 5.1 (16尺8寸)	第2建物跡と重複（不明） 第3竪穴遺構を切る
第 2 建物跡	4.16×2.34	9.73㎡ 2.9坪	2×1	N-42°-E	桁行　北列西より　1.94+2.22（6尺4寸＋7尺3寸） 桁行　南列西より　2.0+2.2　（6尺6寸＋7尺3寸） 梁間　東列　2.22（7尺3寸） 梁間　西列　2.32（7尺7寸）	2.09 （6尺9寸） 2.27 （7尺5寸）	第1建物跡と重複（不明）
第 3 建物跡	9.17×2.4	22㎡ 6.7坪	4×1	N-7°-W	桁行　西列北より 2.35+2.3+2.1+2.42(7尺7寸+7尺6寸+6尺9寸+8尺) 桁行　東列北より 4.8(2分間)+1.85+2.7(7尺9寸+7尺9寸+6尺1寸+8尺9寸) 梁間　北列　2.3（7尺6寸） 梁間　南列　2.4（7尺9寸）	2.31 （7尺6寸） 2.35 （7尺8寸）	第4・第5建物跡と重複（不明） 第4竪穴遺構を切る
第 4 建物跡	6.62×(3.96)	(26.22㎡) (7.9坪)	3×2（？）	N-9°-W	桁行　西列北より 2.32+2.1+2.2（7尺7寸＋6尺9寸＋7尺3寸） 梁間　北列西より 2.0+1.96（6尺6寸＋6尺5寸）+……	2.2 （7尺3寸） 1.98 （6尺5寸）	第3・第5建物跡を重複（不明）
第 5 建物跡	7.81×(1.4)	(10.9㎡) (3.3坪)	4×1（？）	N-3°-W	桁行　西列北より 2.02+2.02+1.92+1.85(6尺7寸+6尺7寸+6尺3寸+6尺1寸) 梁間　北列西より　1.4+……	1.95 （6尺4寸） 1.4 （4尺6寸）	第3・第4建物跡と重複（不明）
第 6 建物跡	5.75×6.8	39.1㎡ 11.8坪	3×2	N-72°-E	桁行　北列西より 1.9+1.95+1.88（6尺3寸＋6尺5寸＋6尺2寸） 桁行　南列西より 2.0+1.9+　（6尺6寸＋6尺3寸＋　　） 梁間　西列北より　1.92+3.0　（6尺3寸＋9尺9寸） 梁間　東列北より　2.4+……　（7尺9寸＋　　）	1.93 （6尺4寸）	第7・第8建物跡と重複（不明） 桁行2面に約1mの庇がつく
第 7 建物跡	2.58×1.9	4.9㎡ 1.49坪	1×1	N-16°-W	桁行　西列　2.58　（8尺5寸） 桁行　東列　2.5　（8尺3寸） 梁間　北列　1.74　（5尺7寸） 梁間　南列　1.9　（6尺3寸）	2.54 （8尺4寸） 1.82 （6尺）	第6建物跡と重複（不明）
第 8 建物跡	4.52×2.5	11.3㎡ 3.4坪	1×1	N-23°-W	桁行　西列　4.4　（14尺5寸） 桁行　東列　4.52　（14尺9寸） 梁間　北列　2.5　（8尺3寸） 梁間　南列　2.5　（8尺3寸）	4.46 （14尺7寸） 2.5 （8尺3寸）	第6建物跡と重複（不明）

で、第１・第４・第５建物跡の３棟は、柱穴の並びが調査区外までおよぶ可能性があり、全体規模については不明である。第６建物跡は、桁行３間×梁間２間で桁行の２面に庇のつく総柱の建物跡で、床張りの可能性が考えられ、検出された建物の中で最も規模が大きい。部分的な検出であるが、第１・第４建物跡も同規模程度の広さをもつものと思われる。一方、第２・第７・第８建物跡の３棟は、２間×１間あるいは１間×１間の建物跡で、前者に比して規模は小さい。次に、柱間寸法についてみると、桁行は1.85×4.52m、梁間では1.4～5.1mまであり、一定した数値を示さず、ばらつきがみられるが、桁行の柱間平均寸法でみると、第５・第６建物跡が1.93～1.95m、第１・第２建物跡が2.07～2.09m、第８建物跡の１間を２間分とみると、第４建物跡とほぼ同じの2.2m、第３建物跡2.31m、第７建物跡2.54mとなり、２mを境に数軒ずつのまとまりを示すことが言える。

次に、これらの建物跡を年代について考えてみたい。８棟とも出土遺物がないため、その所属時期を明瞭にし得ないが、第１・第３建物跡の２棟に関しては、後述する第３・第４竪穴遺



八沢要害遺跡

	桁行×梁間	平均値		桁行×梁間	平均値
A.第１建物跡	４間×１間	2.26	B.第３建物跡	６間×１間	1.98
A.第２建物跡	３間×１間	2.08	B.第４建物跡	３間×２間　南・西面に庇	2.29
A.第３建物跡	３間×１間	1.84	B.第５建物跡	４間×２間　東西に庇	1.98
B.第１建物跡	５間×１間　南面に庇	1.97	B.第６建物跡	２間×２間　総柱	1.96
B.第２建物跡	７間×１間	2.09	B.第７建物跡	５間×３間	1.99

持長地遺跡

	桁行×梁間	平均値
第１建物跡	５間×１間（４面庇）	2.01
第２建物跡	５間×１間（２面庇）	2.18
第３建物跡	４間×１間	2.14
第４建物跡	３間×２間（３面庇）	2.77
第６建物跡	４間×３間	2.25

観音沢遺跡

	桁行×梁間	平均値
第１建物跡	５間×４間　総柱	2.6
第２建物跡	.3間×２間　総柱	2.2
第３建物跡	５間×２間	1.8
第５建物跡	４間×１間	1.6
第６建物跡	３間×１間	1.6

平均値：単位（m）

第51図　各遺跡の柱間寸法
（小井川：1980を参考とした）

構との重複から江戸時代の遺構と考えられる。また、他の６棟であるが、古代の建物跡とは柱穴掘り方等に違いを見せることから、中世あるいは近世の建物跡と考えられる。

県内において中世と考えられる建物跡は、蔵王町持長地遺跡（黒川：1980）で鎌倉時代末期のものが、高清水町観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）で鎌倉時代後期～室町時代前期のものが検出されており、近世と考えられるものは、築館町八沢要害遺跡（小井川：1980）で江戸時代後期のものが検出されている。これらの柱間寸法は、第51図に示す通りで、中世のものにおいては、１間が1.6mと狭いものから2.77mと広いものまであり、必ずしも一定した柱間寸法をもって建物を築いているとは言えないが、近世のものにおいては、２m付近にやや集中する傾向がみられる。

こうした結果をもとに本遺跡の建物群を考えた場合、先にも述べたように２mを境に数軒ずつのまとまりを示すことなどから、近世のものに類似性を示すが、第３建物跡の柱間のように2.31mと広いものも近世には認められること、中世の建物の柱間寸法に規則性が見い出せない現状においては、傾向は指摘できても断言はできず、柱間寸法をもってただちに中世・近世と区別することは困難であり、資料的にも未だ不足の感がする。本遺跡の場合、建物間に重複があり時期差のあることは明らかであるが、新旧関係が不明なため建物の年代は推定の域を出ない。したがって、第２・第４・第５～第８建物跡の６棟に関しては、中世あるいは近世のいずれかに属する建物跡と大きくとらえておきたい。

(2)　竪穴遺構

Ａ平場で５基（第１～第５竪穴遺構）、Ｂ平場で２基（第６・第７竪穴遺構）の計７基検出されている。Ａ平場のものからみてゆく。第２竪穴遺構は、一辺２～2.2mほどの方形基調を呈するもので、桃山期と考えられる陶器皿の出土があり、ほぼ同時期の遺構と考えられる。また、第５竪穴遺構は、桃山期の陶器皿が出土する第３溝を切り、かつ江戸時代の所産と考えられる三引両押印の捺された火舎が出土していることから、江戸時代の遺構と考えられる。一方、第１・第３・第４竪穴遺構の３基は、出土遺物もなくその年代を決めかねるが、形態的に第２竪穴遺構と類似していることから、桃山期の遺構と考えてよいであろう。

次に、Ｂ平場で検出された第５・第７竪穴遺構であるが、いずれも２号堀に切られ、全体形を残してはいない。第７竪穴遺構からは、鎌倉時代後期と思われる陶器甕の出土があり、遺構の年代もほぼ同時期と考えられる。また、第６竪穴遺構は、出土遺物はないものの中世の遺構と思われる２号堀に切られていることから、その年代は中世あるいはそれ以前の可能性もある。

県内において類似の遺構は、大和町御所館跡（宮城県教委：1975）、築館町木戸遺跡（森：1980）、高清水町観音沢遺跡で検出されている。これらの中には階段状の出入口をもつもの、柱穴を伴うものなどもあり、必ずしも、本遺跡のものと同一視できないが、こうした付随する施

設をもたないものでは、規模・形態等に類似性が強く、特に観音沢遺跡Ｉｂタイプに似ている。観音沢遺跡では、こうした竪穴遺構の中で、特に階段状の出入口をもつものには、ある種の貯蔵庫としての倉の性格を与えており、ないものに関しても同様の性格を有するのではと推測している。

このような考え方を参考にするならば、本遺跡例も貯蔵用の施設の可能性が考えられるが、直接裏付けるような事実もなく、多くは不明である。

(3) 井戸

Ａ平場で２基（第１・第２井戸）、Ｃ平場で１基(第３井戸)が検出されている。いずれも素掘りのもので、平面形は円形を呈している。第２井戸は、１号堀が埋まってから構築されたもので、中世以降のものとも考えられるが、出土遺物もなく限定した年代を与えることはできない。また、第１・第３井戸は、遺構間での重複・出土遺物もなく、その年代については不明である。しかし、３基とも、掘立柱建物跡やピット群に隣接して認められることから、これらの遺構と有機的なつながりをもつものと思われ、その年代は、建物跡等の年代と大きく異なるものではないと考えられる。

(4) 土壙

Ａ平場で11基（土壙11～21)、Ｂ平場で７基（土壙22～28)、Ｃ平場で４基（土壙29～32）、Ｄ平場で３基（土壙33～35）の計25基が検出されている。平面形は、円形基調のものが多く、規模は、径あるいは長軸が1.5m前後、深さ40cm前後のものが多い。いずれも出土遺物がなく、年代を決め難いが、中世と考えられる１号堀あるいは第３溝等との重複から、土壙11～16・18・21・27は中世以降の遺構と考えられる。他の土壙の年代については不明である。また、土壙20のような風倒木穴と考えられるものもあるが、他のものに関しては、その性格を明らかにできなかった。

(5) 溝

Ａ平場で３本（第１～第３溝)、Ｂ平場で２本（第４・第５溝)、Ｄ平場で２本（第６・第７溝）の計７本が検出されている。このうち、出土遺物、遺構間の重複などから、第３溝～第６溝については、おおよその年代が推定できる。すなわち、第３溝は、桃山期と考えられる陶器皿の出土があることから同時期に、第４・第５溝は、土塁を切っていること、検出面が基本層位の第Ｉ層中であることから、近世以降の可能性が、第６溝は、後述する３号堀に切られていることから、中世あるいはそれ以前の遺構と考えられる。なお、第１・第２・第７溝については、出土遺物・遺構間の重複もなく、年代については不明であるが、第１～第３溝は、10～12ｍの間隔をおいて、いずれも東西方向に走り、規模も似ているなどの共通点があることから、これら３本の溝は、同時期に機能した遺構の可能性もあり（その性格については明らかにでき

ないが)、第１・第２溝の年代を第３溝と同時期とみることもできよう。

(6) 堀

堀は５本が検出されている。１号堀は、Ａ平場とＢ平場を画するもので、旧２号・２号・３号堀は、上段平場と下段平場を画する堀である。また、４号堀は、下段平場の周縁を巡るものと思われ、遺跡の外郭線を形成する堀の可能性がある。規模について見ると、１号～３号堀においては、上幅が５～７ｍと近似した数値を示すが、４号堀では、３～10ｍと一定した数値を示さず、湿地帯に接する北側の部分で幅が広くなっている。下幅では、１号・２号堀が 0.6～１ｍと狭く、旧２号・３号堀が 1.2～2.5ｍと幅広くなり、４号堀では 2.2～7.5ｍとさらに幅広くなっている。１号・旧２号・２号堀の底面(特に前２者において顕著である)には、段差のある部分や、堀と直交して地山を掘り残した堰状の施設も認められ、水堀の可能性が考えられる。こうした堰状の施設は、白石市地蔵院遺跡(佐々木：1980)、小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1976）などでも検出されている。前者では中世における館跡の裾を巡る堀に、後者では古墳時代前期の集落を画すると考えられる溝に認められ、堰をはさんだ溝底面の高さに違いが認められることから常に湛水状態を保つための機能を有する遺構であり、溝のもつ防禦的機能をより増大させる施設であると理解されている。

次に、堀の年代について考えてみる。遺物は、旧２号堀堆積土２層、５層中から出土している。いずれも陶器甕破片で、鎌倉時代後期頃の所産と考えられるものである。したがって、旧２号堀の年代は鎌倉時代後期頃と考えられる。他の４本の堀に関しては、出土遺物もなく、年代を決め難いが、旧２号堀との重複から、２号堀の年代は鎌倉時代後期以降、しかも、藩政時代における屋敷構え等に関する規制の厳しさ等を加味して考えるならば、その年代は中世期に限定されるであろう。１号・３号堀は、規模・堆積土、後に述べる構造等をも含めて考えると、その年代は、旧２号堀と同時期の可能性が強い。次に、４号堀であるが、他の堀に比して、規模に斉一性がなく、堆積土も全く異なっているため、前者よりは、むしろ新しい時期の遺構の可能性が強いように思われる。直接、館跡に伴なう遺構であるとすれば外郭線を形成するものであろうが、近世以降の新田開発等に関連した用水路の可能性も考えられないわけではない。

(7) 土塁

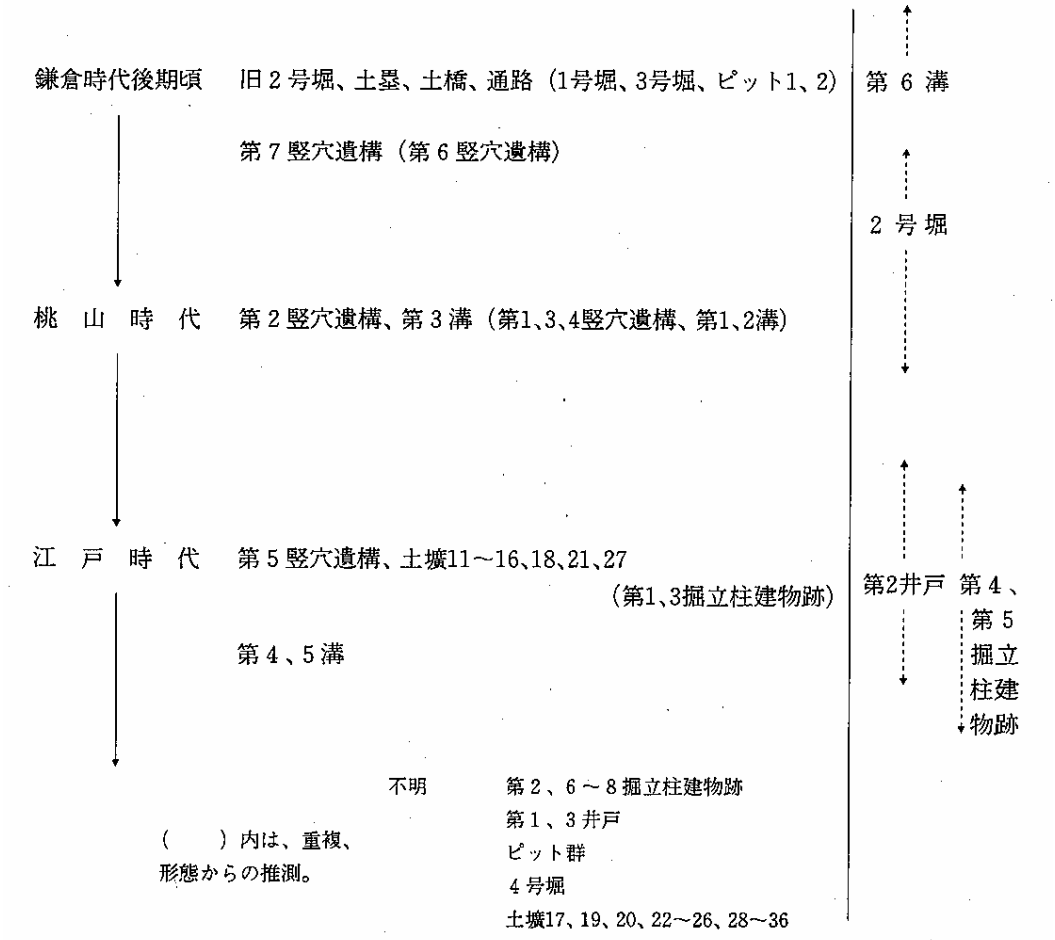
上段平場外縁に沿って築かれたもので、基底幅６～８ｍ、高さ 0.4～1.3ｍを測る。構築順序としては平場内側から外側に向って斜めに土砂あるいは礫を積んでいる場合が多い。崩壊土中から、旧２号堀中から出土した鎌倉時代後期頃の所産と考えられる陶器甕破片や、同期頃の作と考えられる懸仏が出土している。土塁の外側には、時期差のある旧２号・２号の２本の堀が巡り、土塁は、これら２本の堀のいずれか、あるいは双方と対をなし防禦の機能を果たしたものと思われる。したがって、その年代は、旧２号堀の機能していた鎌倉時代後期頃と考えたい。

(8)　土橋・通路・ピット

土橋は、旧２号堀西辺のほぼ中央部で検出されたもので、旧２号堀の一部を掘り残し、堀と直交して作られている。また、通路は、旧２号堀を挟んで土橋と対応する位置で検出され、斜面を登るように作られ、上段・下段平場を連絡している。これらの遺構の年代は、旧２号堀の機能した時期と同様に、鎌倉時代後期頃と考えられる。また、３号堀の北辺沿いに検出されたテラス状の部分も、３号堀の機能した時期の通路の可能性が考えられる。この通路は、Ａ平場、Ｂ平場を連絡するもので、下段平場への連絡としては、西端部と２号堀の接点から下る斜面を利用したものと思われる。

なお、１号堀底面で検出された２個のピット（P_1・P_2）は、柱痕跡はないものの、配置から見ると、掛け橋等の基礎に伴うピットの可能性も考えられ、堀同様の年代が与えられよう。

以上、検出された各遺構について、おおまかではあったが年代を与えてきた。遺構の年代は、鎌倉時代後期頃、桃山時代、江戸時代に大きく分けられ、以下のようにまとめられる。



５．館跡の構造

鶴ノ丸館跡は、舌状に突出した台地の先端部に立地し、南北長 210～250m、東西幅 120～150 mの規模をもつ概ね長方形を呈する館跡で、上下２段の平場から構成されている。

上段平場は、館跡のほぼ中央部に位置し、第４円形周溝等、前代の遺構の遺存状態から考えると、自然地形を巧みに利用し、かつ企画的に改変させて構築された平場と見ることができる。その規模は、南北長約 90m、東西幅約 70mで長方形を呈し、周縁部に土塁、堀が巡ることなどから、上段平場は、館跡の中でも中枢的な意味をもつ、一つの郭として把えることができる。

郭内は、１号堀によって内郭（A平場）と腰郭（B平場）に画され、内郭からは、掘立柱建物跡８棟、竪穴遺構５基、井戸２基、溝３本、土壙 11 基、通路などの遺構が検出され、腰郭からは、竪穴遺構２基、土壙７基と周縁部を巡る土塁などの遺構が検出され、土塁直下には、堀が配されている。

一方、下段平場は、１～２mの比高差をもって上段平場をとりまくように認められ、北・南で広く張り出し、周縁部では比高差もなく沖積地・湿地と接している。面積としては上段平場の約３倍にあたるが、検出された遺構数は少なく、井戸１基、ピット群、土壙７基と周縁を巡る堀（４号堀）、整地面である。

すなわち、本館跡は、堀と土塁で防禦された上段平場を郭とし、その周囲に一段低い腰郭的な平場を配しただけの単純な構造のものと言えよう。そして、先に述べた出土遺物の検討、遺構間の重複などから、館跡の創建は、鎌倉時代後期頃と考えられ、初期の段階において、すでに、堀、土塁といった防禦施設を備えた形が出来上がっていたものと思われる。そして、その後、堀の掘り替え等がなされているが、構造的には、何らの変化を示さずに江戸時代を迎え、ここにおいて下段腰郭に整地を行なうなどの事業が行なわれている。中世においては、上段の郭内に多くの遺構が検出されたわけであるが、江戸時代になると、下段をも広く生活の場として活用したものと思われ、このことは、第 30 図の地籍図に見られる〝大手〟という字名や、南東側に見られる宅地等の配置からもうかがうことができる。

６．館跡の性格

前項までに、館跡内から検出された遺構の年代、館跡の構造等について述べた。ここでは、館跡の性格、館主等について、文献をも含め考えてみたい。

本館跡は、県内各地に多く知られている丘陵頂部や尾根を利用して築かれた、いわゆる〝山城〟とは異なり、沖積地との比高差が頂部で約５mという台地の先端部に築かれた、いわゆる〝平城〟である。館跡の北側は、一迫川の形成した沖積地が広がり、眺望に開けているが、南

側は、館跡よりも標高の高い台地が東西に延び、視界を遮られている。館跡には、防禦施設としての土塁と二重の堀が配されてはいるが、山城等に見られるような急崖もなく、侵入は容易で、かりに周辺部の湿地帯をも防禦の施設（？）と握えても防禦性には劣り、軍事的色彩の薄い館跡と言える。

館跡内からは、部分的な調査にもかかわらず、掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸などの遺構や、陶器甕・皿、磁器椀、木鉢、石臼などの日常生活用具と考えられる遺物の出土があり、居住の場としての依存度が高く感じられる。これらの遺構・遺物は、鎌倉時代後期、桃山時代、江戸時代後期のものであり、このことは、本遺跡が中世から近世にまで使用されたことを物語っている。

次に、館主等について述べてみたい。館跡の創建年代は、鎌倉時代後期頃と考えられるわけであるが、本館については、「仙台領古城書上」、「八樟村風土記書出古館の項」にも全く記載がなく多くは不明である。しかし、江戸時代になると、栗原郡は、伊達藩の所領であり、「伊達世臣家譜」によると、八樟村は、伊達家々臣、茂庭定元が元和中（1619）に拝領していることがわかる。

茂庭

前略……駿河守政秀＿為レ租……定直……定元……元和中易＿名取郡茂庭邑於栗原郡八樟邑＿、比時領＿八樟川熊成田富四邑＿、乃保＿四百六十石餘之祿＿…定信…重常…重孝……秀興……元祿末（十五年壬午十二月二十五日）為＿召出家＿、明年（正月七日）賜＿所（註出＿西大條家譜＿）於舊地＿（茂庭邑去レ治四里許給＿宅市場及一廓家中舎二十區足軽舎山林＿）……後略……

茂庭氏は定元以後、五代が元祿十六年（1703）までの 84 年間にわたって八樟村に居住しているが、本館に居を構えたとする記録は何もない。ただ、出土遺物の中に、江戸時代初期～中期頃と考えられる伊万里焼きの皿があり、こうした遺物から、本館に居を構えた可能性も考えられないわけではない。

その後、茂庭氏の名取郡茂庭村への所替えに伴って、同じく伊達家々臣、西大條定賀が八樟村を拝領している。

西大條

前略……定賀＿為レ祖、……（元祿十六年発末正月）賜＿宅一廓侍舎十一區足軽舎五區及山林於栗原郡八樟邑＿、……略……

この時、西大條氏の石高は 1300 石余で、身分は、召出一番座で永世三引両御免の家柄である。しかし、その後の跡目相続が思わしくない、八代賀直の代には、「藩臣須知・御一門以下持出」の項に

永代御召出一番座　　三十五人

六百十六石六斗七升　　三引両御免

士　十一、足　十五　　西大條四郎賀直

の記載があるなど、石高に関しては拝領時の半分に減っている。

また、「八樟村風土記書出」によると、西大條氏の屋敷内には、樟明神社、牛頭（ごず）天王社の二社があったことが記されているが、「志波姫町史」では、この二社は、明治四十三年に鶴ノ丸館跡から志波姫神社に合祀されたとしていることから、西大條氏が八樟村の中でもこの地を屋敷地としていたことは、疑うべくもないところであろう。

次に、江戸時代以前についてみると、「栗原郡誌」、「志波姫町史」には、本館は、北東約１㎞の旧沼崎村にある日良館の館主、沼田氏の別館であったと伝えられ、館主沼田四郎宗綱天正十八年（1590）まで住むとある。

沼田氏について、「志波姫町史」では、代々沼田家の家老を務めたとされる小野寺家に伝わる系図書－初代定綱小野寺因幡守－

文治五年閏四月源頼朝公奥州泰衡征伐之節、和田義盛任、軍功有、葛西壱岐守清重より太刀拝領、合戦之後、葛西壱岐守任奥州奉行代官職、故に葛西家仕、葛西家臣沼田式部太夫政綱公仕、栗原郡一迫金田庄吾勝郷沼崎城主、政綱女妻之、□老後□□沼崎小野寺氏元祖也

を取り上げ、沼田氏は建久元年（1190）に、葛西清重から日良館を拝領した葛西家臣であることを伝え、代々の系図書から、南北朝期には建武三年（1336）の泉州阿倍野原合戦、興国三年（1342）の三迫の戦いに参戦するなど、葛西氏と動きを共にし、天正十八年佐沼城の合戦における葛西氏の没落に伴って断絶したとされている。

しかし、こうした記載は、本館に近い日良館々主沼田氏に関連する系図から、単に想定したものであると思われ、葛西氏の勢力が栗原地方に及んだ時期が南北朝以後のことなどを考えあわせると、葛西氏の臣としての沼田氏が鎌倉時代初期の段階から、この地に配され支配していたとするその理解は、必ずしも当を得たものとは言えないであろう。

本館の創建年代が出土遺物から考えて、鎌倉時代後期頃まで遡ることは間違いなく、こうした沼田氏との関連も考えられないわけではないが、「朽木文書」によると、鎌倉時代中・後期は、郡地頭狩野氏の一族が、沼崎郷に隣接する板崎郷は、文永２年（1266）狩野為時の四女文殊に、刈敷郷は、文殊の弟、甲斐六郎太為行に譲られるなど、村々に一分地頭として惣領的な広がりを示し、一族共同で一迫全体を支配していた時期でもあり、狩野氏との関連も考えなければならないものと思われる。

すなわち、本館の性格は、系図書等の真偽については明らかにし得ない現状であるが、中世においては、構造的に防禦性に劣ること、出土遺物として日常生活用具が認められることなど

から、軍事面よりも前面に展開する沖積地支配に主眼を置いた、狩野氏あるいは沼田氏と関連した武士の居館であり、近世においては、前代に使用された居館を拝領した伊達家々臣茂庭氏（？）、西大條氏の屋敷地として継承されたということができよう。

そして、宅一廓、侍舎十一區、足軽舎十五區等の遺構の存在を考えるならば、中世において郭として使用された上段平場よりも、より広い下段平場に多くの遺構（建物跡）の存在が予想され、場の活用も広い範囲に及んだものと思われる。

Ⅴ．ま　と　め

1．鶴ノ丸遺跡は、町中央部の台地が吹付附近から北に舌状に突出した先端部に立地し、その規模は南北約210m、東西約120mに及んでいる。

2．本遺跡は、縄文時代（晩期）、弥生時代（中期）、平安時代、鎌倉～江戸時代に至る複合遺跡である。

3．出土遺物には、縄文土器（大洞C_2～A´式）、弥生土器（大泉式）、土師器（塩釜式･表杉ノ入式）、須恵器、中世陶器、磁器、石製品（砥石・石臼）、木鉢、懸仏、古銭などがある。

4．検出された遺構には、竪穴住居跡７軒(塩釜式期５軒・表杉ノ入式期２軒)、方形周溝墓３基（塩釜式期）、円形周溝５基（塩釜式期）、土壙10基（弥生(?)１、平安２、不明７）などの中世以前のものと、掘立柱建物跡８棟、竪穴遺構７基、井戸３基、土壙 25 基、堀５本、溝６本、土塁、土橋、通路など中世以降のものがある。

5．塩釜式期の竪穴住居跡のうち３軒（第５～７住）と、第１方形周溝墓は、出土遺物の検討から同型式内でも古い方に位置づけられるものであり、他の方形周溝墓も配置や形態の類似性などからみると同様の時期と思われる。また、第１・第４住居跡と円形周溝については、特に新・古等の位置づけはできなかった。しかし、これらの中にも第１住居跡➞第１円形周溝という重複が認められ、三者を比較した場合、円形周溝の時期が最も新しい可能性も考えられる。

6．中世以降の遺構は、館跡を構成すると考えられるもので、出土遺物の検討から、館跡は鎌倉時代後期頃に創建されたもので、江戸時代の終りまで使用が認められる。

7．館跡は、土塁と二重の堀で画された長方形の上段郭と、それをとりまく下段の腰郭からなる単純な構造のもので、遺構の多くは上段郭から検出されている。館跡の性格としては、中世においては、前面に展開する沖積地支配に主眼を置いた武士の居館と考えられる。館主としては、狩野氏あるいは沼田氏と関連をもつ武士と思われる。また、近世においては、八樟村を拝領した伊達家臣茂庭氏、さらに西大條氏の屋敷地として使用されており、屋敷地は、中世において遺構の検出の少なかった下段の平場と広く活用した可能性が強い。

引用・参考文献（五十音順）

石田　尚豊（1976）：「手印」『新版仏教考古学講座』第４巻　雄山閣

伊藤・遠藤（1975）：「中世」『大和町史』上巻　大和町

伊東　信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第１巻　宮城県

一迫町教委（1977）：「巻堀遺跡」『一迫町文化財調査報告』第１集　一迫町教育委員会

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

宇田川　洋他（1975）：『青戸・葛西城址調査報告Ⅲ』葛西城址調査会

太田　昭夫（1980）：「大橋遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会

小野寺　祥一郎（1979）：「鶴ノ丸遺跡－宮城県文化財発掘調査略報－（昭和53年度分）」『宮城県文化財調査報告書』第57集　宮城県教育委員会

角田市教委（1976）：「梁瀬浦遺跡」『角田市文化財調査報告』第１集　角田市教育委員会

加藤　道男（1980）：「藤屋敷遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会

（1980）：「東館遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集　宮城県教育委員会

加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会

工藤・藤沼（1979）：「熊刈Ａ窯跡調査報告」『東北歴史資料館資料集』Ⅰ．東北歴史資料館

黒川　利司（1980）：「持長地遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会

栗原教育會（1918）：「中世」『栗原郡誌』栗原教育會

小井川　和夫（1980）：「八沢要害遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会

（1981）：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会

小牛田町教委（1976）：「山前遺跡」『小牛田町文化財調査報告書』第１集　小牛田町教育委員会

斎藤　吉弘（1979）：「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集　宮城県教育委員会

斎藤・真山（1980）：「宮沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会

佐々木　安彦（1980）：「地蔵院館跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集　宮城県教育委員会

紫桃　正隆（1973）：「栗原郡の古城・館」『仙台領内古城・館』宝文堂

志間　泰治（1971）：『鱸沼遺跡』東北電力・宮城県教育委員会

志波姫町史編纂委（1976）：『志波姫町史』志波姫町
鈴　木　　友　也（1978）：「御正体」『文化財講座・日本の美術（工芸・金工）』第９巻　第一法規
仙　台　市　教　委（1976）：「仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第 10 集仙台市教育委員会
（1978）：「南小泉遺跡－範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第 13 集　仙台市教育委員会
高　橋　・　中　島（1978）：「鶴ノ丸遺跡－宮城県文化財発掘調査略報－(昭和 52 年度分)」『宮城県文化財調査報告書』第 53 集　宮城県教育委員会
築館町史編纂委（1976）：「中世」『築館町史』 築館町
手　塚　　均（1980）：「留沼遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査親告書』第 69 集　宮城県教育委員会
東京・国立博物館（1979）：『日本出土の中国陶磁』東京美術
東北学院大考古研（1975）：「鳥屋窯跡群三角田地区発掘調査報告」『温故』第９号　東北学院大学考古学研究部
（1979）：「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第 12 号　東北学院大学考古学研究部
土岐山　　武（1980）：「安久東遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第 72 集　宮城県教育委員会
楢　崎　　彰　一（1976）：「瀬戸・美濃」『日本陶磁全集』第９巻　中央公論社
丹羽・柳田・阿部（1974）：「西野田遺跡－東北新幹線関係調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第 35 集　宮城県教育委員会
原　川　雄　二　他（1977）：『夕日長者・朝日長者遺跡調査概報』いわき市教育委員会
平　沢　・　手　塚（1980）：「佐野遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第 63 集　宮城県教育委員会
藤　沼　　邦　彦（1971）：「大橋遺跡－東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）」『宮城県文化財調査報告書』第 24 集　宮城県教育委員会
（1977）：「宮城県出土の中世陶器について」『研究紀要』第３巻　東北歴史資料館
藤沼・佐々木　他（1978）：「多高田窯跡調査報告書」『三本木町文化財報告書』第４集　三本木町教育委員会
藤沼・小井川　他（1980）：「宮城県」『日本城郭大系』第３巻　新人物往来社
三　上　次　男　他（1972）：『有田天狗谷古窯』有田町教育委員会
宮　城　県　教　委（1973）：「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第 33 集　宮城県教育委員会
（1975）：「御所館跡－宮城県文化財調査略報（48･49 年度分）」『宮城県文化財調査報告書』第 40 集　宮城県教育委員会

宮 城 県 教 委（1975）：「鶴ノ丸遺跡－宮城県文化財調査略報（48･49 年度分）」『宮城県文化財調査報告書』第 40 集　宮城県教育委員会

（1977）：「船渡前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 49 集　宮城県教育委員会

宮城県多賀城跡調 査 研 究 所（1977）：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1976　多賀城跡調査研究所

み わ　し げ を（1975）：『石臼の謎』産業技術センター

森　　貢　喜（1980）：「木戸遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集　宮城県教育委員会

山 形 県 教 委（1979）：「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第 17 集山形県教育委員会

遊 佐　五 郎（1980）：「宇南遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第 69 集　宮城県教育委員会

：「仙台領古城書上」『仙台叢書』第４巻

：「伊達世臣家譜」『仙台叢書』別巻

：「藩臣須知」『宮城県史』第 32 巻　宮城県

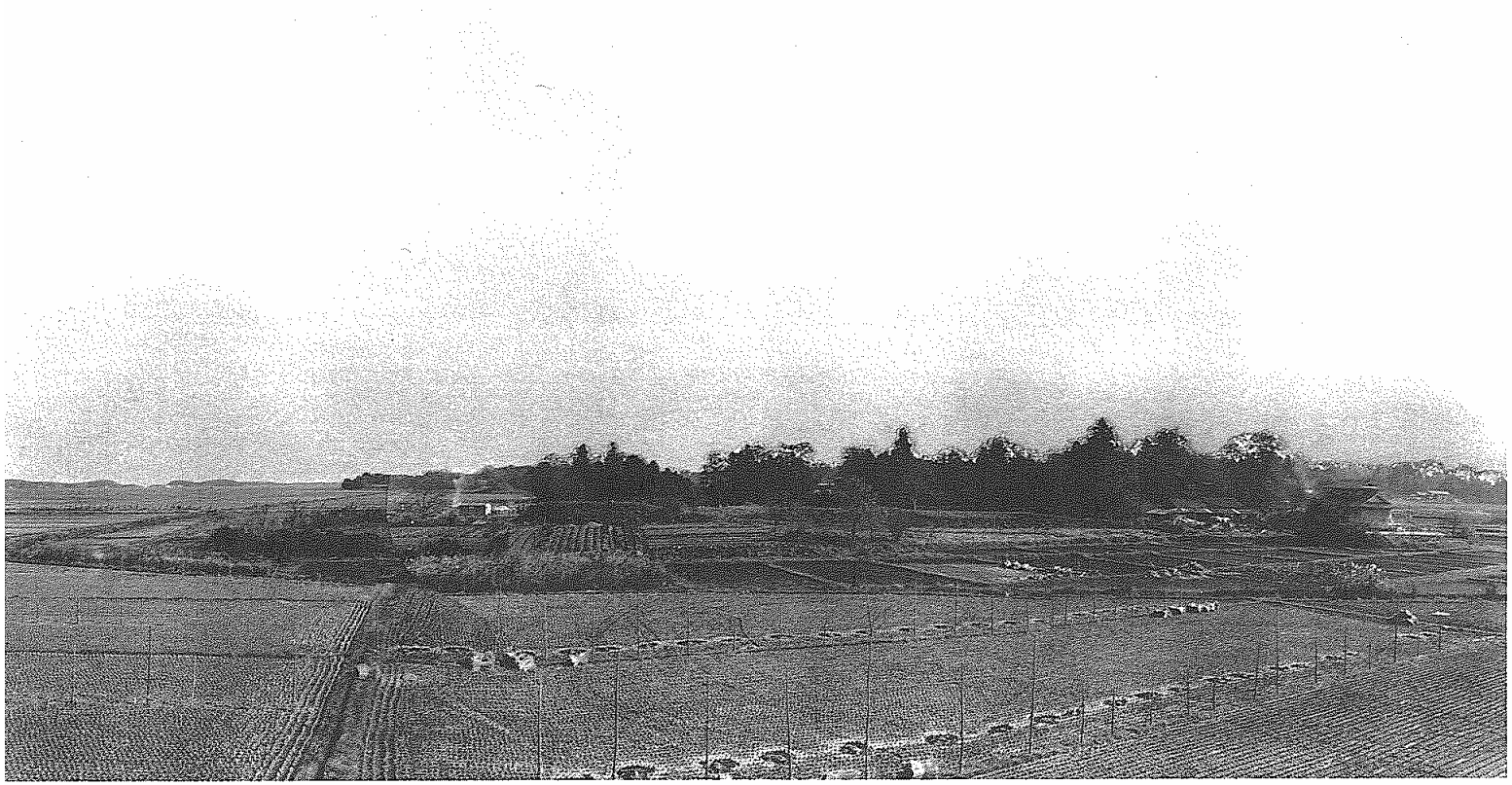
：「栗原郡八樟村風土記御用書出」『宮城県史』第 25 巻　宮城県

第 13 表　破　片　集　計　表

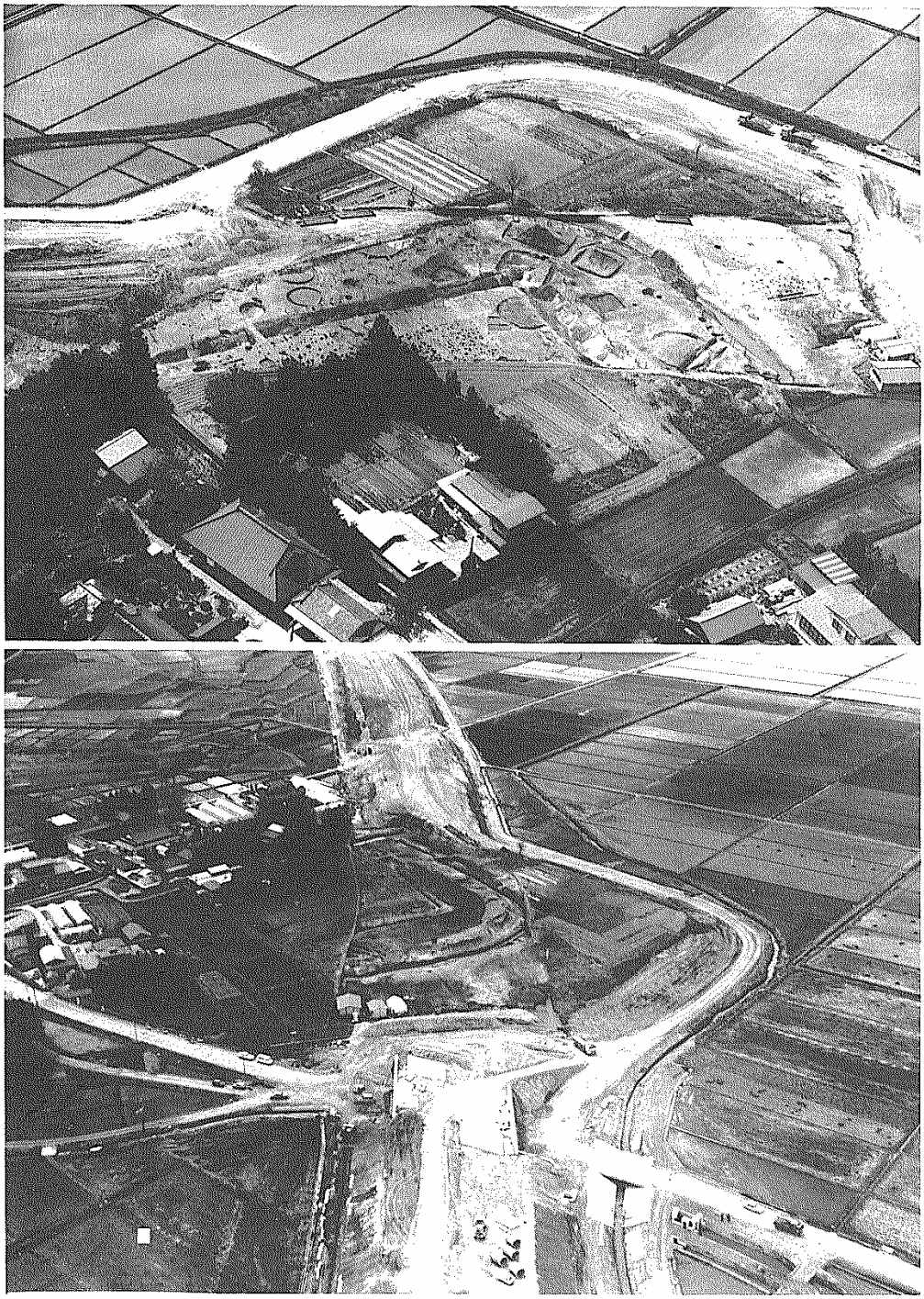
種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	第1住居跡 床面	第1住居跡 1層	第2住居跡 床面	第2住居跡 1層	第3住居跡 カマド	第3住居跡 2層	第4住居跡 床面	第4住居跡 1層	第4住居跡 2層	第5住居跡 床面	第5住居跡 1層	第5住居跡 2層	第5住居跡 3層	第6住居跡 床面	第6住居跡 2層	第6住居跡 3層	第6住居跡 4層	第6住居跡 5層	第7住居跡 床面	第7住居跡 貯蔵穴	第7住居跡 2層	第1方形周溝墓 底面	第1方形周溝墓 1層	第1方形周溝墓 2層	第3方形周溝 2層	第3方形周溝 3層	第1円形周溝 1層	第1円形周溝 2層	第1円形周溝 3層	第2円形周溝 1層	第2円形周溝 2層	第2円形周溝 3層	第4円形周溝 2層	第5円形周溝 2層	第1墓穴 2層	第3墓穴 2層	土壙7 2層	土壙7 3層	土壙10 1層	土壙10 3層	土壙5 1層	第1溝	第6溝	基本層位 Ⅰ層	基本層位 Ⅲ層	表採	不明	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ－ミガキ										1	1			1	1		1						1				1																				5
			ミガキ(円機)																																							1								1
			ミガキ(黒色)																																						1			1					2
			刷毛目		1										2																																			2
			ナデ		1									1																																				2
			不明													1																																		1
		縁部	横ナデ－ミガキ(黒色)																																											1				1
			横ナデ																											1																1				2
			刷毛目												1																																			1
			ナデ－不明																																											1				1
			ロクロ－ミガキ(黒色)			1	1		1																																3	9		1						16
			不明－ミガキ																																											1		1	2
			不明－不明												2																																			2
		体部	刷毛目－不明				2																							4														1						5
			ケズリ－ミガキ(黒色)	1			2																																									1		3
			ミガキ－ミガキ	1								2		1	3															1			1			1											1			11
			ミガキ(円機)													1																																		1
			ミガキ(黒色)								1																																							1
			ナデ																											1					1														2
			不明																							1		3																						4
			ナデ－ミガキ															1																																1
			ロクロ－ミガキ(黒色)																																						2	11				1				13
			不明																																			3												4
			不明－ミガキ(黒色)																																													1	1
			ナデ																																													1	1
			不明														1																1															2	4
		底部	ケズリ－ロクロ																																								1							1
			ミガキ－ミガキ																																													1	1
			ミガキ(黒色)																																										1				1
			糸切り－ミガキ(黒色)					1																																	1	4								6
			不明－不明																																									1	1		1		3
	甕	口縁部	刷毛目－刷毛目																						1		1																	1		1	1			4
			刷毛目－不明																							8																								8
			ミガキ－ミガキ	1																											1																1			3
			ナデ																							2																								2
			不明																							1										1														2
		縁部	横ナデ－刷毛目	1																																														1
			横ナデ			1						1									1								1	1												1			2	2				10
			不明																																											1				1
			ロクロ－ロクロ																																							6								6
			不明－横ナデ											1																			1																		2
		体部	刷毛目－刷毛目	1	13								2		4	10	6								3	1		2		2									3	1		2									50
			ケズリ																											3																				3
			ミガキ	1												6				3						12				1																				23
			ヘラナデ										3			2						3		2																							1			11
			ナデ		1		1							1		4			1	2										3	1						3										2			19
			不明										2	6	7	12										4	1															2								34
			ケズリ－刷毛目				1		1	1					3	7						1										1											9		1			1			26
			ミガキ			1																																												1
			ミガキ(黒色)				1																																		1									2
			ヘラナデ																													2																1	3
			ナデ			1																								2						1					1	4					1	1	13
			ロクロ																																							4					3	1	4
			不明			3		2						6	4	4																				5						4	7				1		3	39
			ミガキ－刷毛目										7	2	11	14	1									3																					1			39
			ケズリ		2																																													2
			ミガキ	3	5											2				1						1				1	4	3		1		1											2			24
			ヘラナデ										2					7						4																						1			14
			ナデ							2			1	8											2	5				2						1									1				22
			不明											3	3	9	3									4	3																							25
			ナデ－刷毛目												1																																			1
			ナデ			2															1											1										1								5
			不明												2	2																										1				1				6
			平行タタキ－ナデ																																											1				1
			ロクロ－刷毛目																																					1		1								1
			ミガキ(黒色)																																						1									1
			不明－刷毛目										4	3						1						1					3																1			13
			不明－ミガキ(黒色)																																								1							1
			ヘラナデ														3																																	3
			ナデ														2	1														3			1								1								8
			不明	4	4			5			4		4	33	41	27	1	2	2	8	4				4	22				18	1	2										10	23				1	2	5	5	232
			円形浮文																		1																										1	2	5	5	1
		底部	ケズリ－刷毛目			1																																												1
			ヘラナデ																						1																									1
			ナデ																			1								1																	1			3
			不明												1	1														1													1							4
			ミガキ－刷毛目																											1																1				1
			ミガキ																											1																				1
			ナデ－ナデ																										1																					1
			不明													1												1														2								4
			回転糸切り－刷毛目																																							1								1
			不明																																							1								1
			不明－刷毛目																											1													1							2
			ナデ																																							2					1			2
			ロクロ																																											5				1
			不明			1						3			1															1												1	2			2				14
須恵器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ			1		2									1																									4	11			2			1	3	25
		体部	ロクロ－ロクロ						1																													1					1	6		1					10
		底部	平持ちヘラケズリ																																												1				1
			回転ヘラケズリ																							1																									1
			ヘラ切り		1																																						1								2
			回転糸切り				3										1																										8		1	1			2		15
	甕	体部	ケズリ－刷毛目																																								1						1	2
			ナデ		1	1																																			1					1				4
			ロクロ														1																																	1
			平行タタキ－刷毛目																																							2				1				3
			ナデ		1	2																				1															2			2		3			11
			平行タタキ			1																																				1					2			4
			ロクロ																																													1	1
			不明																																							1						1	1	4
			ロクロ－ナデ																																											1	1			2
			ロクロ			2			1		1						1																									2	2			1	3	3	2	2	18
			不明－ロクロ			1																																													1
			不明																																							1									1
		底部	ヘラ切り																																								1								1
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ																														1										1								2
		体部	平行タタキ－ロクロ																																											1				1
			ロクロ－ロクロ						2																																				2	1	1			1	7
	壺	突帯部	ロクロ－回転ヘラケズリ																																														1	1
計				12	29	22	6	10	6	1	8	6	26	66	86	103	28	4	3	16	7	4	5	2	11	68	4	7	2	49	11	8	2	4	1	9	4	1	3	3	1	44	126	1	7	9	10	43	17	28	923

写　真　図　版

図版 1



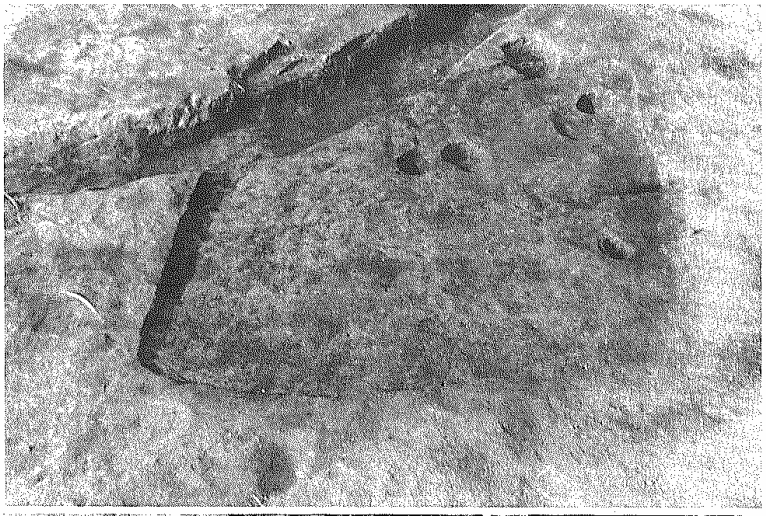
遺跡遠景



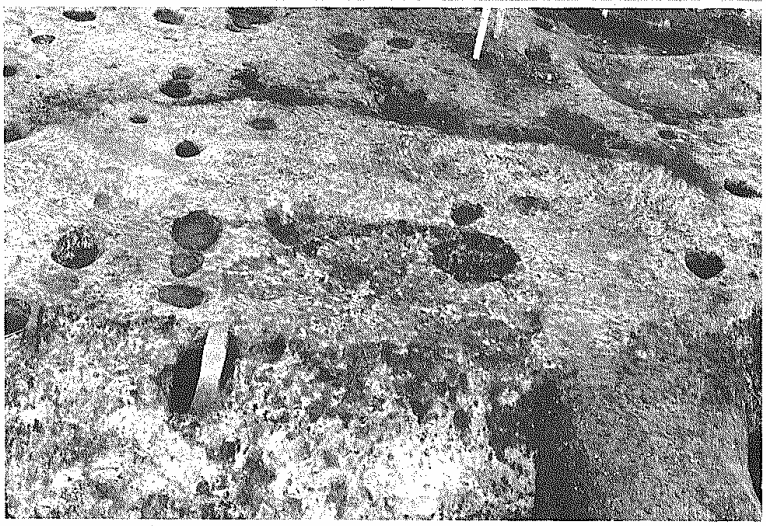
図版２　遺跡全景　上：南東より
下：北東より

図版２

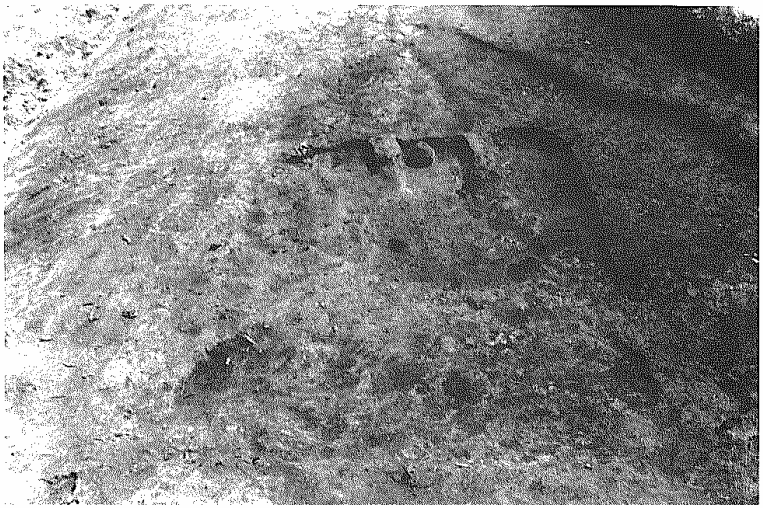
第１住居跡



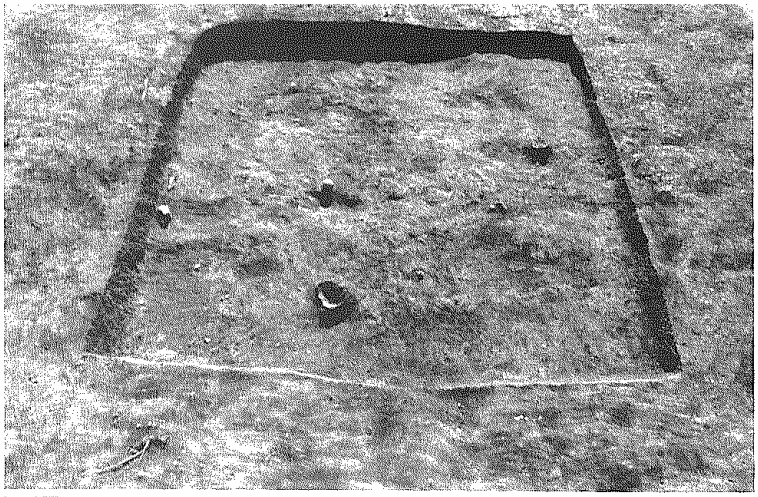
第２住居跡



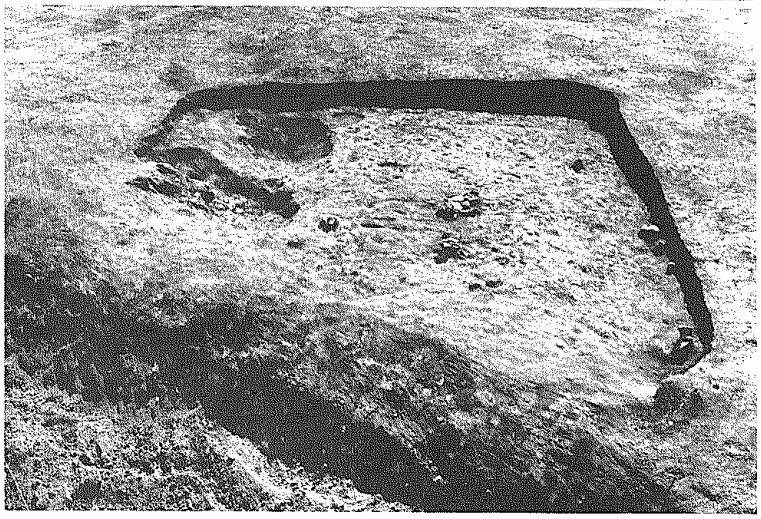
第３、４住居跡



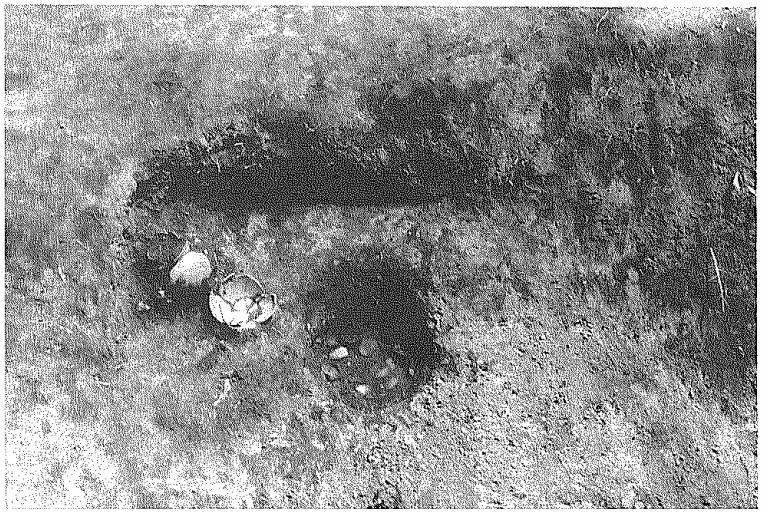
図版３



第５住居跡



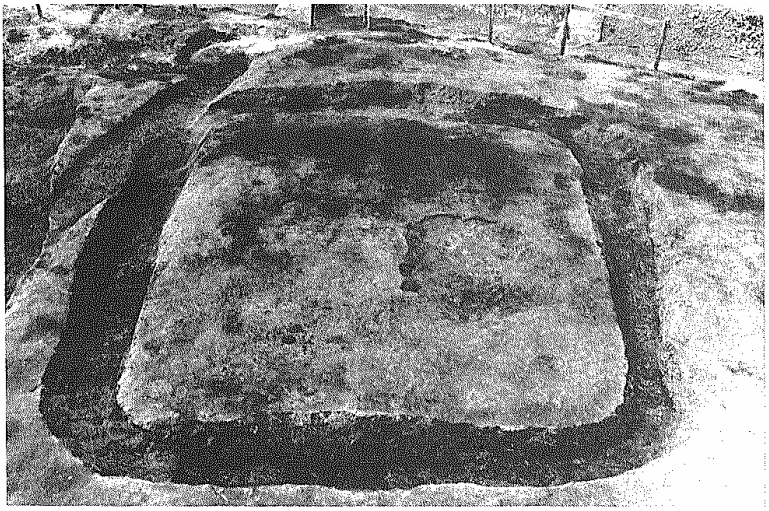
第６住居跡



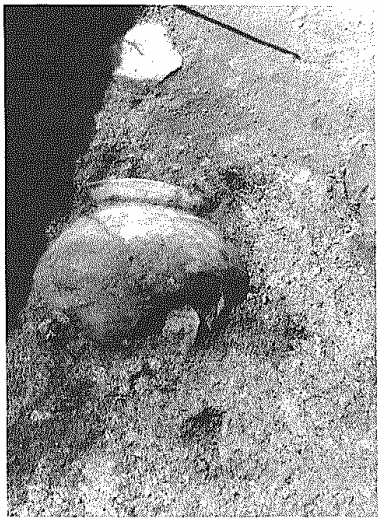
第７住居跡

図版４

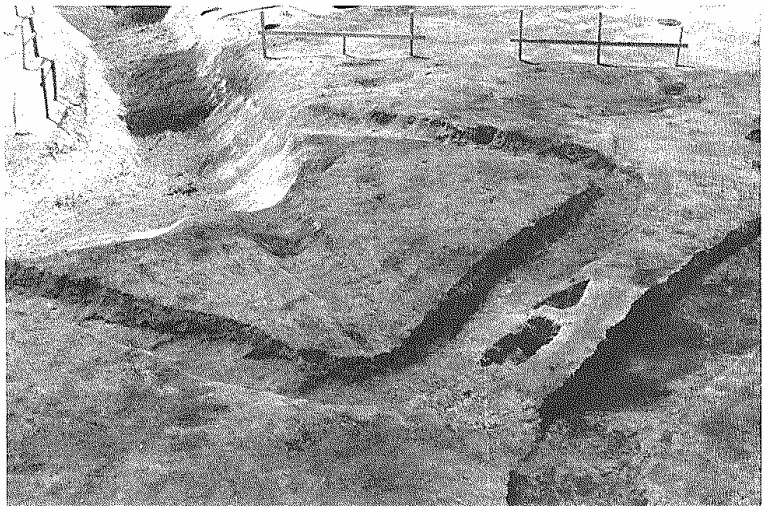
第１方形周溝墓



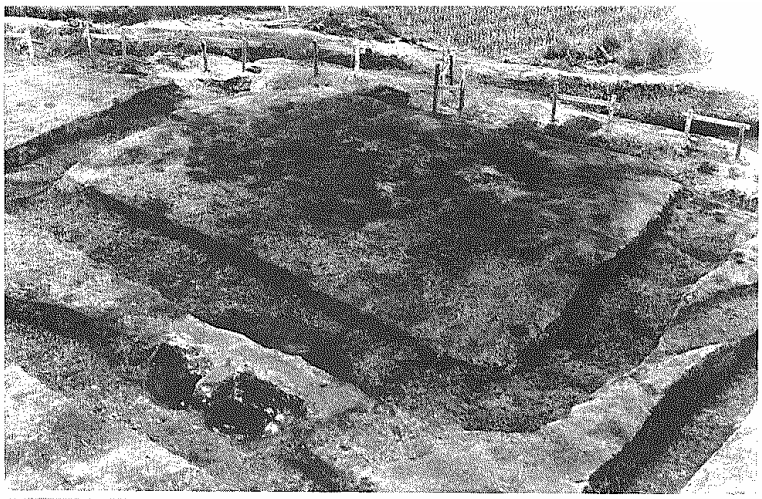
同上　　右
遺物出土状況　左



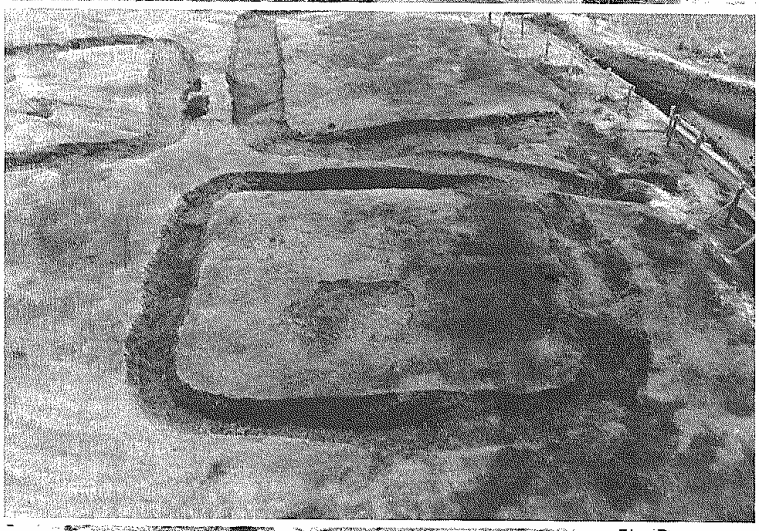
第２方形周溝墓



図版５



第３方形周溝墓



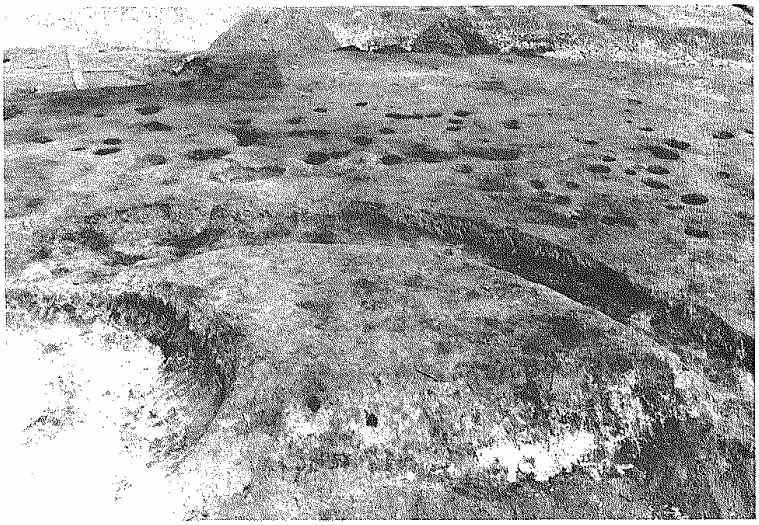
第１～第３方形周溝墓

第１円形周溝

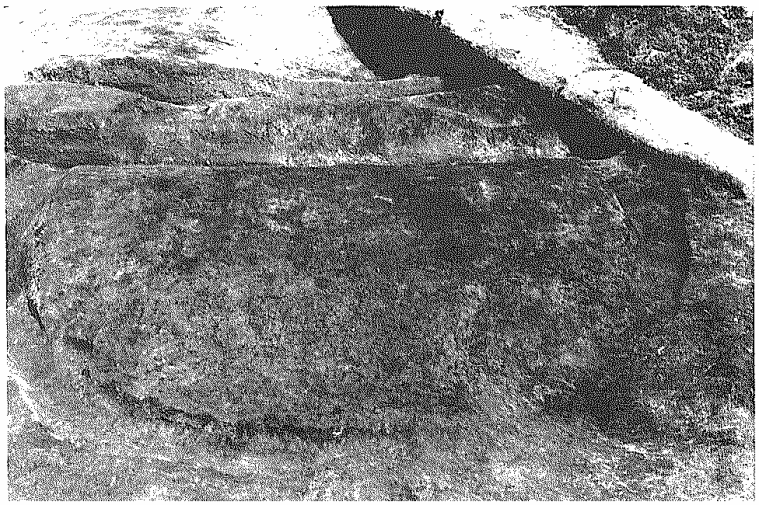
図版６

第２・第３円形周溝

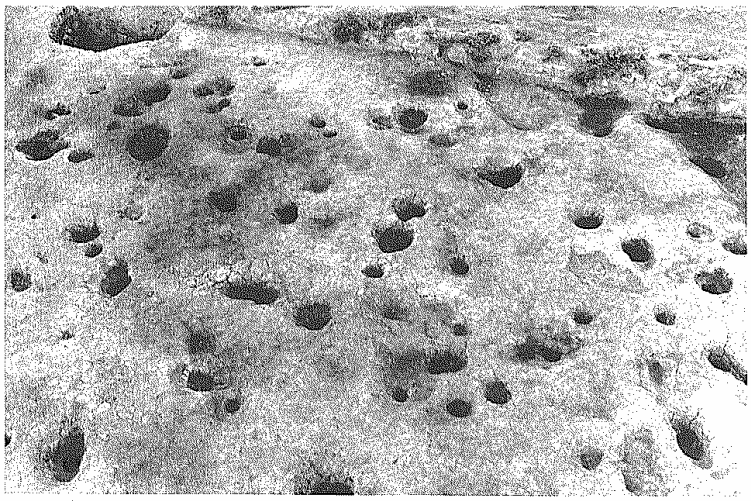
第４円形周溝



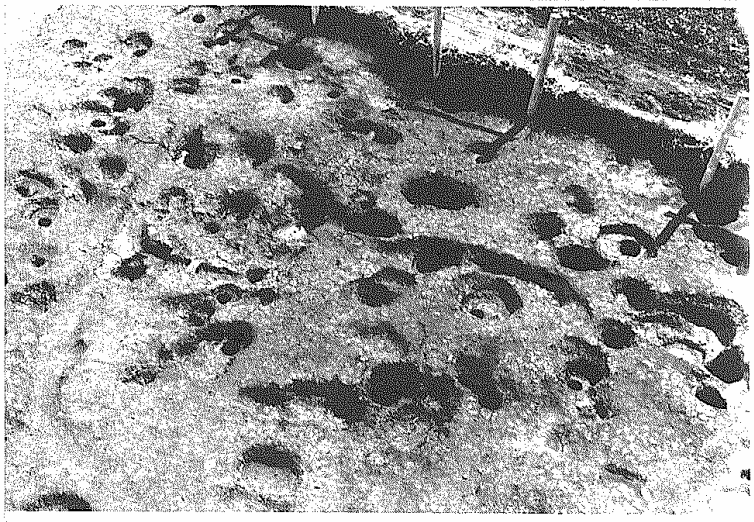
第５円形周溝



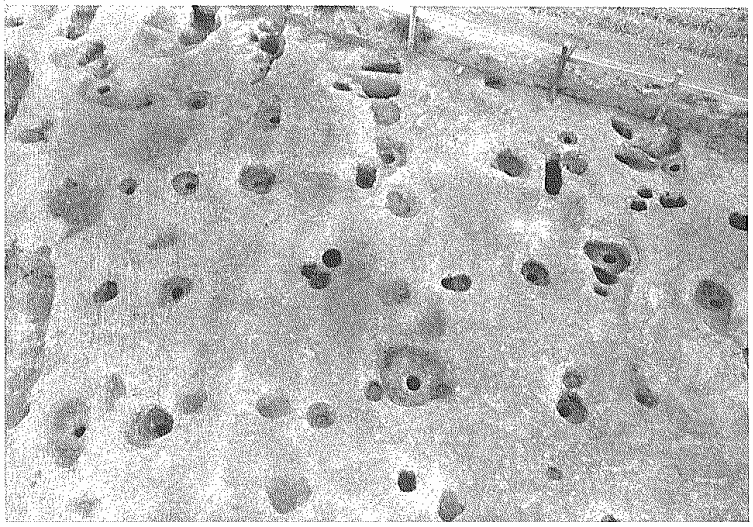
図版７



第１・第２掘立柱建物跡
とピット群



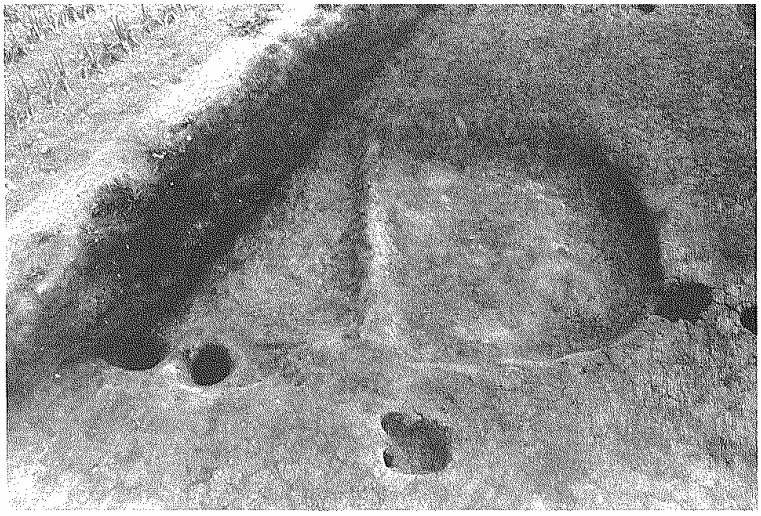
第３～第５掘立柱建物跡
とピット群



第６～第８掘立柱建物跡
とピット群

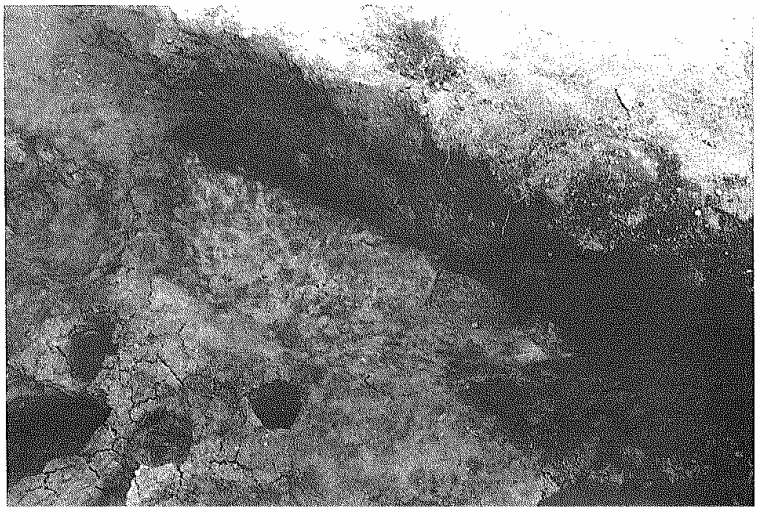
図版８

第１・第２竪穴遺構

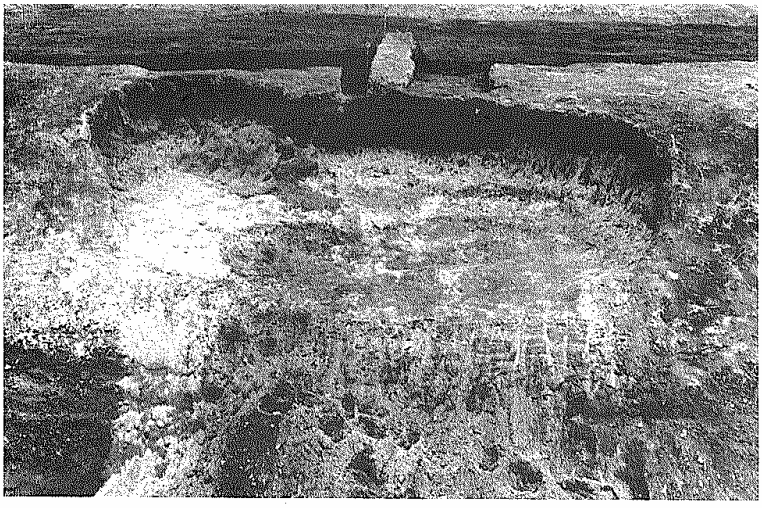


第３竪穴遺構

第４竪穴遺構

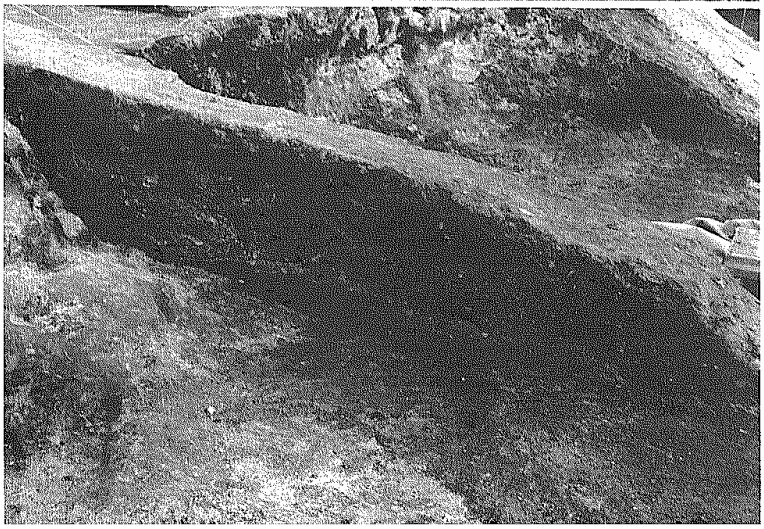


図版９



第７竪穴遺構

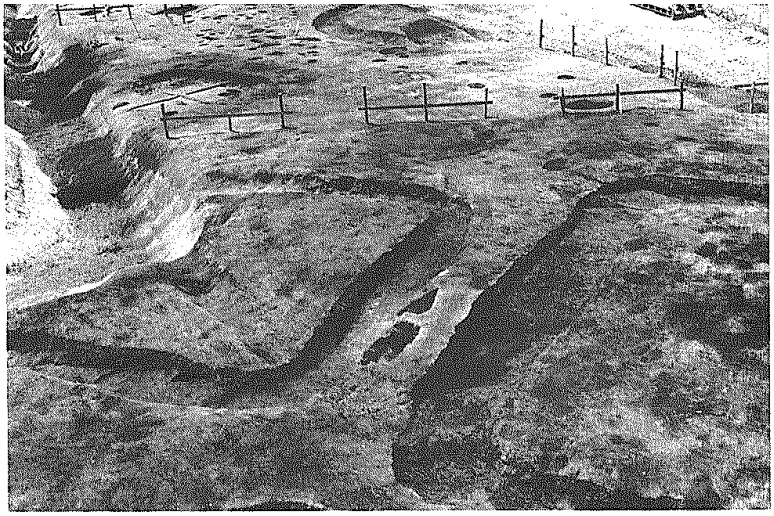
同上
堆積土断面（南北）



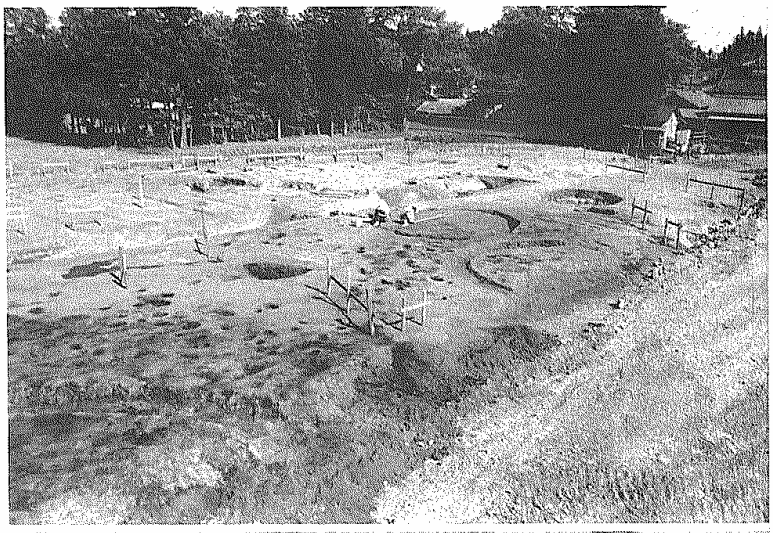
同上（東西）

図版10

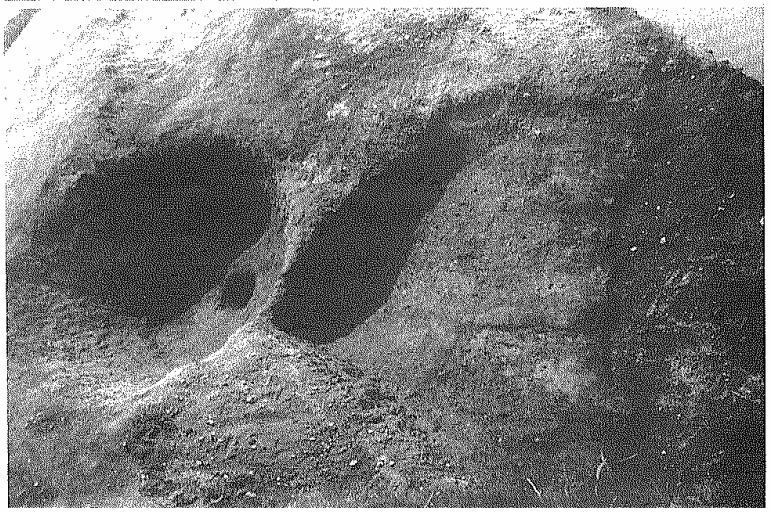
B平場遺構



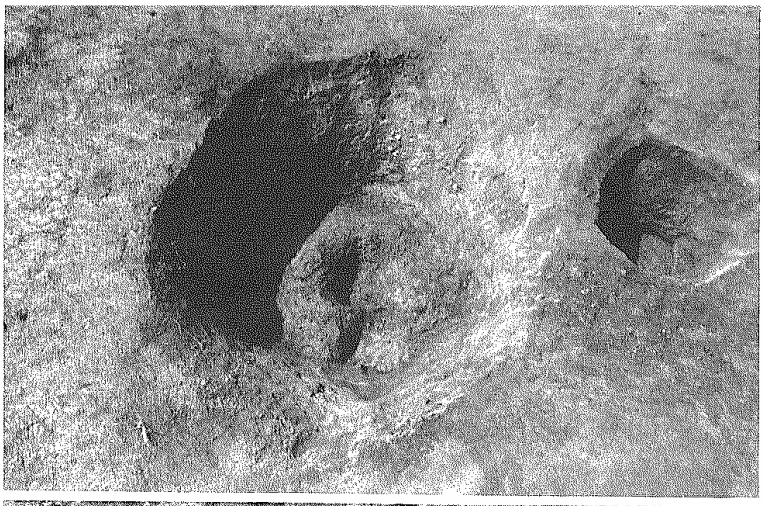
A・B平場遺構



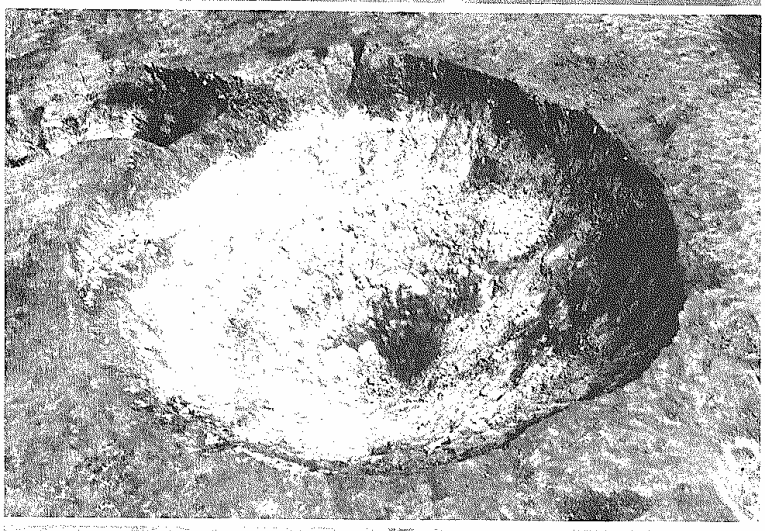
土壙９と第６竪穴遺構



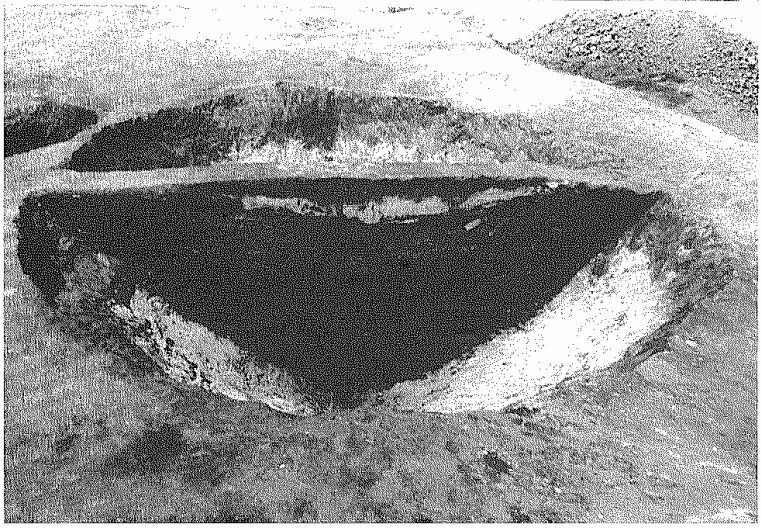
図版11



土壙８



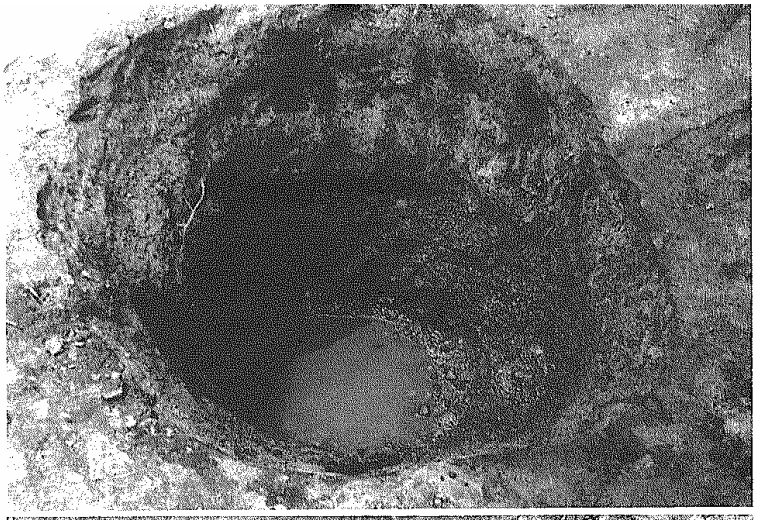
土壙10



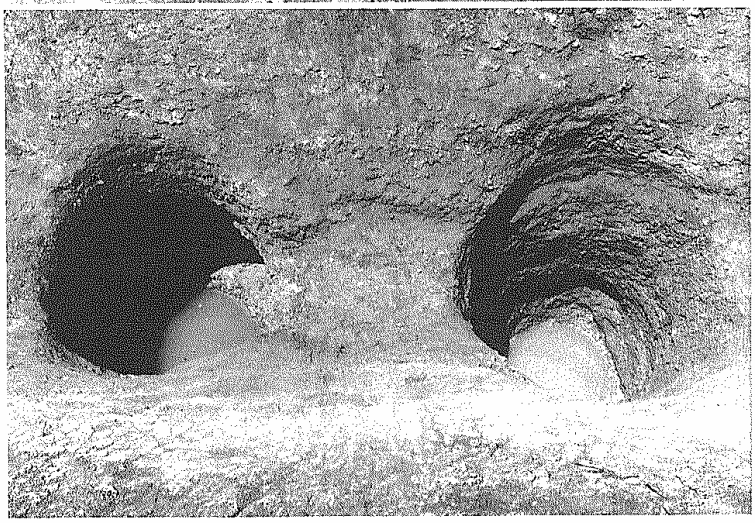
同上
堆積土断面

図版12

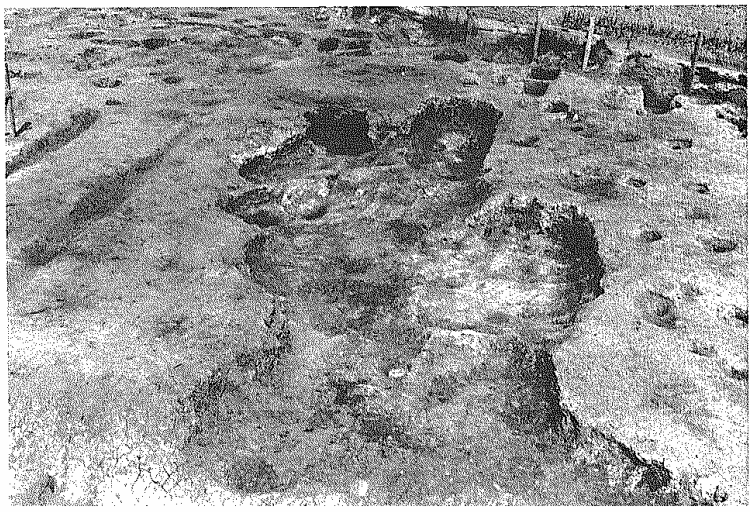
１号堀内ピット２



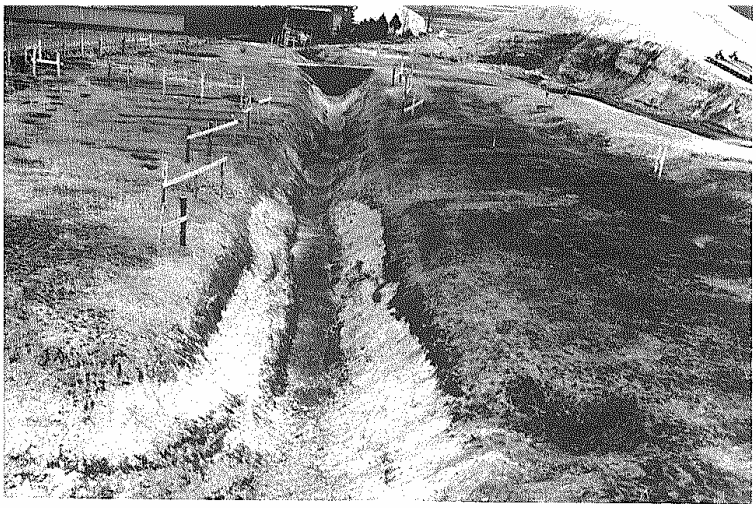
１号堀内ピット１・２



Ａ平場土壙群と第３溝



図版13



1号堀（西辺）

1号堀（北辺）

2号、旧2号堀（北辺）

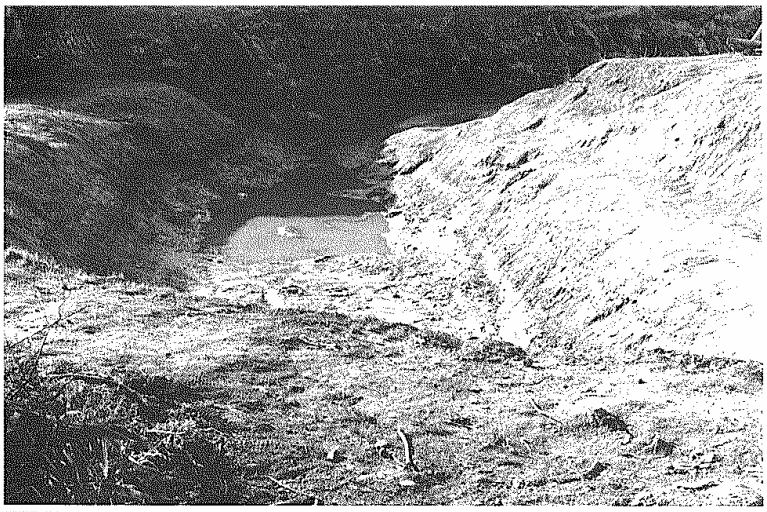
図版14

２号堀調査風景（西辺）

２号・旧２号堀（西辺）

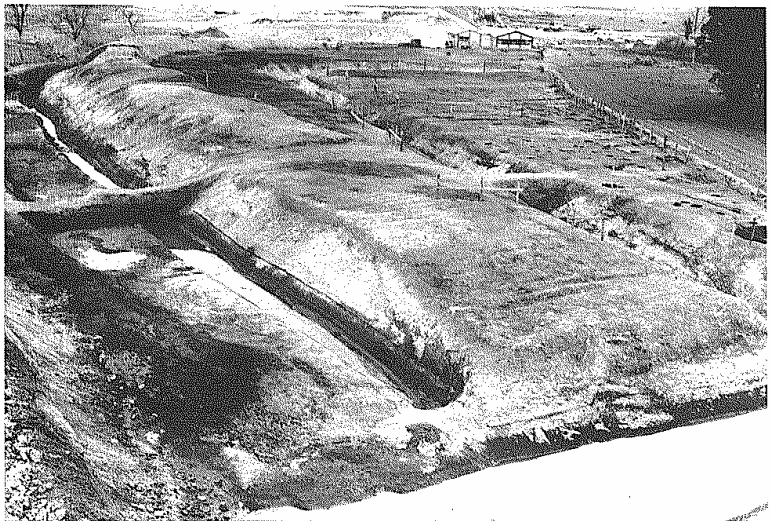
３号堀と通路

図版15



３号堀と通路

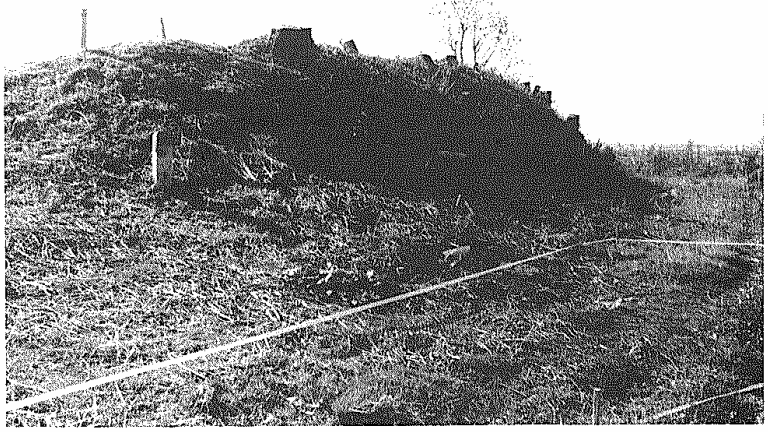
４号堀（南端）



上段平場
調査区全景

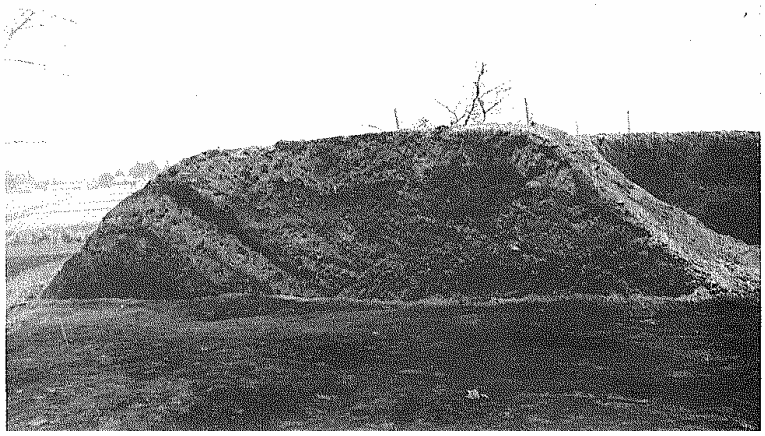
図版16

同上（積土断面）

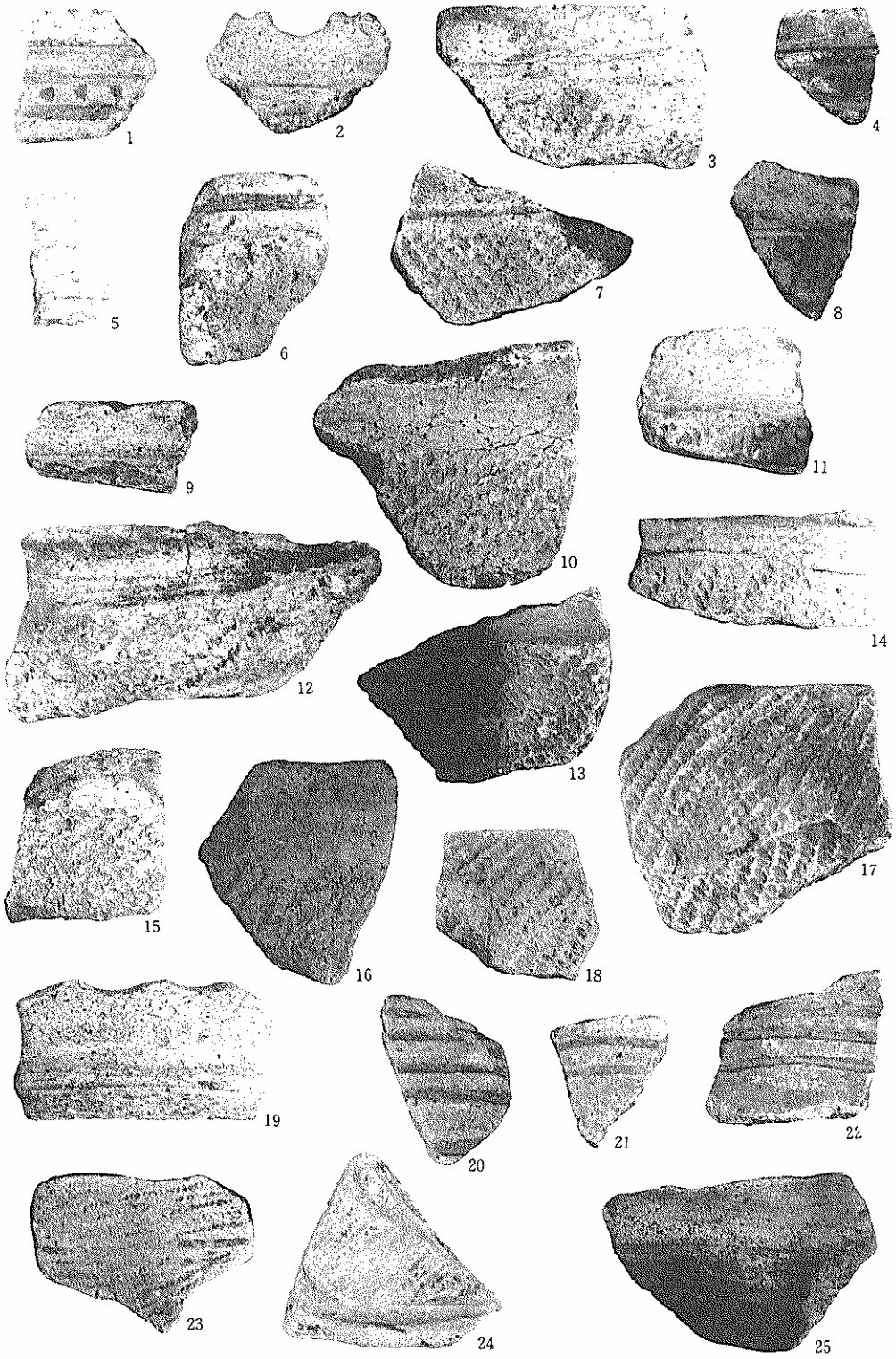


同上（発掘後）

土墨（発掘前）

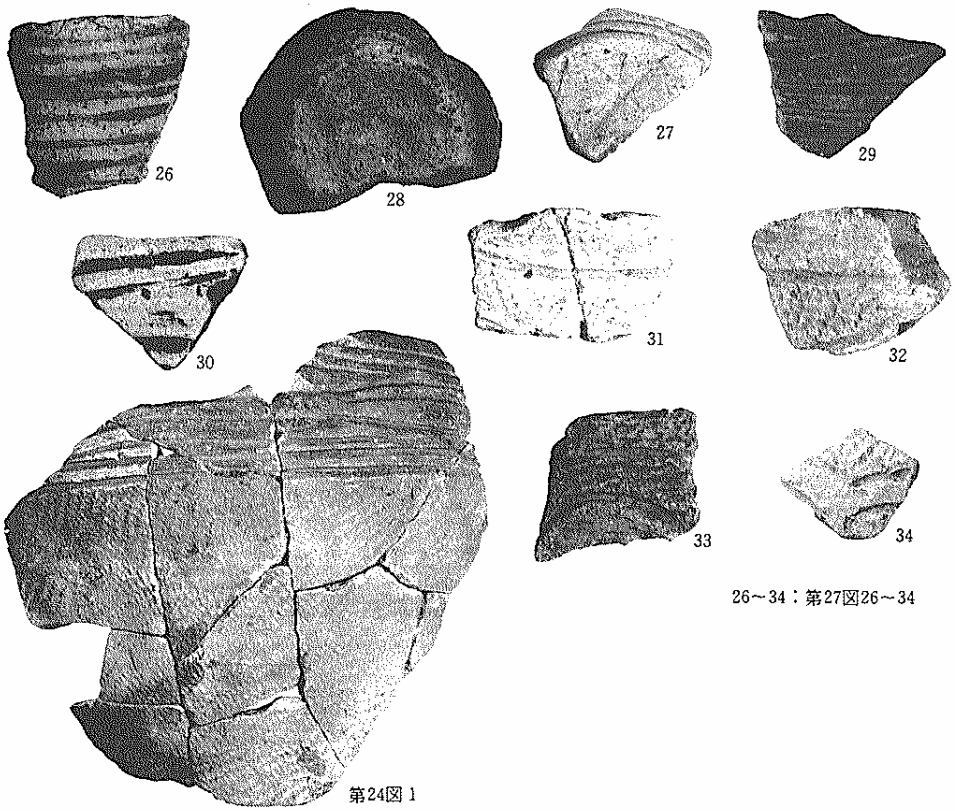


図版17

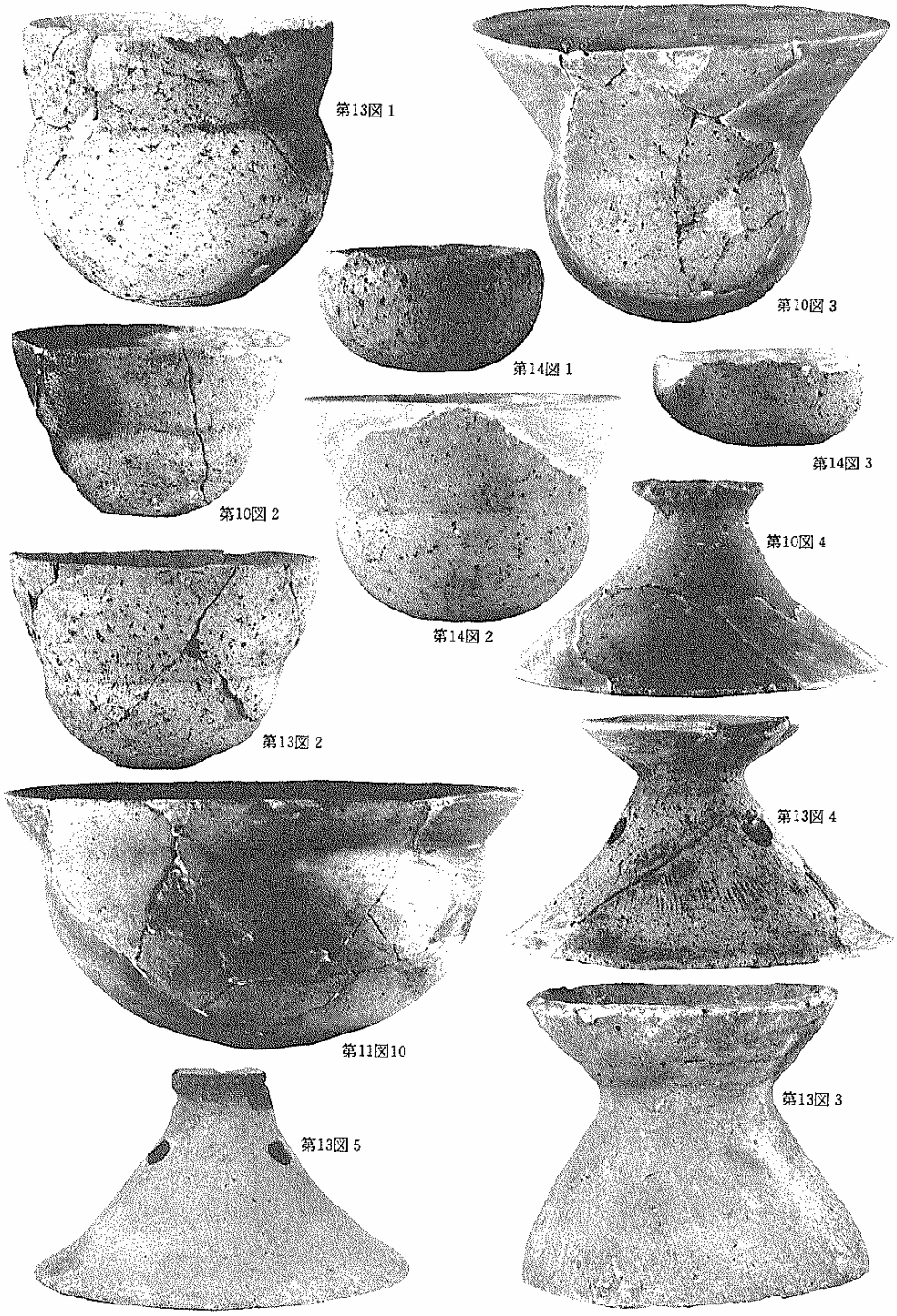


1～25：第27図1～25

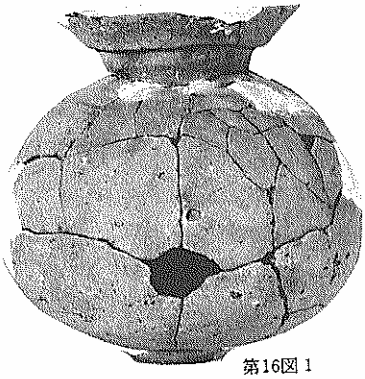
図版18　縄文土器



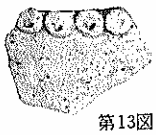
図版19　縄文・弥生土器



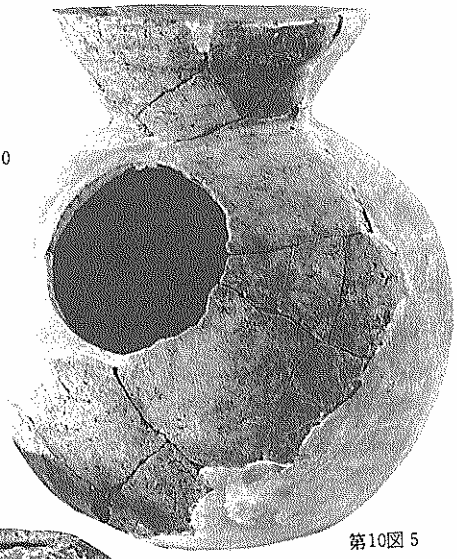
図版20　古墳時代前期の土師器



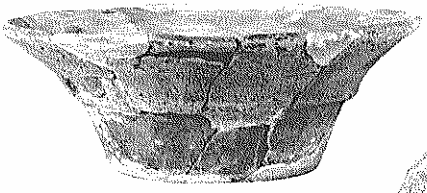
第16図 1



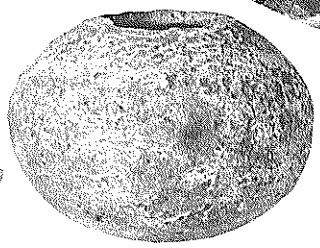
第13図10



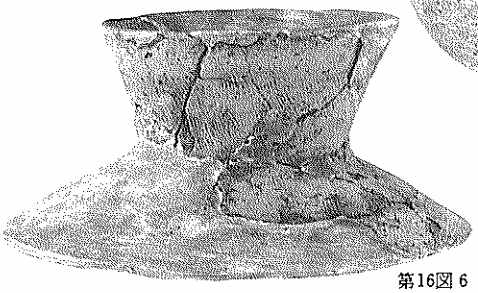
第10図 5



第13図 7

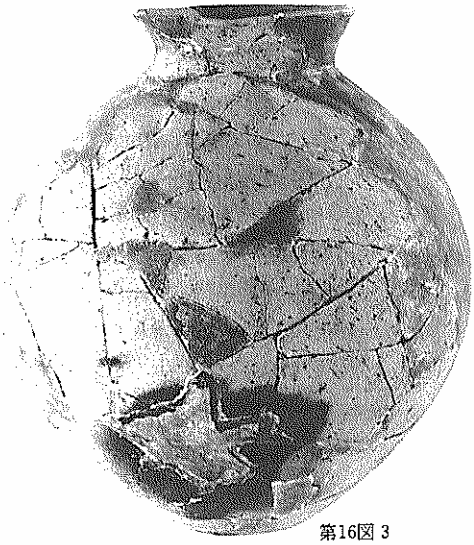


第10図 6

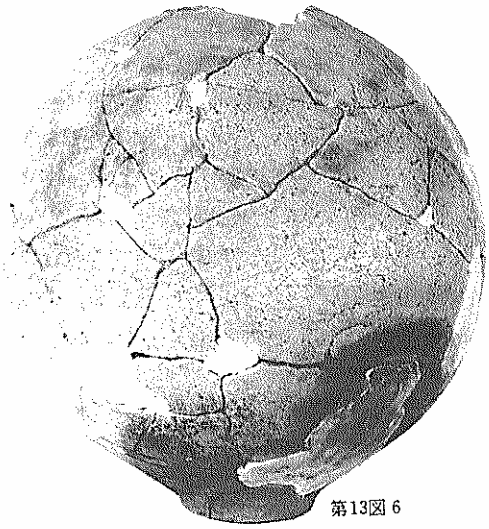


第16図 6

第13図 6

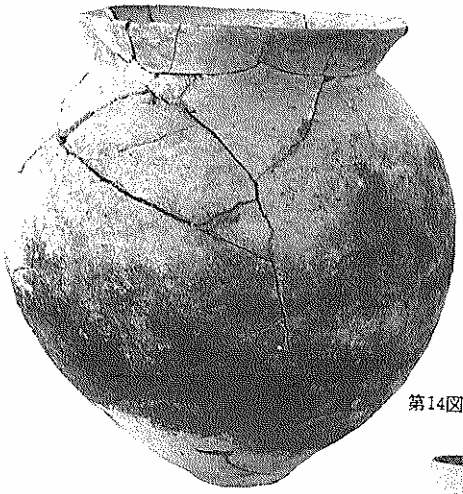


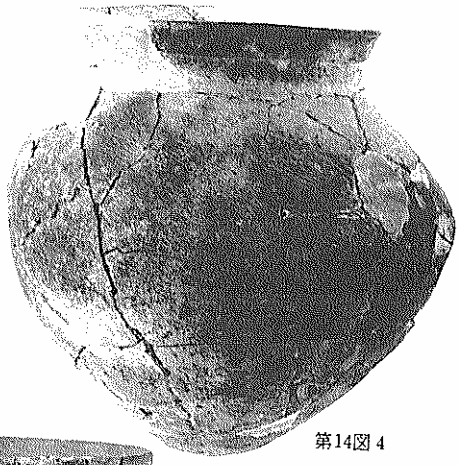
第16図 3

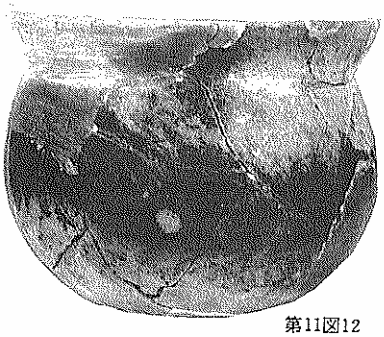


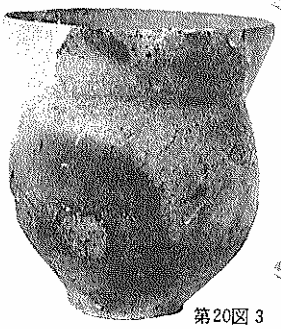
第13図 6

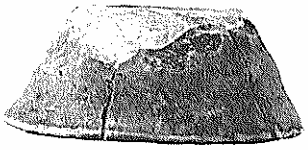
図版21　古墳時代前期の土師器

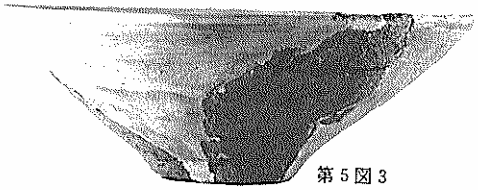

第14図 5


第14図 4

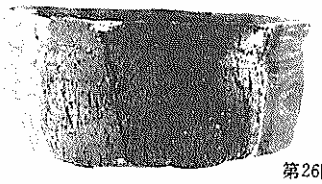

第11図12

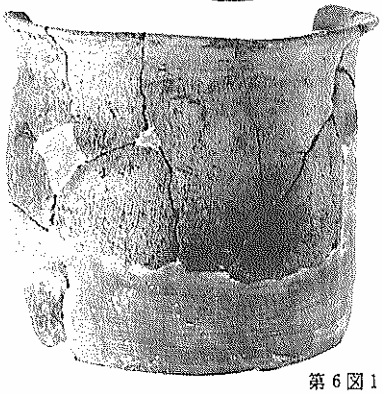

第20図 3

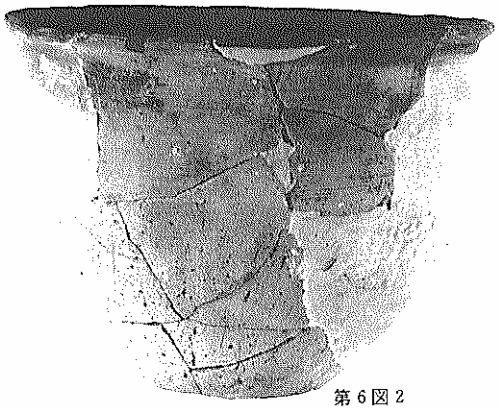

第10図 8


第 5 図 3

第 8 図 1

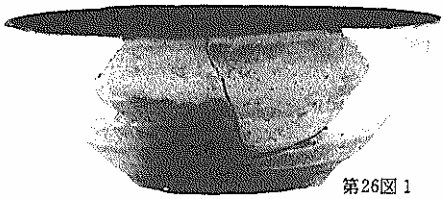

第26図 2

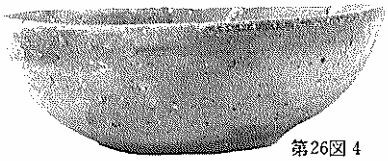

第 6 図 1

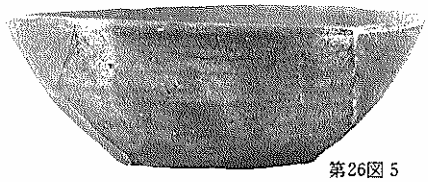

第 6 図 2

図版22　古墳時代前期、平安時代の土師器

第 6 図 4

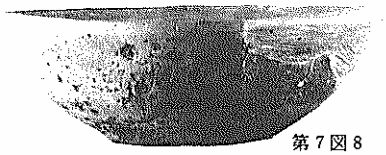

第26図 1

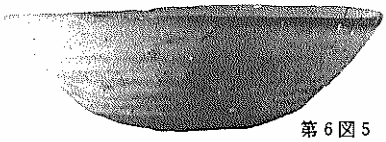

第26図 4

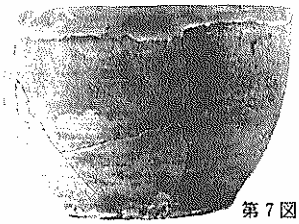

第26図 5

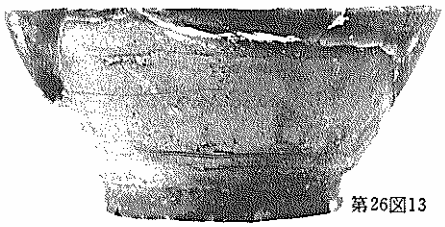
第 7 図 7

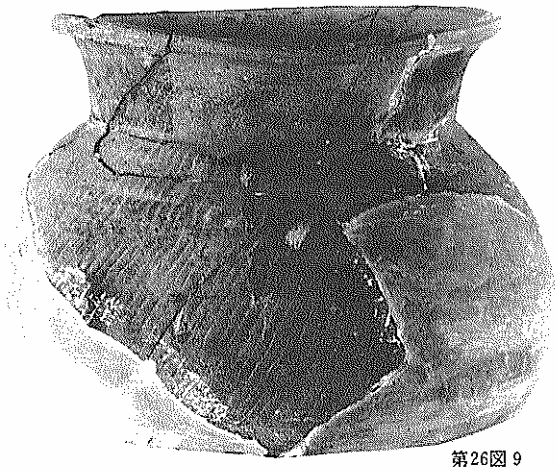
第26図 7

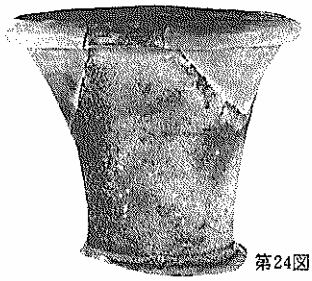

第 7 図 8


第 6 図 5

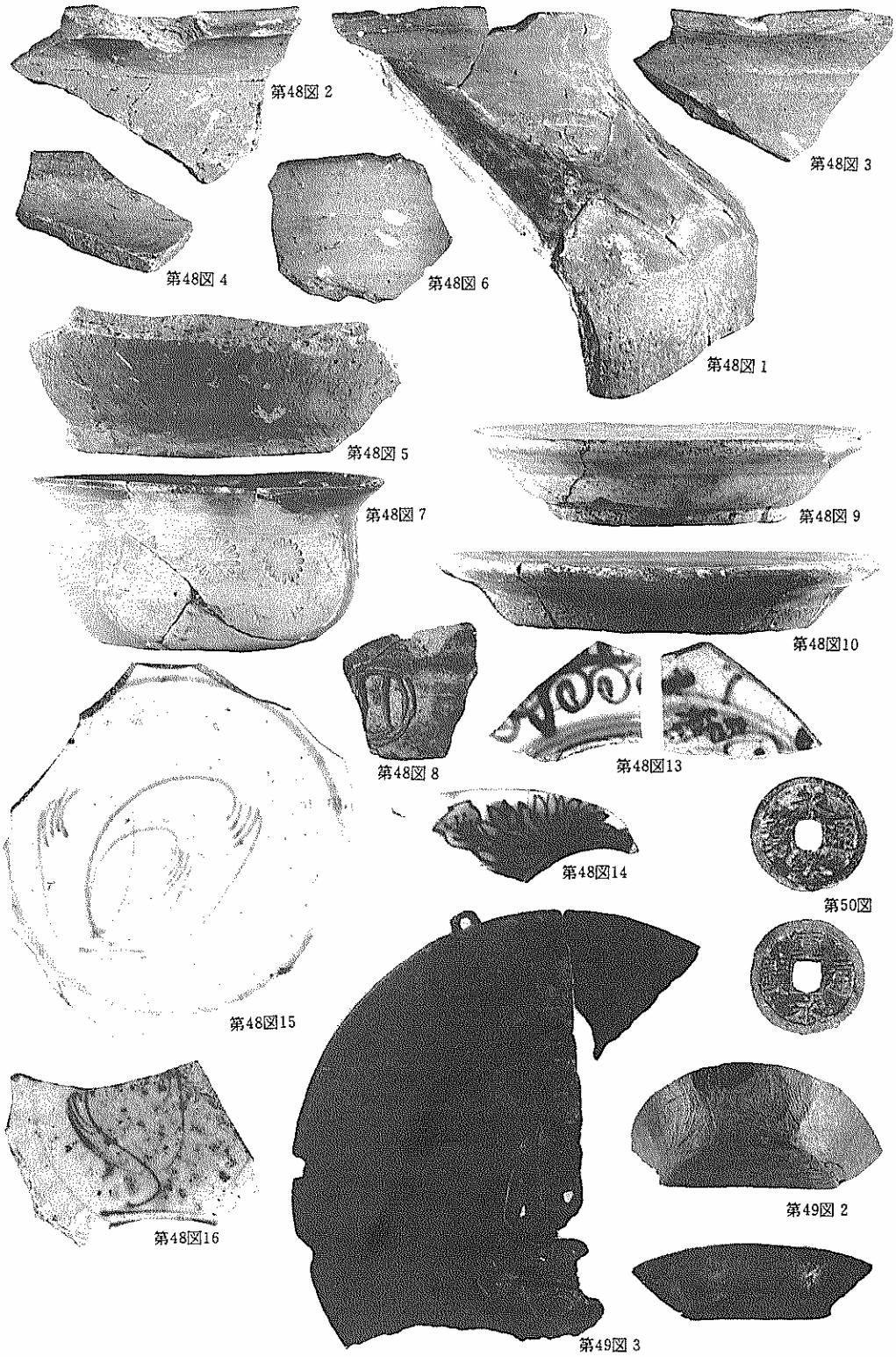

第 7 図 9


第26図13


第26図 9


第24図 2

図版23　平安時代の土師器、須恵器


第48図 2
第48図 3
第48図 4
第48図 6
第48図 1
第48図 5
第48図 7
第48図 9
第48図10
第48図 8
第48図13
第48図14
第50図
第48図15
第48図16
第49図 2
第49図 3

図版24　中・近世の遺物